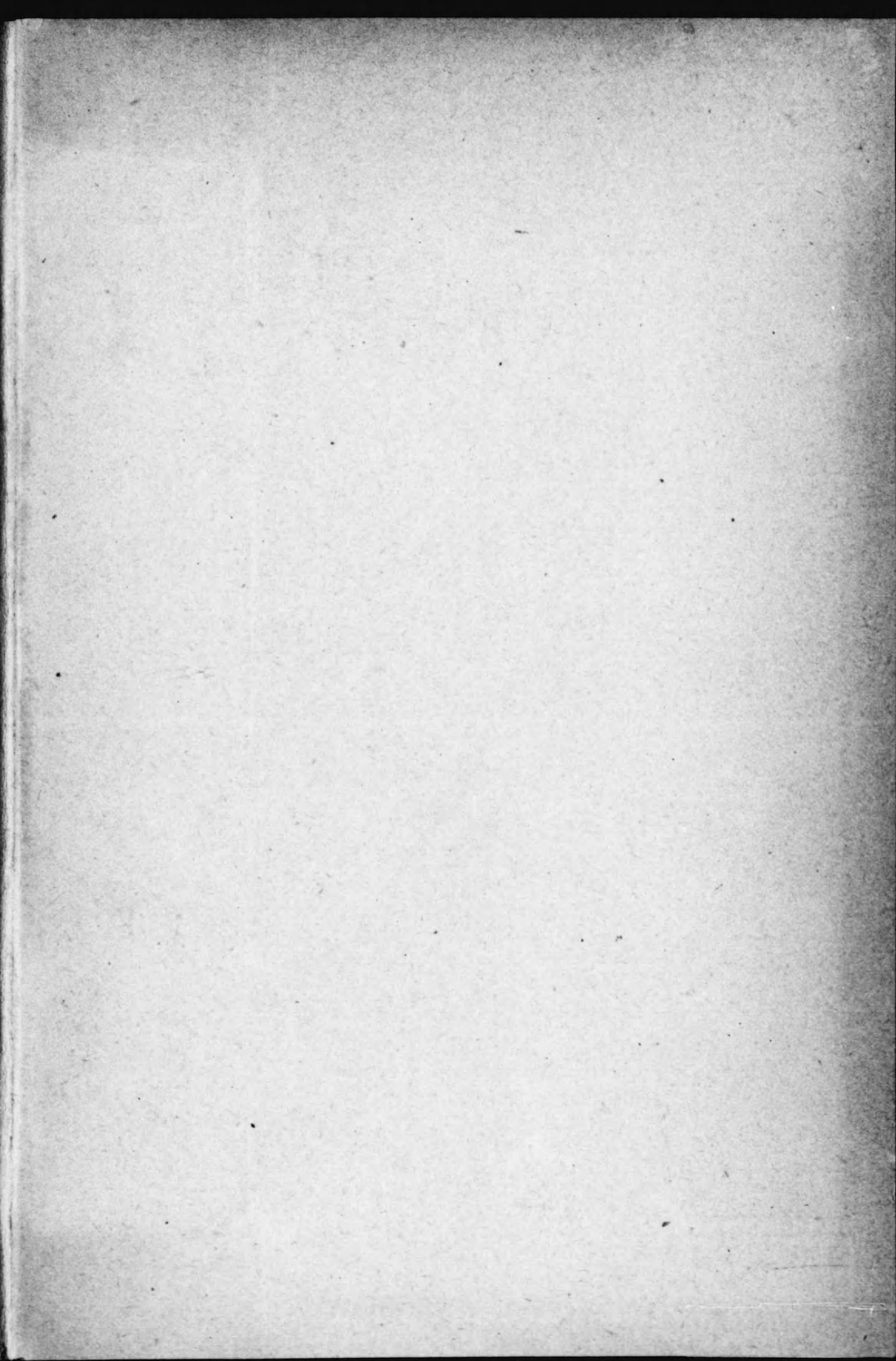
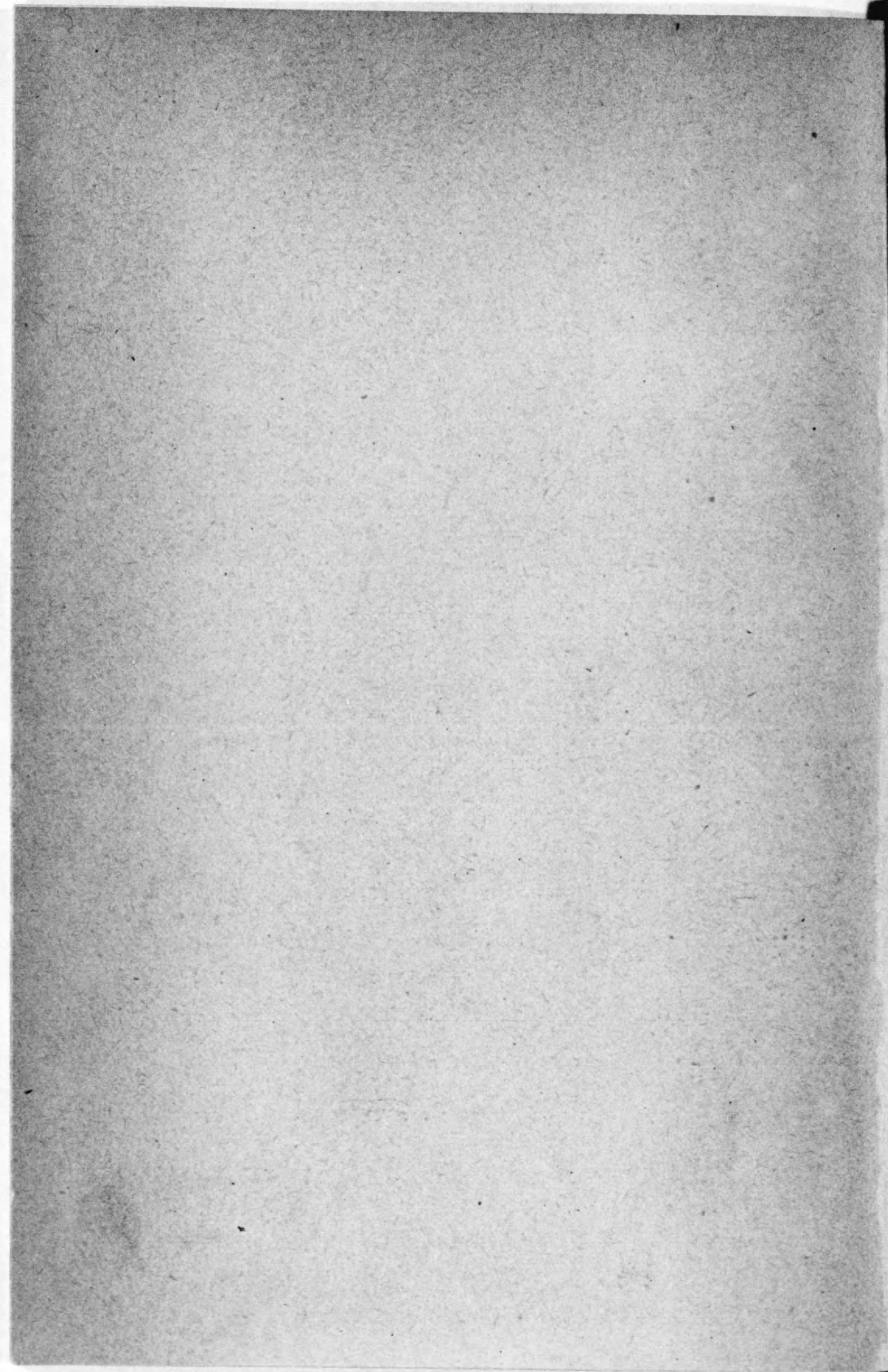


始





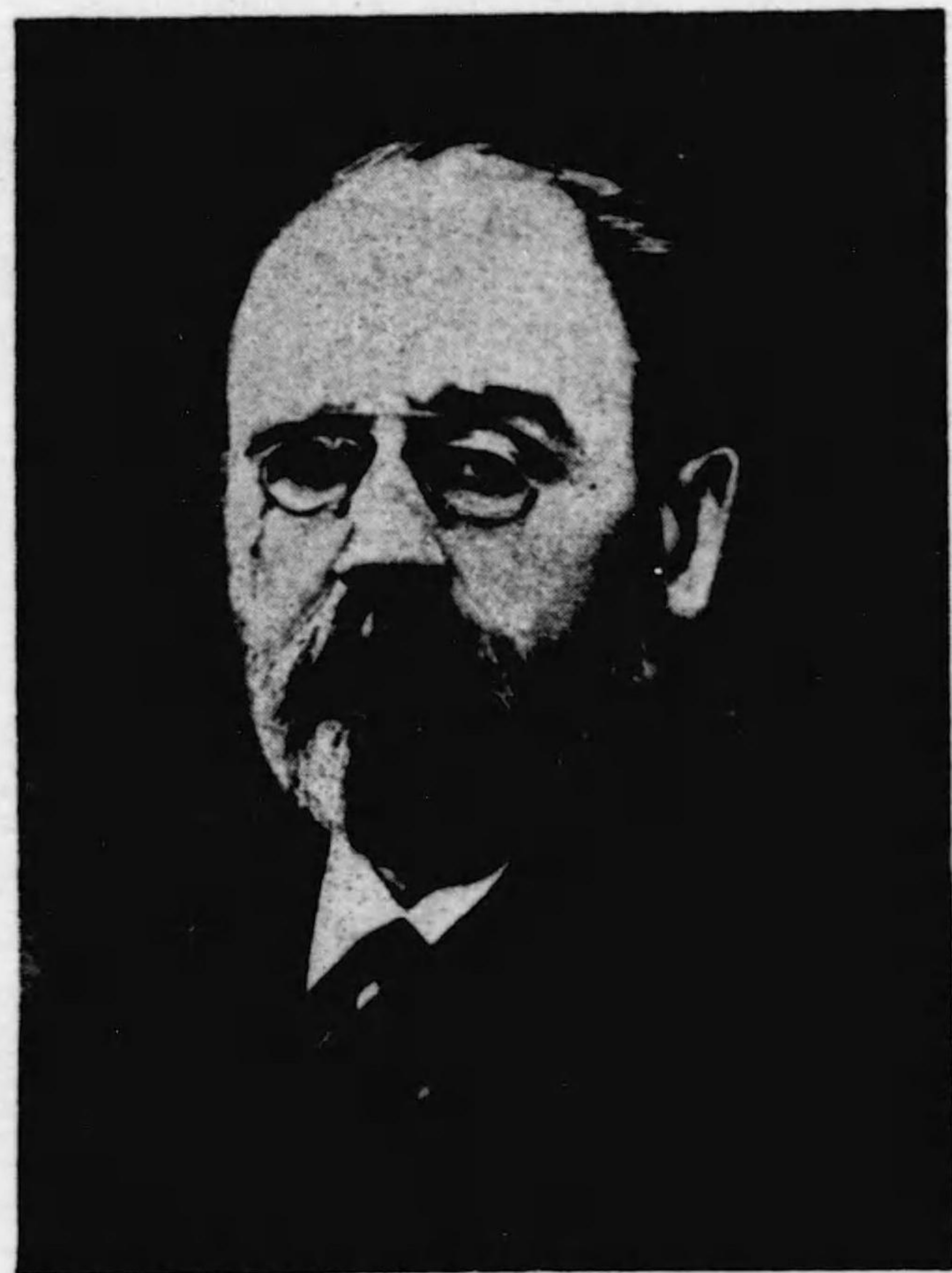




作ラゾ・ルイミエ

# 夢・ナナ

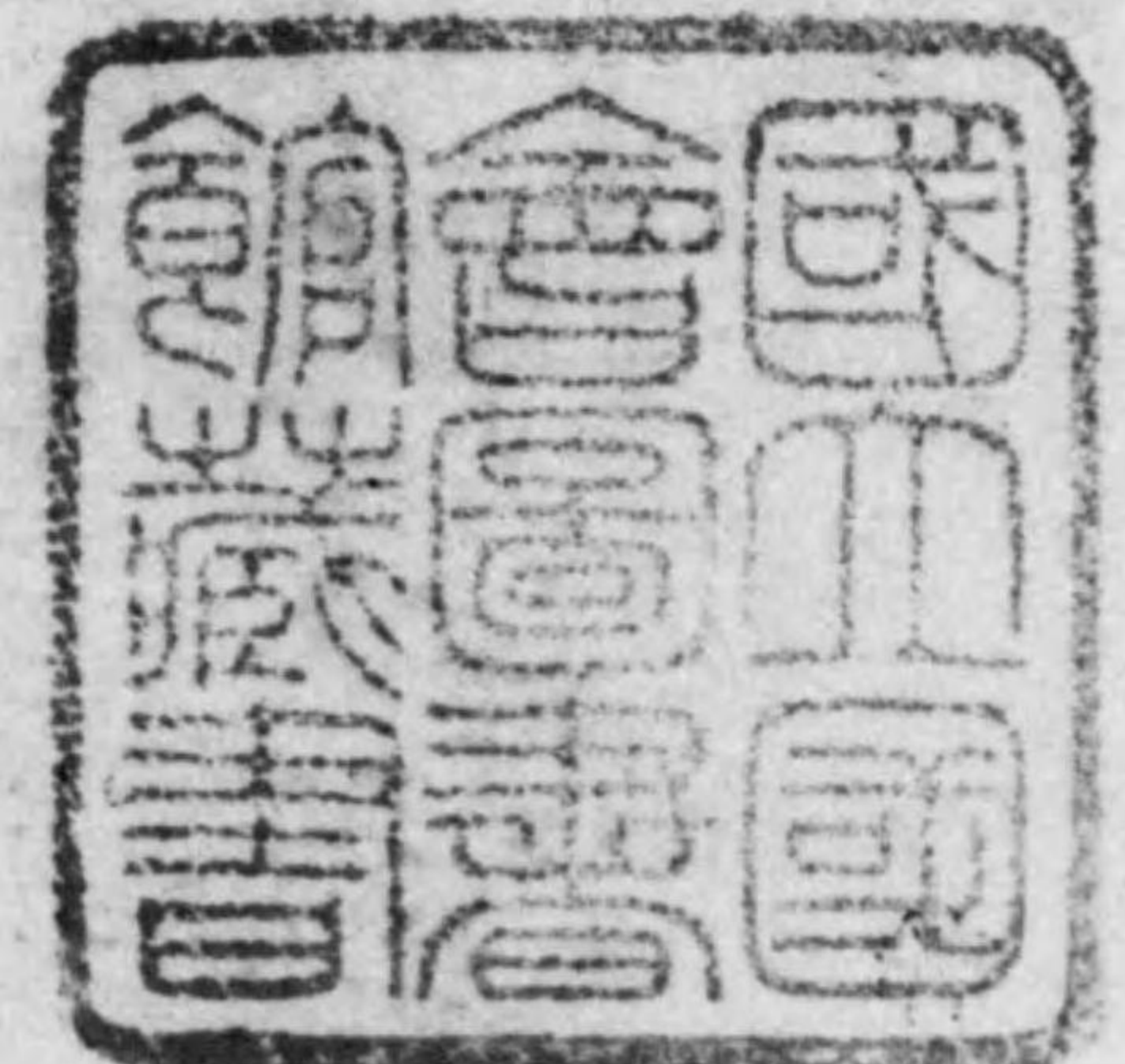
譯 一 伸 高 宇  
幹 村 木



版 出 社 潮 新



908  
7



200533

### 解説

#### 一、「ナナ」に就いて

「ナナ」は「第二帝政治下に於ける一家族の自然的及び社會的の歴史」と註されて公になつたゾラのルウゴン・マッカ  
 アル叢書二十巻中の第九巻目で、ゾラが四十一歳の時の作である。二十巻の叢書は彼が二十八歳から五十三歳までの  
 二十五年間の不斷の精進によつて成つたもので、それが世界に於ける自然主義文藝の大殿堂を成してゐることは否ま  
 れない。彼は遺傳と境遇との關係から成り、また起る人間の悲劇を心理的に研究し、科學的に分析し、解剖して、  
 その發生と結果を、いつになつても集團生活から逃避することの出来ない人間に報告したのである。人間的なそして  
 餘りに強く人間的な作者は、この叢書に千二百有餘の男女を活躍せしめてゐる。政治家、實業家、軍人、宗教家、職  
 工、鑛夫、農夫。また淑女、賣笑婦、女中と、有ゆる階級の人間を包括して、それらの離合や軋轢を細大漏らさず八  
 方の觀點から觀察してゐる。また人間の生活、家庭の構成と社會の組織と制度、自然界の現象、みんな飽くまで冷靜  
 に深刻に描寫してゐる。しかも、各巻の冒頭から終末の一字まで動かし難い嚴密さと緊張さとして、みんなで二百五十  
 萬餘の用語を駆使して、斷じてだみ、み、許さない高い調子の高鳴りを紙背に聞かせるのだ。どんな男女もこの作者の  
 手では大地を踏んでゐる人間であつて、英雄なんて一人も出てゐない。どんな事件も、たとへば喧嘩、接吻、祈り、  
 情慾、舞踏、出産等みんな人間を離れてゐない。そして人々は遺傳と境遇との支配の下に悲劇の一役を買つて登場し  
 てゐるのである。勿論十九世紀後半の佛蘭西ブルジョアの没落種々相の過程が詳細克明に描かれて、それが本質を形作  
 つてはゐるけれど、中でこの作の姉妹篇たる第十三巻の『居酒屋』(一八七七年出版)と第十六巻の『ジェルミナル』

解説

一



(一八八五年出版)の二作は、他の作とはやゝ毛色を異にして、下層階級の生活苦、勞資の抗争、社會問題等、まづ新興階級の發芽とも云ふべきものが見られることになつてゐるのである。で、二十卷の叢書は十九世紀から二十世紀の自然主義文藝の大殿堂であつて、またそのエンサイクロペディアでなければならぬと思ふ。

この作の荒筋は、ナナなるアルコール中毒の遺傳を受けた技倆の拙ない、聲の悪い、しかし、非常に美貌なる十八歳の女優が、興行師ポルドナアウの投機的興行政策の餌として、造花女工から一躍してグリエテ座の初舞臺を踏む。『金髮の女神』と云ふ喜歌劇で、彼女は女主人公の女神に扮し、輕羅を纏つて登場する。初日から、滿場の観客は忽ち彼女の肉體美に艶殺せられる。観客の中で、のち、この篇の重要な役目を負ふ男女二十餘人の人々の名と描寫とは漏れなく盡してある。(一章)

ナナは暴風の如き喝采に酔つて宿へ歸つた。次章は、その翌朝十時からの彼女の一日の生活に初まる。彼女はもう母なのだ。里子に出してあるそのルキを、伯母のルラ夫人の手に託して養育してもらはうとするのだが、肝腎の金がない。絶え間のない來客は花束を持つて來る者か、または出入商人の掛取りばかりだ。と、突然トリコン夫人なる娼婦の媒介を職とする來訪者のために、彼女は二時間ばかりの外出で四百フランを手にすることが出來た。しかも、三百五十フランは伯母に、五十フランは貧民救濟會への贖金の勸誘と云つた風で瞬く間に元の無一物となる。

ミッファ・ド・ブヴィル伯爵は、皇后の侍從で會計官吏だが、カトリック教徒として四十年間の精進を續けた貴族である。彼は、グリエテ座でナナの舞臺姿に魅了せられ、その翌日、貧民救濟會の委員として舅のシユアール侯爵と共にナナを私宅に訪問し、家庭に於ける彼女の手から五十フランの贖金を受ける。彼は、夫人のサビイヌとは十九年の夫婦生活でありながら夫人と同衾しない。當時十八歳のエヌテルは、彼の子ではないらしい。夫人サビイヌは「腿がな

い」と噂をせられてゐるほどだが、若い時から情事に關しての祕密を持つてはゐたのである。寺院のやうなこの屋敷で、火曜日には茶の會がある。こゝにまた、この篇の主要な人物が二十餘人も招かれて、三四人づゝ集つて雑談する。この會へ初めて列席した演藝記者フォシユリイに對して、夫人は誘惑を感じた。フォシユリイの方でもまたさうであつた。(二・三章)

ナナは晩餐會を催した。幾人を何時招待したか彼女ははつきり覚えてゐないので、宴酬になると席は足りなくなる。劇場關係者、女優、貴族、資本家などが夜を徹して酔ふ、踊ると云ふ騒ぎだ。たゞナナが心待ちにしてゐたミッファ伯爵は遂に來なかつた。酔つばらつた彼女は怒つて席を外し、來客の無作法なのを罵り人々を手こずらしたりしてゐたが、夜明け前の郊外へ馬車を驅つて牝牛が乳を搾られるのを見に出掛ける心になる。銀行家シユタイネルと同乗するのである。(四章)

満員ばかりで演ち續けてゐた『金髮の女神』の三十四回目的樂屋へ、スコットランドの王子が支配人の案内で訪問せられる。王子はナポレオン三世の甥で、當時巴里の博覽會へ來てゐたのだ。ミッファ伯爵もシユアール侯爵も隨行してゐる。肌着一枚で化粧直しをしてゐたナナは、姿體をカーテンに隠したりしたが、そこへ、シャンパンを持つた男優どもが來合せて、乾盃したりする。ナナは、後の八章で同棲することになる俳優の一人のフォンタンに、戀を感ずる。(五章)

銀行家シユタイネルはフォンデットに別莊を買つてナナに提供する。ナナはこゝで中學を卒へたばかりの紅顔の美少年ジョルジュと甘い戀に陥ち、また、ミッファ伯爵と同衾し、しかもイルマ・ダングララルなる權勢のある老尼の、行ひ澄まして多くの渴仰者に崇拜せられてゐる晩年の生活を見たりしては、宗教的感激を感じたりする。田園を背景とした篇中隨一の詩趣の溢れた頗るロマンティックな幾場面が展開せられてゐる。(六章)



一度ナナによつて許されたるミッファアの執着は苦惱と共に高潮して来た。しかしナナの方では、全く氣紛れであつた。サビイヌ夫人は記者フォシユリイに迷ひ、家庭を顧みなくなつてゐる。そしてナナは、伯爵の餘りに融通の利かない一本氣に厭氣がさして、一夜伯爵を締め出してしまふ。伯爵はコキユ(妻を奪取)の悲哀と愛想づかしの慘憺たる氣持を抱いて、雨に濡れながら自分の家に辿りつくと、夫人は旅行から夜汽車で疲れて歸つて来た。夫婦は顔を見合はしたが一言も云はなかつた。(七章)

ナナは舞臺を棄て、宿を疊んでフォンタンと同棲することにした。卑吝、陋劣なる性格の持主たるフォンタンは、最初はナナを愛人とし妻として好遇してゐたが、ナナの金が盡きる頃からは虐待を加へ初めた。でもナナの偏愛は、益々深くなつた。彼女は眞心を傾けてひたすらフォンタンに溺れた。彼女は夜な／＼辻に立つた。そしていつしか幼な友達なる賣笑婦のサタンと親しくなり、やがて二人は離れ難い同性の戀に陥つた。この間は、警察から拘引せられかけたり、俳優のブリユリエールから脅かされたりしながら、陰惨な淪落生活を送つた。が、或夜フォンタンに締め出しを食はされて、遂に伯母の許に急いで助けを求むるに至つた。(八章)

ナナはグリエテ座へ二度目の出演をした。フォシユリイの新作『公爵夫人』の中の一役であつたが、彼女はミッファアに頼んでポルドナアウを買収し、到頭ローズ・ミニヨンの扮すべき公爵夫人の役を横取りしてしまつた。自分では貴族の令夫人と云つた風な貫録のある主役が、こなせるものと信じてゐたのだ。舞臺稽古もすんで、蓋を開けてみると、演技の拙劣さは如何ともし難く、終始笑殺せられてしまつた。それでゐて観客は、毎日殺到する勢ひであつた。(九章)

ナナはミッファア伯爵の提供するヴィリエ街の堂々たる邸宅を住居として極めて豪華な生活に入つた。一ヶ月の生活費五十萬フランと云ふのだが、それでゐて彼女はいつも十フランの餘裕も持つてはゐなかつた。初めこの邸宅へ来て

は逃げ、また連れ戻されたのはサタンであつた。ナナはサタンを着飾らせ、心を躍らして接吻し、抱擁するのだが、サタンの方では不意に飛び出してしまふのであつた。紳士連では、ミッファアは勿論、グンドゥル伯爵、シユタイネル、フォシユリイ等が出入して、ナナの一瞥を希つては、何萬フランかを提供した。ナナは、あらんかぎりの浪費をしてゐた。(十章)

六月の或る日曜日に、ブウロオニユの森で競馬が行はれた。ナナは素晴らしく着飾つて、二人の馬丁と二人の侍者を従へてミッファア伯爵の贈物なる四輪馬車で出掛けた。競馬通のグンドゥル伯爵は、自ら厩舎を持ち、名馬を飼つてゐた。或る馬にナナといふ名を附し、その日の懸賞競馬として走らせたのであつた。結局、一般の豫想を裏切つてナナが優勝した。グンドゥルは巨萬の富を得た。と、その富はこの道の人の最も忌む不正なトリックによつたものだといふ事が知れた。競馬が果てゝ人々が退場したその晩、伯爵は、自ら厩舎に火を放つて愛馬ナナとともに焔の中に焚死した。(十一章)

享樂と、浪費と、放肆なる生活は、必ずしもナナの心の底までを幸福にしてはゐなかつた。彼女はしきりに神を怖れ、地獄の恐怖を感じるやうになつた。彼女とミッファアは相擁して啜り泣いては祈つた。或る朝、彼女は墮胎した。それは、ミッファアの子であつた。心の平靜を失つてゐる時の彼女は、病的であるのを免かれなかつた。しかも、自分から進んで伯爵に説いて、元の愛人のダグネとミッファア家の令嬢エステルとの婚約を成立せしめたりなどする。(十二章)

彼女の周囲の者はみな不幸になつて行く。グンドゥルの斃死、ジョルジュの自殺、フキリップの投獄、シユタイネルの破産、フウカルモンの投身、サタンは施療院に送られ、その他フォシユリイ、ラ・ファアア等の没落する姿を眺めながら、彼女は飽くまで病的な誇らしげな浪費生活を續ける。ミッファアと戯れて、彼を侍従の正装をつけて來訪せし



めたり、四つ這ひになつて熊の眞似をさせたりなど、狂態をつくす。(十三章)

彼女は不意に巴里を去つた。知人の間に噂だけが残つた。巴里では、普佛戦争の宣戦布告で勳員令のために全都が或る種の不安と周章とに襲はれた。そこへ、子供のルキが天然痘で死んだのを見舞つて、露都から驛へ着いた彼女が、また天然痘でグラン・トテルに瀕死の状態であると云ふ知らせがある。知己であつた者は皆集まつたが、病毒の感染を恐れて多くは病室へ入らない。たゞローズ・ミニョンだけは舊怨を忘れて看護をつくし、臨終を見とどけた。最も美しかったナナは怖ろしい形相となつて世を終るのであるが、窓の外では群衆が「伯林へー 伯林へー 伯林へー」と列を組んで喚聲を立てゝ通ると云ふ處で終つてゐる。(十四章)

作者エミール・ゾラ(一八四〇・四二一)は、六十二歳の時、室内の暖房設備の不完全から炭酸瓦斯の発生を知らないで死したと傳へられてゐる。伊太利人たる父は貧しい土木技師であつたが、ゾラが七歳の時に世を終つた。ゾラは背の低い、體の頑丈な、顔色蒼白、黒髪の沈鬱な相貌の持主で、交際社會やその他の集會には列席しないことにしてゐたが、來訪者は喜んで迎へて談話した。彼は小説に評論に座談に最も意識的に力強く自然主義を主張した。ドオデエ、フローベル、ゴンクール、また當時露西亞から來て巴里に滞在してゐたトゥルゲニエフなど、最も親しく來り訪ねたのであつた。彼は毎月一回午餐會を催して、これ等の友を招き、半日の會談を楽しんだ。

彼は書籍出版商の發送係を振り出しに、社長の秘書、フィガロ紙の文學美術の評論記者などを迎つて、二十八歳の時の出版になるルウゴン・マッカアル叢書第一卷『ルウゴンの運命』出版以後は純然たる作家生活で、冬期は巴里に夏期は田舎に暮らし、毎日缺かさず四頁づゝ三十餘年間、機械の如く執筆した。年少の時はロマンティックな詩を作つてゐた。ラマルティン、バイロン、ユーゴー、特にユーゴーは愛讀し崇拜するところであつた。戯曲も書いた。又忌憚

なき評論の筆を揮つて當時の既成作家と作品とを、文學方面にも美術方面にも鋭く罵倒した。三十餘年間自然主義の大旗を翻かして啓蒙運動をリードしてゐた。詩作數篇、戯曲數篇、ルウゴン・マッカアル叢書二十卷、三都會(ルウルド・ローム・パリイ)、四福音書(繁殖・勞働・眞理(死後發表)・正義(未稿))等の大作のほかは文學、美術、演劇、音樂に關する評論が少なくない。

○ 彼は神經質で、話が下手で、絶えず怒つてゐるやうな風の人であつたが、苟くも筆にせんとする事象に對しては、十分微細に熱心に調査研究した。劇場、料理店、牢獄等の踏査、觀察、また人々の性格や生活狀態、遺傳、習癖に關する探求は實に綿密に科學的に徹底を期して些の幻影や潤色や臆化の介在を許さなかつた。十二分に材料が整つたと見ると、毎日午前九時から午後一時まで執筆して、讀み返すなど云ふことはなかつた。そして年月と共に、あの大部な作品が出來上つて行つた。細かなものを氣長く組み立てゝゆく精力絶倫な大建築師の、巨大な手腕がうかがはれる。

然し彼は、又世を憤り世を怒らせる偉大な闘士であつた。その一は一八九八年(死の三年前)のドレフュス事件(賣國奴の冤罪にて孤島に流調せられた猶太人ドレフュス大尉を、ゾラ一流の社會的正義の見地から論文を公にして遂に大尉を救済した。しかし彼自身は公安を害したりとて、一ケ年間の禁錮を宣告せられた。大尉は英國に亡命した)に於て知られ、その二は、彼の十年祭に當る一九二二年の九月二十五日に、政府が國葬の禮を以て生前の文勳を表彰せんとするや、忽ち一群のモップが義憤し(?) 蹶起してその葬儀に妨害を加へたと云ふことである。死せる孔明生ける仲達を走らす亞流にも増して、いかに彼の作品が第一義的、非妥協的なものであるか知られるであらう。(宇高伸一)



## 二、「夢」に就いて

『夢』は、ルウゴン・マッカアル叢書の第十六番目に當るゾラの佳作であり、肉的な描寫に滿つる農民小説『土』と文字通りの『獸人』との間にあつて、一層氣品の高さを示してゐる。で、これを傑作であるとか、大作であるとか云つて、聲を大きくして騒ぐのは當らず、佳作といふところに、この作品の香氣を髣髴せしむるものがあらうと私は思ふのである。

素よりゾラは自然主義の巨匠として、或は理論を以て或は作品を以て、當時の佛蘭西文壇を風靡してゐたのであるが、それにも拘らず、ゾラの個々の作品を仔細に檢察すると、内に包んでも包み切れぬ浪漫的な資質をふんだんに看取することが出来る。そのゾラが浪漫的な題材を假りて、以前の浪漫病を些かの遠慮もなしに出して見せた本篇は、讀者に取つて飛んだ御馳走である。尤も今日から見れば、随分亂暴とも思はれる自繩自縛的な自然主義理論を振り翳して自らも律し他にも臨んでゐたゾラは、晩年になると理想主義的な小説をさへ物してゐる。由來文學は、ひたすらに排他的な理論を以て臨むのが無理なのであつて、これをゾラよりも一時代前の浪漫派の驍將ユーゴーの理想主義的な『レ・ミゼラブル』とゾラの没理想主義的な『居酒屋』とを比較して、孰れが吾々に教ふところが多いかと云へば、事實の描寫を羅列して却つて整理を怠つてしまつたゾラは描寫に於いてユーゴーに一籌を輸してゐるが、人間の理想を根深く指示して見せてくれる點では、彼が一頭地を抜いてゐると云うても、詭辯ではないのである。少くとも私はさう信じてゐる。——と云つた次第で、ゾラの浪漫主義的作品『夢』の一篇は、決して附け焼刃でもなければ一夜漬けの作物でもない。

ゾラは性格を描出する手腕に特に長けてゐて、心理描寫は彼の最も得意とする所である。が、それ以上に推稱した

いのは彼の力強さである。さうしてこの『夢』がルウゴン・マッカアル叢書中の他の諸作と目立つて異なる處は、作者ゾラが人性のよき方面を把握しようとして努力してゐる點である。卑猥ひわいに流れる點の斷じてない事である。たゞ、如何に浪漫的背景と雰圍氣との中にその諸人物を點綴してゐても、人性の眞實性を斜視するが如き事は、ゾラにあつて嘗てないところである。

今これを、拾兒であり雪の日に伽藍の門前で刺繡工夫婦に拾ひ上げられた、この一篇の女主人公アンヂェリックに就いて見るも、彼女は決して作者藥籠中の架空の人物ではなく、眞實の中に生きてゐる現實の人間として吾々の前に現出してゐる。さうして作中の主要諸人物は、孰れも強い主觀と信仰とに生きてゐるのであるが、その強い主觀を互に把持して下らず、養母ユベルティヌとアンヂェリックとが、互の好意の中に一種の性格悲劇、運命悲劇を生んで行くところに渾身の力が入つてゐて、讀んで呼吸もつけぬほどである。このアンヂェリックの理想は、頗る荒唐であり月並である。然し、荒唐ではあるが、必ずしも無稽ではなく、月並であつても決して低劣ではない。アンヂェリックは乞食の子にも劣るやうな生れでありながら、佛蘭西一の美貌で、富裕な公子に想はれてその妃になりたいと希ひ、且自分の夢を信ずるのである。それが幸福な、乃至はお目出度い大團圓となつて結ばれてゐると聞いたたら、諸君は讀まぬ先から何アんだ！と言ふだらう。事實多くの通俗小説や前期浪漫派の諸作品はひたすらに讀者の虛榮心を當て込んで浪漫的煽情を事とし、お目出度い大團圓の裡に自他共に陶醉してゐる。ゾラにはそんな妥協は斷じてない。讀むべきは、又讀まるべきは眞實の小説である。思想的に言つたら、平民が公爵の妻君になる——これは何でもない事である。屁みたいな事實であるべき筈である。ところで現在の世の中にあつてすらも、公爵の妻君などと言つたらどうも語呂が合はぬし、又人情とも合致しない。で、現實とはかうしたものだといふ人生觀は宜しく養母ユベルティヌの口を通して作者から聞いて欲しい。而してアンヂェリックはその夢のやうな理想を如何に全身全靈を以て實現して行くかも亦本



文に就いて読んでいたゞきたい。

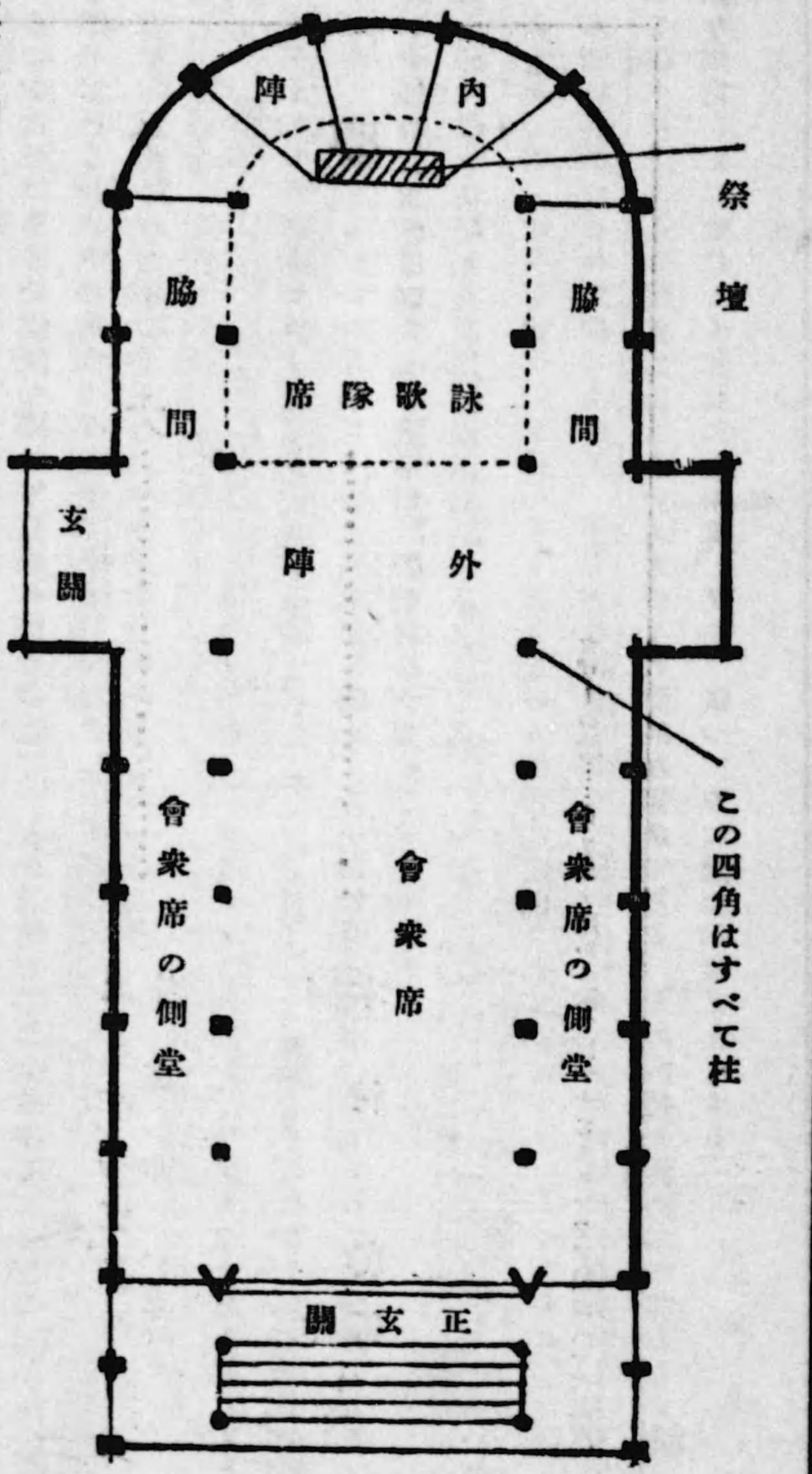
次に、主人公フェリシアンフェリシアンの如き、恵まれたる物質的境遇に居る人は数少いであらう。然しフェリシアンフェリシアンの如き資質の青年は必ずや多くあるだらう。私は解説で一通りを言つてしまふ事は欲しない。茲ではフェリシアンフェリシアンの父祖がオオトクウルの侯爵、某の伯爵、男爵、騎士、主獵頭、王室附云々と云つた風に一人で十指を屈する程な稱號を持つてゐた事だけを明かにして置かう。

で、一口に言へばオオトクウル侯であるが、日本の大名華族のそれのやうに、西洋でも昔の貴族はそれ〴〵領地を持つてゐて、例へば某の公爵領を持つてゐるから某の公爵であり、併せて某の男爵領を持つてゐるところから男爵の稱號も併用されるといつた風に、正式の稱呼は、長たらしい名前の例に引かれる百人一首の前の關白太政大臣云々といふ比でないものである。

ワキ役に出てゐるアンデリックアンデリックの養父ユベールの性格が、又なか〴〵面白い。殊に女主人公と共に直ぐ理想郷へ分け入つて夢を辿る浪漫派振りが、とても好意が持てる。それをその妻のユベルティヌユベルティヌにが、いんと鐵槌を下されると直ぐにへこみ、後悔する。が、又しても娘と共に夢を辿る。さうして中老に向ひつゝあるこの刺繍工夫婦は清淨な伽藍伽藍の蔭に二十代の若者に見るやうな戀仲を續けてゐるのである。

所謂敵役に廻つてゐるフェリシアンフェリシアンの父なる司教——彼も亦、身は聖職者としての高きに位し、一切の煩惱を拂はうとしてゐるが、老いの身を拂へども拂へども盡きない人間苦に壓倒されてゐる。

で、人物の解説はこれで切り上げて、手引とし讀者に知つて置いていたゞきたいのは、眞實にして可憐なこの一篇の物語を醸し出してゐる伽藍伽藍（聖堂）といふものゝ實際的な構造である。その大體を豫め知つてゐないと、ゾラの折角の精細な描寫がたゞ煩はしく無駄になつてしまふ。依つて左に圖で示すことにする。



即ち正面玄關から入つて行くと左右に側堂を控へた會衆席が廣くあつて、次は外陣が左右に出張つて伽藍全體を十字架形となし、左側に玄關を控へ、それからやはり左右に脇間のある詠歌隊席を経て主祭壇に達し、主祭壇の後ろを内陣（即ち奥殿）と呼ぶのである。それからごくの書き出しにある事だから序に言つて置くが、聖アニェス門の二重扉と云ふは、中央に仕切りがあつて左右に門扉があるので、即ち都合二つ扉があるのである。伽藍と云ふは素より寺院の大なるものゝ謂である。尙、女主人公アンデリックアンデリックの信仰と性格改造とに多大の影響を及ぼしてゐる『聖者傳』は、『黄金傳説』の名で廣く知られてゐる書である。（木村 幹）



目次

ナ ..... エミイル・ゾラ作 ..... 一  
 ナ ..... 宇高伸一譯 ..... 一  
 ..... 同 ..... 一  
 ..... 木村 幹 譯 ..... 一  
 ..... 作 ..... 一

カワの繪……ゾリエテ座から歸つたナナミユツア伯爾(一六五頁)



ナ

エミイル・ゾラ作  
宇高伸一譯

九時になつてもまだゾリエテ座の場内はがらんとしてゐた。張出席や特等席にゐる幾人かの人々は、暗紅色の天鵝絨の肘掛椅子に身を投げて、ぼんやりとした吊燭臺の薄明りの下で待つてゐた。緞帳の赤い大きなうねりが影を作つて揺れてゐた。舞臺からは何の物音も聞えて來ない。脚光はまだ點されてゐず、奏樂者の樂譜臺は何の支度も出來てゐない。たゞ、瓦斯の光で緑に染められた裸體の女神や子供が空を翔けてゐる圓天井のまはりの四階の棧敷からは、がやくといふ人聲にまじつて笑ひ聲や呼び聲が聞えてゐた。金の縁飾りをした圓い窓の下には、烏打帽や縁無し帽を被つた頭が、段をなして並んでゐた。時々女案内人が忙しさに切符を手にして現はれた。そして一組の男女が案内して來て席に着けた。男は夜會服で、女は華奢な身を反らして、席に着く時ゆつくりあたりを見まはした。

二人の青年紳士が特等席へ入つて來て、突つ立つたまゝ周圍を眺めてゐたが、やがて、

「言はんことぢやないよ、エクトル」と年上の黒い口髭を短く蓄へた背の高い男が言つた。「馬鹿に來かたが早かつたぢやないか。僕にあの葉巻をみんな喫はせたとつてよかつたんだよ。」

この時女案内人が通りかゝつた。

「あら！ フォシュレイさん。」と彼女は狎れ／＼しく呼びかけた。「開幕までにはまだ三十分はありますよ。」

「ぢや、なぜ九時開幕なんて書いて置くんない？」とエクトルは長い瘦せた顔にぶり／＼した表情を見せて呟いた。「しかも今朝の事だよ、こゝのクラリスが替つて正九時に開けますなんて言つてゐたんだよ。」

暫らく二人は黙つたまゝ、頭を上げて薄暗い觀覽席を見渡してゐた。そこには緑色の紙が貼つてあつて、その爲め一層觀覽席が暗くなつてゐた。階下の棧敷の蔭になつた平土間はすつかり眞暗だつた。張出席には肥つた婦人がたつた一人、天鵝絨の欄干に寄りかゝつてゐるばかりだつた。高い柱の間の觀席は右も左もすつかり空席のまゝで、長い總のついた飾り幕が垂れてゐた。白と金とで飾られた場内

ナ  
ナ

一



は、柔かな緑色に引き立てられて、まるで霧でも立ち罩めたやうに大きな玻璃製の吊燭臺の小さな焰でぼうつと霞んでゐた。

「リュシイさんに前の方の席がうまくとれたかね？」とエクトルが訊いた。

「とれたがなか／＼面倒だつたよ……。でもリュシイが早く來過ぎる心配だけはないね、あれのことだから」と、フォシユリイは答へた。

彼は軽い欠伸を噛みこらして、暫らく黙つてゐたが、  
「初日から見るつて事のない君でも、今度はやつて來たね……『プロンド・ヴェニユス』(金髪の女神の意、グリ)は、今年中での出し物だらうと云ふので、もう半年も前から噂の種になつてゐるんだ。ところで、ねえ君、こんなに囁し立てゝ置いて、犬ころでも飛び出すんぢやないかね……拔目のないポルドナアヴ(の支配人)のことだから、博覽會を當てこんで出さずにゐたんだ。」

するとそれを一心に聞いてゐたエクトルが尋ねた。  
「ぢや君はヴェニユスを演る新らしい花形のナナを知つてゐるのかい？」

「やれ／＼！ また初まつた！」と、フォシユリイは腕をあげて叫んだ。「今朝からナナの話で弱らされてゐるんだ。あちらでもナナ、こちらでもナナと、二十人以上も訊かれ

たんだ。僕が知るものかね！ まさか僕が巴里中の女を皆知つてやしまし！……ナナはポルドナアヴの拵らへあげたものなんだ。きつとつまらない代物だらうさ！」

彼はかう云つて澄ましてゐたが、場内のがらんとしてゐることや、吊燭臺の薄暗い光や、囁きの聲と戸の閉け閉ての音だけしかない教會のやうなしんとした様子が彼をいら／＼させた。

「あゝ！ いやだ、いやだ。」と突然彼は言つた。「こんなところにゐちや年をとつてしまふ。僕は出るよ……さあ出よう。下には多分ポルドナアヴがあるだらう。さうすると詳しい事も分るからね。」

階下の大理石を敷いた大きな玄関には、木戸口があつて、そろ／＼客が入りはじめてゐた。開け放された三つの扉口からは、四月の晴れた夜空の下に、雑沓し輝いてゐる並樹街の潑刺とした様子が眺められた。馬車が駈けて來てびたりと止まると、音高くその扉が閉められ、観客が二三人づゝ伴れ立つて入つて來る。そして木戸口のところぢやつと立ち留り、階段を登つて行く。婦人たちはしなを作りながら遅れ勝ちについて行く。書齋の寺の柱廊めいた感じを抱かせる、この帝政時代の貧弱な裝飾を施した劇場の蒼白い壁の上に、黒い肉太の字でナナと書き出した大きな黄色い貼紙が、瓦斯の激しい光の中に並んでゐた。人々は

釘付けにされたやうに、立ち止まつてそれを讀んでゐた。立ちただかつて話をしながら、入口を塞いでゐる者もあつた。切符賣場の近くでは、剃りたての大きな顔をした頑丈な男が、席を得ようとして言ひ争つてゐる數人の客に、亂暴な言葉で應答してゐた。

「おや、ポルドナアヴだ。」と、階段を下りながらフォシユリイが言つた。

併し、支配人の方では既にフォシユリイを見付けてゐた。「全くお前さんは親切な人だよ」と彼は遠くからフォシユリイに話し掛けた。「あの記事つてのはどんなものかね……今朝のファイガロ(新聞)を開けて見たんだが、一體どこに書いてあるんだい。」

「まあお待ちよ！」とフォシユリイは答へた。「書くまでには君の御自慢のナナも見なければならぬし……それに別に約束をした譯でもなしさ。」

そして、この話を早く切り上げようとして、彼は、巴里でやつと學業を終へたばかりの若い従弟のエクトル・ド・ラ・ファロアズを紹介した。支配人はぢろりと青年を檢べるやうに眺めた。エクトルの方では、眞面目になつて相手を見詰めてゐた。このポルドナアヴと云ふ男は、もと／＼女を見世物にする興行師で、まるで看守のやうに女達を扱つてゐた。いつも金儲けの計畫で頭が一杯になつて、がみ／＼

と怒鳴り立て、べつ／＼と唾を吐きちらかし、始終腿を敲いてゐる。皮肉屋の、軍人のやうに荒つぽい氣象の男だつた！ エクトルはその場を程よくとり繕ふ言葉を探さうと思つて、

「あなたの劇場は……」と、やさしく澄んだ聲で言ひ初めた。

ポルドナアヴはそれを平然と遮つて、何でもづけ／＼話す方が好きだと云はぬばかりに、ぶつきら棒な言葉で言つた。

「私の女郎屋と言つてもらひたいね。」  
フォシユリイはお追従笑ひをした。エクトルは挨拶の言葉が咽喉に引つか／＼つて、すつかり面喰つてしまつたが、努めて相手の言葉を味はつてゐるやうに見せかけた。支配人はつか／＼と近よつて、その書く記事が大きな反響を持つてゐた劇評家に握手をした。彼が離れて行つたので、エクトルはやつと心を落着けることが出來た。彼はあまり狼狽して田舎者扱ひにされるのを怖れてゐた。

「評判ではナナは大層美しい聲ださうですね。」ともかく何か話の緒口を見つけようとして彼はかう言つた。

「ナナが！」と、支配人は肩を聳やかかし、言つた。「全く喇叭みたいな聲を出すよ！」

青年は慌て、附け加へた。



「兎に角優れた女優なんぞせう。」  
「ナナが！……からつ下手だよ！ 手足の置き場所だつて知つてやしない。」

エクトルはかすかに顔を赧らめた。もう何が何だかさつぱり分らなくなつて、口籠りながら言つた。  
「兎も角も僕は今夜の初演を見落せませんね、僕は知つてゐるんです、あなたの劇場では……」

「女郎屋と言つて貰ひたいね。」と、ボルドナアヴは再び頑固者らしい冷淡さで堅意地に遮つた。

その時、フォシュリイは入つて来る婦人達を静かに眺めてゐたが、笑つていゝものか怒つていゝものか分らないで、ぽかんと口を開けてゐる従弟を見ると、助けに入つた。

「ボルドナアヴさんの氣の済むやうに、それがお氣に入るのなら、劇場のことはお望み通りに言へばいゝぢやないか……。それから、君、君にしてもさうこだはらなくつたつていゝだらう。もしも君のナナが歌が拙くて、芝居が出来なければ、君がまる潰れになるばかりぢやないか。それはもとより僕にしたつて望むところぢやないんだが。」

「まる潰れ！ まる潰れだつて！」と支配人は顔を眞赤にして叫んだ。「女は芝居や歌が出来なきやならん必要があるのかい？ ねえ！ 君、智慧がないね……ナナには外の物があるんだぜ、憚りながら、どんなものにも代へ難い物があるんだぜ。」

あるんだぜ。私はそれを嘆き出したんだ。それがまた飛び切りなんだぜ。これでうまく行かぬけりや、私の鼻がもう利かなくなつてゐるんだらう……お目にかけるよ。お目にかけるよ。あいつは舞臺へ出るだけでいゝんだ。それだけでお客は舌を巻いてしまふんだ。」

彼は熱狂の餘りに震へてゐる大きな手を擧げた。それから氣を換へると、聲を落して獨言のやうに呟いた。

「さう、大當りとも、あゝ！ 有難いぞ！ さう、大當りとも……あの肌だ、さうだ！ あの肌だ！」

それから、フォシュリイが尋ねるので彼はやつといろいろの詳しい話をしたが、その亂暴な言葉使用がエクトルをはら／＼させた。彼はずつと前からナナを知つてゐて、何かやらせて見ようと思つてゐた。ところが丁度女神を演る女優が入用になつた。彼は決して一人の女に永くかゝり合つてはゐないで、新しい女ですぐに觀衆を金玉に取らうとするのだ。けれども、この大柄な女優(ナナ)が現はれて來ると、彼の劇場には紛擾が起つた。一座の花形ローズ・ミニヨンが——これは巧妙な歌ひ手でもあり、立派な女優でもあつたが——ナナを競争者と見てとると機嫌を損じて、一座を去つて彼を困らせてやると毎日のやうに脅かした。ボスターのことでは、まあどんなに騒いだらう！ たうとう彼は、二人の女優の名を同じ太さの文字で書くことにした。

しかしまた彼を怒らせると大變だつた。彼の所謂「阿魔つちよ」の一人が、たとへばシモンヌだとかクラリスとかが、彼の言葉に従はない時は、彼はその尻を蹴飛ばした。さうでもしなければ始末がつかなくなつた。彼は女達を賣りものにしてゐたのだ。彼女達が何であるかをよく知つてゐた。淫賣婦なのだ。」

「見たまへ！」ボルドナアヴは、突然話を切つて言つた。「ミニヨンとシュタイネル頭取だ。何時でも一緒だよ。君も知つてゐるだらうが、シュタイネルはこの頃ローズが鼻につきだしたんだ、それで御亭主のミニヨンは逃すまいと一足も離れないのさ。」

劇場の軒蛇腹に輝いてゐる瓦斯燈の列が歩道の上をくつきりと明るくしてゐた。小さい木が二本生々とした緑色にはつきり浮き出してゐる。一本の圓柱は強い光に照らされて眞白に見え、そこに貼つてある貼紙が白晝のやうに遠方からでも讀みとれた。その向うには、絶えず動いてゐる群衆の波の中に並樹街の深い夜が無数の火を點じてゐる。多くの人々はすぐには入場しないで、劇場の外で喫ひかけた煙草を燻らしながら話をしてゐた。瓦斯燈の光がそれを蒼白く染めて黒い短い影をアスファルトの上に投げてゐる。頭丈で背の高い、角張つた頭の、巡業團のエルキュール(希臘の神話で怪力の武人、こゝ)のやうなミニヨンは、群衆をかき分けなが

ら、圓顔のまはりに灰色の頬髯を生やした、背の低い腹の大きな銀行家のシュタイネルの腕をとつてやつて來た。

「ねえもし」と、ボルドナアヴは銀行家に言つた。「旦那、昨日私の部屋でお逢ひになりましたね。」

「あゝ！ ではあれがさうだつたんだね。」とシュタイネルは言つた。「さうとは思つたんだが、私が出るのと入れ違ひになつたから、ほんのちらつと見ただけさ。」

ミニヨンは始終指輪の大きなダイヤを神経的に動かしながら眼を伏せてゐた。無論彼はナナの事だとは分つてゐた。ボルドナアヴがこの初舞臺の花形の事をいろ／＼話してゐると、銀行家の眼が輝いて來たので、遂にミニヨンは話の仲間に入つて來た。

「ねえ、そんな淫賣なんかどうだつていゝでせう！ 世間がいゝやうにするでせうし……。ねえシュタイネルさん、御承知の通り、家内が樂屋であなたをお待ちしてゐるんですよ。」

彼はシュタイネルを連れて行かうとしたが、シュタイネルはボルドナアヴから離れようとしなかつた。群衆の列は彼等の前を木戸口の方へ雪崩れて行つた。ナナの名が、その二級音の快よい生々とした名が、騒々しい人聲に交つて響いてゐた。貼紙の前に立ち止つてゐる人々は、高い聲でそれを讀んでゐた。他の人々は不思議さうな口調で、通り過ぎ



ながらその名を呟いた。婦人達は微笑を作り、驚いたやうな様子をしながら、優しくその名を繰り返してゐた。誰もナナを知つてゐるものはなかつた。何處からナナは天降つて来たのか？ 評判は次第にひろまり、いゝ加減な噂が耳から耳へと囁かれてゐた。たゞナナと云ふその名に優しさがあつた。この親しみのある短い名は、誰の口の端にも上つた。ナナ、と發音するだけで群衆は快活になり、上機嫌になつた。この巴里の激しい熱狂の發作的な好奇心が、群衆を驅りたてた。誰もナナを見たいと思つた。貴婦人は着物の裾飾りを破つた。紳士は帽子を失つた。

「あゝー そんなに誰も彼も訊かれてはー」と、ポルドナアは質問攻めにする澤山の人々に向つて叫んだ。「ナナはもうすぐに御覽になれますよ……。私はこれで御免を蒙ります。あちらに用事があるんですから。」

彼は、まふと群衆を煽り立てたので、上機嫌になつてその場を去つてしまつた。ミニオンは肩を聳かして、ロイズが第一幕の衣裳を見せるために、彼を待つてゐるとシュタイネルに注意した。

「おやー リュシイさんだ、あすこに、今馬車から降りて来た。」とラ・ファロアズはフォシュリイに言つた。それはたしかにリュシイ・スツワアルであつた。背の低い、頸の長すぎる、瘦せた顔に皺のよつた、唇の厚い四十恰好

の醜い婦人だが、快活で婀娜つぽいので魅力があつた。彼女はカロリヌ・エッケヤその母親と一緒にやつて来た。カロリヌは冷やかで美しく、母親はもつたいぶつて威張つてゐた。

「さあ私たちと一緒に参りませう。私はあなたに席を取つて置きましたから。」と、リュシイはフォシュリイに言つた。「いや、御免蒙らうー そちらの方ちやよく見えんからね！」と、彼は答へた。「僕には席があるんだ。特等席の方がいゝよ。」

リュシイはむつとした。彼は自分と同席したがらないのだらうか？ だが、突然氣をかへて、話頭を轉じた。「何故ナナを御存じだと私に話して下さらなかつたの？」

「ナナー 僕は見た事もないよ。」

「ほんと？……でも、あなたは一緒に寝たつて噂よ。」

だがミニオンが唇に指を當てて見せ、彼等に黙れといふ合圖をした。そしてリュシイが譯を尋ねると、ミニオンは丁度そこへ通りかゝつた青年を指さして、「あれがナナの情夫だよ。」と呟いた。

理店へ伴れて行つたりなどしてゐる男だつた。リュシイはその眼を美しいと思つた。

「あらー ブランシュさんがゐるわー」とリュシイが叫んだ。「あなたがナナと一緒に寝たと私に言つたのはあの人よ。」

美しい顔に化粧を施したブランシュ・ド・シヴリイは、金髪の肥つた女で、すらりとした、身だしなみの好い、誰の目にもつく紳士に伴られて来た。

「クサヴィエ・ド・ヴンドゥル伯爵だよ。」とフォシュリイがラ・ファロアズの耳に囁いた。

伯爵がフォシュリイと握手をしてゐる間に、簡単な説明がリュシイとブランシュとの間に交はされた。二人の女の薔薇色と藍色の裾飾りのついたスカートが、通り路を塞いでゐた。ナナと云ふ名が人々の耳にも聞きとれる程鋭い聲で、度々二人の唇に上つた。ヴンドゥル伯爵はブランシュを伴つて去つた。そして尙ナナの名のみが、次第に募る期待の中で窸のやうに支關の隅々に聲高く聞えてゐた。まだ初ま

らないのだらうか？ 観客は皆時計を出して見た。遅ればせに来た者は馬車が止まり切らない内に飛び降りた。歩道に立つてゐた人の群は散つた。道行く者は、頸をのぼして劇場の中を覗き込みながら、燈火のくつきりと明るい、がらんとした中をゆつくり歩いてゐた。二人の腕白小僧が口笛を吹きながらやつて来て、入口の廣告びらの前に暫らく

突つ立つてゐたが、やがて腹れ聲で、「いよう！ ナナー」と叫んで、尻を振りながら古靴を曳きすつて行つた。どつと笑ひが起つた。人々は喜んで繰り返した。「ナナ、いよう！ ナナー」そして人々は押し合つて、木戸口では喧嘩が初まつた。ナナ、と呼ぶ聲、ナナを見せる！ と叫ぶ聲が次第に騒がしくなつて、荒々しい興奮と馬鹿げた精神的の發作が、群衆に行き渡つた。

しかしこの喧騒の中に開幕の電鈴が鳴り渡ると、そのどよめきは並樹街まで聞えて来た。「電鈴が鳴つた、電鈴が鳴つた。」すると誰も彼も入場しようとして押し合つた。木戸口の番人は幾人分も働かなければならなかつた。ミニオンは心配さうな様子で、ロイズの衣裳を見に行かうとしない

シュタイネルを、たうとう伴れ去つた。電鈴が鳴ると、ラ・ファロアズは、幕の上るのを見ようとして、フォシュリイを引つぱつて群衆をかき分けて行つた。群衆のこの我も我もと先を争ふ有様は、リュシイ・スツワアルをいら／＼させた。

婦人を押しのけるとは何と云ふ亂暴な人達だ！ 彼女はカロリヌ・エッケヤ、その母親と一緒に、最後まで残つてゐた。たうとう支關には誰も居なくなり、彼方の並樹街にはそのどよめきが長く尾を引いて残つてゐた。

「いつもこゝでやる芝居と同じやうに、またつまらないものだらうに！」と、リュシイは階段を上りながら繰り返して



てゐた。

フォシユリイとラ・フロアズは、自分の椅子から立ち上つて、また場内を見まはした。場内は今、明るく輝いてゐた。大きな瓦斯の焰が硝子張りの大きな吊燭臺に點つて、黄色と薔薇色の光線の流れが雨のやうに天井から土間へと降り注いでゐた。椅子の暗紅色の天鵞絨は金色の波模様を浮べ、薄い緑の装飾は、天井の非常にけげんしい繪の下で、金箔が輝くのを和らげてゐた。上向きになつたフットライトが突然ばつとともつて、緞帳を明るく燃えたゞせた。緞帳の重々しい緋の織物は神話の宮殿のやうに華麗で、金箔の装飾に裂け目が出来て壁土の見えてゐる周囲の貧弱さとは少しも調和してゐない。場内はもう蒸し暑かつた。奏樂者はそれ／＼樂譜臺について樂器を調べてゐた。微かに震ふる笛の音、滯息するやうな角笛、やさしいヴァイオリンの聲などが次第に人聲の高まつてゆく騒がしさの中に聞えてゐた。席に着かうとあせつてゐる観客は、話をしたり押し合つたりして、やうやく椅子にたどりつくのであつた。廊下の混雑は實にはげしく、どの扉口も、果てしのない群衆を辛うじて通してゐたほどであつた。點頭き合つてゐるものもあれば、衣擦れの音をさせてゐるものもあり、スカートや帽子の列が續くかと思へば、折々は夜會服やフロックコートや黒い姿が通つて行つた。座席は次第に塞がつて來

この名を聞いて従弟が驚いたらしいので、彼は更に言葉を續けた。

「ガガを知らないのかい？……それ、ルキ・フィリップが御即位の初め頃、御寵愛を受けた女だよ。今では何處へ行くにも娘を伴れてゐるんだ。」

ラ・フロアズは娘の方を見ようともしなかつたが、ガガにはひどく心を動かさし、もう眼を離さなかつた。彼はガガが今でも非常に美しいと思つたが、それは口へ出さなかつた。

その時管絃樂の指揮者は弓を擧げた。樂手達は一齊に序曲を奏した。観客はなほ續いて入つて來、その動搖と喧騒は益々募つていつた。初日には必ずやつて來る常連たちは、あちらでもこちらでも、親しげに微笑み交はしてゐた。馴染の間柄だと、氣軽く親しさに、帽子を被つたまま會話してゐた。此處には巴里全體が集まつてゐた。文學の巴里も、經濟の巴里も、歡樂の巴里も。多數の記者もあれば、文士や、相場師もゐるし、また堅氣の婦人よりも玄人の女の方が多かつた。それは、あらゆる種類の性質を含み、あらゆる種類の罪惡で害なれた奇妙な混合體である。人々の顔には、同じやうな疲勞と熱狂とが現はれてゐた。フォシユリイは従弟に問はれたので、新聞記者と俱樂部員の棧敷を指し示して、二人の劇評家の名前を教へてやつた。その

た。際立つてすつきりと化粧をした婦人や、綺麗な横顔を見せ、寶石で光つた項を垂れた婦人がゐた。或る棧敷には絹のやうに白い女の肩がちらつと見えてゐる。婦人達はものうげに扇子を使つて、鷹揚に押し合つてゐる群衆を見まはしてゐた。特等席に立つてゐる若い男達はチョコキの前を開き、山梔子の花をボタン孔に挿して、手袋をはめた指先で觀劇眼鏡を覗いてゐた。

二人の従兄弟は、知人の顔を探してゐた。ミニヨンとシュタイネルは、一緒に平土間に並んで坐つて、手頭を欄干の天鵞絨にかけてゐた。フランシユ・ド・シヴリイは階下の一つの翼席を一人で占めてゐるらしかつた。だが、ラ・フロアズは特に自分より二列前の特等席にゐるダグネを注意して見た。ダグネの隣には、十七歳になるかならない中學校を出たばかりの少年が、天使のやうな美しい眼を大きく見開いてゐた。フォシユリイはこの少年を見ると微笑した。

「あの張出席にゐる婦人は誰だらう？」突然、ラ・フロアズは訊いた。「隣に青い着物を着た娘を伴れてゐるのは。」彼は肥つた婦人を指し示した。彼女はコルセットで體を締めつけ、今は眞白になつてゐるが昔はブロンドだつた頭髪を黄色に染め、頬紅を塗つた圓顔を子供のやうな心のときめきで膨らませてゐた。

「ガガだよ。」とフォシユリイは簡単に答へた。

一人は薄い意地悪さうな唇をして、瘦せて干からびたやうな男だつた。また他の一人は肥つて子供のやうな無邪氣な顔をした男で、隣に坐つてゐる初々しい娘の肩に倚りかゝつて、父親らしいやさしい眼付でそれに見惚れてゐた。

しかしフォシユリイは、ラ・フロアズが向ひ棧敷の人々と會話を交換するのを見ると、直ぐに説明をやめてしまつた。彼はびつくりしてゐるやうだつた。

「おや！ 君はミラファ・ド・ブヴィル伯爵を知つてゐるのかい？」と彼は訊いた。

「あゝ、知つてゐるとも！ ずつと前から。」とエクトルが答へた。「ミラファさんの地所は、僕の地所の近くなので、僕も度々お屋敷へ伺つたことがあるんだ……伯爵は夫人と舅のシニール侯爵と一緒に暮してゐるのさ。」

そして彼は、従兄が驚くので一層得意になり、侯爵が嘗て樞密顧問官だつたことや、伯爵がつい近頃皇后の侍從に任命されたことなどを力を入れて詳しく話した。フォシユリイは觀劇眼鏡を取り上げて、栗色髪、肥つた、色の白い、美しい黒い眼の伯爵夫人を眺めた。

「幕間に僕を紹介してくれ給へ。」と、たうとう彼は言つた。「僕は前に伯爵に會つたことあるんだが、あすこの火曜會には行きたいと思つてゐるんだ。」

しつ！ と二階の棧敷から強く言ふ聲が起つた。序曲は



初まつてゐたが人々はまだ續いて入つて来た。遅れて来た者が既に席に着いてゐる観客の列をみんな立たせたり、棧敷の戸が音をたて、開け閉てされたり、廊下で罵り合ふ大きな聲が聞えたりした。それは非常な混雑だつた。夕暮れに轉る雀の群の饒舌な話聲のざわめきは止まなかつた。頭や腕が入り亂れて動いてゐた。或る者はゆつたりと席をとらうとするし、また或る者は最後にもう一度場内を見廻さうとして、なかく坐らうとしない。「坐つてろ！ 坐つてろ！」と叫ぶ聲が激しく土間の暗い奥から聞えて来た。場内がときめいた。たうとうあの有名なナナが、一週間も前から巴里中の人々が騒ぎ立てゝゐたナナが、今現はれるのだ！

時々腹れ聲で何か言ふ者もゐたが、話聲は少しづつ鎖まつて行つた。そしてこの消えて行く騒ぎの中に、呼吸の音も聞えなくなつて、急調子の管絃樂が、卑俗なりズムに淫らな笑ひを籠めて、ワルツを奏し初めた。擦られて観客はもう笑つてゐた。しかし、土間の前列に居た喝采係は激しく拍手を送つた。幕が上つて行つた。

「おや！」としゃべり續けてゐたラ・ファロアズが言つた。「リュシイさんは何處かの紳士と一緒にだな。」  
彼はリュシイとカロリイヌが前の方に坐つてゐる右側の、張出席の翼席を見た。奥の方にはカロリイヌの母親の端正

な顔と、申分のない服装をした美しい金髪の大きな青年の横顔が見えた。

「見たまへ。」とラ・ファロアズはしつこく繰り返した。「何處かの紳士があるよ。」  
フォシユリイは翼席の方へ眼鏡を向けたが、直ぐに振り返つて、

「あゝ！ ラボルデットだ。」と氣にもとめない様子で、その男が来たとして誰にもかゝはりのない些細な事のやうに呟いた。

二人の後ろから誰かが「静かに！」と叫んだ。二人は黙らなければならなかつた。今ではもう場内に騒ぐ者もなく、姿勢を正し、注意を凝らした人々の頭の列が、特等席から上の方へ階段形に並んでゐた。「プロンド・ヴェニユス」の第一幕は、オリソング山の場面であつた。脇道具は雲になつてゐて、右手にはデピテル(羅馬神話)の玉座のある厚紙で出来たオリソング山であつた。先づ一群の天使を従へて登場したのはイリイ(虹を神化)とガニメード(トロエの子)であつた。天使達はこの會議に列する神々の席を整へながら合唱した。喝采係だけが謀し合せたやうに喝采を送つた。観客はまだぼんやりとして待つてゐた。しかしラ・ファロアズは、ボルドナアヴのお抱への小娘で、イリイの役を演じてゐる薄青い衣裳を着けて七色の大きな肩巾を纏つてゐるクラリス。

ベスニユスに喝采した。

「クラリスはあの衣裳をつけるために肌着を脱いでゐるんだよ。」と彼はフォシユリイに、あたりへ聞えるやうな聲で言つた。「今朝着付けをしてみたら、……肌着を着てゐると、腕の下や背中からそれが見えるんでね。」

場内は軽くざわめいた。ローズ・ミニヨンの扮したディアヌ(羅馬神話の女神)が登場した。彼女は瘦せて色が黒く、まるで巴里の街の駄々兒のやうにあどけなくて醜いので、容貌も恰幅もこの役には適さなかつたが、生れつき快活で魅力があつた。最初に、自分をヴェニユスに見換へようとするマルス(神)を嘆く繰言を、恥かしさうにつましく歌つたが、それは淫らな諷諭に満ちてゐて観客を牽きつけた。夫のミニヨンとシユタイネルは隣り合つて上機嫌に笑つてゐた。續いて破れるやうな拍手に迎へられて登場したのは人氣役者のブリユリエールであつた。彼はクルティエールのマルスの扮装で、素晴らしく大きな羽冠を戴き、肩まである長い佩剣を引きずつてゐた。マルスはディアヌに厭き／＼してゐたのだが、ディアヌはまだ自惚れてゐて、マルスの舉動を監視し、復讐しようと思つた。この二部合唱はおどけたテロル舞踏で終つた。それをブリユリエールは怒つた虎猫のやうな非常に滑稽な聲で引きたてた。ブリユリエールは若い色男役の氣輕なおどけ者で、その思はせぶりの眼で棧敷の婦

人達をやんやと笑はせた。

やがて観客は、また静かになつた。次の場面は退屈だつた。素晴らしく大きな王冠を戴いてよろめいてゐる、智慧のないデピテルの役を演る老優ボスクが、料理女の事で妻のジュノンと喧嘩をする時だけ、やつと観客を笑はせた。

ネプテューンやブリュトンやミネルダやその他の神々の行列が、危くこの芝居を臺なしにするところだつた。観客は辛抱しきれなくなつて、落着きのない騒ぎが徐々に擴がつて行き、舞臺は見ようともせずに場内を見廻した。リュシイはラボルデットと一緒に笑ひこけ、ワンドゥヴル伯爵はブラシユの廣い肩の後ろから首を伸してゐた。フォシユリイが流眄でミラファ伯爵夫妻の様子を見ると、伯爵は何の事だかさつぱり分らないと云つた風に澄ましてゐた。伯爵夫人は、譯もないのに笑ひながら、眼はどこを見るでもなく、心は夢を趁つてゐた。しかしその時、不意にこの沈滞を破つて、一齊射撃のやうな喝采係の規則正しい喝采が起つて、観客の眼はまた舞臺へ歸つた。ナナが出るのか？ ナナこそは人々の待ち焦れてゐるものだつた。

ガニメードとイリイに導かれて登場したのは、下界の眞面目な市民——妻に欺かれた夫達の代表者で、神々の王なるデピテルの面前で、自分達の妻を無暗に煽動したヴェニユスに對する不平を述べるのであつた。その合唱は物悲しい



純朴な調子で歌はれ、時々餘情に満ちた沈黙もあつて、大いに観客の心に適つた。騒音が場内のあちらにもこちらにも起つた。「コキユの合唱、コキユの合唱」この騒ぎはやまずに、やがて「再演！」が叫ばれた。歌手はみな滑稽な顔をしてゐたが、中でも目立つてゐたのは、非常に肥つた月のやうに圓い顔をした男だつた。そこへヴェルカンが血眼になつて、三日前から家出をした妻を尋ねてやつて来た。合唱は再び初まつて、コキユの神であるヴェルカンを慰めた。ヴェルカンの役は、腕の確かな、才氣のある、途方もなく可笑しな身振りをする喜劇役者のフオンタンで、村の鍛冶屋の扮装で赤い假髪を被り、露はな兩腕には矢が心臟を射貫いた刺青を見せてゐた。どこからか女の聲が、「まあー汚ならしいー」と高く聞えると、観客は皆笑つて喝采した。

次の場面は、何時終るとも見えなかつた。ヂュピテルは神々の會議を召集して、欺かれた夫達の願ひについて議する事を承知しなかつた。しかも相變らずナナは出て来ない！幕を下ろすまでナナを登場させないのだらうか？こんなに長引くにつれて、人々は焦れて来た。また騒ぎ聲がし始めた。「こりや詰らない。」と元氣のいゝミニヨンはシュタイネルに言つた。「まるでまやかし物だ、今に分りますよ。」

この時！舞臺正面の雲が分れて、ヴェニスが現はれた。非常に背の高い、十八とは見えない程發育した、長い立派なブロードの髪をそのまゝ肩に流し、眞白な女神の衣裳をつけたナナが、観客に向つて微笑みながら靜かに落ちついてフライトの方へ下りて来た。そして大きな歌曲を歌ひ初めた。

「夕暮ヴェニスさまよふ時……」  
次の句が初まる頃から、場内の観客は眼を見交はした。ボルドナアヴの悪戯なのか、それともからくりなのか？こんなに貧弱な節廻しの、こんなに調子外れの聲を誰も聞いた事がなかつた。支配人の言つたのは間違つてはゐなかつた。彼女は喇叭のやうな聲で歌ひ、舞臺の動作も知らなかつた。手を前に出して、體全體を揺つてゐるその様子は、まるで型外れで見てゐられなかつた。おや！おや！と云ふ叫びが、早くも土間と押込みから起つて、人々は口笛を吹いた。その時聲變りのしてゐる少年が確信に満ちた調子で特等席から叫んだ。

「いよう、素敵！」  
場内の視線が集まつた。それはナナを見て顔をほてらしてゐる、金髪の、美しい眼をばつちり開いた、中學を卒へたばかりの少年だつた。彼は皆が自分の方に向いてゐるのを見ると、思はずそんな高い聲を發したのを恥かしかつて、

顔を眞赤にした。隣席にゐたダグネは笑ひながら彼を眺め、観客達は我を忘れて、もう口笛を吹かうともせず笑つてしまつた。ナナの美しさに氣をとられてゐた白い手袋の青年紳士たちは、夢中になつて拍手を送つた。

「そこだ、素敵々々！萬歳！」  
するとナナも、観客の笑ふのを見て笑ひ初めた。場内は益々陽氣になつた。ナナは美しいと同時に面白い女だつた。笑ふと頬に小さな可愛い笑靨が出来た。彼女は親しげに、悪びれた様子もなく、自分には少しも技倆はないがそれは枝葉の事で、それよりも外のものがあると自から語つてゐるやうな眼つきをしながら、雜作もなく観客と同じ世界に融け込んで立つてゐた。そして彼女は樂長に「さあつづけて下さい、先生！」と身振りで合圖をして、詩句の第二聯を歌ひ出した。

「眞夜中に行くはヴェニス……」  
相變らず耳障りな聲ではあつたが、今度はうまく観客の心を捉へて、時々軽い戯言を與へた位だつた。紅い小さな唇を綻ばせ、明るく澄んだ大きな碧の眼を輝かしながら、ナナはやはり笑つてゐた。詩句の意味が少し露骨な甘つたるいところになると、ナナは鼻を反らして薔薇色の鼻翼を動かしながら頬をさつと紅らめた。彼女はいつもたゞ體を揺り動かしてゐるだけで、ほかに何の仕草も知らな

つた。しかも観客はもう少しもそれを醜態だとは思はなかつたし、男達は却つて劇眼鏡を集中した。一聯を歌ひ終つた頃には全く聲量が盡きて、とても最後まで歌ひ切れないと彼女は思つた。けれども少しも心配しないで、ちよつと腰を振つた。その圓みが薄い着物の下で動いた。それから體を反らして首を仰けると両手を擴げた。喝采の聲が起つた。と見る間にくるりと後ろ向きになつて、舞臺の奥へ行きながら、豊かな褐色の髪が流れてゐる首筋を見せた。破れるばかりの大喝采だつた。

この幕の終りはつまらなかつた。ヴェルカンがヴェニスの横つ面を打たうとした。神々は協議の結果、欺かれた夫達の言葉を聞き入れるに先立つて、まづ地上の調査に着手しようとして取りきめた。一方ではディアヌが、ヴェニスとマールの間の陸言を盗み聞きして、旅行の間も彼等から眼を離すまいと決心した。それから十二歳ばかりの少女が演つた戀愛の神は、何か問はれる毎に「はい、母様……いゝえ、母様」と、鼻に指を當てながら泣き聲で答へた。すると、ヂュピテルは、學校の先生が怒つたときのやうに、嚴格に「私は愛する」と云ふ動詞の活用を二十回行つてみよと言ひつけて、この戀愛の神を暗い小屋へ閉ぢ込めてしまつた。その上にまだ終曲があつて、一座の者と管絃樂とが非常に華やかにコーラスを奏した。幕が下りて喝采係は再演をと



望んだが駄目だった。人々はもう皆立ち上つて出口の方へ急いでゐた。

「彼等は椅子の列の間に挟つて押し合ひながら、印象を語り合つた。同じ文句が聞えた。「つまりませぬね。」

或る劇評家は、思ひ切つて中程を切りつめてしまへ、と言つた。しかし脚本は結局重要ではない。人々はナナの事ばかり話してゐた。フォッシュリイとラ・ファロアズは眞先に外へ出て、ミニヨンとシュタイネルに特等席の廊下で出會つた。瓦斯の光に照らされたその廊下は、坑道のやうに狭苦しく、込み合つて息ぐるしかつた。彼等は暫らく右の方の階段の下で、欄干の影に身を避けて待つてゐた。押込みの客は重たさうな靴音をたて、續いて下りて來た。夜會服の列が過ぎた。一人の女案内人は外套を積み重ねた椅子を、人込みに押し倒されまいと一生懸命になつてゐた。

「私はナナを知つてゐる。」とシュタイネルはフォッシュリイを見たと直ぐ叫んだ。「確かに何處かで出會つたやうに思ひますが……多分、カジノだったでせう。その時、あの女は酔つぱらつてゐたので、まはりには人だかりがしてゐました。」

「私はもうはつきりとは覚えてゐませんが、あなたと同じやうに、確かに見たことがあります……」と、記者は言つた。

「ねえ、二幕目に出る妻の衣裳を見に行きませう……誰かがくれたんです！」

階上の休憩所では三つの玻璃製の燭臺が煌々と輝いてゐた。二人の従兄弟はちよつと立ち止つた。開け閉めの激しい硝子戸が廊下の端から端までを見せてゐた。そこには浪のやうな人々の頭の列が、二つの流になつて絶え間なく渦巻いてゐた。二人は中へ入つた。五六組の人々が身振りをしながら、高聲にこの騒がしい中で根氣よく話してゐた。他の人々は、振り返る度に塗料を施した組板廊下に踵の音を立てながら、ぞろ／＼と歩いてゐた。右にも左にも、模様を彫りつけた大理石の圓柱の間の赤い天鵝絨の椅子を占めた婦人達は、人々の往き來するのを、暑さに疲れたやうな懶い様子で眺めてゐた。彼女達の後ろの大きな鏡の中には、その頸筋が映つてゐた。奥の方のバーでは、腹の大きな男が一杯のシロップを飲んでゐた。

それから彼は聲を低めて、笑ひながら言ひ足した。「多分トリコンの家だつたと思つてゐますが。」

「おや、おや！ それは大變な所でお逢ひでしたな。」と、機嫌を損じたらしいミニヨンが叫んだ。

「新米の淫賣婦風情に、皆がこんな騒ぐのはにが／＼しいことですね。きつと今に、舞臺へは素性の正しい女がなくなつてしまふでせう……。さうだ、もう私はローズが舞臺へ出ることを止めてしまはう。」

フォッシュリイは笑はずにはゐられなかつた。かうしてゐる間にも階段を重たい靴が絶えず下りて來た。小柄な鳥打帽を被つた男がだらしない聲で、

「いや、全くよく肥えてゐるよ！ 喰ひつきたい位だね。」と言つた。

廊下では、鏡で髪を縮らし、折カラをつけてきちんと服装を整へた二人の青年が、論争してゐた。一人は鼻持がならない！ 鼻持がならない！ と理由も言はずに繰り返してゐるし、また一人は、素敵だ！ 素敵だ！ と同じく何の説明もしないで答へてゐた。

ラ・ファロアズはナナを非常に美しいと思つてゐた。そしてたゞ、聲を練習しなへすれば一層いゝのにとだけ言つた。すると人の話にもう耳を傾けようとしなかつたシュタイネルが、急にはつとしたらしく見えた。もうしばらく待つて

しかしフォッシュリイは、新鮮な空気を吸はうとして露臺へ出て行つた。ラ・ファロアズは、圓柱の間に鏡と代る／＼に掲げてある額縁の女優の寫眞を熱心に見てゐたが、やがてフォッシュリイのあとに従つて行つた。劇場の正面の瓦斯燈はもう消されてゐた。人氣のない露臺は暗くて涼しかつた。たゞ、暗闇につままれて一人の青年が、右手の入り込んだところの石の欄干に肘をついて煙草を喫つてゐた。その光が闇の中に見えた。フォッシュリイには、それがダグネだといふことが分つた。二人は握手をした。

「君はそこで何をしてゐるんだい？」と記者は訊いた。「初日には特等席を離れた事のない君が、そんな隅つこに隠れてさ。」

「だつて御覽の通りに煙草を喫つてゐるんですよ。」とダグネは答へた。

するとフォッシュリイは困らせてやらうと思つて、

「ところで、君！ 君は今度出た新しい花形をどう思ふかね？……廊下では、あまり評判がよくないんだが。」と言つた。

「ふん！ そりやナナに好かれさうもない人の言ふことですよ！」とダグネは呟いた。

これがナナの技術に就いてダグネの述べた批評の全部であつた。ラ・ファロアズは、欄干に寄りかゝつて並樹街を眺



めてゐた。正面のホテルと倶楽部の窓はみんな明るく照らされ、舗道の上では、客が込み合つてカフェ・マドリッドの卓子を占めてゐた。夜は更けてゐたが群衆は雑沓し、人々は皆、小刻みに歩いてゐた。ジュフロイ街からは絶えず群衆が吐き出されて、道を横切るのに五分間も待たなければならぬ程馬車の列が續いた。

「なんといふ雑沓だ！ なんといふ騒ぎだらう！」とまだ巴里に驚き足りないラ・ファアラズは繰り返した。

電鈴が長く鳴つて休憩室は空になつた。人々は廊下を急いだ。幕は上つてゐたが、まだぞろ／＼と入つて来るので、もう着席してゐた人々は不快に思つた。皆は席につくと生き／＼とした顔をして、再び注意深く眼を睜つた。ラ・ファアラズは最初にガガを見た。先刻までリュシイの翼席に居た金髪の背の高い紳士が、ガガの傍に居るのを見て、彼は吃驚してしまつた。

「あの紳士は誰だい？」と彼は訊いた。

「フオシユリイはその方を見ないで、

「あゝ！ あれか、ラポルデットだよ。」と、前と同じやうに何氣ない様子で答へた。

第二幕の舞臺装置は、意外なものであつた。それは、マルデイ・グラ(劇肉祭の最終日)の眞最中の、場末の居酒屋ブル・ノアルの舞踏會の場で、假裝者は輪舞曲を歌つてゐた。

そして復唱句ごとに踵でといと足拍子を入れた。この下卑た大騒ぎは、全く意外だつたので、観客は夢中なつて再演を叫んだ。それから、地上のことは何も彼も知つてゐると詐つて自慢してゐたイリイにまかれてしまつた紳士の列が入つて来て、調査にとりかゝることになつた。紳士は皆身分をかくして假裝してゐた。デユピテルはダゴベル王になつて、股引を裏返しにはき、大きな錫の冠を戴いて登場した。フェビウス(アポロの別名)はロンデュモオの馭者になつて現はれ、ミネルヴはノルマンディの保母になつてゐた。マルスがスキスの將軍になつて、途方もない服装で登場した時には、笑や拍手で迎へられた。更にネプテューンが作業服を着て、まるで膨らんだ高い帽子を被つて、額頭に愛嬌毛を出してスリッパを引きずりながら現はれ、腹れ腹で「どうしたんだい！ 美男子なら惚れられたつていゝぢやないか！」と言ふと、観客は前後もなく笑ひ崩れた。どこかで、お！ お！ と叫ぶ聲が聞え、婦人達は扇子をあけて顔を隠した。翼席でリュシイが餘り大きな聲で笑ふので、カロリヌ・エックは扇子で軽くたしなめた。

この邊から芝居は面白くなつて来て、どうやら大成功としまつた。この紳士の謝肉祭、泥まみれになつたオリンプ、一切の宗教や詩がさん／＼に愚弄されたことなどが、ひどく観客を喜ばせたやうだつた。この初日の教養ある人々も、

演神の情熱に捕へられてしまつた。人々は傳説を蹂躪し、古代の偶像を破壊した。デユピテルは頭がいゝとされ、マルスも喝采された。王權は笑劇になり、軍隊は兒戯になつた。デユピテルが一目で小さな洗濯女に惚れて怪しげな踊りを初め、髪を振り亂すと、洗濯女を演つてゐたシモンヌは、神々の王であるこのデユピテルの鼻柱を足蹴にかけて、「この肥つちよ親爺め！」と言つたので、人々はまたどつと笑つた。皆が踊つてゐる間に、フェビウスはミネルヴに鉢で熱い酒を買つてやり、ネプテューンは菓子を捧げる七八人の女に取り圍まれて、玉座に着いてゐた。白に含まれた諷諭の意味が分ると、直ぐに猥褻さが聯想され、何でもない白までも特等席からの擲擲で、元の意味とは違つた、怪しげな意味に聞えた。もうずつと以前から、観客は劇場でこんな不謹慎な馬鹿騒ぎを経験したことがなかつた。彼等は慰められた。

しかし、こんな騒ぎの中に、芝居は進んで行つた。黄色づくめの衣裳をつけ、黄色の手袋をはめ、片眼鏡をかけた洒落た様子のヴェルカンは、相變らずヴェニスの後を追つてゐた。やうやく舞臺に現はれたヴェニスは、ハンカチを頭に載せ、黄金の飾りをつけ、胸を露はにした女漁師の扮装だつた。色が白くて肥えてゐるナナは、腰と口の達者なこの役には倣つてゐたので、忽ち場内の者は一人残らず

惹きつけられてしまつた。可愛い子供のやうなローズ・ミニオンは、柳の枝を帽子に挿し、短いモスリンの服を着て、いゝ聲でディアヌの歌を歌つたのだが、すぐに観客に忘れられてしまつた。一方、いつも自分の腿を敲いてゐる大柄な娘のナナは、牝鶏のやうな聲で歌ふのだが、彼女の周圍には女の全能力とも言ふべき生命の香りが漂うてゐて、観客はそれに酔はされてしまふのであつた。この二幕目の後は、彼女の身ごなしの拙さや、その調子外れの歌や、白の覚え違ひまですべて許された。観客の方に振り向いて、微笑しさへすれば喝采を受けた。例のやうに腰を動かせば、特等席はどよめいて、棧敷から棧敷へと天井まで皆が熱狂した。この舞踏會で、彼女が先立ちで踊り出した時には、まるで凱旋のやうに喝采された。手を腰に置いて、道端の水溜りにヴェニスの身を坐らせてゐるところは、すつかり板についてゐた。サン・クルウの市日の時のやうなクラリネットや小笛の鋭い聲に交つた簫笛の音は、鄙びた彼女の聲のために伴奏してゐるやうに思はれた。

かうして、二箇所は再演をやらせられた。卑猥なリズムの序幕のワルツが再び演ぜられて、紳士を夢中にした。百姓女に扮してゐるジュノンには、デユピテルと洗濯女との現場を押へてデユピテルの頬を打つた。ディアヌはヴェニスとマルスが構曳の手筈をきめてゐるのを盗み聞き、大急ぎでヴェ



ルカンにその時刻と場所を知らせてやると、ヴェルカンは「俺にも計畫がある。」と怒鳴った。その他のことは何が何だか分らなかつた。調査は大急ぎで終りに近づいた。そして王冠をどこかへ失くしてしまつた汗みづくのヂュピテルは、息せき切つて、地上の女達はなか／＼味なものだと言ふこと、所詮は男達が間が抜けてゐるのだと言ふことを宣言した。

幕が下りた。喝采の騒ぎを壓して激しい叫び聲が聞えた。「役者全部！ みんな出て来い！」すると、幕が上つて俳優が手をつないで再び現はれた。ナナはローズ・ミニヨンと列の真中に並んでお辭儀をした。喝采が起り、喝采係が賞讃の聲を煽りたてた。それから場内は次第に空席になつて、半分も人がゐなくなつた。「僕はミリア伯爵夫人に挨拶して来なければならぬ。」とラ・ファアラズが言つた。

「ぢや、僕を紹介してくれよ。」とフォシュリイが答へた。「一緒に出かけよう。」けれども張出席まで行くのは容易なことではなかつた。階上の廊下は混雑してゐて、その中を進んで行くには、身をかはしたり潜りぬけたりしながら、肘で押し分けなければならなかつた。壁に背を凭せて瓦斯の照つた眞鍮製の燈火の下で、肥つた劇評家が、輪になつて注意深く聞いてゐる。

一群の人々にこの劇に就いての批評をしてゐた。通りすがりに低い聲でこの劇評家の名を囁き合つて行く者もあつた。廊下の評判によれば、この男は芝居の間、始終笑つてゐたと云ふことだつた。しかし彼は非常に厳格な態度で趣味と道徳に就いて語つてゐた。あちらの方では、唇の薄い劇評家が好意に満ちたらしい様子で何か話してゐたが、その言葉は酸っぱくなつた牛乳のやうに後口が苦かつた。

フォシュリイは扉の中に箝つてゐる窓を通して、方々の棧敷を眺めてゐた。が、その時ゾンドゥル伯爵が彼を呼びとめて話しかけた。伯爵はこの二人の従兄弟がミリア達に挨拶に行かうとしてゐるのだと知ると、今出て来たばかりの七番の棧敷を教へてやつた。そして記者の耳の傍に身を寄せて、

「ねえ君、あのナナは確かに我々がいつかの夜、ブロッサンス通りの角で逢つた女だよ……」  
「あゝ！ さう／＼！」とフォシュリイは叫んだ。「僕も確かにどこかで見たと思つてゐたんです！」  
ラ・ファアラズは、ミリア・ド・ブッセル伯爵に従兄を紹介したが、伯爵は極めて冷やかな態度をしてゐた。しかし伯爵夫人の方は、フォシュリイの名を聞くと顔を上げて、ファイガロに載つた彼の記事を、つましやかな言葉で賞めた。彼女は欄干の天鵞絨に肘をついて、美しい肩の動きを

見せながら、彼の方に半ば振り返つてゐた。暫らく話してゐるうちに、話題は萬國博覽會の方に移つていつた。「確かに立派なものでせう。」と役人らしい威厳をもつた四角い端正な顔の伯爵が言つた。「私は今日シャンド・マルスへ行つて見たが……全く感心して歸つて来ました。」  
「ですが、とても開期には間に合はないうですわね。」と突然ラ・ファアラズが言つた。「いろ／＼困つた事が出来たさうで……」

しかし、伯爵の嚴かな聲がそれを遮つた。「間に合ふでせう……陛下のお望みだから。」  
フォシュリイは、或る日新聞の材料を探しに出掛けて、まだ建築中の水族館を出るのがどんなに惜しかつたかを、快活な調子で話した。伯爵夫人は微笑んでゐた。夫人は肘までも届く白い手袋をはめた片手を上げて、時々場内を見廻しながらゆるやかに扇子を使つてゐた。場内は殆んど空になつて鎮まり、特等席では数人の紳士が新聞を擴げ、婦人達はまるで自分の家にもゐるやうな風に氣樂に寛いで話をしてゐた。幕間の騒ぎで立ちのぼる細かな塵埃にぼうつと霞んでゐる吊燭臺の下には、最早上流の人々の囁きより外に何も聞えなかつた。扉口には男が集つて場内に残つてゐる婦人を見ようとしてゐた。彼等は、暫らく頸を長くして、白いシャツの大きな胸を出し、ぢつとそこを動かさなかつた。

「次の火曜日にはお待ち申してゐますわ。」と、伯爵夫人はラ・ファアラズに言つた。  
夫人が招待したのでフォシュリイはお辭儀をした。芝居の話は少しも出ず、ナナのことも言はれなかつた。伯爵の態度は非常に鹿爪らしく冷やかだつたので、どこかの立法會議にでも列席してゐるやうに感じられた。彼はたゞ簡単に、今日こゝへ来たのは舅が芝居好きだからといふことを説明した。來訪者のために起つて席を譲つたシヤール侯爵は、背の高い老體をしつかりと立つて、鑢の廣い帽子の下から、白い優しい顔を見せ、眼はきよ／＼と行きすぎる婦人達を眺めてゐた。そんなことで棧敷の入口は開けて置かなければならなかつた。

伯爵夫人の招待を受けるとフォシュリイは芝居のことを話すのはよくないと思つてその場を去つた。ラ・ファアラズもそれに續いた。彼はゾンドゥル伯爵の翼席に金髪のラポルデットが、ブランシュ・ド・シヴリイと寄り添つて堅くなつて話してゐるのを見かけた。  
「ねえ君！」とラ・ファアラズは従兄に追ひつくと直ぐ言つた。「ラポルデットと云ふ男はどんな婦人でも知つてゐるのかい？……今度はブランシュ夫人と一緒に居るよ。」  
「さうさ、あの男は誰だつて知つてゐるとも。」とフォシュリイは落着いて答へた。「どちらから出ようかね？」



廊下は、少しは人が少なくなつてゐた。フォシュリイが階段を下りようとした時、リュシイ・スツワアルが彼を呼んだ。彼女は奥の方に、丁度彼女の翼席の扉口の前に立つてゐた。部屋の中は蒸し暑いと言つて、カロリイヌ・エッケヤその母親と一緒に並んで、砂糖焼巴旦杏を噛みながら廊下いづばいに歩いてゐた。一人の女案内人が母親らしい態度で彼女等と話を初めた。リュシイはすぐにフォシュリイを捉へて、あなたはほんとに御親切で、他の女を見に行く癖に、私達のところへは咽喉が渴きましたかと聞きにも来てくれやしない、と言つて詰つた。それから急に話を變へて、

「ねえ、ちよいと、私ナナがすっかり氣に入つてしまつたわ。」と言つた。

彼女は、最後の幕を自分達の翼席へ来て一緒に見てくれと言つたが、フォシュリイは幕が終つてから逢はうと約束してその場を逃れた。フォシュリイとラ・ファアロアズは階下に入りて、劇場の入口で煙草を喫つた。人だかりがして、歩道を塞いでゐた。人々は支關の階段を次から次へと下りて来て、並樹街の遠いどよめきが聞える中に、夜の冷たい空氣を吸つてゐた。

一方、ミニヨンはシュタイネルをカフェ・グリエテへ引つぱつて来た。ミニヨンはナナの成功を見ると、熱心に彼女の事を話しながら、始終流暢で銀行家を注意してゐた。彼

はシュタイネルといふ人間をよく知つてゐて、今までも二度ばかりローズを欺す手傳ひをしたことがある。だが、そんな氣紛れがやむと、後悔して、また忠實な銀行家を彼女の許に連れ歸つた。カフェの中では大理石の卓子のまはり澤山の客が込み合つて、大急ぎで立ち飲みをしてゐる者もあつた。大きな鏡が、三つの吊燭臺や護謨引布の椅子や赤い絨毯を敷いた螺旋階段や、この込み合つてゐる人々の頭を無限に映し合つて、狭い部屋を途方もなく大きく見せてゐた。シュタイネルは、季節よりも少し早く扉を外してしまつた、とつづきの、並樹街に面した部屋の卓子に向つて腰を下ろした。フォシュリイとラ・ファアロアズが通りかゝると銀行家はそれを呼び止めて、

「さあ、一緒に一杯やりませう。」と言つた。

が、彼はふと思ひついたことに氣をとられた。ナナに花束をやりたいと思つたのだ。そこで、給仕に向つて、親しさにオウギヌストといふ名を呼んだ。ミニヨンが彼の言葉を聞きつけてちつと見つめたので、彼はあわて、吃りながら言つた。

「オウギヌスト、花束は二つだよ。女案内人に渡して、いゝ頃を見計らつて、あの二人に一つづゝやるやうに言つてくれ。分つたかい？」

部屋の片方の端には、鏡の枠に頭をもたせて、やつと十

八歳ばかりの女が空になつたコップを前にして、長い間待つてゐる人が來ないので疲れたといふ様子をして坐つてゐた。美しい灰色の髪が自然に縮れ、その下の處女らしい顔には天鵝絨のやうな眼が優しく朗らかに輝いてゐた。褪せた緑色の絹の着物を着、その圓い帽子は敲かれて凹んでゐた。夜の冷たい空氣のために彼女の顔はすっかり白くなつてゐた。

「おやー サタンがあるよ。」とフォシュリイはそれと見て囁いた。

ラ・ファアロアズが訊き質すと、いや、何でもない、この並樹街の有名な淫賣婦で、ひどくすれつからしの、皆が面白がつて話の相手にする女だとのことだつた。記者は大きな聲で、

「そこで何をしてるんだい、サタン？」と言つた。

「全くうるさくつてね。」と、サタンは身動きもしないで平氣で答へた。

四人は面白がつて笑ひ出した。

ミニヨンは急ぐ必要はないと言つた。三幕目の舞臺装置は二十分もかゝるのだつた。しかしビールを飲んでしまつた二人の従兄弟は歸りたがつた。寒くなつたのだ。そこでミニヨンはシュタイネルと二人だけになると、兩腕をついて、意味ありげに言つた。

「どうです？ 分つてゐますよ。行きませう。私が紹介しますから……。ね、これはこゝだけの話で、家内には知られないやうにして。」

席に歸ると、フォシュリイとラ・ファアロアズは樓敷の二列目に、上品な様子をしてゐる綺麗な婦人を見つけた。彼女は、ラ・ファアロアズがミラファアの家で逢つて知つてゐる眞面目さうな内務省の或る局長と一緒にゐた。フォシュリイはその女の名はロベール夫人と云つて、何時もしつかりした男を、それもたつた一人だけ戀人にもつてゐる、身分のある女だと云ふことをよく知つてゐた。

だが、従兄弟達は振り返らなければならなくなつた。それはダグネが彼等を見て笑ひかけたからである。ナナが成功した今となると、彼はもう人目を避けようとはしなかつた。そして意氣揚々と廊下を通つて来たところだつた。彼の傍には中學を出たばかりの少年が、ちつと席を離れないで、いつまでもぼんやりとしてナナに對する讚美に耽つてゐた。さうだ、ナナは女だ、かう考へると、彼は眞赤になつて、機械的に手袋をはめたり脱いだりしてゐた。そして、隣席の男がナナのことを話してゐるので、彼は思ひ切つて訊いてみた。

「失禮ですが、あの舞臺に出た女をあなたは御存じですか？」



「え、少しはね。」と、ダグネは驚いて躊躇ひながら答へた。

「では住所も知つてゐらつしやるんでせうね？」

この質問は餘り突然だつたので、ダグネは答へる代りに横面を振りつけてやらうかと思つたほどだつたが、

「知らないよ。」と素氣なく答へた。

そしてくるりと背を向けてしまつたので、金髪の少年は自分が悪い事をしたのだと思つて、益々赤くなつて途方にくれてしまつた。

鐘が三つ鳴ると、女案内人は澤山の上着や外套を持つて、席に歸る人込みの中でそれを返さうと一生懸命になつてゐた。喝采係は、エトナ山の銀鏡に穿たれた洞窟の側面が、新しい銀貨のやうに輝いてゐる舞臺装置を喝采した。奥にはヴェルカンの鍛冶場があつて日没のやうに輝いてゐた。第二幕の後にディアヌは、ヴェニスとマルスを自由にするために止むを得ず旅行に出る風を装つた神と相談をしてゐた。そしてやつとディアヌが一人になるとヴェニスが登場した。観客は身震ひした。ナナは裸體なのだ。自分の肉體に十分の自信をもつて、彼女は、裸體のまま大膽に落着いてゐた。ほんの一枚の輕羅が、彼女を包んでゐるばかりだつた。圓い肩、薔薇色の槍のやうにくつきりと盛りあがつた固い二つの突起のある胸、淫蕩な動作で揺れて

ゐる大きな腰、脂ぎつた金色の腿、かゝした彼女の全身が泡のやうに白い軽い織物の下に、透き通つたり露は見えたりしてゐた。浪の間から現はれ出たばかりのヴェニスで、身につけてゐるものと云つては、たゞ、髪の毛だけであつた。そしてナナが腕を上げると、フライトの光で腋の下の金色の毛が見えた。今は喝采も起らなかつた。笑はうとする者もなかつた。人々の顔は緊張し、鼻に皺を寄せ、唾も濁れて口をからくさせてゐた。無言の脅威を含んだ優しい風が、人々の上を通り過ぎたやうであつた。と突然、この笑つてゐる娘のうちに一人の『女性』が描き出されて、おづ／＼しながらも女性の奔放な衝動で、人の意識に隠れてゐる欲望を目醒めさせた。ナナはいつも笑つてゐたが、それは男殺しの鋭利な微笑だつた。

「これは、これは！」フォシユリイは、たゞそれだけラ・フアロアズに言つた。

羽冠を被つて急いで嬌曳にやつて來たマルスは、二人の女神の間に挟まつてしまつた。この場面では、ブリュリエールが大變うまく演つた。ディアヌは、夫をヴェルカンの手に引き渡す前に、もう一度取り戻さうとして最後の努力をするし、競争者の現はれたのを見て躍起となつたヴェニスは、彼を手練手管でたらし込もうとする。マルスはその間に挟まれて、各々より程よく愛を受けながら、浮世の風

はどこを吹く、といつたやうな澄ました様子だつた。そして、この場面は長い三部合唱で終りとなつたが、この時、リュシイ・スツワアルの棧敷に女案内人が入つて來て、白いリラの大きな花束を二つ舞臺へ投げた。人々が喝采してゐる間に、ナナとローズ・ミニオンがお辭儀をし、ブリュリエールがその花束を拾つた。特等席に居た観客の中には、シュタイネルとミニヨンの居る席を顧みて微笑した者もあつた。シュタイネルは顔を赧くして、咽喉に何かまつたやうに、神經的に頸を頓はしてゐた。

次の場面も観客をすつかり魅惑してしまつた。ディアヌは氣も狂はんばかりになつて退場した。すると直ぐヴェニスは苔の上に坐つて、マルスを自分の傍に呼んだ。今まで誰もこんな熱烈な誘惑の場面をやつたものはなかつた。ナナはブリュリエールの頸に兩腕を巻いて引き寄せた。その時、フォンタンが滑稽な憤怒の身ごなしで、屈辱を受けた夫がその妻を取り押へた時の顔付を飽くまで誇張して、洞窟の奥に現はれた。手には有名な鐵の投網を携へて、漁夫が網を打つ時のやうに、ちよつとそれを揺つた。そして巧みに投げかけると、ヴェニスとマルスは幸福な戀人たちの姿勢のまま動けなくなり、買にかゝつてしまつた。ほつと溜息をついたやうに、場内には騒ぎが起つた。拍手をしたものもあつた。観劇眼鏡は皆ヴェニスに集中され

た。少しづつナナは觀衆を征服し、今では男といふ男は一人残らず彼女に服従してしまつた。彼女の身から立ちのぼる魅惑は、熱に冒された動物のやうに、次第にその力が擴がつて場内を満たして行つた。そして、彼女のほんの僅かな動作でさへも人々の情慾を咬り、小指一本の動きでさへもその全身を戦かせるのだつた。人々は背中をまるくし、眼に見えない樂器の弓が筋肉の上を過ぎるかのやうに戰慄し、その頸筋に見えてゐる生毛は、誰とも分らない女の口から吹いて來る、温かい、ほのかな溜息に亂れてゐた。フォシユリイは自分の前で、例の中學を出たばかりの少年が情熱に驅られて椅子から立ち上るのを見た。そして好奇心から唇を堅く閉ぢて眞蒼になつてゐるゾンドゥル伯爵や、肥つたシュタイネルの癡癡つて歪んだ顔や、完全な牡馬に見られてゐる伯爵のやうに眺めてゐるラポルデットや、夢中に上氣して赧くなつた耳を動かしてゐるダグネなどを見廻した。そしてふと後を振り返ると、彼はミラファ達の棧敷を見て吃驚してしまつた。眞白な眞面目な顔をしてゐる夫人の後に、伯爵は延び上つて、口をぽかんと開き、その顔は赤くなつてゐた。そして彼と並んで蔭になつた中に、シユアール侯爵の落着きのない眼が、金の輪の中で燐光を放つ猫の眼のやうに二つ輝いてゐた。場内は息苦しくて、髪の毛が汗にぬれ、頭は重たくなつた。開幕の後三時間たつて、空



氣は人いきれで暑くなつた。瓦斯の焰の中に塵埃はますます濃く立ち上つて、吊燭臺の下を動かさなかつた。観客は残らず眩暈を感じたやうに動揺し、疲勞した上に興奮させられて、今までは氣にならなかつた寢床に歸つて行きたいといふ希望に捉はれた。しかもナナは、このぎつしり詰つた千五百人ばかりの観衆——大詰近くになつて、疲れて神經の調子の狂つた人々——のぼんやりしてゐる面前で、勝ち誇つたやうに、大理石のやうな肉體と、観衆を壓倒しつゝした素晴らしい女性の魅力を示して、平然と舞臺に残つてゐた。

芝居は終りかけてゐた。ヴェルカンの元氣な呼聲に集つて来た全オリンブの神々は、妻を失つた男たちの前を列を作つて進みながら、快活に我を忘れて、おー！とか、あー！とか、叫び聲を發した。デビテルは、「皆の者よ、我々を呼んでこのやうな有様を見せるとは、全く憤しみのないことではないか。」と言つた。それからヴェニユスのために、まだ行列が廻り初めた。再びイリイが音頭をとつて、コキエの合唱が初まり、今度は神々の王にもう調査を切りあげてくれと哀願した。妻が家に歸つて来ると男の生活は非常に苦しくなつた。それで彼等は欺かれてゐることに満足して、その方を選ぶ、といふのがこの劇の主題であつた。そこでヴェニユスは網から出されて解放せられ、ヴェルカンは夫

婦別れをし、マルスはディアヌと仲直りをした。デビテルは家庭の平和を得るために自分の好きな小さな洗濯女を星座に送つてしまつた。そして監禁せられた小屋で、「愛する」と云ふ動詞の變化を繰り返しもせずに、雌鶏のやうにコッコと云つて遊んでゐた戀愛の神は、たうとう釋放せられた。コキエの合唱隊が皆跪つて、神々しい裸體で微笑みながら威容を整へてゐるヴェニユスへ、感謝の讚美歌を歌つてゐる禮拜の場で幕が下りた。

観客は直ぐ起つて扉口へ急いだ。作者の名が口々に呼ばれ、雷のやうな喝采の中で二度もアンコールがあつた。「ナナー！ ナナー！」と云ふ叫びが激しく起つた。まだすつかり空にならない場内は暗くなつて、フットライトが消え、吊燭臺の焰が小さくなつた。灰色をした布の長い覆ひが翼席の上に滑り落ちて棧敷の金の飾りを隠した。あんなに暑く、あんなに騒がしかつた場内は、突然深い眠りに落ちた。そして鐵と埃の匂ひが立ち上つてゐた。ミラファ伯爵夫人は自分の棧敷の側で、毛皮にくるまり、體を眞直ぐにして群衆の流れ去るのを待ちながら暗い場内を眺めてゐた。

廊下では女案内人達が群衆に押されて、積み重ねた外套の崩れた間で途方に暮れてゐた。フォシュリイとラ・ファロアズは、人々の出るのに遅れまいと急いでゐた。支關に沿つて群衆が垣を作つてゐた。奥の廣い左右の階段から人浪

の列がゆつくりと規則正しく、ぎつしり詰つて下りて来た。シュタイネルはミニオンに引張られて眞先に出来た。ヴンドゥル伯爵はブランシユ・ド・シヴリイと腕を組んで出て来た。ガガとその娘とは當惑してゐる様子だつたが、ラボルデットが大急ぎで馬車を探しに行つて、彼女等をそれに乗せ、氣取つた様子をしてその扉を閉めてやつた。誰もダダネの通るのを見なかつた。例の中學を出たばかりの少年は顔をほてらしながら、女僮達の通る通用門で待ち受けようと決心してパノラマ通りに駆けつけたが、その鐵柵は閉まつてゐた。と、歩道に立ちどまつてゐたサタンがやつて来て、スカートで彼に觸れた。しかし失望してゐる少年は手荒く彼女を拒けて、眼には情熱と消耗の涙を湛へて、群衆の中へ消え去つた。煙草に火をつけて、「夕暮れヴェニユスさまよふとき……」と低い聲で歌ひながら遠ざかつて行く者もあつた。サタンは再びカフェ・グリエテの前に身を現はした。そこでオウギヌストが客の残した砂糖を食べさせてやつた。すると泥酔した一人の肥つた客が出て来て、たうとう彼女を、次第に睡りに落ちてゆく並樹街の蔭の方へ伴れ去つた。

しかも群衆はまだ引きつゞいて下りて来た。ラ・ファロアズはクラリスを待つてゐた。フォシュリイはリュシイ・スツワアルやカロリイヌ・エッケや彼女の母親のお伴をしようと

約束してゐた。彼女等は出て来て支關の一隅にかたまつて、ミラファ伯爵達が冷やかな様子でそこを通つた時、高い聲で笑つた。その時、丁度ボルドナアズが小さな扉を押しあけて出て来て、フォシュリイに向つて例の新聞記事の約束をした。彼は汗みづくになつて、この成功に酔つてよもゐるらしく、日射病に罹つたやうな顔をしてゐた。

「どうしてもこの芝居は二百日位は續くでせう。」と丁寧なラ・ファロアズが言つた。「巴里中の人々が擧つてあなたの劇場へ来るでせうから。」

しかしボルドナアズはむつととして、荒々しい態度で顔をしゃくつて、あの支關に込み合つて一杯になつてゐる、唇を乾かし、眼を輝やかしてまだナナで頭が一杯の、上氣した群衆の塊りを指して、

二

「強情な男だね！ 女郎屋と言つておくれつてばー」と、ひどい權幕で叫んだ。

翌朝の十時には、ナナはまだ眠つてゐた。彼女はオースマン街の大きな新しい家の三階を借りてゐた。この家の家主は婦人にだけ新築の家に住はせてゐたのである。冬期を巴里で過ごす莫斯科の或る豪商が、家賃を六ヶ月分前拂ひして、彼女をそこに圍つて置いた。この部屋は彼女には



廣過ぎる位で、まだ十分に家具も整へられなかつた。調子外れの豪華な品物や、金箔塗りの物置臺や椅子などが、古道具屋で買ったがらくたもの、桃花心木の圓卓やフロランス青銅製の燭臺など、鉢合せをしてゐた。最初の眞面目な男に早くから見捨てられて、素性も分らないやうな情夫達の間を轉々し、人生の門出から苦勞を嘗めて、最初の世渡りに失敗した女が、世間の信用を失ひ、人々から感かされては追つ拂はれるその様子が、これらの家具の中にも感じられた。

ナナは俯伏して眠つてゐた。露き出した腕に枕をかゝへ、その中に眞白な顔を埋めて熟睡してゐた。近所の室内裝飾商の手を煩はした部屋と言へば、この寢室と化粧室だけである。光線が窓掛けの下から滑りこんでゐたので、紫香木細工の家具や灰色地に大きな青い花模様のある金襴の壁覆ひや椅子掛けが目についた。ナナはこの生温たかい静かな部屋の中で、自分の傍が空いてゐるのに驚いたかのやうに、急に眼を覺ました。隣の枕を見ると透しレースの枕覆ひの中心に、まだ温かい凹みが残つてゐた。それで、彼女は手さぐりで枕もとの電鈴のボタンを押した。

「歸つてしまつたのかい？」と、彼女は入つて来た女中に訊いた。

「はい奥様、ボウル様(ダグネ)は、まだ十分にもなるかならな

い位の前にお歸りになりました。奥様が大層お疲れの御様子だつたので、お起しすまいと仰しやつて、私に明日来るからとお傳へして置くやうにお言ひつけになりましたね。」かう話しながら女中のゾエは鏡扉を開いた。するとぼつと明るい日光が射し込んで来た。彼女は濃い栗色の髪をした女で、それを小さく梳きつけてゐた。顔は長くて犬のやうに尖り、血の氣が失せて皺が多く、それに平たい鼻と、厚い唇と、絶えずきよろしく動いてゐる眼をしてゐた。

「明日、明日だつて。」とナナはまだすつかり眼が覺めないで同じ事を繰り返した。「明日はあの人の日なの？」

「さうですわ奥様、ボウル様はいつも水曜日にはお見えになりませぬ。」

「あゝ！ さうぢやないの、私忘れてゐたわ！」とナナは寢床の上に起き直つて叫ぶやうに言つた。「すつかり日取りが變つてゐるの。今朝その事をボウルに言はうと思つてゐただけけれど……。あの人は乾度黒奴に出會つてしまふわ。さうなるまでには濟まないだらうね！」

「奥様は何とも仰しやらないんですもの、私は知りませんでしたわ。」とゾエは呟いた。「奥様が日取りをお變へになつたのなら、私もよく承知して置くやうに、さう仰しやつて下されば好かつたのに……。ではあの老いぼれの吝嗇漢はもう火曜日には來ないのですね？」

二人が眞顔で話してゐる、この金を呉れる、老いぼれの吝嗇漢だとか黒奴だとか言ふのは、一人は郊外のサン・ドゥニにゐる吝嗇な商人の事であり、今一人は伯爵と自稱するブラシイ人で、その男の収入は出鱈目で出所が不明だつた。ダグネはこの老いぼれの吝嗇漢が來て泊つて行つた翌朝の時間を頂戴してゐるのだつた。この商人は朝の八時には自分の家へ行つてゐなければならなかつたから、ダグネはゾエのゐる臺所口からこの男の出掛けるのを待つてゐて、それから、まだ温か味の残つてゐる寢床にもぐり込んで、十時が來るとまた自分の仕事に出掛けるのだつた。ナナとダグネはこの手筈を重寶に思つてゐた。

「あゝ、いけない！」とナナは言つた。「私は午後、手紙を書きけれど……。もしもその手紙がうまく届かなくつても、お前はあの人を明日は入れないやうにしておくれね。」

ゾエはその時靜かに部屋を歩いて昨夜のナナの素晴らしき出来榮えの話をした。奥様は非常に立派な胸前をお見せになつて、大層上手にお歌ひなすつた！ あゝ！ 今ではもう奥様は何も御心配になることはありませんわ！ と言ふのだつた。

ナナは脇を枕に埋めて、たゞ點頭いて答へてゐた。肌膚は滑り落ち、肩の上には解けて亂れた髪が流れてゐた。「でもね、」ナナはうつとりとなつて言つた。「でも、私どう

したらいゝのだらうね？ 今日随分厭なことがあるの……。今朝また門番が來て？」

それから二人は眞面目になつて話をした。ナナには三期(三期)の家賃の滞りがあるので、家主は差押へをすると言つてゐた。その外に貸馬車屋、反物屋、仕立屋、炭屋、その他先きを争つて押し掛けて來る債權者の群が、毎日控室の椅子に頭張つてゐた。殊に炭屋が一番猛烈で、階段まで來て怒鳴りつけたりなどした。けれどもナナの最も大きな心配は、子供のルキのことであつた。ルキは彼女が十七歳の時に産んだ兒で、ラムプウィエ附近の或る村の保母の手に預けてあつた。この保母はルキを返すのに三百法を要求してゐた。最近この兒を訪問して以來、ナナは母性愛に目醒めて、早く保母に金を拂つて、子供をバテイニヨルにゐる伯母のルラ夫人に預けようと云ふ計畫が頭にこびりついて離れないのだが、それを實現出來ない爲めに失望してゐたのである。伯母の所ならば、見たい時には何時でも出掛けに行けるのだ。

女中はあの老いぼれの吝嗇漢にこの事を打明けたがいゝとナナに仄めかした。

「さうよ！」とナナは言つた。「彼の人には何もかも言つたのよ。だけど、彼の人も澤山の支拂に攻められてゐると言ふし、毎月の千法の中からは、それは出せやしないの……。」



黒奴と来た日には、當分まるで手も足も出ないの。たしかに博奕ですつたらしいんだわ……。貧乏者のミミは、却つてあちらの方で貸して欲しい位なのだ。株の暴落ですつかり裸になつてしまつて、今では私に花さへ持つて来られやしないんだからね。」

ナナはダグネの事を話した。目醒めたばかりの投げやりな氣持から、ゾエに對して何も隠さなかつた。女中はこんな打明け話には慣れてゐたから、思ひ遣り深くつゝましく聽いてゐた。奥様が進んで事情を話されるのだから、女中も心置きなく意見を述べられるのだつた。何より彼女は非常にナナを愛してゐた。ブランシュ夫人は手代へ品を代へして、彼女を呼び戻さうとしてゐた。彼女の名はよく知られてゐたので、口を探すのに困りはしなかつたが、どんなに不自由な目を見ても、ナナの所に止まりたいと思つてゐた。ナナの行末に見込があると信じてゐたからである。

それで、彼女は自分の意見をはつきりと言つてしまふのだつた。人と云ふものは若い時には随分馬鹿げた事をするものだが、今度と云ふ今度は目を開けなきやならない。男と云ふものは眞面目にものを考へて呉れない。さあ！ほんとしつかりしなきやならないのだ！債權者をなだめたり、要るだけのお金を取る位のことなら、奥様がたつた一言口をきゝさへすればいいのだと、彼女は言つた。

「そんなことをしたつて、三百法にもなりやしないわ。」とナナは首筋に亂れかゝつた髪の中へ指を通しながら繰り返した。「どうしても三百法だけは今日、今すぐ欲しいの……三百法位のお金を呉れる人を知らないなんて馬鹿げてるわね。」

この朝ナナはルラ夫人を待つてゐたのだ、そしてどうかしてラムブウィエへ行つてもらひたいのだ。こんな風に不如意なことを取りとめも無く考へてゐると、昨夜の勝利は全く傷つけられてしまふのだつた。昨夜あんなに喝采してゐた觀客の中に、十五ルイ(二十ルイは約)の金を貸してくれる者が唯の一人もないとは！しかし、こんなにしてゐたのでは尙更金が手に入る見込みがない。あゝ！何と云ふ不幸な事だらう！そして彼女の考へはいつも子供の土へ戻つて来るのだつた。子供は、天使のやうな青い眼をしてゐて、廻らぬ舌で「母ちゃん」と呼ぶ。その聲が、可笑しくて可笑しくてならないのだつた！

丁度この時扉口の電鈴がけたましく鳴り響いた。ゾエは出て行つたが歸つて来ると、心得た様子で囁いた。

「御婦人の方でございます。」  
ゾエは何度もこの婦人を見かけたことはあつたが、又、彼女が金に困つてゐる婦人達と何か關係があることなども少しも知らないふりをしてゐた。

「お名前を伺ひました……。トリコンと仰しやいました。」  
「トリコン！」と彼女は叫んだ。「まあ！ほんとに私はあの人のことを忘れてゐたわ……。お通し申しておくれ。」

ゾエは、背の高い巻髪の、顧問辯護士を訪ねる伯爵夫人とでもいつた物腰の老夫人を案内して来た。そして、その場にゐてもよかつたのだが、いつも男たちが来た時のやうに身をかはして、足音も立てずに、まるで蛇のやうに身をくねらせて部屋から出て行つた。トリコンは腰も下ろさなかつた。たゞ短い言葉を交はしただけだつた。

「今日一人あるのだけれど……どう？」  
「いゝのよ……いくら？」

「二十ルイ。」  
「何時頃なの？」

「三時よ……ちやいゝのね？」  
「いゝわ。」

それからトリコンは、天氣がよくて外を歩くのにいゝこととや、まだこれから四五人に逢はなけりやならないことなどを話した。そして、小さい手帳をめくつてゐたが、部屋を出て行つてしまつた。一人になると、ナナは肩の荷を下ろしたやうに見えた。軽い戦慄が肩を走つた。彼女はまるで寒がりの猫のやうに不精に、もう一度温かい寢床にふんわりと身を埋めた。少しづつ眼が閉ぢていつて、明日はルキゼ

(ルキゼの)を美しく着飾らせてやらうなどと空想しながら微笑してゐた。かうして眠りに落ちながらも、昨夜一晩中見てゐた激しい夢や長く尾を曳いた喝采の聲などが、連続したバスのやうになつて再び歸つて来て、彼女の疲勞を慰めた。

十一時にゾエがルラ夫人を部屋に案内して来た時にナナはまだ眠つてゐた。そして物音で眼を覺ますと、すぐに言つた。  
「あらいらつしやい……。今日はラムブウィエに行つて下さいわね。」  
「その積りで来たのですよ。」と伯母は言つた。「零時二十分の汽車があるから、まだ間に合ひますよ。」  
「だつて、そんなに早くお金は出来やしないわ。」とナナは伸びをして首を反らせながら答へた。「まあ御飯でもお上りなさい。またそれからのことにしませうよ。」

ゾエが化粧箱を持つて来た。  
「奥様、髪結さんが来てゐますよ。」  
だが、ナナは化粧室には行かうとしないで、自分で呼びかけた。  
「お入り、フランシス。」

すると扉を押して、身なりのきちんとした男が部屋へ入つて来て會話をした。丁度ナナが素足のまゝで寢床から出たところであつた。彼女は少しも急がないで、ゾエが化粧



着の袖を通す事の出来るやうに手をさし延ばした。フランシスは心得たもので、鷹揚に顔もそむけないで待つてゐた。それから彼女が腰を下ろして、初めて櫛が入れられるやうになつた時に彼は語り出した。

「多分奥様はまだ今日の新聞を御覧にならないのでせうね。ファイガロに大變い、評判が載つてゐますよ。」

彼はその新聞を買つて来てゐた。ルラ夫人は眼鏡をかけ、窓の前に立つて高い聲で読み初めた。夫人は軍人のやうに眞直ぐに突つ立つて、氣の利いた形容詞を讀む度に鼻をうごめかした。その劇評と言ふのはフォシユリイがブリエテ座から出ると直ぐに書いたもので、女優としてのナナの演技に對する氣の利いた皮肉と、一女性としてのナナの魅力に對する思ひ切つた讃辭を並べ立てた二段に互る甚だ熱心さに充ちた記事であつた。

「素晴らしいものですよ！」とフランシスは繰り返した。ナナは自分の聲が抑揚はれてゐる事なんか少しも氣に懸けなかつた。このフォシユリイは中々親切者だつたから、彼女は彼に相當な返禮をしてやらうと思つた。ルラ夫人はもう一度記事を讀み返して、突然、男と云ふものは皆臍腔に悪魔を容れてゐるものだと言つた。そしてそれ以上は何も説明しないで、自分だけしか分らないこの淫らな諷刺に満足してゐた。フランシスはナナの髪を結び終つてから、

お辭儀をして、かう言つた。

「夕刊も見て置ませうね……。それからいつもの通りでいゝんでせう？ 五時半で？」

「あのね、」とフランシスが戸を閉めかけたときに、ナナは部屋の中から言つた。「ポマードを一瓶とボアシエの店で砂糖、焼巴旦杏を一斤買つて来て頂戴な！」

それから女二人だけになると、彼女等はお互にまだ接吻しなかつた事を思ひ出して、頬の上に強い接吻をし合つた。記事が二人を喜ばせてゐた。それを讀むまでナナはまだ睡氣から覺め切らなかつたが、今は再び勝利の熱情に囚はれた。さうだ！ ローズ・ミニオンはさぞ今朝は機嫌のいいことだらう！ 伯母は感動すると胃に悪いと言つて、劇場へ行きたがらなかつたので、ナナは昨夜の事を語り初めた。まるで巴里全市が彼女に對する喝采に酔ひ崩れでもしたかのやうに、自分の話に我ながら陶然としてゐた。それから突然話を切つて、これが若し、彼女がグウト・ドオル街にゐたお轉婆盛りの時代だつたら、世間の人はこんなことは言つてくれなかつたらうに、と笑ひながら話した。ルラ夫人は首肯した。え、え、人は決して未來の見通しなんか出來ないものだ。そして今度は、ルラ夫人が落着いた様子をして、ナナを娘と呼びながら語りはじめた。ナナの實母がナナを棄て、父や祖母の許に走つたのだから、自分が第

二の母ではなからうかと言ふのである。ナナは感動して今にも涙を落しさうになつた。しかしルラ夫人は過ぎ去つた事は過ぎ去つた事だし、殊に汚れた過去はいつもその儘にそつとして置くものだよと繰り返して言つた。夫人は永い間姪とは往き來をしてゐなかつた。といふのは、ナナの家庭では、夫人が姪を道伴れにして一緒に破滅に導いたのだと言つて非難したからであつた。伯母はナナの家庭に對して信用を求めようとはせずに、自分は自分だけでいつも恥かしからぬ暮しをして來たと信じてゐた。まるで神業か何ぞのやうに！ そして今ではナナが立派な地位にゐることや、また彼女がその子供に對して好い感情を持つてゐるのを見て満足してゐた。何と言つても、この世では正直と勤勉が大切であつたから。

「あの兒は誰の子なの？」と、夫人は急に言葉を切つて、鋭い好奇心に燃えた眼をみはつて尋ねた。

ナナは驚いてちよつと躊躇したが、

「或る紳士よ。」と答へた。  
「さう！」と伯母は引きとつて言つた。「實はね、お前をひどく殴つた左官の子だといふ噂なんだけれど……。でも、私にだけは何時か言つておくれだらうね。お前だつて、私が秘密を守るかどうか位は知つてゐるぢやないか！……ね、子供は皇族の若様のやうに育て上げますよ。」

ルラ夫人は花屋の方は廢めて、一スウ一スウと掻き集めるやうにして手に入れる六百法の収入で小ぢんまりと暮してゐた。ナナは夫人に小綺麗な部屋を借りてやつて、その上、月々百法づゝ届けると約束した。百法と聞くと伯母は我を忘れて、姪に向つてあの人達の咽喉を締めつけてもつと絞つておやりと叫んだ。これは伯母が何も彼も知つてゐて、男達のことを言つたのである。二人はなほも抱き合つてゐた。けれどもナナはこんなに喜んでゐても、またルキのことを話し初めると、突然何か思ひ出したやうに鬱々とした。「厭なことね、三時に、私は一寸行つて來なけりやならぬいの！」と彼女は呟いた。「ほんとにまた、厭なことだわ！」

丁度その時ゾエは食事の用意が出來たと知らせた。食堂に行つてみると、そこには年輩の婦人が一人もう食卓に着いてゐた。彼女は帽子も脱がずに、褐色と鐵色の間のはつきりしない暗い色の服装をしてゐた。ナナは彼女がそこにゐるのを見て別に驚きもしなかつたが、たゞ、何故部屋へ來なかつたのかと尋ねた。

「話聲が聞えたので、」と老婦人は言つた。「お客さまだと思ひましたの。」  
この上品に勿體ぶつたマロアール夫人は、ナナの舊い友人だつた。ナナとはいつともつき合つてゐて、どこへでも一緒に行つた。ルラ夫人のゐることが、彼女を先づ不安に思は



せたらしいが、ナナの伯母だと知ると蒼ざめた顔に微笑を浮べて優しく眺めた。ナナは大變お腹が空いたと言つて、赤蕪を取るとパンも添へないで食べ初めた。ルラ夫人は改まった態度で、害になるからと言つて赤蕪を断つた。それからゾエがカツレツを持つて来ると、ナナは肉を食べつくして美味さうに骨までしゃぶつた。彼女は時々横目でマロアール夫人の帽子を見てゐた。

「それは私が上げた新しい帽子ぢやないの？」とさうとう彼女と言つた。

「さう、あれを少し變へたの。」と、マロアール夫人は口に一杯頬張つたまゝ答へた。

その帽子は素晴らしく大きく、前が廣くなつてゐて、高い羽飾りがついてゐた。マロアール夫人はどの帽子もみな形を變へてしまふ癖があつて、自分に似合ふものは自分だけしか知らないのだと云ふ譯で、手先きの細工で、折角のいゝ帽子を下らないものにしてしまふのであつた。ナナは彼女と一緒に掛ける時に赤い顔をしなくてもいゝやうにと思つて、この帽子を買つてやつたのだから、少し機嫌を悪くした。

「お願ひだから、せめてこゝではそれを脱いでゐて頂戴よ」と彼女と言つた。

「いゝえ、これでいゝの。」と老婦人は落着いて答へた。

「ちつとも邪魔にはならないから、被つてゐたつて、いゝ具合に食べられるわ。」

カツレツの後は、冷たい鳥肉と花キャベツとが運ばれた。しかしナナは皿が来るごとに不機嫌な顔をして、みんな残した。彼女は砂糖漬で食事を済ましてしまつた。デザートが長びいた。ゾエは食器を除けなさいで珈琲を出した。夫人達はちよつと皿を突きやつただけだつた。そして相變らず昨夜の成功を話してゐた。ナナは煙草を捲いて、椅子の上に倒れてそれを喫ひながら體をゆすぶつてゐた。そしてゾエが食器棚に凭れて兩手をぶら／＼させながらちよつとしてゐたので、皆は彼女の身の上話を聞き初めた。彼女はベルシイの或る産婆の娘で、母親はいろ／＼の不幸に逢つたといふことを語つた。ゾエの最初の奉公先は齒醫者の家で、それから保險會社の社員だつたが、どうもうまくゆかなかつた。そして彼女は少し自慢らしい調子で、女中としてつき／＼に勤めた貴婦人達の名を數へ上げた。ゾエは自分の手の中にまるでその運命を握つてゐるものゝやうに貴婦人達の話をした。それらの貴婦人達はもしも彼女が居なかつたならば、一人ならず飛んだ浮名を流しただらうと信じてゐたのだ。たとへば、ブランシュ夫人が或日オクタヴと一緒居るところへ思ひがけなく老主人が歸つて来た。そのときゾエはどうしたか？ 彼女は客間を通りな

がら詐つて卒倒した。老主人は大急ぎで彼女のために水を取りに臺所へ走つて行つた。その間にオクタヴは逃れたのだつた。

「まあ！ほんとに重費者だわー」ナナは優しく心を牽かれて、感心したやうに聞きながら言つた。

「私もね、大へん不仕合せだつたの……」とルラ夫人が語り初めた。

そして彼女はマロアール夫人の傍に寄つて打明け話をした。二人は珈琲に浸した角砂糖を舐めた。マロアール夫人は、自分のことは少しも言はないで、他人の祕密をだまつて聞いてゐた。人の噂によると、彼女は、或る不思議な下宿の、誰も入つたことのない部屋に住んでゐるといふことだつた。

不意にナナは機嫌を悪くして、

「伯母さん、ナイフで悪戯をしないで頂戴……。私が氣にするのはよく御存じでせう。」と言つた。

ルラ夫人は何氣なしに、卓子の上にナイフを二本十字形に重ねてゐたのだつた。ナナは迷信じみたことは嫌ひで、たとへ食鹽が零れたにしても、金曜日に當つてゐたにしても、そんなことは少しも氣に留めなかつたが、このナイフは餘りひどかつた。それは當らなかつたことではないのだ。きつと今に不愉快なことが起るだらう。彼女は欠伸をして、そ

れからひどく退屈な様子で言つた。

「もう二時だわね……。私、出かけなけりやならないの。なんて厭なことだらう！」

ルラ夫人とマロアール夫人は顔を見合せた。三人は何も言はないで首を振つた。確かにそんな用事は、何時だつて面白い事ではなかつた。ナナはまた煙草に火を點けて椅子に身を投げた。二人は深く考へ込んで、遠慮勝ちに口を噤んだ。

「あなたが歸るまで、」とマロアール夫人は暫らく黙つてゐた後に言つた。「私達はベジグ(カルタの一種)をしませうよ。なさいますでせう？」

ルラ夫人はベジグが非常に巧かつた。ベジグは卓子の隅でも出来るので、その時その部屋にゐなかつたゾエをわざ／＼呼ばなくてもよかつた。二人は汚れた皿の上に卓布をまくりあげた。しかし、マロアール夫人が自分で食器棚の抽斗へカルタを取りに行きかけると、ナナはどうか勝負の初まらない前に手紙を一本書いて貰ひたいと言つた。ナナは手紙を書くのが億劫だつたし、文字の綴りにも自信がなかつた。それにこのマロアール夫人に文章を作ることが非常にうまかつた。ナナは自分の部屋へいゝ紙を取りりに走つて行つた。錆びついたペン先と一緒三スウばかりのインキ壺が家具の上に載つてゐた。その手紙と云ふのはダ



ダホに宛てたものだつた。マロアール夫人は得意の英吉利風で「妾の最愛なる」といふ文句から書き初めて、明日はどうか来てくれるなといふことを認めた。その譯は、「當方に都合もあるから」と書いて、「離れてゐるとも、御傍に居ると變りなく、いつもく、妾の靈は御身と共に」と結んだ。「そして私はね、『數限りなき接吻を』と云ふ字を付け足したいと思ふわ。」とマロアール夫人は呟いた。

ルラ夫人は、どの文句のときにも點頭うなづいて見せた。夫人の眼は輝いて、他人の情事の内幕を知るのを喜んでゐた。そこで優しい態度で、自分も一つ何か言つて見ようと思つて、しめやかに言つた。

「御身の麗はしき御眼の上に、數限りなき接吻を」  
「さうね、『御身の麗はしき御眼の上に、數限りなき接吻を』とナナは繰り返した。二人の老人の顔には何か和やかな表情が現はれた。

この手紙を階下の小使に渡さうと思つて、電鈴を押してゾエを呼んだ。丁度その時、ゾエは、劇場から今朝忘れてゐた用事の手紙をナナの許へ持つて来た給仕と話をしていた。ナナは給仕を呼び入れ、歸り途に渡してくれと言つてダグネへの手紙を頼んだ。それから彼女はいろいろの事を訊ねて見た。全く、ボルドナアダは大喜びで、一週間の椅子は皆賣切れた、今朝からナナの住所を尋ねに来た人の數は、

とても想像もつかない程だと云ふことだつた。給仕が歸るとナナは、精々半時間ばかり留守をするから、もしお客があつたら待たせて置くやうにとゾエに言ひ付けた。かう言つてゐるときに、電鈴が鳴つた。それは借金を取りに来た貸馬車屋で、もう控室の椅子に陣取つてゐるといふことだつた。勝手に夜迄でも暇をつぶしてゐるが、何も急ぐことはないのだから。

「さあ、元氣を出さう」とナナは懶るさうに、また伸びと欠伸をして言つた。「もうあちらに行つてゐなければならぬ時間だわ。」

しかし彼女は少しも動かうとしなかつた。そしてその時、ポイントの百、と言つた伯母達の勝負を眺めながら煙杖をついてぼんやりしてゐた。が、三時の打つのを聞くと飛び上つて、

「あゝ、あゝ」と投げやりな口調で言つた。  
すると點數を數へてゐたマロアール夫人が優しい聲で元氣をつけた。  
「ね、早くすませてしまつた方がいゝわ。」  
「早くおしなさい。」とルラ夫人はカルタを切りながら言つた。「四時迄にお前がお金を持つて歸つて来れば、私は四時半の汽車に乗れるんだから。」  
「そんなに遅くならないわ。」とナナは呟いた。

十分ばかりかゝつて、ゾエはナナを助けて着物や帽子をつけさせた。ナナには服装の事などはどうでもよかつた。彼女が階段を下りようとする、又けたましく電鈴が鳴つた。今度は炭屋だつた。まゝよ、貸馬車屋と一緒にゐつて、二人で氣でも紛らしてゐるが、しかし彼女は顔を合はすのを恐れて、臺所を通つて勝手口の梯子を下りて行つた。彼女は、ちよつとスカートを摘み上げてそこをよく通るのだつた。

「女と云ふものは、いゝ母親でさへあれば、外のことはどうでもいゝのですわね。」とマロアール夫人は、ルラ夫人と二人だけになるともつたいらしく言つた。  
「キングの八十よ。」と勝負に夢中になつてゐたルラ夫人は答へた。

かうして二人は何時すむとも分らないやうな勝負に耽つてゐた。  
食卓はかたづけてなかつた。食物の香ひや煙草の煙などがこんがらかつて部屋を満たしてゐた。夫人達は又角砂糖を舐めた。そして二十分ばかりも角砂糖を舐めてはペジグを續けてゐたが、その時三度目の電鈴がなつてゾエが急いで入つて来ると、二人を押しよけるやうにして、まるで自分の友達のやうに、

「さあ、また電鈴が鳴つてゐるんですよ……あなた方

はこゝにいらしてはいけません。お客様が澤山いらつしやればどの部屋も皆要るんですよ……さあ、さあ、早く早く」と言つた。  
マロアール夫人は終ひまで勝負をつけようと思つたが、しかし、ゾエが札を滅茶苦茶にしてしまひさうな權幕けんまくなので、仕方なくそつと崩さないやうに札を拾つた。その間にルラ夫人はコニヤックの瓶や、盃や、砂糖を持つた。そして二人とも臺所へ行つて、雑巾が干してあつたり、皿で汚れた水の一杯入つてゐるバケツなどがある間の卓子の端へ坐り込んだ。

「三百四十ですよ……あなたの番。」  
「私、ハートで行くわ。」  
ゾエが歸つて来ると、二人はまた夢中になつてゐた。マロアール夫人は暫らく黙つてゐたが、ルラ夫人が札を切つてゐる時、

「誰だつたの？」と訊ねた。  
「なあに、誰でもないの。」と、ゾエは面倒臭さうに答へた。「まだ小さい小僧ですよ。……還してしまはるかと思つたんだけど、それはく可愛い、髯なんか一本もなく、眼の青い、まるで娘のやうな顔をしてゐるんですよ、たうとう待つておいでと言つてやりましたわ……。吃驚する程大きな花束を持つて来て、それをどうしても私に渡さ



ないんですよ……まさか手で打つて言ふことを聞かせるやうな年齢でもないけれど、まだ中學校にでも通つてゐるさうなお坊ちゃんですの！」

ルラ夫人はグログ（砂糖湯に火酒ミシト）を作るために水差しを取りに行つた。先刻からの砂糖で咽喉が渴いたのだ。ゾエも、口が膽汁のやうに苦いので、兎も角それを一杯飲みみたいと言つた。

「で、その子供は何處に通してあるの？」とマロアール夫人が訊くと、

「ほらね、あの家具のない小さな奥の部屋へ通して置きましたの……。奥様の行李と卓子がたつた一脚しかないあの部屋に。あんな小僧なんかは、何時もあそこに入れるんですよ。」

それからゾエが自分のグログを甘つたるくしてゐると、また電鈴が急ぎ立てるやうに鳴つた。ちえッ！ ゆつくり飲んでゐる暇さへありやしない。朝の鐘が鳴り初めるとか、かうなんだ、と思ひながらも、彼女は駆けつけて扉を開けた。そして歸つて来て、マロアール夫人の物問ひたげな眼付を見ると、

「花束ばかり。」と言つた。

三人は、互に點頭きながら、グログを飲んだ。それからゾエは食卓を片つけて、皿を一枚々々流し許へ運んでゐる間に、

る間に、續けざまに二度も電鈴が鳴つた。けれどもそれは大したことではなかつた。彼女は臺所でせつせと働きのながら、二度ばかり馬鹿にしたやうな口調で繰り返した。

「花束ばかり。」

一方、二人の夫人はカルタをやりながら、花束を持ち込む毎に控室にゐる債權者がどんな顔をしたといふことをゾエが話すのを聞いて笑つてゐた。ナナは歸つて来て化粧臺の上の花束を見るだらう。それは、もとは非常に高價であるにも拘らず、たゞの十スウにもならないのだ。つまり多くの金が捨てられるやうなものである。

「私はね、」とマロアール夫人が言つた。「毎日巴里で男が女のために使ふ花代だけ貰へれば満足するわ。」

「それや、あなた、お安い事ぢやありませんか。」とルラ夫人が呟いた。「私なら電報代だけ欲しいわ……。おや、クインの六十ですよ。」

四時十分前になつた。ゾエは驚いて、ナナがこんなに長く外で何をしてゐるのかと不審に思つた。普通ならば、ナナが午後外出しなければならぬ時は、急いで馬車に乗つて、直ぐに歸つて来るのだつた。だが、マロアール夫人は、世の中と云ふものはいつと思ひ通りに行くものではないと言つた。ルラ夫人も、全くこの世には澤山の邪魔があるものだ、と言つた。ちつと辛抱してゐるのに越したことはない

いのだ。たとへ姪の歸りが遅くなつても、それはきつと何か仕事が手間どつたのだらう。兎に角そんなに心配することはない。それにこの臺所は氣持がいい。——かう思ひながら、もうハートがなかつたので、ルラ夫人はダイヤを出した。

また電鈴が鳴つた。ゾエは歸つて来ると眞赤な顔をして、「皆さん、あの肥つたシュタイネルさんですよ！」と扉口から言つて、それから聲を落した。「あの方は小さな方の客間へ通して置きましたわ。」

するとマロアール夫人は、かうした銀行家の事などは少しも知らないルラ夫人にシュタイネルの話をした。この男はロイズ・ミニオンを乗てようとしてゐるのだらうか？ ゾエは違ふと言つた、彼女は何も彼も知つてゐたからだ。が、さうしてゐるうちにも、また彼女は扉を開けに行かなければならなかつた。

「まあ！ どうしませう！」歸つて来るとゾエはかう呟いた。「あの黒奴ですよ！ 奥様はお留守だと、幾度も言つただけけれど、聞かないで寢室へ入り込んでしまひましたの……晩までは、来て呉れては困るだけけれど。」

四時を十五分過ぎてもナナはまだ歸つて来なかつた。何をしてゐるんだらう？ 全く常識がないやうな方だつた。花束がまた二つ来た。ゾエは退屈して、珈琲がまだ残つてゐる間に、

ないかとあたりを見まはした。さうだ、珈琲があればこの人達も喜んで飲むだらう、そして氣持もはつきりするだらう。夫人達は先刻から、椅子の上にくつたり坐つてゐた。同じ姿勢で屈みこんでカルタを取りつゞけて、ずるぶん疲れてゐるやうだつた。四時半が鳴つた。確かにナナはどうかしたに違ひない。彼女達はそつと囁き合つてゐた。

と、突然マロアール夫人は我を忘れて大きな聲で叫んだ。

「ほら、五百……役札が揃ひましたよ！」

「静かにして下さい！」とゾエは怒つて言つた。「お客様達が何とかお思ひになりますよ。」

あたりは森として、たゞ二人の老夫人が言ひ争つてゐる囁きの中へ、大急ぎで勝手口の梯子を上つて来る足音が聞えて来た。たうとうナナが歸つて来たのだ。まだ戸を開けない前から彼女の喘ぐのが聞えた。彼女は赤い顔をして慌だしく入つて来た。裾紐が切れたのか、スカートは階段を曳きずり、女中がだらしないのでいつも二階から流れて来る汚れた水溜りで裾飾りが濡れてゐた。

「お歸りなさい！ まあ、よかつたわ！」と唇をとがらせて、まだマロアール夫人の五百點でむしやくしやしてゐるルラ夫人が言つた。「まあ大したものね、お客様が澤山お待ちだよ。」

「ほんとに奥様はひどいお方ですわ！」とゾエが言ひ足し



た。  
機嫌を損ねて歸つて来たナナは、かう言はれたのでかつとした。たつた今厭な目をして来た直ぐ後だのに、こんなことを言はれるなんて！

「うるさいわね！」と彼女は叫んだ。  
「しつ！ 奥様、お客様がゐらつしやるんですよ。」とゾエが言つた。

するとナナは聲を低くして、息を切らしながら、  
「私が遊んでゐたでもお思ひなの？ なか／＼切り上げられなかつたんだわ。何ならあんた方に代つて貰ひたかつたわね……私は煮えくり返るほど腹が立つて、横つ面を張り倒してやらうと思つたわ……。歸らうにも貸馬車が見當らないし、丁度幸ひ近い所だつたから走つて来たんだわ。」と言つた。

「お金は出来たの？」と伯母が訊いた。  
「まあ、そのことばかり言ふのね！」とナナは答へた。

彼女は暖爐に向つて椅子に腰を下ろした。耻けたので足がふらく／＼してゐた。そして息をつく間もなく肌着から百法の小切手の四枚入つてゐる封筒を取り出して、手荒く中を調べた。大きな裂け目から小切手が見えてゐた。彼女を取り巻いてゐる三人は、ナナの手袋をはめた小さい手の間、皺になつて汚れた粗末な封筒をちつと見てゐた。時間

が遅れたので、ルラ夫人は明日でなければラムブウィエへ行けなくなつた。そこでナナはいろ／＼の相談をした。  
「奥様、お客様達がお待ちになつてゐますわ。」と女中が繰り返した。

するとナナはまた怒り出して、客は待たせて置けばいいぢやないか、そのうちに暇になるだらうから、と言つた。  
そしてその時、伯母が金の方へ手を差しのべると、

「あゝ！ いけません、みんな取つては。」と彼女は言つた。  
「保母に渡す三百法とあなたの旅費や雜費に五十法、それで三百五十法でせう……。五十法は私がとつて置くわ。」

家の中にはもう十法もなかつた。小切手を金に作りかへるのに困つてしまつた。しかし誰も、無關心な様子で聞き流してゐるマロアール夫人には訊いてみようともしなかつた。彼女は何時も乗合馬車に乗る用意の六スウ以上の金は持つてゐたことがなかつたからである。たうとうゾエが自分の行李を調べてみませうと言つて出て行つた。そして五法金貨で百法だけ持つて来て、卓子の端でそれを數へた。

ルラ夫人は明日ルキを伴つて来ると約束して直ぐに歸つて行つた。  
「誰か待つてるとお言ひだつたね？」とナナはまだ腰掛けで休んだまゝ、訊ねた。

「えゝ、奥様、三人も。」

そしてゾエは眞先に銀行家の名を言つた。ナナは不機嫌な顔をした。シュタイネルは昨夜花束を投げただけで、もうナナが自分の来るのを待つてゐるとでも思つてゐるのだからか！

「しかしね、」とナナは言つた。「今日はうんざりしてしまつて、誰にもお目にかゝらないから、どうかもうお引取り下さいと言つておいで。」

「奥様、よく考へて、シュタイネルさんにはお逢ひなさいましよ。」とゾエは、またへまなことをしさうな主人を見ると腹立たしい氣持になつて、その場を動かないで眞面目に言つた。

それからゾエは、例の黒奴がもう先刻から寢室で待ちくたびれてゐるだらうと言つた。するとナナはすつかり怒つてしまつて、もうどうしても言ふことを聞かうとはしなかつた。誰にも、誰にも會ひたくない！ 誰がこんな煩さい男を押しつけようとするのか！

「みんな突き出しておくれ！ 私はねマロアールさんとベジグをやるんだから。その方がずつといゝわ。」

また電鈴が鳴つて、かう言つてゐる彼女の言葉を遮つた。全くやり切れない。また煩さい男が来たのだ！ 彼女は戸を開けに行くと言つたが、ゾエは聞かないで臺所から出て行つた。そして歸つて来て、二枚の名刺を差し出し、き

つとなつて言つた。  
「奥様はお目にかゝります、と申しました……お二人とも客間においでよ。」

ナナは怒つて突つ立つた。しかし名刺のシュアール侯爵とミッファ・ド・ブヴィル伯爵の名が彼女の氣持を和らげた。暫らく黙つてゐたが、

「これはどんな方達なの？ お前は知つてゐるかい？」と訊ねた。  
「お年を召した方は存じてゐます。」とゾエは慎しみ深さうに唇をつぼめて答へた。

それでも主人の眼がなほ不審さうに光つてゐるので、  
「何處かでお目に懸つたことがあります。」とだけ言ひ加へた。

この言葉でナナは心を決めたらしかつた。彼女は、この暖かな避難所——残り火の上に温められてゐる珈琲の香を嗅ぎ、體を自由にして話すことの出来る臺所——を名残惜しく思ひながら、出て行つた。その後には、勝負の手柄話をしてゐたマロアール夫人が残つてゐた。彼女は相變らず眉子を被つたまゝで、たゞ首筋を樂にするため、その紐を解いて肩の上に垂らしてゐた。

化粧室でゾエはいそ／＼とナナが化粧着を着るのを手傳つたが、ナナの方は、かうした厭な目をさせられる腹癒せ



に、小聲で男達を呪ふやうなことを呟いてゐた。その亂暴な言葉は女中の心を悲しませた。ゾエは、主人が急には昔の習慣が附けないのを見て苦々しく思つたからである。彼女は思ひ切つてナナに機嫌を直すやうに頼んでみた。「ふん！ 何だか分りやしない！」とナナは素氣なく答へた。「全く野暮な通中だね！ 彼奴等はそんな事が好きなさ。」

けれどもナナは、彼女の所謂妃殿下のやうな様子になつて、客間の方へ行かうとした時に、ゾエはそれを押し止めて、シュアール侯爵とミッファ伯爵を化粧室へ案内して来た。その方がずつとよかつた。

「お二方様、」とナナは鄭重な態度で言つた。「ほんとにお待たせ致しまして申譯ございません。」

二人はお辭儀をして腰を下ろした。刺繍をした網目織の窓掛けが部屋の光を調節して薄暗くしてゐた。この部屋は壁には明るい布を掛け、大きな大理石の化粧臺と、鉄木細工の自在鏡と、長椅子と、青い縞子を張つた安樂椅子數脚などが備へてあつて、この家では一番氣持ちのいい部屋だつた。化粧臺の上には薔薇や紫丁香花や風信子の花束が花の崩れるほど積んであつて、その香は強く頭を刺すやうだつた。その上濕っぽい空氣の中に洗面器から立ち上る變な香ひに交つて、コップの底に小さく碎かれた乾燥したパチュ

ーリの細片が、時々一層鋭く切つてゐた。そしてナナはうまく着つけの出来なかつた化粧着をかき合せ、體を窄めながら鏡を見て、自分の化粧に驚いたやうであつた。彼女の皮膚はレース織の着物の中で、まだじつとり汗ばんだまゝ、微笑んでゐるやうにも、馴いてゐるやうにも見えた。「奥様、」とミッファ伯爵は改まつた調子で言つた。「御迷惑なことを申上げて済みませんが、我々は實は義捐金募集に上つたのでございます……この方と私はこの區の慈善救濟會の會員です。」

シュアール侯爵は急いでその後をうけて鄭重に、「このお屋敷に優れた藝術家がお住ひになつてゐると承はりましたものですから、お伺ひして貧民達のために特にお願いをしたいと存じたのでございます……才能のある方は必ず情にも厚いものですからね。」と言つた。

ナナは慎しみ深くしてゐた。彼女は急いで一寸考へてゐたが、直ぐ軽く點頭して答へた。どうも老人の方が一人を伴つて来たらしく思へた。老人の眼には好色なところがあつた。けれども同時に、も一人の方だつて信用は出来なかつた。その顔は可笑しい程膨らんでゐた。彼とても、たとへ一人でもやつて来たに違ひない。これは屹度、門番がナナの名を教へたので、二人ともそれ考へがあつて、やつて来たのだ。

「それはまあ、ようこそおいで下さいました。」とナナは頗る上機嫌に言つた。

このとき電鈴の音が彼女を驚かした。また客が来たのか。あのゾエは、何故扉を閉めて置かないのだらう！

「では喜んで御寄附申上げませう。」と彼女は續けて言つた。

心の底から彼女は嬉しさうだつた。

「あゝ！ 奥様、あなたは、貧民達がどんなに悲惨なものか、御存じないでせう！」と侯爵は言つた。「我々の區内には三千人以上の貧民が居りまして、それでもまだ巴里のうちでは一番富んでゐる區の一つなのです。あなたのやうなお方には、こんな悲惨な事は到底想像もお出来にならないでせうが、子供達にはパンがなく、女達は病氣に冒されて、助ける者もなく凍死してしまふのです……」

「お氣の毒な人々でございますわね！」とナナは深く感動して叫んだ。

彼女は同情の餘り、その美しい眼に涙を一杯溜めた程であつた。最早化粧ぶりを鏡で見ること忘れて、ふと前屈みになると、體を離れた化粧着から頸筋が見えて、曲つた膝は薄い織物の下に腿のまるみを見せてゐた。

ナ ナ

室のやうに密閉された重苦しい氣温が少し暑すぎた。薔薇の花は萎れかゝつて、コップの中のパチュアリからは酔ひさうな香ひがした。

「かう云ふ時には誰でもうんとお金を持つてゐたいものでございますわね。」とナナは言ひ加へた。「でも人は結局自分出来るだけの事しか出来ないのですわ……、どうか信じて下さいまし、皆様、私、出来ることなら……」

ナナは感動して、も少しで取り返しつかない事を喋りさうだつた。それで途中で言葉を切つてしまつた。彼女は、さつきの五十法を着物を着換へる時にどこへ置いたかと思ひ出せなくて、一寸困つてしまつた。が、やつと、化粧臺の隅に轉がつてゐるボマーの瓶の下にあることを思ひ出した。彼女が立ち上つた時に電鈴が長く鳴つた。さあ！

また一人来たのだ！ お客は絶えさうになかつた。伯爵と侯爵とは同時に立ち上つた。侯爵の方は入口の方角へ氣を配つて耳を傾けた。確かに彼は、こんなに度々電鈴が鳴るといふ意味を知つてゐたのだ。ミッファは侯爵を見た。そして二人とも目を反らした。彼等は互にきまり悪く思つたが、また冷靜な態度に歸つた。一人は四角張つた頑丈な體で、堅い髪の毛を立てゝゐた。他の一人は瘦せた肩を怒らせて、その上へ少くなつた白髪が流れてゐた。

「ほんとに皆様！」とナナは、大きな銀貨をもつて来て、



愛嬌を作りながら笑つて言つた。「お手敷をおかけいたしますが……、これはどうか貧しい人達にお渡し下さいませ……」

愛くるしい小さな笑靨がその頬に現はれた。彼女は、勿體ぶつた所のない、子供のやうな態度で、開いた手の上に銀貨を積み重ねて、「さあ、どちらのお方でも」と云つた風に二人の前へ差し出した。伯爵の方が敏捷だつた。彼はその五十法を受取つたが、銀貨が一枚だけ残つた。そしてそれを取るには若い婦人の皮膚に觸らなければならなかつた。その柔かい温かな皮膚が彼に戦慄を與へた。彼女の方は上機嫌で、相變らず笑つてゐた。

「では皆様、この次にはもつと澤山差し上げたいと思ひますわ。」

この上、長居の口實もなかつたので、二人は挨拶をして扉口の方へ進んだ。彼等が出ようとした時に、また電鈴がけたましく鳴り渡つた。侯爵は蒼い顔に微笑を隠し切れなかつたが、一方伯爵の方はふと何かの影がさしてその顔を一層沈鬱にした。ナナは二人を暫く引き止めて、ゾエに、どこか客を通す場所を探させる餘裕を與へた。彼女は自分の家で、人々の出會ふのを好まなかつた。しかし今日は何處も満員らしかつた。それで、客間の空いてゐるのを見つけた時には、ほつと安心した。ゾエは、あの人達を戸棚の

中にでも入れたのだらうかと考へてみた。

「ではさやうなら、皆様。」と彼女は客間の扉口で言つた。彼女は微笑と明るい眼付とで二人を包んだ。ミユリア伯爵はお辭儀をしたが、社交界で長い經驗を経てゐるにもかかはらず、新鮮な空氣が欲しくなつたほど、あの化粧室での眩暈——息苦しいほどの花と女の匂ひ——がまだ續いてゐたのに當惑してゐた。また彼の後ろではシュアール侯爵が、人眼に觸れないと見て取ると、忽ち顔の相を崩し、唇を舐めながら、ナナに秋波を送つた。

ナナが化粧室に歸つて見ると、そこではゾエが澤山の手紙と名刺を持つて待つてゐたので、彼女は高い聲で笑ひながら叫ぶやうに言つた。

「やれ、私から五十法を捲き上げて行くやうな素寒貧もゐるんだわね！」

彼女は少しも怒つてゐなかつた。あんな立派な男達が、彼女から金をとつて行つたのが面白く思はれた。が、何といつても、彼等はやはり厭な奴だつた。彼女の手にはもう一スウもなくなつた。それから名刺や手紙を見ると彼女は不機嫌になつてしまつた。手紙——それは昨夜劇場で彼女を喝采した後で、言ひ寄つて来る男達から來たものだつた——はまだ我慢が出來た。しかし來客に至つては、何處へでも散歩に行くがいとさへ思はれた。

ゾエは所かまはずお客を通してしまつた。彼女は、この家がどの部屋もみな廊下に向つてゐるので、大變便利だと思つてゐた。どうしても客間を通らなければならぬブラシユ夫人の家——夫人はそれをひどく厭がつてゐた——のやうではなかつた。

「皆追ひ出しておくれ。」とナナはまた自分の考へを固執して言つた。「まづあの黒奴からお初め。」

「あれは私ずつと前に追ひ出しましたの、奥様。」とゾエは笑ひながら言つた。「たゞね、今晚來る事が出來ないといふことだけ、奥様に言ひたかつたのですつて。」

それは嬉しいことだつた。ナナは手を拍つて喜んだ。彼が來ないとは、まあ何と云ふいゝ機會だらう。彼女は自由になれる！そして、恰も今まで最も忌はしい刑罰に苦しめられてゐるたかのやうに、ほつと溜息をついた。彼女が最初に思つたのはダグネの事だつた。丁度あの可愛い小猫には、木曜日まで待つやうに手紙を出してしまつたのだつた！ さあ大急ぎでマロアール夫人に、もう一度手紙を書かせよう！ けれどもゾエが、例によつてマロアール夫人は誰にも知られないで出て行つたと告げた。するとナナは誰かを使にやらうかとも言つて見たが、たうとう見合はせることにした。彼女は非常に疲れてゐた。一晩ぐつすり眠れたらどんなに嬉しいだらう！ この楽しい考へが彼女

を前後もなく夢中にした。久し振り、初めてぐつすり眠ることが出来るのだ。

「劇場から歸つて來たら、私直ぐに寝るわ。」と、彼女は嬉しさに呟いた。「お晝まで起しては厭だよ。」

それから聲を高くして、

「誰も彼もさあ早く！ お願ひだから、もうみんな階段まで追ひ出しておくれ！」

ゾエは動かなかつた。彼女は決してあけすけに奥様に忠告しようとは思はなかつたが、しかし奥様が夢中になつてゐて頭が悪くなつてゐる時には、落着き拂つて自分の經驗を主人のために役立てようと心懸けた。

「あのシュタイネルさんも？」と彼女は簡単に訊いた。

「さうとも、誰よりも眞先にさ。」とナナが答へた。

しかし女中は奥様に考へ直す暇を與へるためにまだ待つてゐた。奥様は自分の競争者のローズ・ミニヨンから、こんなにお金持の、どこの劇場でも知られてゐる紳士を奪ひ取るのを得意には思はないのだらうか？

「さあ早くおしよ、ね。」と、ナナは何も彼もよく呑みこんだ上で、繰り返して言つた。「そして私の氣には入らないんだと言つておやり。」

しかし突然彼女は氣が變つた。明日なら會つてやつてもいゝと思つた。そして駄々っ兒のやうに眼をばちくりさせ



て笑ひながら言つた。  
「つまり、あの男を手に入れようと思へば、一番近道は、先づ門前拂ひを喰はすことだよ。」

ゾエは非常に驚いたらしかつた。俄に感心して主人を眺めてゐたが、やがてさつさとシユタイネルを追い出しに行つた。

それからナナはゾエの言ふまゝに、彼女が床を掃く數分間、辛抱してやらなければならなかつた。今度はそんな風にして彼女が追ひ出されたのだつた！ 彼女は客間を覗いて見たが誰もゐなかつた。食堂も同じく空だつた。それでも誰もゐないものと信じ切つて、安心してあちらこちらと覗き廻つてゐるうちに、或る小さな部屋の戸を開けると、突然、まだ年も行かない少年とばつたり顔を合してしまつた。その少年はトランクの上に腰を下ろし、膝の上に大きな花束を載せて、穏順しく静かに待つてゐたのだつた。

「おや！ まあ、まあ！」とナナは叫んだ。「まだこゝに一人ゐるんだわ！」

少年はナナを見ると急に立ち上つて、雛髯栗のやうに赤い顔をした。彼は感動して咽喉がつかまつてしまつて、兩手で花束を持ち代へてゐるだけで、それより外にどうしていいのかわらなかつた。その若さとその困り果てた様子と、花を持つて立つてゐるその可笑しな顔付とが、ナナの心を

和らげたので、彼女は氣持よく高い聲で笑つた。まあ、こんな子供までがやつて来るのか？ 今では、襦袢にくるまつてゐても、男でさへあれば誰でも彼女のところへやつて来るのか？ 彼女はすつかり我を忘れて、親しうに母親らしく、腿を敲きながら冗談に問ひかけた。

「鼻をかねで貰ひに来たの、赤ちゃん？」

「え、さうです。」と少年は懇願するやうな低い聲で答へた。

この答は一層彼女を喜ばせた。少年は十七歳で、名はジョルジ・ユーゴンと言つた。昨夜ブリエテ座へ行つて、今日彼女に會ひに来たと言ふのだつた。

「その花は私に呉れるの？」

「さうです。」

「では頂戴よ、お馬鹿さんね！」

そして彼女が花束を受け取ると、少年はその年頃の向う見ずさから、兩手に飛びついて來た。彼女は、それを振りほどかうとして、彼を敵かなければならなかつた。すると少年は全く堅くなつてしまつた。彼女は叱りつけながら、頬を薔薇色にして笑つてゐた。そして送り歸す時に、また來てもいいといふ許しを與へた。彼はよろ／＼して、もうどちらの方に扉口があるのか、分らないやうな有様だつた。

ナナが化粧室に歸ると、間もなくフランシスが髪の仕事にやつて來た。彼女は夕方にならなければ衣裳を着けなかつた。大きな鏡の前に坐つて、フランシスの巧みな手の下に頭を垂れながら、彼女は夢みるやうに黙つてゐた。その時ゾエが入つて來て、

「奥様、どう言つても歸らうとしない方がありませんわ。」と言つた。  
「さう！ ぢやその儘にして置くより仕方がないぢやないの。」と彼女は平氣で答へた。

「さうすれば、みんなが歸らなくなりますわ。」  
「ぢやね、お待ち下さいと言つておやり。そのうちにお腹が空いたら皆歸るだらうから。」

彼女はまた氣が變つた。そんなにして人々を待たせて置くのが面白く思はれた。ふと或る思ひつきが彼女を喜ばせた。彼女はフランスの手の下から身を引くと走り出て、扉口に急いで棧を下ろしてしまつた。さあ、皆來て隣の部屋に一杯になるが、まさか壁を破ることは出來ないだらう。ゾエは裏所に續いた小さな扉口から入つて來られる……さうしてゐる間にも、電鈴は一層忙がしく鳴り渡つた。まるで五分毎に、鋭くはつきりと、正しい機械のやうな正確さで、繰り返し／＼鳴つた。ナナはそれを數へて興に入つてゐたが、急に思ひ出して、

「私の砂糖焼巴且杏はどうして？」と訊いた。

フランシスも砂糖焼巴且杏のことは忘れてゐた。彼は女友達に贈物をする社交界の男のやうな慎ましい態度で、上衣のポケットから袋を一つ取り出した。しかしどんな品物でも、砂糖焼巴且杏でも、必ずちゃんと勘定書につけておくのであつた。ナナは袋を膝の間に置いてフランシスが手で軽く押すまゝに頭を廻しながら、砂糖焼巴且杏を噛み初めた。「まあ！ しつきりなしたわ。」と、彼女は暫らく黙つてゐた後で呟いた。

續けざまに二度電鈴が鳴つた。電鈴の鳴るのは益々忙がしくなつた。或るときは慎ましく口籠りながら、最初に心を打明ける時のやうに顫へて鳴り、或るときは荒々しい指に押されて大膽に鳴つた。また素早い戦慄のやうにさつと急いで鳴るときもあつた。ゾエの言ふやうに、全く鳴り通しだつた。隣近所を騒がせる位、男達が込み合つて後から後からと列をなして象牙のボタンを押しに來た。あの飄忽なポルドナアヴが餘りにナナの住所を教へすぎたのだ。昨夜の観客が皆こゝへ押しかけて來るのかと思はれた。

「それはさうと、ね、フランシス。」とナナが言つた。「あんな五ルイほど持つてゐて？」

彼は後退りして髪を眺めてから、靜かに答へた。「五ルイなら、お話によりましては。」



「おや、おや！ ぢや抵當が要るとでも言ふの……」と彼女は言ひ返した。

そしてまだ言ひ終らないうちに、大きく體を動かして隣室を示した。フランスは五ルイを貸した。ゾエは手が空いたので、ナナの支度をしに入つて来た。すぐ衣裳を着けてやらなければならなかつた。フランスはその間、髪に最後の手入れをしようと思つて待つてゐた。しかし絶えず電鈴がゾエの邪魔をするので、彼女は奥様にコルセットを半分着けかけたままにして出て行つたり、靴下を片方だけ穿かせたまゝで出て行つたりした。彼女のやうに經驗の多い女でも、狼狽してしまつた。どんな小さな片隅でも利用して、殆んど家中何處へでも人を入れて見たが、たうとう彼女の主義には反しても、三四人一緒にして入れなければならぬやうな始末になつた。困つた事だが、もしお客同志で共食でも始めて呉れれば、少しは場所も出来るだらう！そしてナナはしつかり襪を下ろした部屋に隠れて、彼等のことは氣にも留めずに、苦しうな呼吸が聞えて来るなどと冗談を言つてゐた。みんな車座になり、犬のやうにちよこんと坐つて舌を垂れ、さぞかし俐巧さうな顔をしてゐることだらう。この臘犬のやうな男達の群が、彼女の跡をつけて来るのは、昨夜の成功がまだつゞいてゐるからだらう。「何も毀されなければいゝが。」とナナは呟いた。

彼女は隙間から漏れて来る暑い人いきれで不安になり初めた。然しゾエがラポルデットを伴つて来たので、ほつとして叫び聲を上げた。彼はナナのために、治安裁判所で解決した始末を報告に來たのであつた。彼女の方はそれには耳を借さないで繰り返した。

「一緒に出掛けませうね……二人で食事をしませうよ……そしてそこからゾリエテ座まで私を伴つて行つて下さいな。私、九時半にならないと舞臺へは出ないの。」

親切なラポルデットが、ほんといゝ時にやつて来た！決して彼は何も要求しなかつた、彼はたゞ女達の友人で、そのこまなくした小さな事件を世話してくれた。たとへば、今も通りがりに控室の借金を追ひ拂つて来てくれたのだ。それに今日のうるさい連中は支拂を望んでゐるのではなかつた。反對に、彼等が歸らないのは、昨夜のやうな大成功の後だから、奥様に挨拶を申し述べて、個人的に新たに一臂の力を添へようと言ふのであつた。

「早く、早く。」とナナは衣裳を着け終つて言つた。

丁度その時、ゾエが大聲で叫びながら入つて来た。

「奥様、戸を開けるのはやめました……。階段に行列してゐるんですもの。」

階段に行列！ フランスはさへも、氣取つて英國風の沈着を裝つてゐる彼さへも、櫛を寄せ集めながら笑ひ初めた。

ナナはラポルデットの腕をとつて臺所へ連れて行つた。そしてやつと男達から抜け出した。ラポルデットだけは、かうして一緒に何處へ行つてもつまらない心配をする必要がないので、それが嬉しかつた。

「私を家まで伴つて歸つて呉れるでせう。」と彼女は臺所の階段を下りながら言つた。「さうすれば私は安心だけど……まあ考へて頂戴、私は一晩ぐつすり眠りたいのよ、私一人で一晩中、ねえ、ほんとに眠たくてならないのよ！」

三

ミラファ・ド・ブヴィル夫人をサビイヌ夫人と呼ぶのは、先年亡くなつた伯爵の母堂と區別するためである。夫人は毎火曜日にパンティエーヴル街の角のミロメニール通りにある邸宅で招待會を開いた。それは宏壯な正方形の建物で百年餘りも前からミラファ家の人々が住んでゐるのである。街路に向つた高い黒い家の正面は、何となく修道院のやうな陰鬱さで眠つてゐて、大きな鎧屏が年中殆んど閉め切つてある。裏手のじめ／＼した庭の端には、樹木が太陽を求めて長くひよろ／＼と伸び、その枝は屋根瓦越しに見受けられた。

その火曜日の十時頃、客間には約十二人ほどの人が集つてゐた。伯爵夫人は昵懇な人だけを招く時は、小さい客間

や食堂は開かなかつた。そして人々は極めて親しげに、煖爐の周圍に坐つて話し合つた。しかしこの客間は廣くて天井が高かつた。四つの窓が庭に向つてゐて、この雨の降る四月末の黄昏には、煖爐の中に大きな薪が燃えてゐても、その濕氣が感じられた。太陽は少しもこの客間へ射し込まないので、晝間は緑の光が僅かに明るくしてゐるばかりだつた。しかし夕方ランプや吊燭臺が點されると、どつしりした帝政式の桃花心木の家具や、繩子のやうな光澤のある、大形な模様の黄色い天鵝絨の壁掛や椅子などのあるこの部屋は、重くるしいほどどつしりしたものであつた。人々は冷やかな威嚴の中へ、古い習慣の中へ、また敬虔な感じを止めてゐる過去の時代の中へと溶け込むのであつた。

伯爵の母堂がその上で亡くなつたといふ質の硬い木に丈夫な布を張つた四角い椅子——それは煖爐の向う側にあつた——と向ひ合つて、サビイヌ伯爵夫人は、羽蒲團のやうな柔かい填め物をした赤い絹の深い脇掛椅子に坐つてゐた。

その椅子は、この嚴肅な部屋の中に目立つてゐる唯一の當世風な家具で、他の部分とは少しも調和してゐなかつた。「では波斯の王様がお出で遊ばすのですね……」と夫人が言つた。

人々は博覽會を見に巴里へ来る王子達の話をしてゐた。數人の夫人が煖爐の前を輪になつて取り巻いてゐた。デ。



ジョンコア夫人は兄が東洋に駐在してゐる外交官なので、ナザル・エッダンの朝廷の事を詳しく話した。

「御氣分でもお悪いのですか？」大きい鐵工場主の妻であるシャントロー夫人は、伯爵夫人がちよつと身を慄はせて蒼い顔をしてゐるのに氣がついて訊ねた。

「いゝえ、少しも。」と伯爵夫人は微笑みながら答へた。「私ね、少し寒うございますの……。この部屋は温めるのに時間がかゝりましたね。」

そしてその黒い眼で壁を眺め廻した後、高い天井を見上げた。十六歳の悪戯盛りで、瘦せた平凡な顔立のエステルといふ娘は、腰かけてゐた椅子を離れ、落ちてゐた薪を黙つて拾ひ上げた。サビイヌの修道院時代の友達で、五つばかり年下のシユゼル夫人は叫ぶやうに言つた。

「まあ！ 私ばかり云ふ客間が欲しいと思つてゐますわ！こゝなら招待會もお出来になりますもの……近頃の建物と言つたら、まるで箱みたいなものばかりでしてね……私はあなたの御身分が羨ましくございますわ！」

彼女は熱心に、生々とした身ごなしで、私だつたら壁掛や椅子をすつかり變へてしまつて、巴里中に評判になるやうな舞踏會をするだらうと言つた。彼女の後ろには夫の裁判官が嚴めしい顔をしてそれを聞いてゐた。世間の評判では、彼女は夫に不貞で、しかもそれを隠さうともしないのだが、

夫はそれを大眼に見て、彼女を氣遣ひだと言つて少しも咎めなかつた。

「まあ、レオニードさんつたら！」サビイヌ夫人は蒼白い顔に笑を浮べて、たゞそれだけ囁いた。

懶げな夫人の身ごなしがその考へてゐることを十分に現はしてゐた。確かに、十七年も住み慣れた客間を變へてしまふなどは、とても思ひも寄らなかつた。どうしてもこの部屋は、姑が生存中望んでゐたまゝにして置かなければならないのだ。それからまた夫人は前の話に戻つた。

「普魯西の王様や露西亞の皇帝も入らつしやるさうですわね。」

「えゝ、きつと賑やかなことだらうと思ひますわ。」とデニ・ジョンコア夫人が言つた。

先刻、巴里中の人をみんな知つてゐるといふレオニード・ド・シユゼルに連れて來られた銀行家のシユタイネルは、窓と窓との間で安樂椅子に腰をかけて話してゐた。彼は一人の代議士に、近頃嗅ぎつけた株式取引所の變動に關する新しい消息を、うまく聞き出さうとして努めてゐた。その間ミラプア伯爵は、平常よりも一層氣むづかしい顔をして二人の前に立つて、黙つてそれを聞いてゐた。四五人の若い人々が扉口の近くに別の一組を作つて、クサヴィエド・ブンドゥル伯爵を取り巻いてゐた。伯爵が聲を低くして話

してゐるのは非常に卑猥なことからしく、一同は腹を擦つて笑つてゐた。部屋の中になつた一人、肥つた内務省の或る局長が、肘掛椅子にぐつたり腰かけて、眼を開いたまゝ眠つてゐた。すると、若い連中の一人がブンドゥル伯爵の話を疑ふやうに見えたので、伯爵は聲を高くして言つた。

「君は餘りに懷疑的だよ、フウカルモン君。それでは當然得られる楽しみまでも捨てるやうなものだよ。」

そして笑ひながら夫人達の方へやつて來た。名門の出で、女性的で才氣のある彼は、飽滿を知らない底抜けの食慾をもつてゐて、矢鱈に財産を食ひ潰してゐる男であつた。名馬の揃つた彼の厩舎は巴里でも有名なもので、従つてその費用も莫大なものであつた。彼がアンペリアル俱樂部で失ふ金は毎月恐るべき巨額に上つた。彼の情婦達は景氣不景氣に頓着なく、年々彼から小作地とか、地所や森林の幾町歩だとかを貪り取つたが、それもピカルディの彼の廣大な領地のほんの小部分にしか過ぎなかつた。

「何もお信じにならないあなたが、他人を懷疑的だなんかと仰しやるのはお止しなさいよ。」とレオニードは、自分の傍に彼の席を作りながら言つた。「それはあなたのことですよ、御自分の楽しみをお捨てになるのは。」

「全くです。」と彼は答へた。「ですから私の經驗を皆さんのお役に立てたいと思つてゐるのです。」

しかし誰かゞ彼を黙らせた。その言葉はゾノオの感情を害するかも知れないからだ。夫人達が少し體を除け合つたので、長椅子に靠れてゐる六十恰好の齒並の悪い、微笑を浮べてゐる小さい男が見えた。彼は恰も自分の家にもゐるやうに納まりこんで、人々の言ふことを残らず聞きながら自分では一言も口をきかなかつた。彼はちよつと體を動かして、自分が何も感情を害してゐないといふことを知らせた。ブンドゥルはまたもの／＼しい態度に歸り、落着いて言葉を續けた。

「ゾノオさんは、私が信じなければならぬことを信じてゐるのだといふことをよく御存じです。」

その言葉は宗教的な誓ひのやうであつた。レオニードさへも満足らしく見えた。部屋の奥の方の若い連中はもう笑つてゐなかつた。部屋中の者が襟を直し、もう冗談をいふものもゐなかつた。冷たい風が吹き通つた。その静かさの中で、思慮深い代議士の相手をしてゐるうちにたうとう苛々してしまつたシユタイネルの、鼻にかゝつた聲が聞えた。サビイヌ夫人は暫らく燧燼の火を見てゐたが、また語を續いだ。

「私ね、去年バードで普魯西の王様をお見掛け申しましたけれど、お年にしては随分まだ元氣なお方でしたわ。」

「今度はビスマルク伯爵が御隨行なさるのでございませ



う。」とデュ・ジョンコア夫人が言った。「あなたは伯爵を御存じでいらつしやいますか？ 私は、兄の家であの方と御一緒に晝餐を頂いたことがありますの。餘程以前のことで、普魯西の代表として巴里に派遣されてゐなすつた時分ですわ……ほんとに今日のやうに御出世なさるとは少しも思はれない方でした。」

「まあ、どうしてよすの？」とシャントロー夫人が訊いた。「さあ、何と申し上げたらいいでせう……兎に角、私は好きませんでしたわ。無骨で、無作法でした。それで私、随分感じの鈍い方だと思つてゐましたのよ。」

それからビスマルク伯爵の話が始まつて、皆の意見が區區になつた。ワンドゥルは彼を知つてゐるので、彼が大酒飲みで、賭博もうまいといふことを話した。その議論の最中に扉が開いて、エクトル・ド・ラ・フロアズが現はれた。フォシュリイがその後から従つて来て、伯爵夫人の方へ来てお辭儀をした。

「奥様、御親切なお招きを忘れないで参りました……」彼女は笑顔をして一言優しく答へた。記者は伯爵に挨拶した後に、シュタイネルの他に誰も知つた人の見えない客間の真中に、ぼんやり立つてゐた。ワンドゥルは振り返つて彼を見ると、近寄つて来て握手をした。フォシュリイは彼に會つたことを喜んで、嬉しさを押へ切れぬ様子で、彼を

片隅へ伴れて行つて小聲で囁いた。

「明日ですよ。いらつしやいますか？」

「勿論！」

「夜の十二時に、彼女の家で。」

「知つてゐる、知つてゐる……。私はブランシュを伴れて行く。」

ワンドゥルは彼から離れて、また夫人達の傍へ歸つて、ビスマルクのために新しく辯護をしようと思つたが、フォシュリイはそれを引き止めた。

「あなたは彼女がどんな人を招んでくれと私に頼んだか、まづお當てになることは出来ないでせうね。」

そして彼は軽く顔を動かして、その時シュタイネルや代議士と豫算案に就いて議論を戦はしてゐたミッテラ伯爵を示した。

「駄目、駄目！」ワンドゥルは驚いて、併し快活に言った。

「いや、さういふ譯に行かないんです！ どうしてもあの伯爵を伴れて行くと、約束しなければならなかつたのです。」

こゝへ来たのは、少しはそんな譯もあるのです。」

二人は黙つて笑つた。ワンドゥルは夫人達のところへ歸つて行くとき急いで言つた。

「ところが事實は反對で、ビスマルクは非常に才氣があるのです……お聞きなさい、彼は或る晩、私の前でこんな素

敵なことを言つたのです……」

そして、さつき彼等が低い聲で早口に話し合つてゐた言葉聞いたラ・フロアズは、譯を話して貰ひたさうにフォシュリイを眺めたが、答は聞かれなかつた。誰のことを話してゐたのだらう？ 明日、夜の十二時に、何をしようと思ふのだらう？ 彼はもう従兄の傍を離れなかつた。従兄は腰を掛けに行つた。サビイヌ伯爵夫人が殊に彼の心を惹いてゐた。彼も夫人の名は屢々聞いたので、夫人が十七歳で結婚したことや、だから今はもう三十四歳で、結婚以來ずつと夫と姑の間で、修道院のやうな生活をして来た事などを知つてゐた。世間では夫人を信心に固まつた者のやうに冷淡だと言ふ者もあつたが、また、この古い屋敷に閉ぢ込められない前の、彼女の美しい笑ひや輝いた大きい眼を思ひ出して、夫人を氣の毒に思つてゐる者もあつた。フォシュリイは彼女をおつと眺めて何か考へてゐた。最近メキシコで死んだ彼の友人の大尉が、その出發前夜の食事後に、どんな慎しみ深い人でも或る瞬間には漏らすことのある、あの無遠慮な打明け話をしたことがあつた。しかしその記憶はもう漠然としてゐる。彼等は二人ともその晩にはよく飲んだのだつた。そして、今この古風な客間の真中に、黒い着物を着て靜かに笑つてゐる伯爵夫人を見てみると、彼は疑はしくなつて来た。彼女の後ろに置かれたランプが、美し

い横顔をくつきりと見せてゐた。髪は褐色で、ぼつてりと肥り、その少し分厚な口許だけでも抗ひ難い肉感を現はしてゐた。

「この人達は一體ビスマルクとどんな關係があるんだらう！」と、いつも社交界の席に出るとすぐにうんざりするラ・フロアズが呟いた。「全くこれぢや、遣り切れないな。こんなところへ来たがる君の心が僕には分らないね！」すると突然フォシュリイが彼に問ひかけた。

「どうだらう？ 伯爵夫人は他の男と一緒に寝やしないのだらうか？」

「どうして！ そんなことはないよ。一緒に寝たりなんぞするものか！」と、彼は眼に見えるほど周章で、態度を亂して口籠つた。「一體君はこゝをどこだと思つてゐるんだい？」

だが彼は、そんなに眞顔になつて怒るのも野暮だと思つたのか、安樂椅子に身を投げて、言ひ足した。

「さあね！ 一緒に寝ないとは言つたが、しかしそれ以上のことは知らないよ……あそこに小さな男があるだらう、あのフウカルモンはいつもこの家に來てゐるんだ。が、確かにそれだけではなくて、もつと怪しいことまで見た者もあるんだ。僕は氣にはしてゐないがね……兎に角一番確かなことは、ほんたうに伯爵夫人が男を拵へたりなんぞした



とすれば、夫人のやり方は實に狡いと云ふことだ。何故なら、そんな噂も擴まらないし、誰もそれを口にしないくらゐだからね。」

それから彼は、フォシュリイが問ひもしないのに、ミッファア家に就いて知つてゐることを話して聞かせた。煖爐の前で夫人達がしきりに話し續けてゐる中で、二人は聲を低くして話し合つた。人々は二人が白い襟飾や手袋をしてゐるのを見て、何か眞面目なことを洗練された言葉で話してゐるとでも思つたやう。ラ・ファアロアズがよく知つてゐたミッファア伯爵の母は、いつも牧師達のお仲間をし、どうにも相手になり兼ねる老婦人であつたが、立派な様子をし、動作に威厳があつたので、人はみな彼女の前では身を屈した。ミッファアはナポレオン一世によつて伯爵に叙せられた陸軍大将の晩年の子で、そのため自然に、あの十二月二日以後は寵愛を蒙る身となつた。彼も快活さは缺いてゐたが、しかし非常に廉直な、心の正しい人として通つてゐた。その上彼は、あの世に就いての信念と、宮廷に於ける自分の地位や威厳や徳義に就いての高い觀念を持つてゐたので、いつも堅信式の時のやうに反身になつてゐた。彼にそのやうな立派な教育を授け、毎日懺悔をさせ、こつそり脱けて遊んだり、または若い者の犯し勝ちな過ちなどを少しもさせなかつたのは、彼の母であつた。彼はそれを實行して、屢々熱病

の發作に似た、血の滲むやうな激しい信仰の危機をも経験したのであつた。そしてラ・ファアロアズは、ミッファアに關するどんな些細なことまでも語り盡さうとして、最後に從兄の耳に一言囁いた。

「それや有り得ないことだ！」と從兄が言つた。「たしかにほんたうださうだよ！……結婚してからでも、まだ失はないでゐるんだ。」

フォシュリイは伯爵を眺めて笑つた。口髭はないが頬髯に圍まれたその顔は、議論の相手のシュタイネルに數字を上げて示してから、一層四角張つて嚴格に見えた。

「さうだ、そんな顔もしてゐるね。」と彼は呟いた。「奥さんに立派な贈物をしたものだ！……あゝ！あの氣の毒な奥さんはあの男のために、どんなにうんざりしたことだらう！あの奥さんはどうにも出来なかつたんだ！」

丁度その時サビイヌ夫人が彼に話しかけたが、彼には聞えなかつた。それほど彼はミッファアのことを可笑しく異常なものと思つてゐたのである。彼女は繰り返して問ひかけた。

「フォシュリイさん、あなたはまだあのビスマルクさんの記事を本にはなさいませんか？……あなたはあの方とお話しになつたことがありませんでせう？」

彼は急に立ち上つて、夫人達が輪になつてゐる方へ近づ

き、落着かうと努力しながら、兎に角十分な餘裕を示して答へることが出来た。

「どういたしましたして、奥様。白狀すれば、あれは獨逸で出た傳記類から書いたものでして……私はビスマルクにお目にかゝつたことなどないのです。」

彼は夫人の傍に腰かけた。そして彼女と話しながら絶えずさつきのことを考へ直してみた。彼女は年よりは若くて、誰の眼にも精々二十八歳ぐらゐに見えた。青い影の中に沈んでゐる長い睫毛をしたその眼には、殊に青春の焰が潜んでゐた。不和な家庭で生ひ立つた、彼女は一ヶ月はシュアール侯爵の傍で、次の一ヶ月は侯爵夫人の傍で暮らしたのであつたが、母が亡くなるとともに、非常に若くて結婚した。きつと手足纏ひにしてゐた父に強ひられたのであらう。侯爵は恐ろしい人であつた。彼に就いては、その信心深いにも拘はらず、變な噂が擴がり始めてゐる！フォシュリイは、今日は侯爵にお目にかゝれないのでせうかと尋ねた。彼女の父はたしかに来る筈だつたが、非常に遅くなるらしかつた。彼にはそれほど澤山の事務があつたのだ！記者にはどこで老人が夜を更かすのか、ほど見當がついたので黙つてしまつた。しかし彼はふと氣がつくと、彼女の左の頬の口許に、小さな黒子があるので驚いた。ナナにも、それが少しも違はないところにある。これは不思議なことだ

つた。その黒子の上には細い毛が縮れてゐた。たゞナナのは茶色の毛で、夫人のは黒玉のやうに眞黒な毛であつた。それは兎も角として、この婦人は他の男と一緒に寝たことはないのだ。

「私ね、ずつと前からオウギスタ皇后様にお目にかゝりた」と思つてゐますの。」と夫人が言つた。「皇后様は大變親切な、信仰の深いお方ですつてね……今度は王様と御同伴になるのでせうか？」

「さうではないらしいですね、奥様。」と彼は答へた。夫人が他の男と一緒に寝ないといふことは、その眼に現はれてゐた。それは、素氣ない、様子ぶらぬ娘の傍にゐる彼女を見るだけで十分だつた。教會の香ひのするこの墓のやうな客間は、彼女が、如何に鐵のやうな手で抑へつけられ、如何に堅苦しい生活の下積みになつて、屈從し續けて来たかを十分に語つてゐる。濕氣で黒ずんだこの古ぼけた邸に、彼女は、自分の附與したものは何もなかつた。敬虔な教養と、懺悔と、斷食とをもつて、彼女を強制し支配して来たのはミッファアであつた。そして、ふと夫人達の後ろに、眩掛椅子の中で薄ら笑ひをしてゐる、齒の悪い小さな老人がゐるのを見て、フォシュリイはそれを一層動かし難い證據だと思つた。彼はこのテオフィール・ヴノオと云ふ、宗門に關する訴訟を得意とする古い辯護士の人柄を知つてゐる



た。彼は今では澤山の財産を作つて隠退し、極めて不思議な生活を續けてゐて、到るところで歓迎せられ尊敬せられてゐた。彼の背後に感ぜられる神祕な力の偉大な権力を、彼が代表してゐるかのやうに、少しは怖れられてさへゐた。しかし彼は非常に謙遜な態度を示してゐた。彼はマドレーヌの教會理事であつたが、その上に暇潰しのためにと云つて第九區の助役の位置をも簡単に引受けてゐた。夫人はすつかり取巻かれてゐた。これでは手を出す隙間もない。

「君の言ふ通りだ、こゝは全く遣り切れないよ。」とフォシリイは夫人達の仲間から離れて来て従弟に言つた。「さあもう歸らう。」

しかしミリア伯爵と代議士に置き去りにされたシュタインエルが、汗みづくになり、ぶり／＼して、小聲で呟きながらやつて来た。

「仕方がないね！ 言ふまいと思へば金輪際言はないんだから……。他に話してくれる人を探さう。」

そして記者を隅の方に伴れて行き、聲を變へて、さも得意げな様子で言つた。

「どうだい！ 明日だらう……。僕は行くよ、ねえ君！」

「へえ！」と記者は驚いて呟いた。

「君は知らないだらうが……僕は一度あの女の家へ行つて見たんだが、逢へなかつたんだ！ おまけにミニヨンが、

少しも僕を離さないのね。」

「だが、ミニヨン達も行くのですよ。」

「さうだ、あの女がさう言つてゐたよ……たうとうあの女は僕を歓迎して招待してくれた……芝居が閉れてから、夜の正十二時に。」

銀行家は嬉しさうな顔をしてゐた。そして隣きながら言葉に特別の力を入れて附け加へた。

「うまく行つたかい、君は？」

「何のことです？」とフォシリイは分らない風を装つて言つた。「あの女は私の記事にお禮を言はうと思つたので、私を訪ねて来たんですよ。」

「さうだ、さうだ……。君達は幸福だよ、君達はみんなね。君達はお禮を言つて貰ふんだからね……ときに、明日の支拂ひは誰がするんだい？」

記者は誰にもそんなことは分らないといふ風に、腕を擴げて見せた。その時ワンドゥルがビスマルクを知つてゐるシュタイネルを呼んだ。デュ・ジョンコア夫人は殆んど説き伏せられさうになつて、かう言つて議論を結んだ。

「あの方は私に悪い印象を與へたものです。あの方の顔付が狡猾さうだつたのですね……。それにしても、あの方が十分才氣のある方だといふことは信じますわ。それでこそ御出世なすつたんですからね。」

「勿論です。」と蒼白い笑ひを浮べて、フランクフォル生れの猶太人の銀行家が言つた。

この時ラ・フロアズは、今度こそは思ひ切つて従兄に問ひかけようとして、彼の後について行つて顔をすり寄せた。

「では明日の晩、或る婦人の宅で晩餐會をするんだね……一體、誰の家なんだい？」

フォシリイは、人に聞えるから、場所柄を辨へて呉れな

くては困ると合圖した。その時また扉が開いて、少年を伴

れた老夫人が入つて来た。記者はその少年が「プロンド・ヴェ

ニクス」の夜に「いよう素敵！」とやつて、それが今も評判になつてゐるあの中學校を出たばかりの男だといふことを思ひ出した。この老夫人が来ると客間がざわめき渡つた。サビ

イヌ夫人は急いで椅子から離れて迎へに行つた。そして兩

手をとつて、ユーゴンの奥様と呼んだ。この有様を珍らしさうに眺めてゐる従兄を見ると、ラ・フロアズは相手の心にとり入りたさに、手短に夫人のことを教へた。ユーゴン夫人は或る公證人の未亡人で、オルレアン附近にある同家の昔からの所有地フォンデットに隠棲してゐて、巴里ではリシユリ街の彼女の持家の一室に假寓してゐたのである。今丁度そこへ法科の一年になつた若い息子を伴つて来て、二三週間逗留してゐるのであつた。昔はシユアール侯爵夫人の親友だつたし、サビイヌ夫人の生れたのも知つてゐて、

夫人が結婚する前には自分の家へ幾月も引取つてゐたこともあるの、今でも特別に親しく口を利いてゐるのだつた。

「私、ジュールジュを連れて来ましたよ。」とユーゴン夫人はサビイヌに言つた。「ね、大きくなりましたでせう！」

明るい眼の、男装した少女のやうに金髪を縮れたその少年は、すこしも差かまらずに伯爵夫人にお辭儀をして、二年前にフォンデットで、一緒に羽子つき遊びをしたことを夫人に思ひ出させた。

「フキリッブ君は巴里にゐらつしやらないのですか？」とミリア伯爵が訊ねた。

「え、ゐませんの。」と老夫人は答へた。「ずつとプールの聯隊の方にゐましてね。」

夫人は腰を下ろし、誇らしげにその長男が、極めて勇敢な働きをして非常に早く中尉に昇進した快男兒であるといふことを話した。夫人達は皆敬意の籠つた同情をもつて彼女を取り圍んだ。會話はまた一層楽しく一層巧みにとり交はされるやうになつた。そしてフォシリイは、眼の前にこの尊敬すべきユーゴン夫人の、白髪を大きく二つに分けた間から優しい微笑に輝いてゐる母親らしい顔を見て、先刻ふとサビイヌ夫人を疑つたことを、我ながら淺ましく思つた。

そのとき、伯爵夫人の腰掛けてゐる、深々とした大きな赤い絹の長椅子が彼の注意を惹いた。彼はそれをこの燻ぶ



つた客間にはひどく調子外れの、途方もない氣紛れなものだと思つた。確かにこの肉感的な、怠けるのに都合のいい家具をこゝへ持ち込んだのは、伯爵ではなかつた。それは一つの試みであり、また欲望と享樂の手初めであるとも言へるだらう。そして彼は我を忘れて、何かの夢を追ふやうに、またしてもあの夜料理店の一室で聞き、今はもうぼんやりとしか覺えてゐない打明け話を繰り返して考へるのだつた。例の友人がメキシコから歸つて來ないので、彼は淫らな好奇心に驅られて、前からミラファ家へ出入りしたいと願つてゐたのだつた。しかし今後はどうなるだらう？ それ時間は経つて見なければ分らない。こんなことを考へるのは詰らないことに違ひなかつたが、いろ／＼の想像が彼を苦しめ、惹きつけ、悪徳が服醜めたのであつた。大きな椅子が愛嬌のある顔付に見えた。今はその椅子の大きく反つた背が彼の心を樂しませた。

「さあ、行かうかね？」とラ・ファアは、外へ出てからどうしても晩餐會を催す婦人の名を言はせようと考へて言つた。

「直ぐ行くよ。」とフォジュリイは答へた。

しかも彼は少しも急がなかつた。招待を傳へてくれと頼まれてゐるのだが、それをうまく言ひ出す折がないのだといふことを口實にした。夫人達は三日以來巴里中の人々が

すつかり感動してゐる儀式、あの哀れな着衣式のことを話し始めてゐた。それはフウジュレー男爵夫人の長女で、神のお召に従つてカルメル派の尼僧になつた少女の事であつた。フウジュレー家の遠縁に當るシャントロー夫人は、男爵夫人が翌日床に就かなければならなかつたほど泣き明かしたと話して聞かせた。

「私はよく見える場所に坐つてゐましたの。」とレオニードが言つた。「ほんとに珍らしいことだと思ひましたわ。」

しかしエーゴン夫人は氣の毒な母親に同情してゐた。そんな風にして娘を失つてしまふとは、どんなに苦しいことだらう！

「私も日頃信心家だとは言はれてゐましても、」と彼女は靜かに率直に言つた。「だからと言つて、子供達がそんな自殺のやうなことに身を捧げるのを見るのは、矢張り残酷だと思はないではゐられせんわ。」

「さうですわ、恐ろしいことですわ。」と伯爵夫人は呟いて、寒がりらしく軽く身を慄はせ、暖爐の前の大きな椅子に深く身を埋めた。

それから夫人達は議論を始めた。しかしその聲はどこまでも慎ましかで、折々の微かな笑聲が重苦しい會話の間に聞えた。薔薇色のレースで覆はれた暖爐の上の二つのランプが、彼女等を弱く照らしてゐた。そしてずつと離れた

家具の上に、もう三つのランプが置かれてゐるだけなので、廣い客間は柔らかな影の中に沈んでゐた。

シュタイネルは退屈してゐた。彼はフォジュリイに、レオニードと呼び捨てにしながら、小柄なシュゼル夫人の情事を話してゐた。そして夫人達の椅子の後ろの方で聲を低くして、彼女のことを彼奴などと言つた。フォジュリイは、瘦せて男の子のやうにお轉變な彼女が、薄青い縞子の大きな着物を着て、椅子の端へ妙な形に腰かけてゐるのを見た。彼は驚いてしまつた。カロリイヌ・エッケの家では、母親が眞面目に家庭を支配してゐるので、そこへ來る人々はもつと行儀がよかつた。それに、これは全く新聞記事の材料になるほどのことだつた。一體巴里の社交界とは何と云ふ不思議なところだらう！ 最も嚴格なサロンが、今や蹂躪されてゐるのだ。この黙つて醜い齒を見せて笑つてばかりゐるテオフィール・ヴノオは、老齡のシャントロー夫人やデュ・ジョンコ

ア夫人や部屋の間ちつとしてゐる四五人の老人達と同様に、きつと亡くなつた伯爵夫人の形見に相違ない。テュイルリイ宮殿(佛國帝政時代の政府のありしころ)の人々の取柄であるあのきちんとした服装の役人達を伴つて來たのはミラファ伯爵である。中にも局長は剃りたての顔をどんよりさせて、いつも部屋の間ちつに獨りぼつちで、身動きも出來ないほどきちんとして服に身を緊めつけられてゐた。青年紳士や舉措の高雅な

人々は殆んど皆、樞密院に籍を置いてからも正統派と從來の關係を保つてゐるシュアール侯爵に紹介されて來たのであつた。レオニード・ド・シュゼルとシュタイネルの素性の怪しげな二人は一組となり、その中でエーゴン夫人一人が愛すべき朗らかな老婦人として特に他とは違つて目立つてゐた。記事のことを考へてゐたフォジュリイは、それをサビイヌ伯爵夫人組と呼んだ。

「或る時なんかはね、」とシュタイネルは一層聲を低くして語り續けた。「レオニードが相手のテノール歌手をモントオパンへ來させたのだ。そして自分は二里も離れたボウルクイエの屋敷に住んでゐて、毎日二頭立の馬車を仕立て、そのテノール歌手の泊つてゐる旅館のリヨン・ドオルへ出かけたものだ……ところで馬車を入口で待たせて置いてね、レオニードは幾時間も出て來ないもんだから、すつかり人だからがしてみんな馬を眺めてゐるといふ始末なんだ。」

ふとあたりが靜かになつた。高い天井の下が、暫くしんと鎮まり返つた。二人は囁いてゐたが、今度は黙つてしまつた。そして部屋を歩いてゐるミラファ伯爵の微かな足音だけが聞えた。ランプの火は弱くなつたやうに思はれ、暖爐の焰は衰へ、嚴かな物影がこの家の古い友達を、四十年この方彼等がいつも腰かけて來た脇掛椅子の中に溺らせてゐた。それは恰も話を交してゐる途中で、ふとお客達が皆、



冷やかな嚴めしい様子の、あの伯爵の母堂が歸つて来るのを感じたかのやうであつた。すると、サビイヌ夫人がまた話し始めた。

「でもね、こんな噂が擴まつてゐますのよ……若い方が亡くなられたのだらうつて。もしもさうなら、あの可哀さうな娘さんが尼さんになつた理由も分りますからね。またこんな事も言つてゐますわ、お父さんのフウジュレーさんが、どうしても結婚に同意なさる見込がなかつたのですつて。」

「もつと違つた噂もありますよ。」とレオニードがそつつかしく言つた。  
彼女はそれ以上のことを問はれても、笑つて話さなかつた。その無頓着な様子に誘はれて、サビイヌもハンカチを唇へ持つて行つた。二人の笑ひ聲は、しんとした廣い客間に、硝子の壊れるやうに響いたので、フォシュリイは吃驚してしまつた。それから今までの静かさに龜裂が入り始めて、あちらこちらに話聲が聞えた。デュ・ジョンコア夫人は反對を唱へ、シャントロー夫人は、或る結婚の計畫があるにはあつたのだが、すべてがこんな始末になつたと言つた。男達は男達で、彼等の意見を述べてゐた。暫くの間、皇帝派も正統派も世俗的な懷疑派達と入り混つて、客間の種々な要素が一時に衝突し、腕と腕とを突き合はして、判断を混亂させてゐた。エステルは電鈴を鳴らして煖爐に薪を入れるやう

に命じた。それから召使がランプの芯を捲き上げたので、眼が醒めたやうに思はれた。フォシュリイは氣持よさうに笑つてゐた。

「なあに、彼女等は從兄達と結婚が出来ない時には、神様と結婚するのさ。」この話題にうんざりして、フォシュリイの方へ遣つて來ながら、グンドゥルは齒の間から言つた。「ねえ君、愛されてゐる女が尼さんになつたのを見たことがあるかい？」

彼は返辭を待たなかつた。もう厭き／＼してゐたのだ。そして低い聲で言つた。  
「ところで明日は幾人くらゐになるのだらう？……ミニヨン夫婦とシュタイネルと君に、ブランシュと僕なんだから……まだ他に來るのかい？」

「僕の考へではカロリイヌと……シモンヌに……ガガも勿論來るでせう……でも、はつきりとは分りませんよ、ね。こんな場合には、二十人だと思つてゐると三十人にもなりますから。」  
夫人達を眺めてゐたグンドゥルは、急に外の話題に移つていつた。

「十五年昔なら、あのデュ・ジョンコア夫人は非常に美しかつたに相違ないね……。エステルは氣の毒にまた背ばかり延びたらしい。これで、寢床の中へ入れる立派な板が出來

上つたといふものさ！」

しかしその話は中止して、また明日の晚餐會に戻つた。「こんな機械のやうな連中の間にゐると、退屈してしまふな、それも年中同じ顔ばかりなんだから……新しい女が欲しいね。誰か一人伴れて來るやうに努力し給へ……さうだ！ いゝことがあるぞ！ あの肥つた男に、この前ザリエテ座へ伴れていつた女を引張つて來るやうに頼んで見よう。」

彼は客間の眞中で居眠つてゐる局長のことを言つてゐるのだつた。フォシュリイは遠くからこの微妙な交渉を見るのを喜んだ。グンドゥルは非常に威張つてゐるこの肥つた男の傍に腰掛けた。暫くは二人きりでお互に禮儀を守つて、例の問題になつてゐるあの娘が、實際どんな感情から宗教に入つたかといふことに就いて議論してゐるらしかつた。それから伯爵は歸つて來て言つた。

「駄目だ、あの男は彼女が賢婦人だと言ふんだ。きつと斷るだらうつて……。しかし僕はロールの家でたしかに見たことがあると思ふんだが。」

「何ですつて！ あなたがロールの家へいらつしやるんですつて！」とフォシュリイは笑ひながら囁いた。「あなた方があんな場所へお出でになるんですか！ 私はまた、我々のやうな貧乏人だけかと思つてゐましたよ……！」

「なにさ！ どんなことだつて知つてゐなければならぬよ、君。」

そして二人はこつそり笑ひながら、眼を輝かして、マルティル街のあの肥つたロール・ピエドフェル夫人が、食ひつめ者の例の女達に三法で食べさせる食卓の細かな話をした。それは優しい隠れ家であつた！ 女達は皆ロールの口に接吻した。すると、伯爵夫人がふとそれを一言洩れ聞いて、彼等の方へ振り返つたので、二人は互に體を打ち當てながら、快活さうに上機嫌で後退りした。彼等はジョルジュ・ユーゴンが彼等の傍でそれを聞いて、兩方の耳から娘のやうな頸筋まで、薔薇色にしてゐるのに氣付かなかつた。この少年は恥かしさで一杯になり、うつとりして聞いてゐた。彼は客間へ入つて母の手を離れてから、美しいと思つた唯一人の、シュゼル夫人の後ろに廻つてゐた。それにしてもナナのことには決して忘れられなかつた！

「昨晚ね、」とユーゴン夫人が言つた。「ジョルジュが私を劇場へ伴れて行きました。さう、ザリエテ座ですの。あそこへはもう十年以上も行きませんでした。この子は非常に音楽が好きでしてね……。私の方は面白くも何ともありませんのに、この子はそれは嬉しさうにしてゐますの！……この頃は變な脚本をやりますのね。でも私、ほんとは音楽が少しも面白くありませんの。」



「あらまあ！ 奥様が音楽をお好きにならないのですつて！」とデュ・ジョンコア夫人が天井を見上げて叫んだ。「音楽を好かないやうな人があるでせうか！」

驚いたのは彼女一人ではなかつた。だが、善良なユーゴン夫人には何のことだか分らなかつた。グリエテ座の脚本に就いては誰も口を利かなかつた。他の夫人達は、その意味が分らないのではなかつたが、何も言はなかつた。それから直ぐ彼女等は、音楽界の大家を、感傷的な洗練された讚美の仕方、夢中になつて讚美上げるのだつた。デュ・ジョンコア夫人はウェベルばかりを慕ひ、シャントロー夫人は伊太利派を支持した。しかし夫人達のその話聲も疲れて元氣がなくなつた。この燧爐の前の集りは、教會堂で一心に祈つてゐるやうでもあり、小さな祭壇の前で消え入るやうにつましく讚美歌を歌つてゐるやうでもあつた。

「そこでね、」グンドゥルはフォシュリイをまた部屋の眞中へ連れて来て囁いた。「兎に角明日のために女を一人つくらなければならぬが、シュタイネルに相談したらどうだらう？」

「シュタイネルですつて！」と記者は言つた。「彼が知つてゐる女があるとすれば、それは巴里中がもううんざりしてしまつた代物ですよ。」

さう言つてゐる間にも、グンドゥルは周囲を見廻してゐ

た。

「待ち給へ。」と彼がまた言つた。「いつかフウカルモンが可愛い金髪の子を伴つてゐるのに出會つたことがあるから、ひとつ彼女と一緒に来るやうに言つて見よう。」

そして彼はフウカルモンを呼んだ。彼等は手短かに言葉を交した。しかしどうやら話が簡單には進まないらしく、二人はそこを歩き出して、注意深く夫人達のスカートに跨ぎながら、一人の若い男を見つけると、窓口で三人がまた相談を始めた。フォシュリイは獨りぼつちになつたので燧爐の傍へ行くことにした。丁度その時デュ・ジョンコア夫人は、ウェベルの音楽を聞くときつとすぐに、湖水や森や露に浴した野原に上る太陽を思ひ浮べないではゐられないと話してゐた。すると記者の肩に手を觸れて、誰か後から話しかけた。

「親切がないね。」

「何がさ？」と彼は振り返つて、ラ・ファロアズを見て問ひ返した。

「その晩餐會にさ、明日の……僕を招いてくれたつていぢやないか。」

フォシュリイが答へようとした時に、グンドゥルが戻つて来て彼に話しかけた。

「あれはどうやらフウカルモンの女ではないらしいんだ。」

ほら、あそこにあるあの紳士のものらしいんだ……だから來られないだらう。どうも運がないね！……しかし兎も角僕は、フウカルモンの方は連れこんだよ。彼がパレエ・ロアイヤル座のルイズを引つ張つて來るやうに計らつて見るさうだ。」

「ねえ、グンドゥルさん、」とシャントロー夫人が聲を上げて問ひかけた。「日曜日にワグネルの音樂會が彌次られましたわね？」

「ええ、ひどくやられましたよ、奥様。」と歩み寄つて、彼は品のよい丁寧さで答へた。

そして誰も引き止めないので、彼はそこを離れて記者の耳に囁いた。

「僕はもつと探して見よう……。若い連中ならきつと可愛い女を知つてゐるよ。」

そして彼は人好きのするやうに、にこ／＼しながら、人を捕へてはあちらこちらの隅で話してゐた。彼は人々の間へ入つてちよいと耳許へ囁くとまた引き下つて、瞬きや合圖などをして見せた。彼は上機嫌になつて、まるで命令の傳達をでもしてゐるやうであつた。彼の言葉が人から人へと傳はつて、會合の約束が出来上つた。その間、音樂に就いての感傷的な夫人達の議論が、この熱に浮かされたやうな誘惑のざわめきを覆ひ隠してゐた。

「いゝえ、もうそんな獨逸人のお話はお止めなさいまし。」とシャントロー夫人が繰り返した。「歌と云ふものは朗らかな輝やかしいものであるべきですわ……あなたはパッティの『理髮師』をお聞きになつたことがありませんか？」

「素敵なものですわね！」と、ピアノを敲けばオペレットの小曲しか弾けないレオニードが呟いた。

サビイヌ夫人がその時電鈴を鳴らした。この火曜日のお客の人数が少ない時には、客間でお茶が出されるのだつた。

夫人は召使に圓卓子の用意をさせながら、グンドゥル伯爵をちつと眺めてゐた。彼女はわづかに微笑を湛へて、白い齒を少し見せてゐた。そして伯爵が通りかゝると、

「さつきから何を企らんでゐらつしやるの、グンドゥルさん？」と問ひかけた。

「私がですか、奥様？」と彼は靜かに答へた。「私は何も企らんでなんかもありませんよ。」

「まあ……お見受けするところ大層お忙しさうですが……でも、ちよいとお手を借して下さらない？」

彼女は樂譜帳を彼の手に渡して、それをピアノの上まで持つて行くやうに頼んだ。しかし彼は非常に低い聲でフォシュリイに、この冬に於ける最上の歌手であつたタン・ネネと、フォリイ・ドラマチック座で初舞臺を踏んだばかりのマリア・ブロンとが來るだらうと知らせることが出來た。



ラ・ファロアズは招待を受けたので、彼につき纏つて離れなかつた。そしてたうとう自分の方から切り出した。ワンドゥルは直ぐに引受けたが、しかし彼にクラリスを連れて来ることを約束させた。そしてラ・ファロアズが心配さうな様子をするので、安心させるやうにかう言つた。

「君は私が招待するんだから、文句はないよ。」

ラ・ファロアズはその女の名を知りたいと思つたが、その時伯爵夫人がワンドゥルを呼んで、英國人のお茶の出し方を尋ねた。彼は自分の持馬が競走に出るから、よく英國に渡るのであつた。彼は、たゞ露西亞人だけがお茶の出し方を知つてゐると言つて、その方法を教へた。それから、話しながらも絶えず他のことを考へてゐたやうに、ふと話を切つて問ひかけた。

「時に侯爵は？ 今日はお見えにならないのでせうか？」

「いえ、父はいつものやうに私に約束はしましたのよ。」と伯爵夫人は答へた。「でも私、少し心配になり出しましたわ……仕事が打切れないのでせうけれど。」

ワンドゥルは忍び笑ひをした。彼もまたシヤール侯爵の仕事がどんな性質のものであるかを疑つてゐるやうに見えた。彼は侯爵が時々田舎へ連れて行く美人のことを考へた。多分あの女を伴れて來させることが出来るだらう。

一方フォッシュリイは、ミラファ伯爵を招待してもいゝ時機だと思つた。夜が更けてゐた。

「眞面目にかい？」と冗談だと思つてゐたワンドゥルが尋ねた。

「非常に眞面目なんですよ……もしこの役目を果さなかつたら、彼女は私の眼玉を引き抜くかも知れません。大變なんですよ、御承知の通り。」

「では助太刀をしてあげよう。」

十一時が鳴つた。伯爵夫人は娘に手傳はせて茶を配つた。殆んど親しい人ばかりしか來てゐないので、茶碗や菓子鉢は手から手へと渡された。夫人達も燂爐の前の椅子を離れないで、指先で菓子を削りながら少しづつお茶を喫んだ。會話は音楽から出入り商人の方へ移つていつた。汗入りボンボンはボアシエに限るし、氷菓子はカトリイヌに限るといふことだつた。しかしシャントロー夫人はラタンヴィルがいゝと言つた。人々の言葉は益々ゆつくりとなり、部屋中が渡れて眠氣を催して來た。シユタイネルは長椅子の端に坐り込んでゐた代議士に、またそれとなく話を持ちかけ始めた。

オは、砂糖菓子は齒を害すると云ふので干菓子を一つ、二十日鼠のやうな音をたて、嘸つてゐた。局長は茶碗を唇へ持つていつたまゝ、いつまでも飲み終らなかつた。伯爵夫人は少しも急がないで、人から人へと歩いていつて、

暫く物問ひたげな様子で黙つてあたりを見まはしてから、そこにも長くはゐないで微笑みながら餘處へ行つた。燃えさかる火で彼女はすつかり薔薇色になつてゐた。そしてその傍に居る瘦せた可哀さうな娘の姉のやうに見えた。夫人はフォッシュリイが夫やワンドゥルと話してゐる傍へ行つた時に、三人が急に黙つてしまつたのに氣づいた。彼女はそこを通り過ぎてずつと向うのジョルジュ・ユーゴンにお茶を渡した。

「或る婦人が、晩餐會にお招きしたいと申してゐるのですが。」と、記者はミラファ伯爵に向つて、快活に話しかけた。

夕方からずつと澁い顔をしてゐた伯爵は非常に驚いたらしく見えた。どんな婦人なんだらう？

「それはねー ナナなんですよー」とワンドゥルは單刀直入にその招待を打明けた。

伯爵は一層氣むづかしい顔をした。彼はやつと瞬きをしたが、偏頭痛の影のやうな不快さがその額を過ぎた。

「でもその婦人を知らないのですから。」と彼は呟いた。「だが、あなたはあの女の家へ行らしたことがあるぢやありませんか。」とワンドゥルが言つた。

「何ですつて！ 私が行つたことがあるつて……あゝ！ さう、この間、慈善救濟會の用事でね。すつかり忘れてゐる

ました……それにしても私はあの婦人を知つてゐるといふ程ではないから、お受けすることは出来ません。」

彼は嚴かな様子をして、そんな冗談を言ふのは自分から見れば、悪い趣味だといふことを彼等に悟らせようとした。自分のやうな身分の紳士の坐るべき席は、そんな女の食卓にはないのだ。ワンドゥルは、藝術家の晩餐會だから、彼女の藝術的な才能以外の事はすべて大目に見てもいゝと言つた。併し伯爵は、フォッシュリイが、スコットランドの王子——

女王の子さへがカフェ・コンセルの昔の歌女の傍に坐つて晩餐をとつた例を引いて、理窟を並べるのをもう聞かうともしないで、聲を大きくして拒絶した。彼は日頃嗜み深いにも拘らず、苛々した様子さへ見せた。

ジョルジュとラ・ファロアズとは向きあつて立つたまゝお茶を喫まうとしてゐたが、自分達の傍で交はされてゐる言葉を聞いたので、

「おや！ ナナの家だな。それに氣がつかかなかつたとは！」とラ・ファロアズが呟いた。

ジョルジュは何も言はなかつたが、眞赤になつて、金髪を亂して青い眼を燈火のやうに輝かした。この數日以来彼を惹きつけてゐる放埒な考へが、それほど情熱を燃やし、その心を奪つてゐたのである。今や彼は、嘗つて夢みてゐたものゝ中へ進んでゐるのであつた！



「ところで僕は番地を知らない。」とラ・ファアロアズが言った。

「アルカード通りとバスキエ通りの間の、オースマン街の四階建の家ですよ。」とジョルジュが一言に言った。そして相手が吃驚して自分を見るので、彼は眞赤になつてどぎまぎしながら、きまり悪さうに附け加へた。

「僕も行くんです。今朝招待を受けたのです。」

その時客間の中がざわついた。ワンドゥルとフォシュリイは伯爵に向つてそれ以上言ひ續けることが出来なかつた。シュアール侯爵が入つて来たので、皆が急いで出迎へた。侯爵は足がよろめくので歩きにくさうにして進んで来た。そして部屋の真中に立ち止つて、丁度どこかの暗い路次から出て来てランプの光で前が見えなくなつたやうに、眼をばちくりさせながら蒼白い顔をしてゐた。

「もういらつしやらないのかと思つてゐましたわ、お父様。」と伯爵夫人が言った。「明日までも心配しなければならぬところでしたわ。」

彼は返事をしないで何のことだか分らないやうな様子で夫人を眺めた。その鼻は大きくて、剃りたての顔に、まるで瘰癧で腫れてゐるやうに見えた。下唇が垂れてゐた。ユゴン夫人は彼がそんなに疲れてゐるのを見て氣の毒さうに同情して、

「餘りお働きの過ぎるのですわ。お休みなさいましよ……私共の年頃になると、仕事は若い者に任さなければなりませんわ。」と言つた。

「仕事ですつて、あー！ さう、仕事ですな、いつも仕事が多すぎましてな……」と彼は口籠りながら言つた。

彼はやつと我に歸つて、曲つた背中を伸ばすと、いつもの癖で、耳の後に僅かな旋毛が波うつてゐる白髪に手をやつてゐた。

「こんなに遅くまで、どんな仕事をしてゐらつしやいましたの？」デュ・ジョンコア夫人が尋ねた。「大藏大臣の招待會にでも出てゐらつたのでせう。」

すると伯爵夫人が話の中へ入つて、言つた。

「父は法律案を調査してゐるのですわ。」

「さう、法律案です。」と彼は言つた。「法律案なんですよ、全くその通り……それにかゝりきりなんです……工場に關したことでしてね。それにしても安息日は守りたいものですね。政府がはき／＼と仕事をしないのはほんとに恥かしいことです。それでいつも教會は空で、行つてみるとまるで災害のあつた跡のやうでせう。」

ワンドゥルはフォシュリイを見た。二人は侯爵の後にゐてそつと様子を見てゐた。ワンドゥルが侯爵を片脇へ引つ張つて行つて、あの田舎へ伴れて行つた美人の事を話しか

けると老人は非常に吃驚した風を装つた。恐らく彼が時々數日を過しに行くダイロフレエのテケル男爵夫人と一緒にゐるところを見たのであらう。そこでワンドゥルはちよつと仕返してやらうと思つて、突然彼に問ひかけた。

「ところでどこからいらしたのです？ 腕に蜘蛛の巣や壁土が澤山ついてゐますよ。」

「私の腕に？」と侯爵は少し當惑して呟いた。「成程、ほんたうですね……少しよごれてゐる……どうも家を出る時についたらしい。」

數人の人々が歸つた。もう十二時に近かつた。二人の召使が靜かに、空になつた茶碗や菓子鉢を下げて行つた。夫人達は暖爐の前へまた輪を小さくして坐り直した。そしてこの夜の集りももう終りに近くなり、慄さうに益々投げやりな調子で話してゐた。客間さへ眠りに落ちようとして、四方の壁から靜かに影が逼つて来た。その時フォシュリイは歸ると言ひ出したが、またサビイヌ夫人を見ると我を忘れてしまつた。伯爵夫人は一家の主婦としての心遣ひからやつと釋き放されて、いつもの席に黙つて坐りこみ、その眼は燃え盡きて煥になつた火を眺めながら、見遠へるほど白い沈鬱な顔をしてゐた。火の光で彼女の口許にある黒子の黒い毛が見え、色まですつかりナナの黒子であつた。フォシュリイは一言ワンドゥルの耳に囁かないではゐられ

なかつた。ほんとにその通りだと、今までそれに氣づかなかつたワンドゥルが言つた。そして二人はナナと伯爵夫人との似てゐるところを數へ上げた。彼等は顎や口に漠然とした相似を見出したが、眼は少しも似てゐなかつた。そしてナナには氣質の優しさうな様子があつたが、伯爵夫人の方はまるで眠つてゐる猫が爪をかくし、神経的な戰慄で僅かに前足だけを顫はせてゐるやうで、何と言つていゝか分らなかつた。

「何と言つても、男と一緒に寝るでせうさ。」とフォシュリイが言つた。

ワンドゥルは彼女を眺めてその裸體を想像してゐた。「さう、何と言つてもね。」と彼は言つた。「だが、ねえ君、腿は駄目だよ、腿には肉はないよ、きつとー」

そして彼は黙つてしまつた。フォシュリイははげしく腕で突いて、前の椅子に掛けてゐるエステルを眼で示した。彼は彼女に氣づかずには腰を高くしてゐたので、それが聞えたらしかつたが、しかし彼女は堅くしくちつと體を動かさないでゐた。彼女は早く背丈の延び過ぎた、瘦せた頸筋を見せてゐたが、一筋の後毛も顔へてはゐなかつた。彼等は三四歩後退りをした。ワンドゥルは伯爵夫人が非常に品行の正しい女であると誓つた。

丁度その時、暖爐の前で聲が起つた。デュ・ジョンコア夫人



が話してゐた。

「私もビスマルクさんが才氣のある方だと云ふことには、賛成いたしますわ……けれども、天才とまで仰しやるのならば……」

夫人達はまた初めの話題に歸つてゐるのであつた。

「何のことだい！ またビスマルクぢやないか！ 今度こそ何といつても歸らう。」とフォシュリイは呟いた。

「待ち給へ。はつきり伯爵から返事を聞いて置かうよ。」とワンドゥッセルが言つた。

ミッファ伯爵は、舅や二三人の堅くるしい仲間など話してゐた。ワンドゥッセルは伯爵を片隅へ呼び寄せて、また招待の話をし、自分もその晩餐會へ行くのだからと言つて勸誘に努めた。人はどこへ行つても構ひはしないのだ。高々好奇心くらゐ持つてゐたとて、それを誰も悪事と思ひはしないのだ。伯爵は眼を伏せ口を閉ぢたまふ、その議論を聞いてゐた。ワンドゥッセルには伯爵が迷つてゐるのが分つた。その時、シュアール侯爵が物問ひたげな様子で近づいて来た。そしてそれが、何の事であるか分つた途端に、フォシュリイが今度は侯爵を招待したので、そつと婿の方を見た。暫く間の悪い沈黙が続いたが、二人は氣を取り直した。もしミッファ伯爵が、彼の方を凝視してゐるヴノオに氣づかなかつたならば、きつと承諾したに違ひなかつた。ヴノオは勿物

のやうに明るく鋭い眼の、恐ろしい顔をして、もう笑つてゐなかつた。

「お断ります。」と直ぐに伯爵はとりつく島もないほどきつぱりした調子で答へた。

そこで侯爵も一層嚴肅な調子で謝絶した。彼は道徳に就いて語つた。貴族階級はすべて模範とならなければならぬ。フォシュリイは微笑を浮べてワンドゥッセルに握手をした。彼はワンドゥッセルを残して直ぐ部屋を去つた。新聞社へ行かなければならなかつたからだ。

「ナナの家で、夜の十二時に。ね？」

ラ・フロアズもまた部屋を去つた。シュタイネルは伯爵夫人に挨拶を述べた。數人の人々がその後に行った。そして控室へ外套をとりに行きながら、「ナナの家で、夜の十二時に。」と、誰もが繰り返す同じ言葉があちこちに聞えた。母と一緒になければ出られなかつたゾルジュは、闕の上立つて、四階の左手の入口です、と詳しくその住居を教へてゐた。フォシュリイは出かける前にも一度ちらりと部屋を見渡した。ワンドゥッセルはまた夫人達の間に座を占めて、レオニード・ド・シユセルと冗談を言つてゐた。ミッファ伯爵とシュアール侯爵も會話の仲間になつてゐた。善良なユイゴン夫人は眼を開けたまゝで居眠つてゐた。婦人達のスカートの後ろで、ヴノオは體を小さくしてまた笑つてゐた。

静かな廣い部屋で緩やかに十二時が鳴つた。

「何ですつて！ 何ですつて！」とデュ・ジョンコア夫人が言つてゐた。「あなた方はビスマルクさんが戦争を仕掛けて、私達を攻めて來るとお考へになるのですか……おゝ！ それはあんまりひどいお考へです！」

シャントロー夫人が、夫の工場のあるアルザスで聞いて來たことを繰り返した時に、人々は彼女の周囲でほんとに笑ひこけた。

「幸ひに、上には皇帝がゐらつしやるのだから。」とミッファ伯爵は官吏らしい威嚴を作つて言つた。それはフォシュリイが聞いた最後の言葉であつた。フォシュリイはサビイヌをもう一度見てから扉を閉めた。彼女は様子をつくつて局長と話してゐたが、その肥つた男の話を興がつかつてゐるやうに見えた。たしかに彼の考へは間違つてゐるのだ。すこしも龜裂は入つてゐない。それが残念だつた。

「おい！ 早く來ないか。」とラ・フロアズが玄關から彼に叫びかけた。

歩道では、人々が別れながら、まだ繰り返してゐた。「では明日、ナナの家で。」

四

料理長が下働きとボーイを従へてブレバンの店から來た

ので、ゾエは朝から家中のことを彼等に任せてしまつた。

食事も、皿も、盃も、卓布も、花も、椅子や腰掛に至るまで、すべてがブレバンの店から運ばれた。ナナは自分の家の戸棚の中に、一ダースのナブキンも持つてゐなかつた。やつと名前を賣り出したばかりで、まだそれらを買ひ整へる暇もなかつたし、それかと云つて、料理店へ行くのも好まなかつたので、結局彼女は、料理店を彼女の家へ移すことにした。その方が遙かに氣が利いてゐると思はれた。彼女は女優としての大成功を、例の話題になつてゐた晩餐會で祝ひたいと思つてゐたのだつた。食堂はお話にならないほど狭かつたので、料理長は食卓を客間に据ゑることにした。その食卓には、少し窮屈だつたが、二十五人分の食器が並べられた。

「準備はすつかり出來て？」とナナは夜の十二時頃に歸つて來て尋ねた。

「いゝえ、私は知りませんの。」ゾエは怒つたやうに荒々しく答へた。「仕方がありませんもの！ 私は捨て、置きましたわ。料理人が來て、臺所もお部屋も滅茶々にしてゐますわ……喧嘩さへしなければなりませんでしたの。又あの二人が來たのですよ。けれど追ひ歸してやりましたわ。」

ゾエは、ナナの昔馴染の金持の商人とブラキア人のことを言つてゐるのであつた。ナナは前途のことを考へて、彼



女の言葉で言へば、新規播き直しがしたので、きつぱり二人とは手を切つたのであつた。

「煩さい男ね！」と彼女は呟いた。「今度来たら、警察へもお行き、と怒鳴つておやり。」

そして彼女は、ダグネとジュールジュが控室に外套をかけたまゝ、まだ其處の後ろの方に立つてゐたのを呼び寄せた。二人ともパノラマ街の、俳優の出入口で出會つたので、彼女が馬車に呼び込んで連れて来たのだつた。まだ客は誰も来てゐなかつたので、彼女は二人を、丁度そのときゾエが片付けてゐる化粧室へ招き入れた。ナナは、大急ぎで着物も着換へずに、自分で髪を梳きつけて、頭と胸に白い薔薇の花を挿した。化粧室は客間にあつた家具で一杯になつてゐた。そこまで轉がして来たらしく、圓卓子や、安樂椅子や、脇掛椅子などが、脚を上にして積み重ねてあつた。丁度彼女の身支度がすつかり出来上つた時、スカートが椅子の脚輪に挟まつて裂けた。彼女は腹を立て、叫び聲をあげた。私は何時もこんなふまな事ばかり仕出來す。彼女は怒つて、その白い薄絹の着物を脱ぎ捨てた。それは極めてあつさりとした、柔らかな上品な着物で、彼女は長い肌膚のやうにして着てゐたのである。しかし他の着物は、どうしても氣に入らないので、殆んど泣きさうになつて、乞食のやうだわ、などと言ひながら、やがてまたそれを身につけた。ダ

グネとジュールジュは、留め針で、その裂け目を隠してやり、ゾエは彼女の髪を直してやらなければならなかつた。かうして三人が皆彼女のまはりに急いで立ち働いた。殊に小さなジュールジュは、床に跪つて、両手でスカートを直してゐた。その時ダグネが、どうしてもまだ十二時を十五分も過ぎてはゐないと言つたので、彼女はやつと落着いた。彼女は「プロンド・ヴェニス」の三幕目の臺詞を飛ばし、歌詞をぬかして、時間を急いで歸つたのであつた。

「それで澤山なのよ、あんなつまらない見物には。」と彼女は言つた。「御覽になつて？ 今晩は大變な人だつたわ！……ゾエや、いゝ子だから、こゝに待つて、頂戴ね。寝てしまつてはいやよ、きつと何か用事があると思ふから……おや、おや！ もう時間だわ。お客様が来るわよ。」

彼女は身を隠して出て行つた。ジュールジュは、燕尾服の裾を曳きすつて、床に蹲まつてゐた。彼は、ダグネが自分を見てゐるのに氣づいて顔を赤くした。しかし二人は、互に優しい友情を感じ合つてゐた。彼等は大きな鏡臺の前に立つて襟飾を結び直してから、ナナに觸れたために白くなつた服に、代るゝ刷毛をかけ合つた。

「まるで砂糖みたいだ。」とジュールジュが、食ひしん棒の子供のやうに笑つて言つた。

その夜のために備つた燕尾服の給仕が、お客を小さな客

間に案内してゐた。それは、脇掛椅子がたつた四脚だけしか備へてない狭い部屋だつたので、ずぶん込み合つた。隣の廣い客間からは、皿やナイフを配る音が聞えてゐた。そして入口には、明るい燈火が煌々と輝いてゐた。ナナはそこへ入つて来て、ラ・ファロアズが伴つて来たクラリス・ペスニユスが、もう脇掛椅子に納まつてゐるのを見た。

「あら、まあ！ あなたが第一着ね！」あの成功の晩以來彼女と親しくしてゐたナナは言つた。

「ところがね、第一着はこちらの方よ。」とクラリスが答へた。「この人つたら、遅れはしないだらうかつて心配ばかりしてゐるの……もしも本氣に聞いてゐたら、私なんか髪を脱いで紅を落す暇もなかつたわ。」

ナナに初めて會つたその青年は、自分の間誤つてゐることをわざと大袈裟な鄭重さで隠しながら、お辭儀をして挨拶を述べ、従兄のことを話し初めた。しかしナナは、それには耳も借さず顔もよく見ずに、さつさと握手をして、急いでローズ・ミニヨンの方へ進んで行つた。急に彼女は慄慄になつた。

「あらまあ、あなた、よく来て下さいましたわね！……どんなにお待ちしてゐたか知れませんかよ！」

「私こそ嬉しくてなりませんわ、ほんとに。」とローズも同じやうに、心から好意をもつて答へた。

「まあお掛け下さいな……何か差し上げませう？」

「いゝえ、ありがたう……あゝ！ 私、扇子を外套の中へ忘れたわ。シュタイネルさん、右のポケットを捜して来て下さいな。」

シュタイネルとミニヨンは、ローズの後から入つて来た。シュタイネルは後戻りして、扇子を取つて歸つて来た。そのときミニヨンは兄妹のやうにナナを抱いて接吻し、同じ劇場にゐる者は皆同じ家族ではないでせうか？ といふ意味から、ローズも同じくナナに接吻しなければならぬやうに仕向けた。それから、シュタイネルの方へ、勵ますやうに眼配せをした。しかしシュタイネルは、ローズが眼を輝かしてゐるのに常惑して、たゞナナの手に接吻するだけにして置いた。

その時ワンドゥル伯爵がブランシュ・ド・シヴリイを連れて現はれた。皆は非常に敬意を表した。ナナはすつかり儀式張つて、ブランシュを脇掛椅子に導いた。するとワンドゥルは笑ひながら、リュシイ・スツワアルの馬車を通さないといふ門番とフォシュリイが下で言ひ争つてゐることを話した。門番と罵り合つてゐるリュシイの聲が、控室まで聞えて来た。やがて、燕尾服の給仕が扉を開くと、彼女は優しく笑顔を作つて入つて来て、自己紹介をしてナナと握手した。そして、一眼見た時からナナを愛してゐることや、



ナナに素敵な才能を認めてゐる事などを告げた。ナナは、主婦としての慣れない役をときめかせて、逆上せてしまつてゐた。しかしフオシュリイが来てからは、何か外の事に氣を取られてゐるやうに見受けられた。彼の傍へ近づくことが出来る、直ぐに彼女は低い聲で問ひかけた。

「あの方、いらつしやる？」

「生憎ね、来たくない」と仰しやるんですよ。」記者は豫じめミラファ伯爵の拒絶したことを説明する筋書を考へて置いたにも拘はらず、その場になると急に素氣なく答へてしまつた。

彼はナナの顔が蒼くなるのを見て、しまつたと思つて、自分の言葉を取り繕はうと努力した。

「おいでになることが出来ないのです。伯爵は今晚、内務大臣の舞踏會へ、夫人と同伴しなければならぬのですから。」

「いゝわよ。」とナナは彼の意地悪さを疑つて呟いた。「その代り、覚えてゐらつしやい。」

「だから、僕はかういふお役目は好かないんです。僕よりもラポルデットにお頼みなさいよ。」と彼はこの脅し文句に不興げに言つた。

二人は互に顔をそむけて、腹では怒つてゐた。その時丁度ミニヨンがシユタイネルを彼女の傍へ押しやつた。彼女が

一人になると、ミニヨンは低い聲で、友人の樂しみを助けようとしてゐる恥知らずな氣前のいゝ男のやうに、

「あの銀行家は死ぬほど焦れてゐるんですよ……たゞね、私の家内が怖ろしいのですが、どうでせう、あの人をうまく庇つてやる氣になれないのですか？」と言つた。

ナナは、何のことだか呑み込めないやうな振りをしてゐた。彼女はローズと、その夫と、銀行家を、代るく眺めた。それから彼女はシユタイネルに呼びかけた。

「あの方、シユタイネルさん、私の隣へいらつしやいな。」

その時控室から、まるで修道院が移つて来たやうに、快活な騒がしい聲と囁きと笑ひが聞えて来た。そしてラポルデットが後ろに五人の女を従へて、リュシイ・スツワアルの意地悪な言ひ方をもつてすれば、寄宿舎を従へて入つて来た。

ガガは、青い天鵝絨の服に身を締めつけて威張つてゐた。カロリヌ・エッケは、相變らずレース飾りのついた黒い節織の服を着てゐた。レア・ド・オルンは、例によつて下手な着物の着方をしてゐた。肥えたタタン・ネネは、金髪可愛い娘の癖に、蔭口の種になる乳母のやうな胸を見せてゐた。最後に小さなマリア・プロンは、フオリイ座でほんの初舞臺を踏んだばかりの十五歳の小娘で、瘦せて、悪ずれのした子供らしい様子をしてゐた。ラポルデットは、みんなをたつた一臺の馬車に乗せて来たのだつた。彼女等はまた、

車の中で込み合つたことを笑つてゐた。マリア・プロンは他人の膝の上に乗つてゐた。そして彼女等は皆唇をすぼめて、握手や會釋を洒落た様子で交はしてゐた。ガガは勿體ぶつて馬鹿丁寧な口調を用ゐたり見戯に類した事をしてゐた。タタン・ネネは、途中で、ナナの晩餐會では六人の素裸の黒奴が食事を運ぶのだと聞かされたので、不安さうにその黒奴がどこにゐるのかと訊ねた。ラポルデットは彼女を、馬鹿抜ひして、黙つてゐると言ひ付けた。

「ポルドナアヴさんは？」とフオシュリイが訊いた。

「ねえ、ほんとにがっかりしてしまふわ。」とナナが言つた。「あの方はどうしてもいらつしやれないのでせうか？」

「さうです。」と、ローズ・ミニヨンが言つた。「足を踏み外して、ひどく挫いてしまひましてね……繃帯を巻いて、椅子の上へ投げ出してひどく唸つてゐるんですよ！」

人々は、皆ポルドナアヴの來ないのを残念がつた。ポルドナアヴがゐるなければ、折角の晩餐會もつまらないと言つた。が結局、彼のゐないのも諦めることにした。いつしか話題が餘處へ移つて行つた。と、突然、どら聲が聞えて來た。

「何だつて、何だつて！ それぢや、まるで墓の中へ埋められたかたちだ！」

叫び聲が聞えたので、人々は皆その方へ顔を向けた。そ

れは肥つて眞赤な顔をしたポルドナアヴであつた。片足を棒のやうに突つ張つて、鬨の上に立ち、シモンヌ・カピローシユの肩に倚り掛つてゐた。最近彼はシモンヌと通じてゐたのだ。このシモンヌは教育があつて、ピアノも弾ければ英語も話せるといふ金髪の可愛い優しい娘で、ポルドナアヴの大變な重みに身を屈めて、それでも笑ひながら辛抱してゐた。ポルドナアヴは自分達の芝居が、つた恰好に氣がついて、ちよつと見榮を切つて見せた。

「どうだい？ お前が可愛くてね。」と言つてからまたつづけた。「私はね、獨りで退屈してゐるのも厭だから、私も行くか……と考へたんだよ。」

そしてちよつと言葉を切つて呟いた。

「いやはやー」

シモンヌの歩き方が早かつたので、彼の足が床に觸れた。すると彼はシモンヌを怒鳴りつけた。彼女は絶えず笑ひながら、打たれるのを怖れる家畜のやうに、美しい顔を俯向けて、金髪のぼつてり肥つたその小さい體の全力をもつて彼を支へてゐた。それで、人々はがや／＼言ひながら、駈けつけた。ナナとローズ・ミニヨンが、駈掛椅子を押しやつたので、ポルドナアヴはその中に坐り込んだ。その間に他の女達は、彼の足の下へもう一脚の駈掛椅子を滑らせた。そしてその場にゐた女優達は、皆狎れ狎れしく接吻した。



彼は咳きながら、ほつと溜息をついた。  
「あゝ、やれ、やれ……だがね、胃袋の方は大丈夫だから安心してくれ。」

客は續々やつて来た。部屋の中はもう身動きも出来なくなつた。皿やナイフの音はもう止んで、今度は広い客間から、料理長が腹を立て、怒鳴つてゐる聲が聞えて来た。ナナはもうお客を待つ氣はなくなつたが、たゞ、何時までたつても支度の出来ないのを氣にして苛々してゐた。彼女はジョルジュに、どうなつてゐるのか見にやつた。そして、なほ續々と男達や女達の客が来るのを見て、吃驚してしまつた。それらの人々を彼女は少しも知らないものであつた。そこで、少し面喰つて、彼女はボルドナアヴや、ミニヨンや、ラポルドットに訊ねて見た。彼等もまた、少しも知らないものであつた。グンドゥール伯爵に訊くと、伯爵は直ぐに答へた。それは、彼がミラファ伯爵の家で狩り集めた若い連中だつた。ナナはお禮を述べて、大へん結構ですわ、有難うございました、しかし食卓の狭いのは御辛抱下さいね、と言つた。そして、ラポルドットに頼んで、七分分の食膳を追加した。ラポルドットと行違ひに、また案内人が、三人の新らしい客を伴つて来た。かうなるともう滑稽なくらゐで、席に着けるどころではなかつた。ナナは腹を立てて、威丈高に、これではどうにも始末がつかないと言つてゐた。し

かしまだその上に二人来たので、あまりの可笑しさに笑つてしまつた。まあ、仕方がないから、辛抱の出来るやうにして辛抱しようと考へてゐた。皆立つてゐた。ガガとローズ・ミニヨンだけが腰を掛けてゐた。ボルドナアヴは一人で二脚の椅子を占領してゐた。話聲が入り交つた。皆は低い聲で、軽い欠伸を噛み殺しながら話してゐた。

「あのね、」とボルドナアヴが言つた。「兎に角、食卓にいたらどうだらう？……もう満員なんだから、ね？」

「えゝ！ さう、全く、満員ですわ！」ナナが笑つて答へた。

彼女は周囲を見廻した。そして、誰か一人捜してゐる人が見つからない様子で、眞顔になつてゐた。きつと、彼女が誰にも知らさずにゐた客がまだ来てゐないのに相違なかつた。それでもつと待たなければならなかつた。それから數分の後に、人々の中に上品な顔をした、立派な白い髻の背の高い紳士が現はれた。しかも最も意外なことには、その紳士の入つて来るのを誰も見かけた者はなかつた。彼はその狭い客間へ、まだ開いたまゝになつてゐる寢室の扉口から入つて来たのに相違なかつた。一座は靜かになつて、あちこちに囁きが起つた。グンドゥール伯爵は、二人だけでそつと握手を交した位だから、確かにその紳士が誰であるかを知つてゐるらしかつた。しかし、伯爵は女達の問ひに

對しても、たゞ笑つてゐるだけであつた。するとカロリイヌ・エッケが聲を低くして、あれは英國の貴族で、明日は倫敦へ歸つて結婚するのだと言つた。彼女はその紳士をよく知つてゐて、會つたこともあるのだと言つた。そしてこの話が婦人達の耳から耳へ傳へられた。しかし、マリア・ブロン一人が、それとは別に、あれは獨逸の大使で、彼女の友達の一とよく一緒に寝るので知つてゐると言ひ張つた。男達の間では、短い言葉で判断が下されてゐた。頑固さうな奴だね。今夜の弗函だらうさ。知れないね。そんなところだよ。まあいゝさ！ 御馳走さへあるんならね！ などと言ひあつたが、結局誰にも分らなかつた。そして料理長が廣い客間の扉を開けたときには、皆はもうその白い髻の老人のことを忘れてしまつてゐた。

「奥様、食事が出来ました。」

ナナはシュタイネルと腕を組んでゐて、彼女の後ろから一人歩いて来るその老人には氣を留めてゐないやうであつた。一同は列になることが出来なかつた。男達も女達も入り亂れて、この儀式張らない平民的な安易さを喜びながら部屋に入つた。長い食卓が、家具を除いて廣くなつた部屋に、一杯になつてゐた。だが、その食卓もこの場合、小さ過ぎる位で、皿と皿とが觸れ合つてゐた。蠟燭を十本立てた四つの枝付燭臺が、食器を照らしてゐた。その中の一つ

は左右に花束をつけたものだつた。食器は、金の網目模様のついた商標のない磁器や、絶えず磨かれるので擦り減つて古くなつた銀の食器や、どんな勸工場へ行つても、すぐ寄せ集めて一ダース位は買ひ揃へることの出来る硝子製品などで、全く小料理屋の使ひさうな貧弱な贅澤さであつた。それは成金の轉宅祝ひのやうで、少しも落着きがなかつた。吊燭臺が一つ、足りなかつた。やつと枝付燭臺がその代りになつて、その高い蠟燭が、砂糖漬の器や、揃へられた皿や、果物と小さい蒸菓子と砂糖菓子とを交互に色どりによく容れてある鉢などを、黄色にぼんやりと照らしてゐた。

「どうぞ御隨意に席をお極め下さいまし……その方がお氣樂でございますから。」とナナが言つた。

彼女は卓子の中央に立つてゐた。正體の知れない老紳士は、彼女の右に腰掛けた。彼女はシュタイネルを左側に坐らせた。人々は皆席に着いた。するとさつきの小さな客間から罵り聲が聞えて来た。それは取り残されたボルドナアヴだつた。彼は二脚の肘掛椅子から起ち上らうとして、あらゆる努力をしながら、他の人達と一緒に出て行つてしまつたシモンヌを、頓馬め、と喚き立て、呼んでゐたのであつた。女達が同情して駆けつけた。ボルドナアヴは、カロリイヌや、クラリスやタタン・ネネや、マリア・ブロンに助け



られてやつて来た。彼を席に着けるのが、また一仕事だった。

「どうか、真中の、ナナの前に！」と皆が言った。「ボルドナアヴさんを真中に！」そして、司會者になつて下さい！」すると女達が彼を食卓の中央に坐らせた。そしてまたその片足のために、もう一脚の椅子が必要であつた。二人の女がその足を持ち上げて、そつと椅子の上に伸ばさせた。そんな坐り方をしてみても別に何の不都合もなく、横向きになつて食事が出るのだつた。

「やれ／＼！ とにかく、落着くには落着いたが！……」と彼は呟いた。「あゝ、お前達は、また後でお父さんの世話をするんだよ。」

彼はローズ・ミニオンを右側に、リュシイ・スツワアルを左側にして坐つた。女達は、彼の世話をすると約束した。かうして皆が席に落着いた。ヴンドゥル伯爵はリュシイとクラリスの間に坐つた。フォシュリイはローズ・ミニオンとカロリイヌ・エッケの間に坐つた。その向ひ側では、エクトル・ド・ラ・ファアアズが、前からクラリスが呼んでゐるにも拘はらず、急いでガガの隣に席を占めた。シュタイネルの腰を離れないミニオンは、ブランシュ一人を間に置いた隣に腰を下ろして、タタン・ネネの右側に坐つた。ネネの隣へラポルデットが来た。両端の方には、シモンヌや、レア・ド・オ

ルンや、マリア・ブロン達の若い連中が、一緒になつて、出鱈目に坐つてゐた。またそこにはダグネとジョルジュ・ユーゴンも坐つてゐて、笑ひながらナナを眺めてゐた。二人はだん／＼親しくなつた。

しかし、まだ婦人が二人残つて立つてゐるので、人々は冗談を言つたり、男達はこゝへいらつしやいと膝を差し出したりした。脇を動かすことも出来なかつたクラリスは、ヴンドゥルに、どうか食べさせて頂戴、ボルドナアヴはあんなに椅子をとつて威張つてゐるわ！ など言つた。かうして、やつと皆がつめ合つて坐ることが出来た。けれども、まるで荷造りされた鱈のやうだね、とミニオンが叫んだ。

「アスバラガスの野菜スープと、デスリニヤクの肉スープでございます。」とボーイ達が皿を持つて来て、客の後に囁いた。

ボルドナアヴが高い聲で、肉スープにしようと言つて皆に奨めてゐた時に叫び聲が聞えた。誰かと言ひ争つて、怒つてゐるらしかつた。扉は開け放されたまゝになつてゐた。女が一人と男が二人、遅れて入つて来たのであつた。あゝ！もういけません、こんなに遅くいらつしやいましたは！と誰かと言つてゐた。ナナは席を離れはしなかつたが、眉を顰めて、誰か知つてゐる人かと思つて眺めてゐた。ルキ

ズ・ヴィオレエヌだつた。けれども、男の方には見覚えがなかつた。

「あのね、」とヴンドゥルが言つた。「あの男は私の友人の海軍將校で、フウカルモンと言ふのです。私が招んで置いたのですよ。」

フウカルモンは落着き拂つてお辭儀をしてから、附け加へた。

「そして、私の友人を一人同道したのですが。」

「まあ！ 有難うございますわ、有難うございますわ。」とナナが言つた。「どうかお掛け下さいまし……さあ、クラリスさん、ちよつと詰めて下さいな。あなたは場をとり過ぎてゐるわよ……でも、憤つちやいやよ……」

人々はまた詰め合つた。フウカルモンとルキズの二人が、やつと坐れるだけの場所が食卓の端に出来た。しかしフウカルモンの友人は、食器から離れて坐らなければならなかつた。彼は兩隣の友達の肩と扉口との間に、腕を差し延して食べてゐた。ボーイ達がスープの皿をあげて行つて、松露に小兎の平腸詰の皿や、乾酪にニオキイスの皿を運んで歩いた。ボルドナアヴは、一同の注意を集めて、ブリュリエールとフォンタンと、年とつたボスクとを伴つて来ようかと考へたと言つた。ナナはむつ／＼として、彼等を招待するなごゝは飛んでもないことだと、にべもなく言つた。もしも

友達を招きたいのなら、何も人の手を借りなくても自分で呼んで来ると言つた。いゝえ、いゝえ、くだらない俳優なんか御免ですわ。ボスク老人と言へば、いつも酔つ拂つてゐるし、ブリュリエールはおつちよこちよいだし、フォンタンと来た日には、あの大きな聲と馬鹿騒ぎで、我慢にも仲間入りはさせられないと言ふのだつた。それに何時だつても、こんな紳士達の間へ来れば、俳優などはちつとも見栄えのしないものである。

「さう、さう。それはほんとだね。」とミニオンが言つた。

食卓に就いてゐる紳士達は、燕尾服に白い襟飾を結んで、きちんと身なりを整へてゐた。その蒼白い顔は、疲勞によつて一層洗練されて見えた。例の老紳士はゆつたりとしてゐて、まるで國際會議の議長にでもなつてゐるやうに、絶えず上品な微笑を湛へてゐた。ヴンドゥルはミラファ伯爵夫人の家へ行つた時と同じやうに、左右の婦人達と非常に丁寧に應接してゐた。次の朝になつてからでも、ナナは伯母に、昨晚の人達以上に立派な男はないと言つてゐた。貴族でなければ金持で、皆上流社會の人々だつた。しかし女達も、なか／＼上品だつた。ブランシュや、レアや、ルキゼなどといふ女は、暫らくすると襟もとをはだけ出した。ただガガだけは少しはだけ過ぎた。彼女の年配では、何もかも隠してゐればゐるほど、それだけ上品に見えたのに。今



では人々は皆席に落着いて、笑聲や冗談が初まった。ジョルジュは、オルレアンの或る人の處で、もつと快活な晩餐會に屢々招かれたことを思ひ出してゐた。會話はすぐに途切れた。男達は、互ひに見知らない顔を眺め合つてゐた。女達は、澄まし込んでゐた。それはジョルジュにとつては、非常に不思議なことであつた。彼はそれを、食事中だからだと思つた。そして間もなく、皆が接吻し合ふやうになるだらうと信じてゐた。

後皿が廻されるやうになつた。ライン河の鯉のシャンボオル煮と、英吉利式の牡鹿の肋肉であつた。その時ブランシュが高い聲で叫んだ。

「リュシイさん、日曜日にオリヴィエさんに出會ひましたわ……。まあ、随分大きくなりましたね。」

「だつて、あなた、あの子はもう十八になりますよ。」とリュシイが答へた。「つまりませんわ、それで私がもう一度若くなる譯でもなし……昨日ね、もう學校の方へ歸りましたの。」

彼女が得意になつて話してゐる息子のオリヴィエは海軍兵學校の生徒であつた。そこで皆が子供のことを話し合つた。夫人達は優しい氣持になつた。ナナも自分の大きな喜びにしてゐることを話した。彼女の赤ん坊の可愛いルキは、この頃は伯母の家に預けてあつて、毎朝十一時頃に伴れて

來させた。そして彼女は坊やを寢床に抱き込んで、グリフォン(獵犬)のリュリユと一緒に遊ばせるのだつた。犬と坊やとが寢床の中で、夜具にくるまつて遊んでゐるのを見ると、とても可笑しくて笑ひ切れなかつた。どんなに、ルキゼに智慧がついて賢くなつたかは、想像も出来ない位だつた。

「私、昨日まる一日潰してしまひましたわ！」と今度はロイズ・ミニオンが話した。「あのね、私、シャルルとアンリイを寄宿舎へ迎ひに行きましたの。そしてたうとう、夕方になつてから、どうしても芝居へ伴れて行かなくてはならなくなりまして……すると躍り上つて、小さな手をたいて、……母さんの芝居を見るんだい！ 母さんの芝居を見るんだい！」と申しますのよ。それから、まあ、あの騒ぎやうつたら！」

ミニオンは父親らしい優しさを眼に湛へて嬉しさうに笑つてゐた。「そして、芝居を見せてやると、と彼が續けて言つた。「まるで大人のやうに眞面目臭つた顔をして、面白さうにロイズを一心に見つめてゐましたが、私に、どうして母さんは靴下を穿いてゐないの、と言つて訊くんですよ……」

皆がどつと笑つた。ミニオンは父親の誇りを感じて得意になつてゐた。彼は子供を熱愛してゐた。彼の考へてゐる

唯一のことは、ロイズが劇場やその他のところから稼いで來る金を忠實な管理人のやうに嚴格に監督して、それで子供の財産を殖やしてゆくことであつた。或るカフェで管絃樂を指揮してゐた彼が、そこで踊つてゐた彼女と結婚した頃、二人は情熱的に愛し合つてゐた。今日でも二人は親切ないゝ友達であつた。二人の間には約束が出来てゐた。彼女の方はその才能とその美しさで出來るだけ働かし、彼の方は彼女の藝術家又は女としての成功を、一層よく保護するためにヴァイオリンを捨てゝゐたのである。こんな一致した家庭らしい家庭は滅多にないだらう。

「上の坊つちやんはお幾つですか？」とヴンドッヴルが訊いた。「アンリイは九つです。それがまことに胸白者でしてね！」とミニオンが答へた。

そして彼は、子供を好かないといふシュタイネルをからかつて、もしもあなたが父親になれば、もうそんなにあなたの財産を浪費しなくなるだらうと落着き拂つた態度で言つた。彼はブランシュの肩越しに、銀行家とナナとの間がどんな様子だらうかと窺つてゐた。しかし少し前から、フォシュリイとロイズが餘りびつたりとくつきいて話し込んでゐるので、それが彼を苛々させた。まさかロイズが、あんな男と馬鹿な眞似をすることもないだらうが、もしそんな事に

なつたら、止めに入らなければならぬと考へてゐた。そして小指にダイヤモンドの指環をはめた、美しい手を使つて肋肉を食べてゐた。

だが子供の話はまだ續いてゐた。ガガの隣に坐つて當惑し切つてゐたラ・ファロアズは、彼女に、先日グリエテ座で彼女と一緒にゐたその娘のことを訊いた。ガガはリリは達者にしてゐますが、まだほんのねんねで困りますわ！と言つた。リリが十九になつたと聞いて、彼は吃驚してしまつた。ガガが彼の眼に、重みのある女に見えて來た。そして彼が、何故リリを伴れて來なかつたかと尋ねると、

「いえ、どういたしまして！」と彼女は氣取つた様子で答へた。「あの子がどうしても寄宿舎を出たいと言つたのが、まだやつと三ヶ月ばかりのことなんです……。私の考へでは、直ぐにも結婚させようかと思つてゐるのですが……あの子は、それは、私を大事にしてくれますので、心ではやきもき思ひながらも、つひそのまゝにさせてゐるやうな始末ですの。」

彼女は娘の身の振り方を話してゐるうちに、睫毛が熱くなつて、青い臉をしばたゝいた。いゝ年をして、一スウの金も無駄にしないで、まるで孫のやうな若い男を相手にして相變らず働いてゐるのは、それはたゞ、どんな苦勞も娘の幸福な結婚には代へられなかつたからであつた。彼女は、



顔を赤くしてゐるラ・ファローズの方へ、白粉を厚く塗つて露はに出してゐるその大きな肩を押しつけてゐた。「さうでせう、もしもあの子に、妙なことがあつたとしても、私が悪いのではないでせう……」と彼女は囁いた。「若い頃には、誰でも變なことをしますからね！」

食卓の周圍が非常に騒々しくなつた。ポリー達が機敏に動いてゐた。後皿の後に間皿が配られた。蒸焼の若鶏と、辛味ソースをかけた舌比目魚と、薄く切つた鳥の肝臓であつた。今までムウルソオルの葡萄酒を出させてゐた料理長は、今度はシャンベルタンと、レオヴェキユを注ぐやうに命じた。運び出される食器の音の微かに騒がしい中で、次第に驚きを増してゐたジュールジュは、こゝにゐる婦人達はそんなに皆子供をもつてゐるのか、とダグネに尋ねた。ダグネはその質問を面白がつて、詳しい話をして聞かせた。リュシイ・スツワアルは、北停車場に勤めてゐた英國系の塗油職工の娘で、もう三十九歳になる。頭は少し悪いが性質は非常に善良で、肺病に罹つてゐても決して死なないし、兎に角こゝにゐる女の中では最も垢抜けがしてゐるので、三人の王子と一人の侯爵に可愛がられたこともあつたといふことだつた。カロリイヌ・エッケは、彼女がかうなつた事を恥ぢて自殺した小役人の子で、ポルドオ生れで、幸ひにも非常に聰明な母をもつてゐた。その母と仲違ひをしてゐたが、母の

方ではせめて財産を渡してやりたいので、一年も考へた末に、やつと二人は仲直りをしたのだつた。彼女は二十五歳で、非常に冷静な性質でもあり、また何時も變らぬ美人といふ評判を得てゐた。母は几帳面な性質で、本も讀めれば、收支の金の勘定にも精通してゐて、狭い家の内をすつかり一人の手で切り廻し、二階以上に住んでゐて、着物やその他の裁縫をして暮してゐた。ブランシュ・ド・シヴリーのほんとの名はジャックリイヌ・ポオデユといつて、アミアン附近の村から出て来た女だつた。それがまた大した代物で、馬鹿で、嘘つきで、自分では或る將軍の孫だと言つてゐるが、もう三十二歳になつてゐることは決して人に言はなかつた。そして非常に肥えてゐるので露西亞人には大變評判がよかつた。それからダグネは大急ぎで、他の女達のことも一々話した。クラリス・ベスニスは女中として、サン・トオバン・シュル・メエルから或る夫人に連れられて来たが、その夫が彼女に手をつけて捨て、しまつたのだつた。シモンヌ・カピローシユはサン・タントアヌ郊外の或る家具商の娘で、立派な寄宿學校で、小學教員になるやうに教育されたのであつた。それからマリア・ブロンとルキズ・ヴィオレヌとレア・ド・オルンの三人は、全然巴里の娼婦として育つたのだつた。それとは違つてタタン・ネネは、二十歳になるまでシャンパニエ地方の荒蕪地で、牛の番人をしてゐたのであつた。

ジュールジュは婦人達を見ながら、この耳新らしいひどい棚下ろしに聞きとれて、我を忘れて胸をときめかせてゐた。その時彼の後ろでは、ポリーが丁寧な聲で繰り返してゐた。「若鶏の蒸焼と……辛味ソースの舌比目魚でございますが……」

「ねえ君、」とダグネが、自分の經驗を彼にも當て飲めるやうに言つた。「この頃はもう魚類はだめだよ……レオヴィルにし給へ、その方が頭に來ないから。」

枝付燭臺や、運ばれて來る皿や、三十七人も押し合つて坐つてゐる食卓から、熱氣が立ち昇つてゐた。ポリー達は思はず、油を塗つた床の上で滑つてゐた。しかし晚餐會は少しも快活にはならなかつた。婦人達は愚圖々々して皿の肉を半分ばかりしか食べなかつた。タタン・ネネ一人が食ひしん棒で残らず食べてしまつた。こんな夜更けの時間になると、調子の狂つた胃袋の氣紛れな發作的な食慾しか起らなかつた。ナナの隣の老紳士は勧められる料理を悉く斷つてゐた。彼はスープを一匙吸つただけで少しも汚れない皿を前にして、黙つて周圍を眺めてゐた。欠伸を噛み殺してゐる者もあつた。あちらこちらに眼を閉ぢてゐる者もあるし、顔を土色にしてゐる者もあつた。例によつて、ゾンドッダルに言はせれば、どうにもやり切れない退屈な有様であつた。かうした晚餐會は、皆が澄ましてゐては面白いもの

ではなかつた。皆が行儀よく慎しみ深くしてゐたのでは、たゞ食事をするだけで、世の中にこれ以上退屈なものはない。始終怒鳴り立てゝゐるポルドナアヴがゐなかつたなら、人々は皆眠りこんでしまつたかも知れない。獸のやうなポルドナアヴは、片足を投げ出して、兩隣のリュシイとローズに世話を焼かせながら、まるで暴君のやうに構へこんでゐた。二人の女は、彼の方にばかり注意し、コップや皿にまで氣を配つて大切に取扱つてゐた。それでもまだ、文句を言はせないやうには出來なかつた。

「肉を切つてくれるのは一體誰の番だい？……食卓が一里も離れてゐてもどうにも出來ないんだよ。」  
さう言はれる度に、シモンヌは立つて行つて、彼の後ろに廻り、肉やパンを切つてやつた。女達は皆彼がよく食べるとを可笑しがつた。誰かポリーを呼んで、彼がうんざりするまで運ばせた。シモンヌが彼の口を拭いてやつてゐた。その間にリュシイとローズが皿を置き代へた。彼はそれを喜んだ。そして終ひには満足さうな顔を見せた。  
「さうだ！ それがほんとなんだ……女と云ふものは、そんな風にするものなんだぜ。」

人々は少し眼を醒まし、話聲が賑かになつた。マンダリ(監禁)のアイスクリームが濟んだ。焼肉の熱い方は、松露を配した背肉で、冷たい方は、小紋鳥の冷肉のガランテ



料理であつた。ナナは、客が少しも快活にならないのに機嫌を悪くして、高い聲で話し初めた。

「皆さんは御存じでせう。あの、蘇格蘭の王子殿下が博覽會へいらつしやるお序でに、『プロント・ヴェニス』を御覽になりたいと仰しやつて、もう翼席をお取りになつたのですよ。」

「どうか他の宮様方も残らずいらつしやつて欲しいものだ。」とポルドナアヴが、ロ一杯に頬張つたまゝ言つた。

「日曜日には波斯の王様がいらつしやるのね。」とリュシイ・スツワアルが言つた。

するとローズ・ミニヨンが、波斯王の金剛石のことを話し初めた。王様は、すつかり寶石で飾つた、眼も醒めるばかりの燦然たる星のやうな上衣を着てゐて、何百萬法の價か分らない位であつた。婦人達は顔の色を變へて、羨ましさうに眼を輝かし、頸を長くした。そしてまた、近頃巴里へ来る色々な王様や皇帝の話を持ち出した。彼女等は皆、さうした貴族達のほんの氣紛れが、一夜に立派な一財産を蕩盡することをそれとなく空想してゐた。

「あの、ブンドゥルさん、」とカロリヌ・エッケが問ひかけた。「露西亞の皇帝は、お幾つにおなりなのでせう？」

「おゝ！ 皇帝にはお年なんかないさ。」と伯爵が答へた。「そんなことを考へたつて無駄さ。私がお止めしますよ。」

ナナが侮辱されたやうにむつとして見せた。伯爵のその言葉は餘りひど過ぎたらしくあちこちに囁きが起つて座が白けた。するとその時ブランシは、彼女が一度ミランで見かけた伊太利王の話をした。王様は決して美男ではなかつたが、それでも女には不自由ないのであつた。すると、フォシユリイが、そのヴィクトル・エマニエル王はいらつしやらないのだと言つたので、彼女は悲しい氣持になつた。

ルキズ・ヴィオレエヌとレアの二人は埃太利の皇帝の肩を持つてゐた。と突然、小さなマリア・プロンのかう叫ぶのが聞えた。

「瘦せつぼちの、年寄りの普魯西の王様なら知つてゐるわ！ ……去年ね、私バードにゐたの。あそこで、毎日ビスマルク伯爵と御一緒だつたわ。」

「あら！ ビスマルクさんなら、」とシモンヌが言つた。「あの方なら、私知つてゐるわ……面白い方よ。」

「愉快な男です。」とブンドゥルが言つた。「昨日もさう言つたんだが、誰も私の言葉を信じないでね。」

そしてサビエヌ夫人の家と同じやうに、ビスマルク伯爵の話がそれから長く續いた。ブンドゥルは同じ言葉を繰り返した。暫らくは、ミリア家の客間へ戻つたやうであつた。たゞ婦人達の顔だけが變つてゐた。そして、同じやうにまた音楽の話に移つて行つた。すると、フワカルモンが、

巴里中の話題になつてゐる着衣式のことを言ひ出した。ナナは熱心になつて、フウジュレイの令嬢に就いて、出来るだけ精しい話を知りたがつた。おゝ、可哀さうに娘がそんなにして、生きながら世の中から葬られるなんて！ でも、神様のお召しがあつたのなら！ 食卓の周圍では婦人達が皆非常に心を打たれてゐた。ジョルジュは、二度もその話を聞くのに退屈して、ナナの日常生活をダグネに尋ねてゐた。

その時昨日と同じやうに、話はまたビスマルク伯爵の事に歸つてゐた。タタン・ネネはラポルドットの耳許に口を寄せて、ビスマルクと云ふのは誰のことかと尋ねてゐた。彼女はそれを知らなかつた。するとラポルドットは、ビスマルクと云ふ男は、肉は生のまゝで食べるし、家の傍で女に會へば、すぐに背負込むといふ有様で、そんなにして四十歳になるまでもう三十二人の子供を作つたのだ、と澄ました顔で言つて聞かせた。

「四十歳で子供が三十二人！ タタン・ネネはそれを信じ込んで驚いて叫んだ。「随分疲れたでせうね、そんな年で。」

どつと笑聲が起つたので、彼女は自分が笑はれてゐることに氣がついた。

「馬鹿ね！ あなたが嘘を言ふとは思はなかつたわ！」

一方ガガは博覽會のことばかり話してゐた。こゝにゐる婦人達と同じやうに、彼女も喜んで、それを待ち構へてゐる

た。季節はいゝし、田舎からも外國からも、大勢巴里に集るだらう。博覽會が済んで、自分の商賣がうまく行つたなら、かねてから手に入れたと思つてゐたあのデュウキシの小さな家に住むことも出来るだらう。

「どうお考へになつて？」と、彼女がラ・ファロアズに言つた。「女一人ぢや何一つ出来ないものよ……でも情人が出來さへすればね！」

ガガは自分の膝に、ラ・ファロアズの膝が觸れてゐるのを感じて、優しい氣持になつてゐた。ラ・ファロアズは、顔を赧らめてゐた。彼女は子供のやうな口の利き方をしながら、

「一目で彼を見通してしまつた。その青年紳士は、大して金目にもならないとは思つたが、彼女はもう打ちとけた氣持になつてゐた。ラ・ファロアズは彼女の住所を聞いた。」

「御覽」とブンドゥルがクラリスに囁いた。「君のエクトルはガガに奪られさうだよ。」

「どうだつていゝわ！」とクラリスが答へた。「馬鹿よ、あの子は……私ね、もう三度も追ひ出してやつたの……若い男の癖に、お婆さんに惚れたりなんかするのは私嫌ひよ。」

彼女は話を切つて、それとなく、ブランシがこの晩餐會の初めから大へん不便な場所へ坐つて、三つも椅子を隔てたあの立派な老紳士に、肩を見せようとして身を反らしてゐるのを示した。



「あなただつて捨てられさうよ。」と彼女が言った。  
 ワンドゥルは少しも不安のない様子で、上品に笑つて見せた。あの貧乏なブランシュが幸福になるのなら、彼は決して妨げはしなかつたに相違ない。それよりも、こんなに澤山の男女を前にしたシュタイネルの様子が、遙かに彼には面白かつた。誰でもこの銀行家の惚れっぽいのは知つてゐた。この怖ろしい獨逸系の猶太人は、事業にかけては俊敏で幾百萬の富でも作る手腕を持つてゐたが、一度女に惚れ込むと、どこまでもだらしがなかつた。そして彼はどんな女にも惚れた。舞臺へ出る女優といへば、必ず彼が金銭をいとはずに手に入れた女であつた。世間では彼の使つた金高を色々噂し合つた。かうして彼はその激しい欲情の爲めに、二度までも破産したのであつた。ワンドゥルの言葉に従へば、女達が綺麗に彼の弗函を掃除して、その放埒に復讐したのであつた。ランドの製鹽事業に大成功して、取引所に於ける權力を恢復すると、六週間ばかり前からミニヨン夫婦が一緒になつてその製鹽事業から甘い汗を吸つてゐるのだつた。ところが競争者が現はれて、何時までもミニヨン夫婦がうまいことをしてゐられなくなつた。ナナが白い歯を見せて出て来たのである。シュタイネルはまた捕虜になつた。ナナの傍で、彼は胸抜けたやうに口をぽんやり開き、顔には變な斑點をつくつて、食慾もないのにも

のを食べながら、すつかり夢中になつてしまつてゐた。ナナはたゞ金額さへ言ひ出せばそれでよかつた。しかし彼女は焦らなかつた、彼の毛深い耳に何か囁いて笑つたり、その頑固な顔が痙攣するのを見て私に面白がつたりして、彼を操つてゐた。あの情け知らずのミッファ伯爵が来ないとはつきりきまりさへすれば、この男を手に入れることは何時でも遅くはなかつたのである。  
 「葡萄酒はレオヴィルにいたしませうか、シャンベルタンにいたしませうか？」一人のボーイが、丁度低い聲でシュタイネルがナナに話してゐる時に、二人の間へ顔を差し出して囁くやうに言った。  
 「えつ？何を？」と彼は面喰つて口籠つた。「好きなやうにしてくれたまへ、どちらでも同じことだから。」  
 ワンドゥルは、リュシイ・スツワアルがひどい勢で頻りに意地の悪いものゝ言ひ方をするので、軽く彼女の腕を突いた。その夜彼女はミニヨンが癪に觸つてならなかつたのだ。「またいやらしい事をしてゐるのよ。」と、彼女は伯爵に言った。「例のジョンキエの時の事を、また繰り返さうと思つてゐるんだわ……。ジョンキエを覚えてゐるでせう、あのローズと一緒にゐてゐる、その上に背の高いロールにも手を出してゐた……。あの時も、ジョンキエにロールを取り持つたのは、ミニヨンのよ。そんなに置いて置いて、それが濟

んだら仲よく腕を組み合つて、ローズのところへ歸つて来るんだもの。まるで浮氣をした亭主の詫をしてやつて、伴れて歸るやうな恰好だわ……。でもね、今度はさうは行かないわ。ナナはどうしたつて、借りた男を返したりなんぞしませんがね。」  
 「ところでミニヨンが、自分の細君の方を睨んでゐるのはどうしたんだい？」とワンドゥルが訊いた。  
 彼が身を屈めると、ローズがフォシユリイにすつかり優しくなつてゐるところが見えた。それでリュシイの立腹の理由がよく分つた。  
 「これは、これは！ 妬いてゐるんだね？」  
 「妬いてゐるんですつて！」とリュシイは怒つて言った。「いゝわ！ ローズが若しレオンをお望みなら、喜んで差し上げますわ。あんな男の一人位ゆ……。一週間にたつた一度、花束を持つて来るだけなんですもの！……。でもかうなのよ！ あなた、女優といふ者は、誰でも皆同じことね。ローズはレオンが書いたナナの記事を読んで、腹が立つて泣いてゐたの、さうよ、ところでね、お分りになる、ローズも同じやうに記事を書いてほしいのだから。それであんなにしてゐるんだわ……。私もレオンなんか追ひ出してやるわ、見て、御覽なさい！」  
 彼女は話をやめて、葡萄酒の壺を二本持つて後ろに立つ

てゐるボーイに言った。  
 「レオヴィルを頂戴。」  
 それから彼女はまた聲を低くして續けた。  
 「私は、何も喋り立てたくはないの。そんなこと好きぢやないわ……。けれどローズはあれでなか／＼得意なんですよのね。もしも私があんな女の夫だつたら、思ひ切り折檻してやりたいわ……。それにしても、あれはきつといゝ結果にはならないことよ。ローズは、あのフォシユリイが、悪い男だつてことをまだ知らないんですもの。あの男は世間で幅をきかせたいもんだから、何時も女に喰ひつくんだけれど……。ほんとにお立派な人達だこと！」  
 ワンドゥルはしきりに彼女を宥めてゐた。ポルドナアヴはローズとリュシイに放つて置かれるので、腹を立て、飢と渴きで父親を死なす氣か、と怒鳴つてゐた。それが座興になつた。食事が長びいて、誰ももう食慾を感じなかつた。皿の中では、伊太利セーブや、アナナス菓子が空しく残つてゐた。そしてスープの出た頃から初まつてゐたシャンパンが、次第に人々を酔はせ興奮させてゐた。少し亂れ初めた。女達は、亂雑な食器の前に頬杖をつき、男達は、椅子を後ろへ下げて息をついてゐた。黒の燕尾服は、明るい色の胸着の間に隠れ、斜めになつた露はな肩が、絹のやうに輝いてゐた。部屋が非常に暑くなつた。蠟燭の光は、食卓



の上を一層黄色にしてゐた。そして時々、雨のやうな縮れ毛の下の黄色い頸筋が動く毎に、その高い頭の上には、髪止めのダイヤモンドが燦爛と輝いた。人々は快活に燃え上つて、眼を輝やかし、白い歯を見え隠れさせて、枝付燭臺の反射がシャンパンの盃の中に閃めいた。高い聲で冗談が交はされ、身振りが大袈裟になり、話しかける聲が騒がしくて答へる者はなくなり、部屋の隅から他の隅へとお互に呼び合ふやうになつた。しかし一番騒がしかったのは、ボーイ達であつた。自分達のレストランの廊下にもあるやうに、互に押し合つて、アイスクリームや食後の菓子配りながら大きな聲を立てゝゐた。

「皆も知つてるだらうが、」とボルドナアヴが叫んだ。一明日も芝居はあるんだぜ……氣をつけて、シャンパンを過ぎすまいぜ！」

「私はね、」とフウカルモンが言つた。「私は、五大洲のありとあらゆる酒を飲んで見ましたよ……。えー！ とても猛烈な奴で、あなた方たらどんな頑丈な人でも、命がないと云ふ代物ですよ……。ところがね、私は平氣なんです。私は酔へないんです。やつて見ましたがね、駄目でしたよ。」彼は非常に冷静な蒼白い顔をして、椅子の背に反り返つて絶えず飲んでゐた。

「いゝから、およしなさいよ。」とルキズ・ヴィオレヌが囁

いた。「もう澤山召し上つてよ……また私が後で、夜明けまで介抱しなければならぬなんて、厭ですわ。」

酔が廻つて、リュシイ・スツワアルの頬が、肺病患者らしく赤くほてつてゐた。ローズ・ミニオンは、眼を潤まして、優しい氣持になつてゐた。タタン・ネネは、食べ過ぎのため頭がぼんやりし、馬鹿のやうになつてたゞ笑つてゐた。プランシユヤカロリヌやシモンヌやマリヤは、みんな一緒になつて、途中で取者と喧嘩したことや、一度田舎へ遊びに行きたいといふ計畫や、戀人を奪つたり奪られたりした複雑な経緯を、てんでに話し合つてゐた。ジョルジュの隣の青年が、レア・ド・オルンに接吻しようとする、彼女は「いやよー 離して頂戴！」と軽く敵いて、ふんと怒つてしまつた。ジョルジュは酔つ拂つて、ナナを眺めては心をときめかしてゐた。彼は、食卓の下を四つん匍ひになつて行つて、小犬のやうに彼女の脚下に躊躇みたいと、幾度も考へては躊躇つてゐた。おとなしくちつとさへしてゐれば、誰の眼にも見えないだらうと思つた。するとダグネはレアに頼まれて彼に靜かにするやうに注意した。ジョルジュはダグネに叱られたやうに感じて、突然非常に悲しくなつた。何もかも興ざめて、少しも面白くなくなつた。しかしダグネは強ひて彼に大きな盃から水を飲ませながら、もし彼がいま女と二人きりになつたならどうするかとからかつた。彼は、三

杯のシャンパンで床に倒れさうなほど酔つ拂つてゐた。

「あのね、ハブナでは、」と、フウカルモンは話を續けた。「或る野生の果實から酒をつくるんです。それはまるで火を飲むやうな奴です……。ところが、私は或る晩、それを一リットル(約五)以上も飲んだが、それでも何ともないので……。また或る時は、コロマンデルの海岸で、土人がそれよりもつと強い奴を——どんな胡椒や硫酸鹽で出来てゐるのかわりませんが——我々に飲ませたものです。それも何ともないんです……。私は酔ふことが出来ないのですよ。」

少し前から、正面に坐つてゐるラ・ファロアズの顔が、彼には氣に入らなかつた。彼は冷笑を交へて、あてこすりを言つてゐた。酒で浮かれたラ・ファロアズは、ガガに擦り寄つて大騒ぎをしてゐたが、ふと或る不安が、その騒ぎを鎮まらせた。ハンカチがなくなつてゐたのだつた。彼はそのハンカチを、酔つ拂ひらしく執拗く探し廻つた。近くの女達に問ひかけたり、身を屈めて、人の足許や、椅子の下を探したりなどしてゐた。そしてガガが、彼を落着かせようとする、

「馬鹿を言ふない。」と呟いた。「あのハンカチの隅には、僕の頭字と紋がついてゐるんだ……。後で厄介なことになるからね。」

「何ですつて、ファラモアズさん、ラマフオアズさん、い

やさ、マフアロアズさん！」とフウカルモンが、青年の名前を幾通りにも變へて呼ぶのを非常に面白がつて叫んだ。

ラ・ファロアズは憤慨して、吃りながら先祖の功名を並べ立て、水差しをフウカルモンの頭へ投げつけるぞと脅かしつけた。ゾンドゥル伯爵は、その中へ入つて、フウカルモンはたゞ冗談を言つたのだと、宥めなければならなかつた。すると皆が笑つた。それが怒り立つてゐるラ・ファロアズの氣を變へさせ、席に着かせた。そして彼の従兄が大きな聲で、料理でも食べてゐると命令すると、彼は子供のやうに従順に食べ初めた。ガガがまた彼を傍へ引き寄せた。彼はたゞ、時々そつと、心配さうな眼付を周圍の人に投げかけて、まだハンカチを探してゐた。

その時フウカルモンは、卓子を隔てたラポルデットに向つて、毒舌を飛ばして喰つてかゝつた。ルキズ・ヴィオレヌは、彼を黙らせようと手を盡して、彼が人をからかつた末は、何時も自分が迷惑しなければならぬのだと言つた。彼はラポルデットを、「奥さん」と言つてからかひ初めた。それが餘程面白く見えて、彼は繰り返して言つた。ラポルデットは靜かに肩を聳やかして、その度にかう言つてゐた。

「よし給へ、君。馬鹿らしいぢやないか。」



た理由からか、彼を侮辱し初めた。彼はもう答へないで、グンドゥル伯爵に向つて言った。「どうか、あなたの友人を黙らせて下さい……腹を立てたくありませんからね。」

彼は二度もちつと我慢をした。方々から彼を賞めそやし、よくも耐へたものだといふ聲が起つた。これはフウカルモンに對する一同の反感の聲であつた。食卓は活氣づいて來て、皆は彼の態度を利口だと云つた。こんなことも然しこの夜の興をそぐ理由にはならなかつた。上品な顔を赤くしてゐたグンドゥルは、彼にラポルドットを紳士として呼びたまへ、と命令するやうに言つた。その他、ミニヨンやシュタイネルやポルドナアヴも膝を乗り出して仲間に入り、彼の聲が消えるほど怒鳴り立てゝゐた。人々の注意を惹かなくなつたナナの傍の老紳士は、たゞ一人、鷹揚な態度を保つて、黙つて疲れたやうに、微笑みながら、その弱々しい眼で、食後のこの場の混亂を眺めてゐた。

「どうだい、こゝで珈琲を出しては？ その方がいゝよ。」とポルドナアヴが言つた。  
ナナは直ぐには答へなかつた。晚餐會の最初から、彼女はそは／＼してゐた。まるで料理店へでも行つたやうに、人が皆ボーイを呼んだり、大聲を上げたりして、氣樂な姿勢で坐つてゐるのが、彼女を當惑させ、ぼんやりさせてしま

つたのだ。彼女自身も主婦の役目を忘れてしまつて、その傍で夢中になつてゐる肥つたシュタイネルにばかり氣を取られてゐた。しかも、シュタイネルの心を喰ふやうな金髪の肉付のいゝ彼女の微笑は、彼の話は聞きながらも、頭の中では彼を掛けようとしてゐた。彼女はシャンパンを飲んで、すつかり薔薇色になり、唇は潤ひ、眼は輝やいてゐた。それでもまだ銀行家は、彼女が頸を廻すときに、僅かにその咽喉が艶めかしく膨らみ、その両肩が人の心を誘ふやうに動くのを見ると、しきりに酒を勧めてゐた。彼女は女の耳の傍の鬚子のやうな皮膚を見て、氣も遠くなるばかりだつた。ナナは酔つてはゐたが、時々招待客のことを忘れまいとして、また自分が人をもてなす道を知つてゐるのを示さうとして、努めて愛嬌を振り撒いてゐた。食事の濟む頃に彼女はすつかり酔つ拂つてしまつた。シャンパンが直ぐに廻つて、彼女は取り亂してしまつた。そして彼女は怒り初めた。女達が彼女の家で、こんなにだらしない態をするのが、穢ならしくてならなかつたのだ。しかも、彼女の面前で！リュシイは眼配せをして、しきりにフウカルモンをラポルドットにけしかけてゐた。ローズや、カロリヌや、また外の女達は、男達の情を振るやうにしてゐた。騒ぎは大きくなつて、もう誰の言葉も聞えず、まるで、ナナの家で食事をするときには、どんなに勝手な眞似をしてもいゝと考

へてゐるやうな有様だつた。そして、誰にもどうなることか、分らなかつた。彼女は酔つ拂つてはゐたが、それでも慎ましくして、きちんと態度を崩さないことを望んでゐた。

「だからさ、」と、またポルドナアヴが言つた。「珈琲を出しよ……その方がいゝとも、わしもこの通りの脚なんだから。」

しかしナナは、荒々しく立ち上つて、ぼんやりしてゐるシュタイネルと老紳士の耳に囁いた。

「仕様がありませんね。無作法な人達を招ぶのはこれで懲り／＼しましたわ。」

そして彼女は、體を動かして食堂の扉口を示し、高い聲で附け加へた。

「珈琲をお上りの方は、あちらへ行つて下さい。」  
人々はナナの立腹には氣づかずに食卓を離れて食堂へ押し寄せた。やがて客間には、取り残されたポルドナアヴ一人が、壁に纏つて注意深く歩きながら、満腹したとなると父親を氣にもかけない不親切な女達を罵つてゐた。彼の後ろでは、料理長が高い聲で指圖をすると、ボーイ達ももう食器を取り片づけてゐた。道具方の合圖で、夢幻劇の舞臺装置が消え去るやうに、ボーイ達は入り亂れて大急ぎで食卓を片づけてゐた。婦人達も紳士達も、珈琲を飲んだ後は、

またこの客間へ歸つて來るに違ひなかつたからである。「まあ、こゝは寒いね。」とガガは食堂へ來ると、軽く身を慄はして言つた。

その部屋の窓は開け放たれてゐた。二つのランプが、珈琲とリキールの出された卓子を照らしてゐた。椅子がなかつたので、人々は立つたまま、珈琲を飲んだ。隣室ではボーイ達の立てる物音が一層激しくなつた。ナナは見えなかつたが、誰もそれを不審に思ふ者はなかつた。彼女がゐなくても何の不自由もなかつたのだ。珈琲を飲むのに、小さな匙が足りなければ、勝手に食器棚の抽斗を引つ掻き廻した。人々は幾組かに別れた。食事の間は隔てられてゐた者がまた一緒になつた。人々は意味ありげな眼付や微笑を交はして、短い言葉で今日の感想を囁き合つた。

「ね、オウギュスト、」と、ローズ・ミニヨンが言つた。「近いうちに一度フオシユリイを、晚餐に呼んでもいゝでせう？」  
懐中時計の鎖をいぢつてゐたミニヨンは、また鹹しい眼付で記者を眺めた。ローズは夢中になつてゐたが、良き管理人としてのミニヨンは、その收支を考慮しなければならなかつた。記事のためならまづ仕方もないが、しかし二度目からは斷らう、と考へてゐた。だが彼は、妻の頭の悪いことも知つてゐたし、また原則として、止むを得ない時には父親らしく彼女の考へを許してやることにしてゐたの



で、愛想よく答へた。

「いゝとも、私も嬉しいよ……では明日いらつしやい、フオッシュリイ君。」

シュタイネルとブランシュとに話しかけてみたリュシイ・スツワアルがこの招待を洩れ聞いて、聲を高くして銀行家に言つた。

「みんなもう夢中なのよ。私の犬ころまで奪つて行つてしまふ人もあるわ……だからさ、あなたが横取りされたつて、私の罪だとは言へないでせう？」

ローズは振り返つて、少しづつ珈琲を毀りながら、ちつとシュタイネルを睨みつけた。その顔は眞蒼になつて、捨てられた心中の怒りが、眼の中に燃えてゐた。彼女は、ミニヨンよりも眼が利いてゐた。ジョンキエにやつた通りのことをもう一度繰り返さうと思ふのは馬鹿げたことで、二度目はきつと成功しないのが見え透いてゐた。それならまた自分分は、フオッシュリイとふざけてやる、かう考へて、彼女は食事の時から夢中になつてゐたのだつた。それがミニヨンの氣に入らないのなら、思ひ知るがいゝのだ。

「喧嘩はしないのかい？」とザンドゥルが傍に来てリュシイ・スツワアルに言つた。

「いゝえ、心配御無用。あちらが圖々しいのなら、さつさと私はくれてやりますもの。」

「まあ、ハンカチ、ハンカチつて、煩さいのね。」と彼女は叫んだ。「どうして私がそんなものを奪るんですか？ お馬鹿さんね。」

「きつと、家へ送つて、私を困らせようと思つてゐるんだらう。」と、彼はまた疑つてゐた。

その時フウカルモンがリキニールを飲みに来た。彼は、女達の間に交つて珈琲を飲んでゐるラポルデットを、まだ嘲けるやうな眼付で眺めてゐた。そしてはしらない言葉で罵つてゐた。何だい、伯樂の息子の癖に。噂では伯爵夫人が他の男とくつついて出来た子だとも言ふぢやないか。収入もないのに、何時もポケットには二十五ルイ入れてゐるやがる。つまらない女共の小使をしてゐて、それでも一緒に寝させて貰へない、馬鹿野郎。

「寢さして貰へないんだ！ 全くだ！」と彼は怒つて繰り返した。「さあ、一つぶん懲つて懲つてやるぞ。」

彼はシャルトルウズの小さな盃を飲み乾して、この俺が、シャルトルウズなんかには、そんなものに、酔つ拂つてたまるものかい、と呟いた。そして梅指の爪で齒を弾いて見せた。彼はラポルデットの方へ歩いて行かうとしたが、突然顔を蒼くして食器棚の前で正體もなく倒れてしまつた。ルキズ・ヴィオレエヌははらくした。彼女はこんな事になるとさつきから幾度も言つてゐたのだつた。そして、かうな

さう言つて、彼女は横柄な態度でフオッシュリイを呼び寄せた。

「あなた、家にあなたのスリッパがあるのよ。明日、あなたの家の門番まで、届けて置いて上げるわ。」

彼は冗談を言ひたさうにしたが、彼女は女王のやうな様子でその傍を離れた。壁に凭れて、ゆつくり櫻菓酒の盃を傾けてゐたクラリスが肩を聳やかした。これは一人の男の取引だつた！ 二人の女が、彼女等の戀人達と同席するや否や、何よりも先に考へるのは、この取引ではないだらうか？

そして、今その取引が済んだのだ。クラリスにしても、あのエクトルの時に、あゝして済まざなかつたら、或はガガの眼を扶け取らないものでもなかつたが、えゝまゝよ、と思つて、相手にしなかつたのだつた。するとラ・ファロアズが通り掛つたので、彼女はからかつてみたくなつて、

「ちよいと、あなたはお年を召したのが好きね！ あんな果物は甘くないことよ。あなたには熟し過ぎたのがいゝのね。」と言つた。

ラ・ファロアズは非常に癢に觸つた。また不安にもなつた。そしてクラリスが自分を馬鹿にしてゐるのを見て、彼女を疑つた。

「悪口はおよしよ。」と彼は呟いた。「君がハンカチを取つたのだらう。私のハンカチを返しておくれよ。」

つて見れば、また明日の朝まで介抱しなければならぬのは彼女なのだ。ガガは彼女に力を添へて、場敷を踏んだ女らしくフウカルモンの様子を眺めてから——いゝえ、心配することなんか少しもないわ、この方は、このまゝ十二時間か精々十五時間も寝かせて置けば、それでいゝのよ、と言つた。フウカルモンは運び去られた。

「おや！ ナナはどこへ行つたんだい？」とザンドゥルが訊いた。

さう言へば、全くナナは食卓を離れてから姿を見せなかつた。人々は彼女のことを今まで忘れてゐたが、氣がついて不審がり初めた。シュタイネルは、少し前から心配になつて、ザンドゥルと同じく姿の見えなくなつた老紳士のこと

を訊ねてゐた。しかし伯爵は、今あの老人を送り出したところだよ、と言つて彼を安心させながら、あれは今晚の費用を喜んで支出した非常な金持の不思議な人物で、その名前だけは暫らく言はないで置かうと答へた。それから、また人々がナナのことを忘れた頃に、ザンドゥルはダグネが扉口から頭を出して、眼配せで自分を呼んでゐるのを見た。それで寢室へ行つて見ると、ナナは腰掛けたまゝ、堅くなつて唇を白くしてゐるし、その傍には、ダグネとジョルジュが途方に暮れた様子で、突つ立つて彼女を見まもつてゐた。



「どうしたんです？」と彼は驚いて訊いた。彼女は答へようとせず、振り向きもしなかつた。彼は重ねて問ひかけた。

「私はね、と、たうとう彼女が答へた。「私は、人に馬鹿にされるのが口惜しくて堪らないんです！」

そして彼女は言ひたいことを出まかせに喋り散らした。全く彼女の言ふ通りだつた。彼女は馬鹿でなかつた。彼女には何も彼も分つてゐたのだ。食事の時に皆が彼女を蔑ろにしてゐた。そして彼女を馬鹿にしてゐることを示すために、あんなに無作法なことを言ひ合つたのだ。彼女とはまるで、比較にもならないほど蓮つ葉な女達の寄り集りだつた。もう二度と相手になんかするものか、こんなひどい目に會はされるのなら！と叫んだ。一人残らずみんな門の外へ摘み出したくて我慢がならなかつたのだ。そして、怒りが咽喉にこみ上げて、彼女の聲は獻獻に變つてしまつた。

「さあ、君も酔つてゐるんだから。」とワンドゥルは親しい言葉で言つた。「氣を落着けなければいけないよ。」

「いゝえ、」と彼女は遮つた。彼女は誰の言ふことにも従ひたくなかつた。

「私は酔つてゐますわ。え、酔つてゐますとも。だけど、皆も私のことを考へて欲しいわ。」

福を壊してしまふ男だ、と彼女は言ふのだつた。彼女は、ミラファが自分に惚れこんでゐると思つて、伯爵を招くことが出来ると思つてゐたのだつた。

「あれは斷じて來ないよ！」とワンドゥルは、思はず笑ひながら言つた。

「どうして？」と彼女は、少し酔が醒めて、眞面目になつて訊ねた。

「あれは、牧師のやうな固い人間で、もし君の指にでも觸れやうものなら、それこそ、翌日は懺悔に行くだらう……悪いことは言はないから、他の人を逃さないやうにしたまへ。」

しばらく彼女は黙つて考へ込んでゐたが、立ち上つて眼を洗ひに行つた。けれども、人々が彼女を食堂へ連れて行くかうとすると、相變らず腹を立て、どうしても行かないと言ひ張つた。ワンドゥルはそれ以上言ひ争はないで、笑ひながら部屋を去つた。そして彼がゐなくなつてしまふと、彼女は矢も楯もたまらず、優しい氣持になつてダグネの腕に身を投げて繰り返した。

「ねえ！ 私の坊や、あんなだけが可愛いのよ……私はあんなが好きなの、さうよ！ あんなが好きでならないの！……いつも一緒に暮せたら、どんなに嬉しいことせう。けれども、女と云ふものは、何といふ不都合せんでせう

ダグネとジョルジュは十五分も前から、どうか食堂へ歸つてくれと頼んでゐたが駄目であつた。彼女は動かうともしないで、お客達は勝手に好き放題をするが、自分はおんまり馬鹿らしくて、行けないと言つてゐた。行くものか、金輪際行くものか！ そんなに伴れて行きたければ、私の體を一寸刻みにして、運んで行くが、いゝよ。

「でも、私がうっかりしたのがいけないかつたんだわ」と、彼女は言つた。「きつとあのローズの駱駝だわ、ちやんとこんなことを仕組んだ張本人は、そして、今晚、私が待つてゐた立派な夫人達を來させないやうにしたのも、あの女よ。」

彼女はロベール夫人のことを言つてゐるのだつた。ワンドゥルはロベール夫人が確かに自分で斷つたのだと言つた。彼はこんな場合に、女と云ふものはどう扱ふべきかをよく知つてゐて、それには慣れてゐたので、だまつて相手の言葉を聽いてやつたり、眞面目な顔で、理窟を並べたりした。だが、彼女を椅子から立ち上らせ、連れて行かうとして両手をとると、彼女はそれを振りほどいて、一層腹を立てるのだつた。そしてまた、フォシュリイがミラファ伯爵を來させないやうにしたと言つて、誰の言ふことも聽かうとしなかつた。フォシュリイは、ほんとに蛇のやうな奴で、嫉妬焼きで、女のことと言へば夢中になつて他人の幸

ねー

それから彼女は、二人が抱き合つてゐるのを見て顔を眞赤にしてゐるジョルジュを眺めると、また彼をも同じやうに抱擁して、私の可愛い坊や、ね、坊やの癖に、嫉妬を焼くもんぢやありません、と言つた。彼女はボウルとジョルジュがいつも仲よくすることを望んでゐた。こんなにして、三人がお互に皆愛し合つてゐるのを知つてゐることは、非常に嬉しいことだから、するとその時、變な音が話を妨げた。

誰かが部屋の中で駢をかいてゐた。探して見ると、ポルドナアヴがゐた。きつと珈琲を飲んでから、いゝ場所だと思つてこゝへ入り込んでゐたのだつた。頭を寢臺の縁に乗せて、二脚の椅子の上に足を伸して眠つてゐた。ナナは、彼が口を開いて、駢の度に鼻を動かしてゐるのが可笑しくて腹を抱へて笑つた。彼女はダグネとジョルジュを伴れて、部屋を出て食堂を横切り、益々高い聲で笑ひながら客間に入つて行つた。

「まあ！ とても可笑しいのよ。來て御覽なさい。」彼女は殆んどローズの腕に身を投げかけて言つた。

女達は皆彼女に従はなければならなかつた。彼女は優しく皆の手をとつて、力を籠めて引き寄せた。その無邪氣な快活さに誘はれて、誰も皆打解けて笑つてゐた。女達の行列は入つて行つて、傲然と反り返つて寝てゐるポルドナアヴ



のまはりに暫らく息を殺して立つてゐたが、また列を組んで歸つて来た。そしてどつと笑つた。誰か合圖をみると、みんな静かになつて、また遠くの方からポルドナアヴの舞が聞えて来た。

もう四時に近かつた。食堂ではカルタの卓子を持ち出して、ヴンドゥルとシュタイネルとミニヨンとラポルデットがそれを圍んでゐた。彼等の後ろに、リュシイとカロリイヌが立つて、賭をしてゐた。ブランシュは眠いのと、今夜の會があまり面白くなかつたので、氣を腐らして、五分間毎にヴンドゥルに直ぐに歸らないかと尋ねてゐた。客間ではダンスをやらうといふことになつた。ダグネは、ナナ流に言ふと「お氣樂」にピアノに向つてゐた。ナナは彈き手になるのを望まなかつた。そして彼女の坊やが、求められるまゝにワルツやポルカを弾いてゐた。しかしダンスも退屈だつた。婦人達は安樂椅子にぐつたり坐り込んで話してゐた。と突然、大騒ぎが起つた。十一人の青年が列を組んで控室へやつて来て、更に高い聲で笑ひながら、客間の入口へ押し寄せて来たのである。彼等は内務大臣の舞踏會から出て来た白い襟飾と夜會服のまゝで、胸には何かの勳章をつけてゐた。ナナはこの騒がしい來客に腹を立て、まだ廊下に残つてゐたボーイ達を呼んで、彼等を追ひ出すやうに命じた。罵り聲と押し合ひが初まつた。しばらくは大亂闘になるか

と思はれたが、その時金髪の病身らしい小柄な男が執拗く繰り返して言つた。「ねえナナ、何時かの晩、ピーターズの家の大い大きな客間で……憶ひ出したでせう！ あなたが我々を招待してくれたぢやありませんか。」

何時かの晩、ピーターズの家だつて？ しかし彼女には少しも思ひ出せなかつた。一體何時の晩だらう？ すると小柄な金髪の男が、その日が水曜日だつたと言つたので、彼女はピーターズの家で晩餐會を開いたその水曜日の事をはつきり思ひ出す事が出来た。けれどもそのとき彼女が彼等を一人も招待しなかつたことは確かで、疑ひなかつた。「しかし、もしあなたが招待したのなら、」ラポルデットもまた少し様子が變だと思ひながら囁いた。「多分酔つてゐるたのでせう。」

するとナナは笑ひ出した。さうかも知れないが、それ以上のことは分らなかつた。どうせ皆がそこまで来てゐるのだから、入れてもいゝだらう。皆は静かになり、新來の客は、部屋の中に知つた顔を見出した。かうしてこの騒ぎも結局握手に終つた。病身らしい金髪の小柄な男は、佛蘭西で最も有名な家名の一つを持つてゐた。そして他の者も皆それに次ぐ名門の出であるらしく思はれた。しつきりなしに扉が開いて、白い手袋の正裝した紳士が現はれた。それは正

若い頃の話をした。

「まあ聞いて下さいな！」と突然小さなマリア・ブロンが叫んだ。「私の家の前に、とても素敵なお金持の露西亞人の紳士があるの。ところが、昨日私に果物を一籠くれたの、え、果物の籠なのよ！ とても大きな梨や、こんなに大きな葡萄や、この頃の時候には非常に珍らしいものなの……しかもその中に干法の小切手が六枚入つてるのよ……露西亞人が入れたんだわ……勿論、私みんな笑つ返してやつたわ。でも、あの果物だけは今でも惜しくてならないの！」

女達は唇をすぼめて顔を見合せた。こんな小娘の癖に、マリア・ブロンは、なんて厚顔しいんだらう、まあこんな娘に、そんなことがあつてたまるものか！ と思つた。彼女達は互に輕蔑し合つてゐた。殊にリュシイに對しては、例の三人の王子のことがあるので、怒りに近いまで嫉妬を感じてゐた。リュシイが毎朝馬に乗つてプウロオニユの森を散歩して、それで賣り出してからは、皆が氣狂ひのやうになつて馬に乗つた。

夜が白み初めた。ナナは望みもなくなつて、扉口の方へ眼をやつた。皆がぐつたり疲れてゐた。ローズ・ミニヨンはパントフールを望まれたが、歌はうともせず、安樂椅子の上で圓く身を屈めてミニヨンを待ちながら、フォシュリイと低い聲で話してゐた。ミニヨンはもうヴンドゥルから五十

しく内務大臣の舞踏會から歸つた人々であつた。フォシュリイは冗談に、内務大臣はお見えになりませんか、と尋ねた。するとナナは腹を立て、大臣なら、私なんかよりももつとつまらない人のところへお見えになるんだ、と答へた。彼女は口にごそ出さなかつたが、この紳士達の列に交つて、ミリアフアが入つて來はしないかと、一縷の望みをかけてゐた。氣紛れに來ないものでもないと思はれた。ローズと絶えず話をしながら、彼女は扉口に氣を惹かれてゐた。

五時が鳴つた。もう誰も踊らなかつた。カルタだけはまだ續いてゐた。ラポルデットはその仲間から外れてゐた。女達も客間に歸つてゐた。夜更しには付きもの、だらけた空氣が、焦げた芯が火屋を赤くしてゐたランプの下で、その場を重苦しくしてゐた。女達は、とりとめもない淋しさの込み上げて來るその時刻に、自分々々の身の上話を語りたくてならなかつた。ブランシュ・ド・シヴリイは、將軍だつた祖父のことを話した。クラリスは、伯父の家へ野猪狩りに來た一人の公爵が、彼女を口説いたなど、でたらめをこね上げてゐた。そして二人は、互に後向きになると、肩を聳やかして、神様だつてこんな出鱈目な作り話を仰しやることは出来るものか、と思つた。リュシイ・スツワアルはぼつり／＼昔話を初めた。彼女は嬉しさうにその頃北停車場の塗土工だつた父が、日曜日には林檎パイを買つてくれた、



ルイばかり捲き上げてみた。眞面目な顔をして、立派に身なりを整へた一人の肥つた紳士が、アルザスの方言で、「アラハムの犠牲」(アラハムはイザアクの父でヘブライ人の)に就いて話してゐた。神が誓ひを垂れ給うた時にアブラハムは、「我が名をして御心になはせ給へ」と言つた。そしてイザアクは常に「然り、父よ」とそれに和したのだつた。しかしその話は誰にも分らなかつた。そんなつまらない話は馬鹿げたものに思はれた。人々は皆快活に、我を忘れてこの夜を過したかつたのだが、どうしていゝのか分らなかつた。ラボルデットは、ラ・フロアアズが、例のハンカチを頸にでも巻いてゐるはしないかと思つて女達のまはりを一人づゝ探し歩いてゐるのを見て、彼にその女の名を教へてやらうかと、ちよつと考へてゐた。若い連中は食器棚にシャンパンが残つてゐたので、また、それを飲み初めた。彼等は喚き合つたり、ふざけ合つたりしてゐたが、前後もなく泣き出したいやうな酩酊の後の陰鬱さが、客間を浸して來るのをどうすることも出来なかつた。その時、例の小柄な、佛蘭西で最も有名な家門の出である金髪紳士が、何も面白いことがないのうんざりして、考へ抜いた揚句にやつと或ることを思ひついた。彼はシャンパンの壺を携けて行つて、それをピアノの上に注いでしまつた。他の者は皆腹を抱へて笑つた。

「まあ」とそれを見たタタン・ネネが驚いて訊ねた。「どうしてピアノにシャンパンをかけるの？」  
 「どうしてだつて！ あなたは知らないんですか？」と、ラボルデットが落着いて答へた。「ピアノにシャンパンほどいいものがないんですよ。あゝやるといゝ音が出るんです。」  
 「さう」と、タタン・ネネはその言葉をほんとして囁いた。  
 そして皆がどつと笑つたので、彼女は腹を立てた。この女はどうしてかう物事を少しも知らないのだらう！ 皆が何時も彼女をからかつた。  
 それからは何も彼も滅茶苦茶になつた。この夜の會合が、見苦しい終局に陥らうとしてゐた。一隅ではマリヤ・ブロンがレア・ド・オルンを、貧乏つたらしい男と一緒に寝たと非難して、果は掴み合ひを初めてゐた。それから二人はお互の容貌を罵り合ひ、亂暴な言葉を言ひ合つた。容貌の醜いリュシイは、顔立なんか何になるもんでない、それよりも嗜みがなければならぬ、と言つて二人を黙らせた。遠くの方では安樂椅子の上に、大使館附の役人がシモンヌの腰に腕を廻して、その頸筋に接吻しようと思つてゐた。しかしシモンヌは、疲れて氣が鬱いでゐたので、その度に「煩さい人ね！」と押しのけて、大きな扇子で顔を軽く敲いて

みた。女達は皆、男達が傍へ來るのを避けてゐた。彼女等を淫賣婦だとも思つてゐるのだらうか？ しかし、ガガはまたラ・フロアアズを捉へ、膝の上へ乗せんばかりに傍へ引き寄せてゐた。クラリスは二人の紳士の間に身を隠して、まるで擦られたやうにきやつ／＼と笑つてゐた。ピアノの周圍では、氣狂ひじみたやうにまだ悪戯が續いてゐた。それが、それはむしろ罪のない、愛す可きものだつた。  
 「さあ！ 爺さん、一杯飲み給へ……畜生！ 咽喉が渴いてるんだい、このピアノは……さあこゝにもあつたよ。零さないやうに、氣をつけ給へ！」  
 ナナは後向きになつて、もうそれを見ようとしなかつた。彼女は傍に坐つてゐる肥つたシュタイネルへ、宗旨變へすること心に決めた。實際、それは出席を斷つたミユアアの罪であつた。輕くて、肌着のやうに皺になつた白い薄絹の着物を着て、酔ひ覺めの顔を着くした彼女は、善良な娘のやうな静かな様子で、眼を曇らせてゐた。頭と胴着に挿した薔薇の花は、花びらが落ちて、薔ばかりが残つてゐた。シュタイネルはナナのスカートに手をやつてゐたが、ジョルジュのさして置いた留め針に觸れたので、ぱつと手を引いた。血が粒になつて飛んだ。その一滴が彼女の着物に落ちて斑點になつた。  
 「さあ、これでサインも済んだわ。」とナナが眞面目に言つ

た。  
 戸外は明るくなつた。窓から入つて來る薄明りが、たまらないほど悲しく見えた。人々は不快さうな機嫌の悪い顔をして、歸り初めた。カロリヌ・エッケは、つまらない一夜を過したのに氣を腐らして、もうこんな面白くないところにもたたくない人は、さつさと歸らうぢやありませんか、と言ひ出した。ローズは迷惑な捲添へを食つたやうに、不機嫌な顔をしてゐた。こんな女達の集りはいつもかうなるのだつた。彼女等は禮儀を知らなかつたので、初めから無作法でやり切れなかつた。ザンドヴルの機嫌をとつてゐるミニオンは、後見すべきシュタイネルの方には氣もかけずに、もう一度フォシュリイを明日の晩餐に招いてから、ローズと一緒に出て行つてしまつた。リュシイは、フォシュリイと一緒に歸らうと言ふのを斷つて、大きな聲で、あの田舎女傭と一緒に歸り、と言つた。するとローズがまた歸つて來て、「汚ならしい淫賣！」と呟いてやり返した。ミニオンは女達の喧嘩には經驗のある男のやうな態度で、父親らしく仲へ入つて、二人にその争ひを止めさせて、妻を戸外へ連れ出した。その後ろから、リュシイは一人で威張つて階段を下りて行つた。ずつと前に二人の紳士に件られて何處かへ行つてしまつたクラリスを呼びながら、まるで子供のやうに獻獻いてゐるラ・フロアアズを、病人のやうに劬つ



て連れ歸らなければならなかつたのは、ガガであつた。シモンヌの姿も見えなくなつてゐた。後にはタタンとレアとマリヤだけが残つてゐて、ラポルデットが喜んで彼女等を送り届けることになつてゐた。

「私はちつとも眠くなんかないのよ！」とナナは繰り返した。「何かして遊びませうよ。」

彼女は窓を通して空を眺めてゐた。どんよりと曇つた空には黒い雲が走つてゐた。六時だつた。オースマン街を隔てた正面の通りには、夜明けの中になほ眠つてゐる家々が、濡れた屋根をくつきりと浮ばせてゐた。人影のない路上を、掃除人夫の木靴の音が過ぎて行つた。そして、この胸に沈みる巴里の眼覺めを前にして、彼女は何かしら若い娘のやうに田舎の村や牧歌や優しい純潔なものを憧憬れ求める切ない氣持になつてゐた。

「ねえ、」と彼女はまたシュタイネルに向つて言つた。「ブワロオニの森へ連れて行つて下さらない？ そして牛乳を飲みませうよ。」

彼女は子供のやうにはしやいで手を拍つた。だが内心ではもつと他のことを考へて悲しい氣持になつた。しかし、無論同意してくれるにきまつてゐる銀行家の答へは待たずに、走つて行つて外套を肩に羽織つた。客間には最早シュタイネルと若い連中の一組としか残つてゐなかつた。青年達

は、盃の底の最後の一滴までピアノに注いでしまつて、もろ出かける相談をしてゐた。すると彼等の一人が、臺所に残つてゐた最後の一本を手を携へて、意氣揚々と歸つて來た。「待ち給へ！ 待ち給へ！」と彼が叫んだ。「シャルトルウズが一本あつたよ！……さあ、そいつがシャルトルウズを欲しがつてゐるんだ。酔ひ覺ましにね……。そして、今度こそは歸らう、何しろ馬鹿げてゐるからね。」

ナナは化粧室へ入ると、椅子の上に眠りこけてゐるゾエを起きなければならなかつた。瓦斯がまだ燃えてゐた。ゾエは身慄ひをして、彼女に帽子や外套を着せた。

「結局、お前の言つてゐた通りにしたわ。」とナナはうまく運んだのに氣をよくして、何も彼も打明けて親しく言葉をかけた。「全く、お前の言ふ通りだわ。銀行家だつて同じことだわね。」

女中はまだ不機嫌な顔をし、頭もぼんやりしてゐた。そして、奥様は、最初の晩からさうなさらなければならぬのに決つてゐましたわ、と不平を言つた。それからナナの後について寢室に入つて來て、この二人をどうすればいいでせうかと彼女に尋ねた。ポルドナアウはまだ黙をかいいてゐた。そつと逃げ込んで、枕に頭を埋めてゐたジュールジュは、たうとうそこで天使のやうに微かな寢息をたて、眠つてゐた。ナナは寢かせて置くやうに、と答へた。するとその時

ダグネの入つて來るのを見て、彼女はまた懐しい氣持になつた。ダグネは臺所から彼女の様子を見てゐたのだつた。彼は非常に悲しうな様子をしてゐた。

「さあ坊や、そんな顔をするんぢやありませんよ。」と言つて彼女は彼を兩腕に抱いて、あらん限りの優しさをこめて接吻した。「何も變つたことはありはしないのよ。ね、知つてゐるでせう、私が一番好きなのは、いつも私の坊やなの……さうでせう？ そんなことは決つてゐるわ、……ほんとに、私の心は變つたりなんぞしないことよ……明日またいらつしやいね。時間を打合はせて置ませうよ……さあ早く、あんたが私を愛してくれるのと同じ位強く抱いて頂戴……もつと、もつと強く、もつと強く！」

そして彼女は外に出てシュタイネルの傍へ行つた。牛乳を飲むことを思ふと嬉しくてならなかつた。がらんとした部屋にはブンドゥル伯爵だけが、『アブラハムの犠牲』を話してゐた身なりの立派な紳士と向ひ合つて、カルタの卓子に獅噛みついてゐた。彼等は、どこにゐるのかといふことも、もう夜の明けたことも知らないやうであつた。ブランシュは安樂椅子に横になつて、眠らうとしてゐた。

「まあ！ ブランシュがゐたわ！」とナナは叫んだ。「一緒に牛乳を飲みに行きませうよ、ね……。いらつしやいよ、ブンドゥルさんはどこへも行かないで、此處に待つてらつ

しやるから。」

ブランシュは懶るさうに身を起した。すると充血した銀行家の顔は、この肥つた女を伴れて行つては、邪魔をされはしまいかと不満に思つて蒼ざめた。しかしもう二人は彼を捉まへて、かう繰り返してゐた。

「ね、あなた、牛乳を搾るところを見たいわ。」

五

ブリエテ座では『ブロード・ヴェニス』の第三十四回目の上演をやつてゐた。その第一幕が濟んだところであつた。樂屋では洗濯女に扮したシモンヌが、廊下に向つて斜めに開け放された二つの扉の間の臺に置いてある鏡の前に立つてゐた。たゞ一人で、彼女は念入りに眼の下を指でこすつて化粧を直してゐた。鏡の兩側の瓦斯管がそのはげしい焰で彼女を熱くしてゐた。

「お見えになつたかい？」と訊きながら、ブリュリエールが、スキスの將軍の服装で、長い劍と大きな長靴と途方もない羽冠を着けて入つて來た。

「誰がさ？」シモンヌは手を休めずに、唇の紅の具合を見ようとして鏡の中で笑ひながら言つた。

「殿下だよ。」

「私知らないわ。今こゝへ來たばかりですもの……でもお



見えになるでせう。毎日いらつしやるんだからー」  
 ブリュエールは臺に向き合つてコータスの火の燃えて  
 ゐる燧燼の方へ行つた。そこにはまた二つの瓦斯管から大  
 きな燧が燃えてゐた。彼は眼を上げて、左右にある時計と  
 晴雨計を眺めた。それには帝政時代式の金のスファンクスが  
 ついてゐた。それから彼は、四代の俳優に使はれて緑の天鷲  
 絨が黄色くなつた大きな脇掛椅子に倚りかゝつて手足を伸  
 した。彼は其處で眼をぼんやり見開いたまゝ、舞臺の出を  
 待つ間の俳優に有り勝ちな、疲れたやうな、何も彼も諦め  
 た態度でぢつと動かずにゐた。

今度は老優ボスタが足を引きずつて咳をしながら、古い  
 黄色の取者外套を着て入つて来た。その片袖が肩から滑り  
 落ちて、ダゴベル王の金の刺繍をした緋の胴着を見せてゐ  
 た。そしてすぐにピアノの上に王冠を置いてから、一言も  
 口を利かずに不機嫌な顔をして、しかし正直者らしい様子  
 で歩き廻つてゐた。酒精中毒の兆候で、両手は顫へてゐた  
 が、白くて長い頬髯が酒にほつた顔に氣高い様子を與へ  
 てゐた。それからその静かな中へ驟雨が来て、庭に向つた  
 四角な大きな窓の硝子を打つと、彼は不快さうな身振りを  
 して、

「なんていやな天氣だらうー」と呟いた。  
 シモンヌもブリュエールも動かかなかつた。四五枚の風

景畫や俳優ヴェルネの肖像畫が、瓦斯の熱で黄色くなつて  
 ゐた。柱には、このアリエテ座の古い名譽の一つである俳  
 優ポティエの胸像が、空ろな眼を見開いてゐた。その時突  
 然高い聲が聞えた。それはフォンタンだつた。二幕目の衣  
 裳をつけて、洒落た青年に扮し、黄色づくめの身なりをし、  
 黄色の手袋をはめてゐた。

「おいー」と彼は身振りをして叫んだ。「みんな知らない  
 のかい？ 今日俺の祝名節(誕生)なんだぜ。」

「あらー」とシモンヌは笑ひながら、彼の大きな鼻と喜劇  
 的な大きく裂けた口に惹きつけられるやうに近寄つて来て  
 訊ねた。「あんたはアキルつてのね？」

「さうだよー……だから俺は二幕目の後で、ブロン夫人に  
 シャンパンを持つて来いつて誰かに言はせて置くよ。」

少し前から遠くで電鈴が鳴つてゐた。長い響が消えては  
 また起つた。それが鳴り止むと、呼び聲が階段を登り降り  
 して、また廊下の遠くに消えていつた。「二幕目の開幕！

……二幕目の開幕！……」といふその呼び聲が近づいて來  
 た。血色の悪い小さな男が、樂屋の扉口で、弱い聲を力一

ばい張り上げて、「二幕目の開幕！」と叫んで行つた。

「素敵だねー シャンパンだつてー いーねー」と、ブリュ  
 エールはまるで呼び聲には氣がつかないやうな風と言  
 つた。

「俺だつたらシャンパンはカフェから取るね。」と老ボスタ  
 が緑の天鷲絨の椅子に腰掛けて、頭を壁に凭せたまゝ静か  
 に言つた。

シモンヌは、ブロン夫人の店が安くていゝ、と言つた。  
 彼女は手を拍つて、嬉しさうに、山羊のやうな顔の、眼と  
 鼻と口を絶えず動かして笑はせてゐるフォンタンを見つめ  
 た。

「おー！ フォンタン！」と彼女は呟いた。「この人に限る  
 わー！ もうこの人よりましな人はないわー！」

樂屋の二つの扉口は、舞臺裏に通ずる廊下に向つて開け  
 放されてゐた。隠れた處にいた瓦斯燈にはつきりと照ら  
 し出されてゐる黄色い壁の上を、扮装した男達の姿や、シ  
 ールに裹まれた女優の半裸體の影や、「ポール・ノアル」の  
 舞踏會の假裝者や、二幕目の補役者達が残らず次々に急い  
 で通り過ぎた。そして廊下の端の、舞臺へ下りる五段にな  
 つた木の階段を踏む足音が聞えて來た。背の高いクラリス  
 が走り過ぎると、シモンヌが彼女を呼びとめた。彼女は直  
 ぐに歸つて來ると言つた。彼女は實際直ぐに、薄い肌着と  
 イリイの衣裳の下で顫へながら歸つて來た。

「おー、寒いー！ それに私は樂屋に外套を置いて來たの  
 よー！」と彼女は言つた。

そして燧燼の前に立つて脚を温めた。その肉襦袢には燧

のために美しい薔薇色の波形がついてゐた。

「殿下がお見えになつてよ。」

「あー、さうー」とほかの者達は好奇心をもつて叫んだ。  
 「で、私は見たかつたから走つて行つたの……。右の翼席

の一番前の、木曜の日と同じ場所らつしやるわ。ね？  
 この週になつて三度目でせう。ナナと出來たのかしら……  
 ……もうこれからはきつとお見えにならないと思ふわ。」

シモンヌが口を開いた。けれどもまた樂屋の直ぐ前で呼  
 び聲が起つて、彼女の言葉は消されてしまつた。呼び出し  
 係は鋭い聲で力一ばい廊下に怒鳴つてゐた。「開幕！」

「三度だから、もうお安くないわね、」とシモンヌは呼び聲  
 が止むと言つた。「ねえ、殿下はナナの所へはお出でになら  
 ないで、御自分の方へ來させたいのですつて。大した御散  
 財だと思えるわ。」

「さうさー！ どうしたつて他所へ出かけてはねー！」とブリュ  
 エールは皮肉らしく呟いて立ち上ると、棧敷からやんや

と言はれるあの美しい眼付で鏡を見た。

「開幕！ 開幕！」と呼ぶ呼び出し係の聲が繰り返されて、  
 廊下から三階四階と走つて消えて行つた。

フォンタンは、殿下とナナの間が最初の日にどんな風に  
 進行したかを知つてゐて、彼にすり寄つて來る二人の女

にその話を聞かせながら、詳しく語るために身を屈める毎



に、女達は大きな聲を立て、笑つてゐた。老ボスタは一向に平氣で、少しも體を動かさなかつた。こんな女達には彼は興味がなかつた。彼は椅子の上に香氣さうに圓くなつてゐる大きな褐色の猫を撫でゝゐた。そして終ひにはそれを腕の間に抱きあげて、毛祿した優しい王様のやうに人の好い様子をしてゐた。猫は背を圓くして、彼の長い白い頬髯を嗅いでゐたが、その膠の臭ひが厭だと見えて、また椅子に戻つて圓くなつて眠つてしまつた。ボスタはちつと眞面目に考へ込んでゐるやうな風をしてゐた。

「兎に角、俺だつたらシャンパンはカフェから取るぜ。その方がいゝから。」と、彼は出しぬけに、話を終つたフォンタに言つた。

「開幕！」と呼び出し係の長い聲が裂くやうに聞えた。

「開幕！」

暫らくその呼び聲が聞えてゐた。それから急いで走り去る足音が聞えた。そして突然廊下の扉が開けられて、さつと音楽や遠いざわめきが聞えて來たが、また緩衝装置のある扉が閉められる静かな音が聞えた。

観衆が残らず拍手してゐるかと思はれる場内からは、百里も離れた所のやうに、また重い静かさがこの女優達の樂屋を支配した。シモンヌとクラリスは、そこで相變らずナナ

の事を話してゐた。ナナときたら、決して急ぐといふ事はなかつた！昨日の晩も彼女は登場に遅れた。その時背の高い女が扉口から覗き込んだので、一同は黙つてしまつた。その女は、間違つたと分るとまた廊下の奥の方へ歩いて行つた。それは帽子とヴェールをつけて訪問に行く貴婦人のやうに装つたサタンであつた。ふん、淫賣さ！とカフェ・グリエテで一年も前から彼女を見た事のあるブリュリエールが言つた。するとシモンヌは、ナナが古い學校友達のサタンに會つてからひどく好きになり、彼女を舞臺に出させようと、どんなにボルドナアヴを手古摺らせてゐるかを話した。

「やあ！今晚！」と言つてフォンタンは、入つて來たフォンタとミニオンに握手をした。

老ボスタは二人の女優がミニオンに接吻するのを見て、指を開いて呆れた様子をした。

「大入りかい、今晚は？」とフォンタが訊いた。

「え、素敵なものだ！」とブリュリエールは答へた。「どんなにみんなが有頂天になつてゐるか、まあ見て御覽よ。」

「さあもう皆出る時刻だらう。」とミニオンが促した。

ミニオンが言ふ通り時間は迫つてゐた。彼等は第四場から出るのだつた。ボスタ一人が、芝居の老巧者の本能で彼に臺詞渡しが來たのを感じて立ち上つた。丁度その時呼び出し係が扉口に現はれた。

「ボスタさん！シモンヌさん！」と呼んだ。

シモンヌは手早く肩に毛皮外套を纏つて部屋を出た。ボスタはゆつくりと冠をピアノの上から取つて頭に被り、マントの裾を引きずりながら、足もとをよろ／＼させて、何か邪魔でもされたやうに不機嫌になつて、呟きながら出て行つた。

「昨日の記事は非常に有難うございましたが、」と、フォンタンはフォシュリイに向つて言つた。「けれども何故、俳優が虚榮心に富んでゐるなど、仰しやるのですか？」

「さうだよ君、君は何故あんなことを言つたんだい？」と言つて、ミニオンはその大きな両手で記者の弱々しい兩肩を敲いたので、記者は體を屈めた。

ブリュリエールとクラリスは、笑ひたいのを無理に抑へてゐた。少し前から劇場の者は皆、舞臺裏で演ぜられる喜劇を面白がつて見てゐた。といふのは、ミニオンが妻の浮氣に腹を立て、また相手のフォシュリイが彼女のために精々いゝ加減な新聞記事を書いてくれる以外には何の金目にもならないのに業を煮やして、方情を押しつけがましく表面に見せながら復讐してやらうと思ひついたからだつた。彼は毎晩舞臺裏でフォシュリイに逢ふ毎に、如何にも懐しさの餘りするやうにして、相手を小突きまはすのであつた。フォシュリイはこの大男とは比較にならぬ程弱いので、困り切つた様

子をしながらも笑つて、ローズの夫と不和になつてはならないと、甘んじてその腕力を受けなければならなかつた。

「君！それはフォンタンを侮辱するものだよ。」と言ひながら、ミニオンはその喜劇を續けた。「氣をつけろよ！一、二の、三と、今度は胸だ！」

彼は身構へをして相手の胸を手荒く突いたので、青年はしばらく眞蒼になつて物も言へなくなつてしまつた。が、その時クラリスは人々に目で合圖をして、樂屋の入口に立つてゐるローズ・ミニオンを指した。ローズはその場の有様を見てしまつた。彼女は夫のゐるのも眼に入らないやうに、つか／＼と記者の方へ進んで行き、腕を露はにした子供の扮装のまゝで延び上つて、あとけない甘えた顔付で額を差し出した。

「今晚は、赤ちやん。」フォシュリイは親しげにかう言つて、彼女を接吻した。

それは彼等の損害賠償であつた。ミニオンはその接吻を氣に留めてゐないやうに見えた。劇場では誰でも彼の妻を拘擁した。併し彼は記者をそつと一瞥して微笑を浮べた。ローズのこの傍若無人な振舞に對して、記者はまたきつと高い値を支拂ふことだらう。

廊下の緩衝装置の扉が開いて、嵐のやうな喝采の聲が樂屋まで聞えて來たが、また直ぐ閉められた。シモンヌが自



分の役を済ませて歸つて来た。

「皆さん！ ボスタ爺さんが大當りよ！」と彼女は叫んだ。「殿下はお腹を燃つて笑つてゐらしたわ。まるで喝采係のやうに皆と一緒に手を拍いてゐらつしやるの……。でも、ちよいと、あの翼席の殿下の傍にゐる背の高い紳士をあなたは知つてゐて？ 立派な頬髯のある、大層厳めしい様子をした立派な方よ。」

「あれやミユッファ伯爵だよ。」と、フォシュリイが答へた。

「昨日皇后陛下の宮殿で、殿下が今晚の晩餐會に伯爵をお招きになつたつて聞いたがね……間もなく伯爵の身持も崩れることだらうよ。」

「あらさう！ ミユッファ伯爵なの。あの方の舅さんなら知つてるわ、ねえオウギュスト！」とローズがミニヨンに言つた。「私がいつかお屋敷へ歌ひに行つたことのあるシユアール侯爵なら、あんたも知つてゐるわね？……あの侯爵も来てゐらつしやるのよ。棧敷の奥の方に見えてゐたわ。年寄りの方でね……」

大きな羽冠を戴いたブリュリエールは、振り返つて彼女を呼んだ。

「さあ！ ローズ行かうよ！」

彼女は話を途中にして、その後には續いた。その時丁度劇場の門番のブロン夫人が大きな花束を抱へて扉を通りかゝ

つた。シモンヌは冗談に、自分のところへ来たのかと問つて見たが、ブロン夫人はそれに返事もしないで、廊下の端のナナの樂屋を顔で示した。ナナは、全く花で埋まつてゐた！ ブロン夫人はそれから歸つて来て、クラリスに一通の手紙を渡した。クラリスはちえつと呟いた。またあの煩さいラ・ファアアズが！ 彼は彼女につき纏つて離れようとしないのだ！ そしてクラリスは、彼がブロン夫人の部屋で待つてゐると聞くと、

「この幕の後で下りて行くと言つとくれ……下りて行つて横面を引つぱたいてやるつて。」と叫んだ。

フォンタンは急ぎこんで繰り返した。

「ブロンさん……ねえ、ブロンさん……幕間にシャンパンを半ダース持つて来るんだぜ。」

その時また呼び出し係が現はれて、息を切つて、歌ふやうな聲で叫んだ。

「總出ですよ！……早くおしよ、フォンタンさん！ 大急ぎ！ 大急ぎ！」

「よし／＼、行くよ、バリヨ爺さん。」とフォンタンはあわてゝ答へた。

そしてブロン夫人の後を追つかけて、また繰り返した。

「いゝかい？ 分つたかい、シャンパンを六本だぜ、幕間に、樂屋へ……俺の祝名節なんだ、金は俺が拂ふよ……」

シモンヌとクラリスは衣擦れの音をたて、出て行つた。

一同が雪崩れて行つてしまふと、その後には廊下の扉が靜かに閉つて、森とした樂屋の中に、また窓を打つ驟雨が聞えた。三十年この方呼び出し係をやつてゐる小柄な色の蒼白いバリヨは、親しげにミニヨンの傍へ行つて、煙草入れを開けて差出した。この煙草のやりとりが、絶えず樂屋の階段や廊下を駈け廻つてゐる彼に一瞬の骨休みを與へるのであつた。しかし彼の所謂ナナ夫人がまだ残つてゐた。そしてナナは自分の思ひ通りにしかなかつた。罰金なんかは氣にも留めないで、登場に遅れようと思へば遅れて出た。バリヨが突然驚いて囁いた。

「おや！ 支度が済んで出て来たよ……殿下がお見えになつたのを知つてゐるんだな。」

實際、腕と顔を白く塗り、眼の下を薔薇色に彩つて、女漁夫の衣裳をつけたナナが、廊下へ出て来たのである。彼女はわざ／＼入つては來なかつたが、ミニヨンとフォシュリイに簡単に會釋した。

「今晚は。」

ミニヨンだけがナナの差し出した手に握手をした。そしてナナは、鷹揚に歩いて行つた。直ぐその後を衣裳方が離れずにつき纏つて、彼女のスカートの襞を屈んで直してゐた。そして衣裳方の後ろには、サタンが努めて元氣を装つ

てはゐるが、實はもううんざりして従いて行つた。

「シユタイネルは？」と突然ミニヨンが訊くと、

「シユタイネルさんは昨日ロアレへお發ちになりました。」とバリヨは話に戻つて答へた。「どうやらあちらの土地を買ひにいらしたらしいんです。」

「あゝ！ さう、知つてる、ナナの土地だよ。」

ミニヨンはむつとした。曾つてローズに屋敷を買つてやると約束したあのシユタイネルが！ しかし誰に對しても腹を立てゝはならない。機會は待たなければならぬ。そしてなほ自分を優越者のやうに考へて、何か空想しながら、ミニヨンは暖爐から臺へと行つたり戻つたりしてゐた。もう樂屋には彼とフォシュリイしか残つてゐなかつた。記者は疲れて大きな肘掛椅子の中に身を投げ出してゐた。そしてミニヨンが歩きながら投げかける視線の下に、眼を半ば閉ぢて靜かにしてゐた。二人きりになると、ミニヨンはもう彼を小突き廻して虐めることをやめた。その芝居を見てくれる者がなければ、何の役にも立たないからだ。彼は間拔けな亭主の喜劇をやつて、自分一人で腹癒せをするのは少しも面白くなかつた。フォシュリイは數分間が無事に過ぎたので、ほつとして、懐さうに火の前に脚を投げ出したまゝ、眼を上げて時計と晴雨計を代る／＼眺めてゐた。歩いてゐたミニヨンはふとポティエの胸像の前に立ち止つて、ぼんや



りとそれを眺めてゐた。それから庭が暗い穴のやうに見える窓の傍に戻つて来た。雨は降り止んで、深い沈黙が、コースの熱と瓦斯管の焔で更に重苦しくなつた。舞臺裏からは何の物音も聞えて来なかつた。階段と廊下は死のやうに静かであつた。それは幕切れの、呼吸を殺した静かさであつた。とその時、舞臺の上にある俳優は全部、最後の割れかへるやうな大騒ぎを演じてゐた。それに引き換へ、空になつた舞臺は、微かな物音の中で窒息したやうに眠つてゐた。

「やい！ 駱駝め！」と突然ボルドナアズが腹れ聲で怒鳴つた。

彼はたつた今劇場へ来たばかりなのに、もう碌でもない事をして舞臺へ並ぶのに遅れさうになつた二人の補役女優に怒鳴りたてゝゐた。彼はミニヨンとフォシユリイを見ると、二人を呼んで何か耳打ちした。それは殿下が慕間に、ナナの樂屋へ挨拶に見えるといふことだつた。彼が二人を舞臺裏へ連れて行かうとすると、そこへ場内監督が通りかゝつた。

「フェルナンドとマリアの二匹の馬鹿に罰金をくらはすんだ！」と腹を立てゝボルドナアズが命じた。

そして心を静めて、努めて上品な支配人らしい威厳をつくらうとして、ハンカチで顔を拭いてから言ひ加へた。

「私は殿下をお迎へに行く。」

一齊射撃のやうな長い喝采の中に幕が下りた。フットラ

イトが消えて、半分暗くなつた舞臺は、すぐに混亂の状態になつた。俳優や補役は樂屋に歸らうとして先を争ひ、道具方は大急ぎで背景を取り外してゐた。シモンヌとクラリスだけは、小聲で話しながら奥の方に残つてゐた。舞臺で白を遣り取りしてゐる時から、二人は勝手な事を相談してゐたのであつた。クラリスはよく考へ直して見た後で、彼女と別れてガガと一緒にならうとしないラ・ファアズに、もう逢はないことにした。そしてシモンヌが簡単に、そんな遣り方では一人の女も手に入るものではないと彼に言つて聞かせてやることになつた。彼女のことだからその役をうまくやつてのけるだらう。

そこで、笑歌劇の洗濯女の扮装をしたシモンヌは、毛皮外套を肩に羽織つて、門番の部屋に行く、壁のある曲りくねつた狭いじめ／＼した階段を降りて行つた。その門番の部屋は、俳優用の階段と經營者用の階段との間にあつて、左右とも硝子の笹つた幅の広い仕切で閉ざされ、そこには瓦斯の焔が二つ煌々と燃えてゐるので、まるで透き通つた大きなランプのやうであつた。本棚には手紙や新聞が積み重ねてあつた。卓子の上には汚れたまゝの皿や、受付の女が釘孔を繕つてゐる古い胴着の傍に、花束が置いてあつた。

そしてこの掃除の行き届かない亂雑な部屋に、當世風な紳士達が手袋をはめ、身なりを整へて、ブロン夫人が舞臺裏か

ら返事を持つて来るごとには、つとして頭をその方に向けながら、辛抱強いおとなしい様子で、藥の詰つた四脚の古椅子を占めてゐた。丁度その時ブロンが一人の青年に手紙を渡すと、彼は急いで裏口の瓦斯燈の下で開いて見た。そして彼は、この場所で幾度となく澤山の人々が繰り返して讀んだ、「心より慕ひまつるわが君よ、少々差し支へ有之候ま、今宵はお目もじ相叶はず候。」と云ふこの極り文句を見て少し顔を蒼くした。ラ・ファアズは卓子と燧燼との間の奥の方の椅子に腰掛けてゐた。彼はそこで夜を過す決心しなかつたが、その周囲で、腹の黒い仔猫どもが揃つてあばれまはるし、その後からは親の牝猫が坐つて黄色い眼で睨んでゐるので、彼は不安さうに長い足を引つ込めてゐた。

「あらまあ、シモンヌさん、何の御用で？」とブロンが訊いた。

シモンヌはラ・ファアズを追ひ出してくれと頼んだが、ブロンは直ぐにはその言ひ付けに従はなかつた。ブロンは階段の下の奥行き深い衣裳戸棚のやうな中に、小さな料理店を經營してゐて、幕間にはそこへ補役達が飲みに来るのであつた。今も「ブウル・ノアル」の假装のまゝで、咽喉を乾かし切つた男共が五六人大急ぎでやつて来たので、彼女は少し面喰つてゐた。その衣裳戸棚には瓦斯が點いてゐて、手のついた酒瓶の並んだ棚や、錫を張つた卓子が見え

てゐた。この石炭置場のやうな部屋の戸を開くと、そこからは酒精の強い匂ひが、食ひ餘しもの、臭ひや卓子の上に置かれたまゝの花束の鼻をつく香りに交つて流れ出た。

「ではあなたの仰しやるのは、あの褐色の髪の方？」と補役達に酒を配つてしまつたブロンが言つた。

「いゝえ、さうぢやないの！ 燧燼の傍にゐる瘦せた男よ。お前さんの猫がそいつのズボンを嗅いでるぢやないの。」とシモンヌが言つた。

そこでブロンは、ラ・ファアズを支關へ連れ出してしまつた。他の青年紳士達は咽喉がつかまつて息苦しいのをぢつと辛抱してゐた。假裝者達は階段の上で、酔つ拂つた腹れ聲で、快活にふざけ合ひながら酒を飲んでゐた。

その上に當る舞臺では、ボルドナアズがまだ背景を外し終らない道具方を叱りつけてゐた。こんな場合に、もしも殿下の頭の上へ、雪割の粹が落ちたら大變だつた。

「揚げる！ 揚げる！」と道具方の頭が叫んでゐた。

遂に奥の背景も捲き揚げられて舞臺は廣くなつた。フォシユリイをつけ狙つてゐたミニヨンは、また悪戯を初める機会を捉へた。彼はフォシユリイを逞ましい腕に抱へ込んで、「氣をつけろ！ 柱の下敷になるぜ。」と叫んだ。

そしてフォシユリイを抱き上げ、激しく揺ぶつて床に下ろした。道具方が大袈裟に笑ふ面前でフォシユリイは顔を蒼く



してゐた。彼が唇を齧はせて突つかゝつて行きさうにする  
と、ミニョンはまた親切らしく愛情を籠めて繰り返した。  
「君の體が心配なんだ！……さうだらう！ 災難でも起き  
たら大變だ！」

そしてフォシュリイが前屈みになるほど強く肩を敲いた。  
その時「殿下だ！ 殿下だ！」と言ふ囁きが起つたので、  
一同は場内の小さな扉口の方へ眼をやつた。併し、まだ續  
けざまにべこ／＼お辭儀をしてゐるボルドナアヴの、屈む  
毎に膨らむ圓い背中と屠殺者のやうな頸としか見えなかつ  
た。やがて金色の髻を蓄へた背の高い元氣さうな殿下が現  
はれた。際立つて健康さうな薔薇色の肌をし、非の打ちど  
ころのない仕立てのフロクコートの下に、がつしりしたそ  
の四肢が感ぜられた。その後、ミニョア伯爵とシユアール  
侯爵が續いて現はれた。そこは、劇場の中でも殊に暗い處  
なので、入つて来た一行は、絶えず動いてゐる大きな人影の  
中に消えてしまつた。女王の腹から生れた、未來の王位の  
繼承者であるこの王子に話しかけるために、ボルドナアヴ  
は表面だけの感激に頼へて、能使ひのやうな聲を出した。  
「殿下、私が御先導申上げます……殿下、こちらへお通り  
下さいませ……殿下、御用心遊ばしまして……」などと繰  
り返した。  
殿下は非常に面白がり、急ぐどころか反對に道具方の仕

事に見とれて遅れ勝ちだつた。三角燭臺が下ろされて、そ  
の鐵製の網目の中から瓦斯燈の列が幅の廣い光で舞臺を照  
らした。劇場の舞臺裏を覗いたことのないミニョアは、殊  
に驚いて、恐怖の交つた漠然たる嫌厭と不快を感じた。そ  
して天井を見上げると、そこには色々な太さの綱や細綱干  
や、大きな布の干し物のやうに空中に捲き上げられた背景  
の入り亂れた格子天井に、火口の細められた三角燭臺が着  
ざめた小さな星のやうに星座を作つてゐた。  
「さあ、下ろした！」と突然道具方の頭が叫んだ。  
そして殿下の方が却つて伯爵に介添しなればならなかつ  
た。背景が下りて来た。三幕目のエトナ山の洞窟の舞臺  
が作られるのであつた。數人が側燈溝に支柱を立てゝゐた。  
他の人々は舞臺の壁に對して框を立て、それを支柱に太い  
綱で縛りつけた。奥の方ではヴェルカンの炎々たる銀冶場か  
ら出る光を作るために一人の照明係が柱を立てゝ、それに  
赤硝子を蔽めた燈火を點してゐた。作業は混亂してゐるの  
で一見した處ではたゞ押し合つてゐるとも見えたが、實は  
極く些細な動作までも手筈がきまつてゐた。この忙しさの  
中に後見が、足の疲れないやうに小刻みに歩いてゐた。  
「殿下、光榮至極に存じます。」とボルドナアヴは絶えずお  
辭儀をして言つた。「當劇場は少し手狭ではございませんが、  
しかし私共は爲し得る限りのことは致してゐますので……」

さあ、殿下こちらへ……」

ミニョア伯爵は、もう樂屋の廊下を歩いてゐた。舞臺か  
らはかなり急な傾斜だつたので、彼は驚いた。その上、足  
の下では床板が動くので非常に不安がつた。開かれた側燈  
溝から、床下に瓦斯の燃えてゐるのが見えた。それは闇の  
深い地下で、善に特有の、うそ寒い風に交つて人聲が聞え  
た。しかし進んで行くうちに、ふと小さな出來事が彼の足  
を止めた。三幕目の扮装をした二人の女優が、幕の覗孔の  
前で話し合つてゐたのである。一人が腰を曲げて、よく見  
えるやうに指先で覗孔を大きく開いて、場内を見まはして  
ゐた。  
「見えるわ、まあ、大騒ぎつたらー」と、突然彼女が言つ  
た。

ボルドナアヴは不機嫌になつたが、ちつと彼女の尻を蹴  
飛ばすのをこらへた。しかし殿下はその言葉を樂しさうに  
面白がつて聞き、自分に氣を留めてゐないその女を、笑ひ  
ながらやさしく眺めた。彼女はあたり構はず笑つてゐた。  
ボルドナアヴは殿下を連れて行くことにした。ミニョア  
伯爵は汗をかいたので、帽子を脱いだ。この舞臺裏の瓦斯  
の臭ひのする息苦しく濃んだ熱い空氣には、また小道具の  
假漆や、不潔な暗い隅々や、補役女優の汚れた下着の臭氣も  
入り交つて、その強い臭氣が殊に彼を苦しめた。廊下は一層

息苦しかつた。樂屋から流れ出る化粧水の酸っぱい匂ひや、  
石鹼の香りが時々人いきれの中に感ぜられた。そしてふと  
頸筋に熱と光が降りそゞいだのに驚いて、伯爵は頭をあげ  
て階段の上を見た。階上には洗面器の音や笑ひ聲や叫び聲  
が聞えて、激しい音をたてゝ絶えず開け閉めされる樂屋の  
扉口から、髪の毛の籠れた匂ひに交つて、美顏料の麝香や  
女の匂ひが下りて来た。彼は立ち止らずに、未知の世界の  
思ひがけない一瞥にぞつととして、殆んど逃げるやうに急ぎ  
足で進んで行つた。

「どうだね？ 劇場は面白いだらう。」シユアール侯爵は、  
懐かしい場所へ歸つて来た人のやうに機嫌よく言つた。  
その時ボルドナアヴは廊下の奥のナナの樂屋に着いて、  
靜かに扉の把手を廻し、身を屈めて言つた。

「殿下、どうかお入り下さいませ……」  
あわてた女の聲が聞えた。腰まで裸のナナはカーテンの  
蔭に逃げ込み、その體を拭いてゐた衣裳方は、手拭をぶら  
さげたまゝぼんやりとしてゐるところだつた。  
「まあ！ こんなところへ来るなんてひどいわ！」とナナ  
は隠れたまゝ叫んだ。「入つて来てはいけません、入つて來  
ては困るといふ事位、分つてゐるぢやありませんか！」  
ボルドナアヴは、そんなに逃げこんだのが不満らしかつ  
た。



「いゝぢやないか、何でもなないよ、殿下なんだよ。さあ、そんなことを言はないで。」

彼女はまだ驚いてゐて出ては來なかつたが、しかしもう笑つてゐたので、彼も父親らしい改まつた聲で附け加へた。「さあ、さあ、こゝにゐらつしやる方々は、女のことなら何も彼も御存じなんだからね。まさか取つて食はうとも仰しやりやしないよ。」

「當てにはならないよ。」と殿下が洒落て言つた。

その場に居合せた者は、皆大袈裟なお追従笑ひをした。ボルドナアヴの言ふ通り、それは全く巴里つ子らしい洒落た言葉だつた。ナナは黙つてゐたが、カーテンが揺れてゐた。彼女は決心したのであらう。ミラファ伯爵は顔を赧らめて樂屋を見廻した。それは天井の非常に低い四角な部屋で、壁はすつかり明るい褐色の織物で覆はれてゐた。同じ布地で作つたカーテンが眞鍮の帳桿に支へられて奥の方に別の小さな部屋を作つてゐた。大きな窓が、二つ劇場の中間に面して開かれてゐて、その窓硝子が暗い夜の中に、三米ばかり離れてゐる崩れかゝつた壁の上に黄色い光の正方形を映してゐた。大きな自在鏡が白い大理石の化粧棚に向き合つてゐた。棚には香油や香水や白粉などの硝子の瓶や箱が亂雑に置かれてあつた。伯爵は鏡に近づく、額に小さな汗の玉を滌ませた非常に赤い自分の顔の映つてゐるのが見

えた。それから彼は眼を伏せて化粧棚の前に立ち止つた。石鹸水の湛へられた洗面器や、散らかつた象牙の細々した道具や、水を含んだ海綿などが、暫らく彼の心を奪つた。オースマン街にナナの家を初めて訪ねた時に経験した眩暈が、今もまた彼を襲つて來た。そしてこの部屋の厚い絨毯の中へ足が吸ひ込まれるやうに感じた。化粧棚や鏡の傍に置いてゐる瓦斯管が、顛顛の両方にしいく／＼と音を立て、特に強い熱い女の匂ひのために昏倒しないかと心配して、二つの窓の間にある膨らんだ長椅子の端を捉へた。しかし彼はすぐに立ち直つて、化粧棚の傍へ歸つて來たが、もう眼がぼつとして何も見えなかつた。そしてふと昔自分の部屋で、萎びて行つた夏水仙の花束の匂ひを嗅いで死にさうになつたことを思ひ浮べてゐた。夏水仙の體ある時には女の匂ひがするものである。

「早くおしよ！」とボルドナアヴがカーテンの中へ首を突つ込んで囁いた。

殿下は、シニール侯爵が、化粧棚の上にあつた兎の脚を取つてどんなに練白粉をのばすかを説明するのを、樂しさうに聞いてゐた。サタンは隅の方で、純潔な處女のやうな顔をして人々を眺めてゐた。衣裳方のジニール夫人はヴェニスの肉襦袢と肌着を準備してゐた。この女は顔に色艶

がなくて、もう年齢の想像がつかなくなつた。まるで若い時代がなかつたかのやうに、顔には動かない皺が疊まれてゐた。そして巴里でも最も有名な女の腿や胸の間に立ち交り、樂屋の熱い空氣の中にあるながら乾からびて、いつも色褪せた黒い着物を着て、平つたい、女らしくもない胴着の上には、心臓のところに留針を林のやうにさしてゐた。

「御免なさいまし、皆様。」とカーテンを上げてナナが言つた。「全く驚いてしまつたものですから……」

皆はその方を見た。彼女は小さい金巾の胴着を卸して留めたばかりのところ、胸を半分隠しただけで、他には何も身に纏つてゐなかつた。人々が入つて來たので逃げ出した時には、やつと女漁夫の扮装を大急ぎで取り外して、着物を脱いだところだつた。で、ズボンの後ろにまだ肌着の端を挟んだまゝ引きずつてゐた。腕も肩も露はにして胸の隆起を見せ、金色の髪をして、若々しい肥えた見事な體を見せながら、片手はカーテンを離さずに、この上ほんの少しでも驚ろかせば、また閉ぢてしまはうとしてゐた。

「ほんとに驚きましたわ。あちらへいらして下さいましな……」と頸筋まで薔薇色にして當惑し、取り亂して口籠つた。

「さあ出ておいで、悪くは思つてゐらつしやらないのだから！」とボルドナアヴが叫んだ。

彼女はまだ生娘らしく躊躇ひ勝ちな様子で、擦られたやうに身をくねらせながら繰り返して言つた。

「殿下、勿體なうございますわ……こんなところをお眼にかけまして、ほんとに御免下さいまし……」

「失禮なのは私だが、」と殿下が言つた。「しかし是非會ひたいと思つたので……」

そこで、彼女はズボンのまゝ、靜かに道を避ける紳士達の間を通つて、化粧棚の前へ行つた。その腰は豊かで、ズボンは圓く膨らんでゐた。それから胸を張り、愛嬌よく笑つて會釋した。と、突然ミラファ伯爵に氣がついたらしく、親しさうに手を差し延べて、晚餐會に來なかつた不平を言つた。殿下は、ミラファが慄へながら、熱い手の中に化粧水を使つたばかりの冷たい女の手を握つて口籠つてゐるのを抑へた。伯爵は、健啖家で酒にも強い殿下と一緒に晚餐をした後だつたので、二人とも少し酔つてゐたが、態度を亂すやうな事はなかつた。ミラファは努めて周章てまいとして、やつと暑さのひどい事だけを言つた。

「え、この部屋はなんて暑いなさいませう。こんな温度の中だつたら、どんなにしてお暮しなさいませう？」

それから話が初まつた。すると、樂屋の入口に騒がしい人聲が起つた。ボルドナアヴは、修道院風の格子の嵌つた覗き孔の板を上げた。フォンタンの後にブリュリエールと



ポスクが續いて、三人とも酒瓶を抱へ、手には盃を持つてゐた。フォンタンは扉をたゞいて、今日は俺の祝名節だからシャンパンを買つて来たと怒鳴つた。ナナはちらりと殿下の様子を窺つた。ところが、殿下は誰の邪魔もすまいと思つてゐるらしく、非常な上機嫌だつた。フォンタンは、返事も待たずに入つて来て、巻き舌で同じことを繰り返した。

「なあに、けち／＼しやしねえよ。シャンパンの金は俺が拂つたんだい……」

そして、思ひも寄らない殿下がそこにゐるのを見ると、彼は急に立ち止つて、仰々しい滑稽な身振りをして、言つた。

「廊下にはダゴベル王が殿下と乾盃しようとしてお待ち兼ねでございます。」

殿下は微笑を浮べ、一同も面白がつた。しかしこの樂屋は一同のためには狭過ぎた。サタンとジュール夫人は奥の方のカーテンの傍に、人々は半裸體のナナの周圍に押し合つて、重なり合はなければならなかつた。三人の俳優はまだ二幕目の扮装をしてゐた。プリュリエールは天井につかへるほど大きな羽飾りのついたスキスの將軍の帽子を脱いだ。が、ポスクは緋の胴着に鍔力の冠を戴いたまゝ、酔つてふらつく兩足を踏みしめて、有力な隣國の王子を歓迎する君

主のやうに殿下に挨拶した。盃が満たされて、彼等は乾盃した。

「殿下のために乾盃します！」と老ポスクが騰揚に言つた。

「殿下の軍隊のために！」とプリュリエールが續けた。

「ヴェニユスのために！」とフォンタンが叫んだ。

殿下は嬉しさに盃を上下させてゐた。彼は三度會釋を返して、

「夫人……將軍……閣下に……」と囁いた。

そして一息に飲み乾した。ミラファ伯爵とシユアール侯爵も、それに倣つた。それは宮中の儀式だつたので、もう誰も冗談を言はなかつた。俳優達は瓦斯の熱い光の下で現實の世界を眞面目な笑劇へと導いてしまつた。ナナはズボンをはいてゐることや、肌着を引きずつてゐることを忘れて、國家の樞要な人々に彼女の小さな部屋を提供しながら、女王ヴェニユスの役を貴婦人らしく果たしてゐた。そして彼女は言葉の終り毎に、殿下、殿下と敬稱を繰り返して禮儀をつくしながら、ポスクやプリュリエールの假裝者達を大臣を従へた君主として待遇した。誰もこの奇妙な無禮講を笑ふものはなかつた。王位の繼承者である眞の殿下は、この神々の謝肉祭に於ける假裝の皇族達の間で、衣裳方や劇場の淫賣婦や女の見世物師などゝいふ臣民達の間に入り交つて、大層な御機嫌で大根役者のシャンパンを飲んでゐた。

ボルドナアヴはこの場面にすつかり呆氣にとられながら、もし殿下がかうして『プロンド・ヴェニユス』の第二幕に登場して下さるなら、どれほど収入が上るだらうかと考へてゐた。

「さて、女優達をつれて参りませう。」と彼は打ち解けて言つた。

ナナはそれを厭がつた。そして彼女も狎れ／＼しく口を利いた。彼女はフォンタンの奇怪な顔に惹きつけられて、不潔なものを食べたがる妊婦のやうな眼つきで、やさしく眺めながら彼に體を擦りつけた。そして急に親しげに言つた。

「ちよいと、お注ぎよ、お馬鹿さん！」

フォンタンはまた盃を満たした。一同は同じ乾盃の辭を繰り返して飲み乾した。

「殿下のために！」

「殿下の軍隊のために！」

「ヴェニユスのために！」

するとその時ナナは身振りで一同を鎮まらせ、自分の盃を高く揚げて、

「いゝえ、いゝえ、フォンタンのために……今日はフォンタンの祝名節なんだから、フォンタンのために！ フォンタンのために！」

「皆さん、皆さん、急いで下さい……もう休憩室では電鈴が鳴つたんです。」と呟くやうに言つた。

「いゝさ！ お客は待たせて置け。」とボルドナアヴが平氣

そこで人々は、三度目に乾盃してフォンタンの名を叫んだ。殿下は、ナナがしげ／＼とこの喜劇俳優を眺めてゐるのを見て、フォンタンに會釋をして、

「フォンタン君、君の成功のために乾盃する。」と上品な態度で言つた。

殿下のフロックコートの後ろが、化粧棚の大理石に擦つてゐた。この部屋は、洗面器や海綿から立ち昇る水蒸氣と香水の匂ひが、シャンパンの酸っぱい陶酔に入り交つて、寢室の奥のやうにも、狭い浴室のやうにも思はれた。ナナの左右にゐた殿下とミラファ伯爵とは、ほんのすこし體を動かすにも、彼女の腰や胸に觸れないやうに手を上げなければならなかつた。ジュール夫人は汗一滴も流さずに、固くなつて待つてゐた。サタンは夜會服の殿下や紳士が、假裝者に立ち交つて裸體の婦人の傍に居るのを眺めて吃驚し、私かに立派な人々でもそんなに純潔なものではないと、柄にもないことを考へてゐた。

その時廊下にバリヨ爺さんの鈴の音が近づいて来た。彼は樂屋の入口に現はれて、まだ二幕目の扮装をしてゐる三人の俳優を見て立ち止つた。



で言つた。  
けれども酒が盡きたので、俳優達は改めてお辭儀をして衣裳を着けに出て行つた。ボスクはシャンパンで付け髯を濡らしたので取り外すと、その立派な髯の下から突然蒼ざめた酒飲みらしい老俳優の皮膚の荒れた顔が現はれた。彼は階段の下で、囁いた聲でフォンタンに殿下のことを話しかけた。

「どうだい？ うまく吃驚させてやつたらうー」  
ナナの樂屋には殿下と伯爵と侯爵とだけが残つてゐた。ボルドナアヴはバリヨと一緒に出て行つて、開幕の合圖はナナに知らせずにやつてはならないと言ひ付けた。  
「御免なさいまし、皆様。」と言つて、ナナは顔や腕の化粧直しをし初めた。三幕目は裸體だつたので、殊に念入りにしてゐた。

殿下はシニアル侯爵と長椅子に腰かけ、ミラファ伯爵だけが立つてゐた。この息苦しい熱さの中で、二杯のシャンパンが彼等の酔を増してゐた。サタンは紳士達がナナと一緒にゐるのを見て、自分はカーテンの蔭にかくれてゐる方が慣ましいだらうと思つた。彼女はそこでトランクの上に、うんざりして待つてゐた。ジュール夫人は黙つて眼を伏せて、靜かに部屋を往き來してゐた。  
「あの圓舞曲は、素敵にうまく歌つたね。」と殿下が言つた。

それからまた話が始まつたが、長くは續かないで途切れ勝ちだつた。ナナは返事をしないこともあつた。顔や腕にコールド・クリームを塗つてから、手拭の端で白粉をつけた。ちよつと鏡から目を離して、白粉の手を休ませずに、殿下の方へ流眄を送つて微笑みながら囁いた。  
「まあ、殿下、ずるぶんお讚め下さいますのね。」  
ナナのしてゐるのは、なか／＼複雑な仕事だつた。シニアル侯爵は、嬉しうに口を開けて眺めてゐた。今度は彼が言つた。

「音楽はもつと靜かに伴奏出来ないものでせうか？ あなたの聲が聞えないといふ事は、全く怪しからん事ですよ。」  
ナナは振り向かなかつた。彼女は兎の脚を取つて軽くそれを動かし、一心に化粧臺の上に身を曲げてゐたので、臀部の膨らみを包んだ白いパンタロンが後の方へ突き出て、肌着の下端が見えてゐた。しかし、彼女は老俳優の言葉に無關心でないことを示さうと思つて、嬌態をつくつて腰をもじ／＼させた。

誰も口を利くものはなかつた。ジュール夫人はズボンの右脚の綻びを見つけて、ナナの腿の傍で、胸から針を抜きとつて暫らく床の上に屈んで仕事をしてゐた。ナナの方では彼女がそこにあるのにも氣づかないらしく、頬にはつけないやうに注意深く粉白粉を打つてゐた。そのとき殿下は

もし彼女が倫敦へ來て歌つたら、全英國が喝采するだらうと言つたので、彼女は、つこり笑つてまた振り返つた。左の頬が、あたりに散る粉白粉の霧の中に眞白に見えた。それから急に一生懸命になつて、頬紅を塗りはじめた。また鏡を覗きこんで、壺に指先を入れ、それを眼の下へ持つて行き、額まで靜かに擴げて行つた。三人は黙つて眞面目な顔をしてゐた。

ミラファ伯爵は、まだ何も言はなかつた。彼は青年時代の事を考へないではゐられなかつた。彼の子供の頃の部屋は非常に冷たかつた。その後十七歳の頃、毎晩母に接吻して、その接吻の氷のやうな冷たさを夢の中で運んでいつた。或る日、通りが／＼に戸の隙間から、體を洗つてゐる下女を見かけたことがある。それは彼の思春期から結婚に至るまでの間、彼を惱ました唯一の記憶であつた。それから結婚すると、彼の妻は夫に對する義務はあくまで從順に果したが、彼の方は信仰から來る一種の嫌厭を感じつけ

てゐた。彼は年をとり、今は老人になりかけてゐるが、まだ肉慾を無視し、嚴格に宗教の戒めを守り、自分の生活を神の掟や教訓に従はせて來た。そして今、出し抜けに女優の樂屋で裸體の婦人の前に立つことになつたのである。自分の妻が、靴下止めを掛けてゐるのさへ見たことのない彼が、この強いやさしい白ひのする、洗面器や壺の取り亂さ

れた場所、眼の前に女の化粧を詳しく眺めたのであつた。彼は全力を擧げて對抗した。ナナの體の誘惑が、先刻から靜かに彼の心を襲つて、少年時代に讀んで心を揺り動かした悪魔の誘惑を思ひ出させた。彼は悪魔を信じてゐた。ナナはその悪徳に膨らんだ胸や腰や微笑をもつてゐる悪魔のやうに思はれた。併し、彼は強くならうと心に誓つた。そして自分を守ることが出来るであらう。

「では、もし來年倫敦へ來られれば、もう佛蘭西へなんか歸らうと思はないくらゐ歓迎してあげよう……」と殿下は椅子に樂々と坐つて言つた。「伯爵、あなたは美人をあまり厚遇しないんですね。私がみんな貰つて行きますよ。」  
「伯爵は平氣ですよ。」と、シニアル侯爵が、心安だてから意地悪さうに言つた。「伯爵は道徳そのものなんですから。」

その道徳と云ふ言葉を聞いてナナが不思議さうに見返るので、伯爵はひどく當惑した。そして自分の心の動きに驚き、我ながら腹立たしく思はれた。何故道徳的であると云ふ考へがこの女の前で彼を苦しめるのか？ 彼は出来ることなら彼女を擲つてやりたいと思つた。けれどもナナが、取り落した刷毛を拾ひあげようと身を屈めたところへ彼は大急ぎで近寄つた。二人の呼吸は觸れ合ひ、ヴェニヌスの時のまゝの解けた髪が彼の手の上に滑り落ちた。それは



悔恨の交つた喜びで、罪を犯してみてもそ地獄の恐怖が一層鋭くなる加特力教でいふあの快樂の一つであつた。

この時扉の外にバリヨ爺さんの聲が聞えた。「奥さん、合圖をしてもようござんすか？ お客は辛抱しきれないんですよ。」

「もう直ぐだよ。」とナナは落着き拂つて答へた。

彼女は刷毛を墨壺に入れ、顔を鏡に近づけ、左の眼を閉ぢてそれを巧みに使つて睫毛を染めた。ミラファは後ろから彼女を眺めてゐた。鏡の中にはその圓い肩と薔薇色に塗つた胸が映つてゐた。彼ははげしい欲望に心も遠くなつて、片眼を閉ぢ笑顔を作つたナナの蠱惑的な顔から、どうして眼を離すことが出来なかつた。彼女は右の眼を閉ぢて、また睫毛を染め初めた時に、彼は自分がすっかり彼女のものになつてしまつたのを感じてゐた。

「奥さん。」とまた呼び出し係の急ぎ込んだ聲が叫んだ。「足を踏み鳴らして、椅子を壊してしまひさうなんです……合圖をしますよ？」

「いゝわい」とナナは煩さうに言つた。「勝手に合圖をおしよ……私の支度が出来なけりや、待つより仕方がないぢやないの。」  
彼女は氣を取り直して、三人の方へ體を向けて笑ひながら、

「さあ、いゝわねい」と鏡の中に今一度眼をやつて、ナナが言つた。

ボルドナアヴは心配さうにやつて来て、三幕目が初まつてゐると言つた。

「え、いま行きますよ。」と彼女が言つた。「ほんとに煩さいのね！ 何時も私の方が待たされてばかりゐるのよ。」

紳士達は樂屋から出た。しかし殿下が舞臺裏から三幕目を見たいと言ふので、彼等は棧敷へ歸らなかつた。ナナは一人になると驚いてあたりを見まはして、

「あの子は何處へ行つたのかしら？」と尋ねた。

彼女はサタンを探してゐたのである。そして、カーテンの蔭のトランクの上に待つてゐたのを見つけた。サタンは靜かに答へた。

「あんな方々がゐらつしやるので、あなたのお邪魔をしたくないと思つてねい」

そしてサタンはもう歸ると言ひ出したが、ナナは引き留めて、お馬鹿さんね！ ボルドナアヴが採用すると言つてゐるのに！ と言つた。實際、芝居が濟んでから話が纏まることになつてゐたのだ。サタンは躊躇つた。餘り澤山に女達があるので、自分なぞ要りさうにはないと思つたが、しかし樂屋に残ることにした。

殿下が狭い木の階段を下りて行つた時に、不思議な物音

「ほんとに一分間も話してゐる暇がございませぬわ。」と言つた。

顔と腕は出来上つてゐた。そして指先で唇に廣く紅をさした。伯爵は白粉や臙脂の變化に次第に誘惑されて、眞白な顔に赤い唇を浮べ、眞黒な睫毛に圍まれて戀に傷ついたやうに大きく眼を輝かせてゐる彼女の彩られた若々しい顔の前に、前後もなく欲望を咬のかされて、一層心を取り亂してしまつた。それからナナはつとカーテンの蔭に入つて、ズボンを脱いでヴェニスの肉襦袢を着けた。彼女は落着き拂つて、小さな金巾の肌着の釦を外し、ジュール夫人に腕を差し延ばして短かい肌着の袖を通させた。

「みんな怒つてゐるんだから、早くい」と彼女は呟いた。

殿下は眼を細くして、通人らしく彼女の胸のふくらんだ線を眺めてゐた。シヤール侯爵は知らず／＼のうちに首を傾げてゐた。ミラファは眼のやり場に困つて、絨毯を見てゐた。ヴェニスの扮装が出来上つた。肩にたゞ輕羅を纏つてゐるだけだつた。ジュール夫人はまるで木で作られた老婦人のやうに、空虚な輝やいた眼をして、彼女の周圍を歩きまはつてゐた。そして、胸の毛糸の毬に刺した無數の留針を抜きとつて、ヴェニスの肌着を留めてゐた。その豊かな裸體を、萎びた兩手で、もう何の思ひ出もなく、自分と同性の者には無關心なやうに撫でまはしてゐた。

や、息づまるやうな罵り聲や、格闘するやうな足音が舞臺の向う側から聞えて來た。その突然の出來事は、臺詞渡しを待つてゐる女優達を驚かせた。それはすこし前から、またミニオンが例の友情からフォシュリイを小突き廻してゐるのだつた。ミニオンは今度は新手を發明して、蠅を追つてやるのだと言つてフォシュリイの鼻を爪で弾いてゐた。勿論これは女優達を非常に喜ばせた。しかしミニオンは、それが成功したのに圖に乗つて、うっかり羽目を外して、突然記者の横面にほんとの力の入つた平手打ちを喰はしてしまつた。それは餘りひどいやり方だつたので、フォシュリイは人々の前で、そんな平手打ちを甘んじて受けることは出来なかつた。かうなると二人はもう冗談ではなくなつた。眞蒼になつた顔を憎悪に歪ませて、お互に咽喉に飛びついた。支柱の後ろで、女術奴と罵り合ひながら床に轉がつた。

「ボルドナアヴさん！ ボルドナアヴさん！」と場内監督が驚いて彼を呼びに行つた。

ボルドナアヴは殿下にお斷りを言つてやつて來た。彼はフォシュリイとミニオンが倒れて争つてゐるのを見ると、むつとした態度を示した。殿下は背景の向う側に居るし、観客にはみな聞える場所で、勝手なことをやるなんて！ 丁度折悪しくローズ・ミニオンが息を切らして、登場の間際になつて現はれた。ヴェルカンが彼女に對する臺詞を言つてゐる



ときだつた。しかしローズは、夫と情夫が足許に轉がつて咽喉を締め合ひ、呻きながら髪を掴み合ひ、フロックコートを塵で眞白にしてゐるのを見て、呆氣にとられて立ち竦んでしまつた。二人が通路を塞いでゐたのだつた。道具方の一人が、喧嘩の最中に舞臺へ飛び出しかゝつたフォシユリイの帽子をやつと取り抑へた。ヴェルカンの方は急にその場を繕つて観客を笑はせてから、またローズに對する臺詞を言ひ出した。ローズはぢつとしたまゝ二人を眺めてゐた。「見てるんぢやねえ」と耳許でボルドナアヴが怒つた。「早く！ 早く！……お前さんの知つたことぢやねえ！ 遅れてるんだぜ！」

彼にせかれたので、ローズは二人を跨いで、フットライトのばつと明るい舞臺へ、観客の前に現はれた。彼女には何故二人が床に組打してゐるのか分らなかつた。體が慄へ耳鳴りがしてゐた。だが、夫を慕ふそのディアヌに扮した彼女が、美しい微笑を浮べつゝフットライトの方へ眞直ぐに歩みよつて、二部合唱の最初の句を情熱の籠つた聲で歌ふと、観客からは大喝采が起つた。彼女の耳には背景の後で二人の殴り合ふ音が聞えて來た。幸ひにも音楽が、書齋の裏で殴り合つてゐる彼等の騒ぎを消した。「畜生！」と、やつと二人を引き分けたボルドナアヴが怒鳴つた。「自分達の家ぢや喧嘩が出来ないのかい？ 俺が困

る位のこととは分つてゐるだらう……ミニヨン、お前さんはこの右側に居るんだぜ。それからフォシユリイは、左の扉の傍にゐるんだ。一足でも離れたら、それこそこゝから摘み出してしまふから……どうだい？ 右側と左側、分つただらう、聴かなきゃもうローズと一緒に劇場の中へ入られてやらないぞ。」

ボルドナアヴが殿下の傍へ歸ると、殿下はどうしたのだと訊き質した。「いゝえ！ 何でもありません。」と、彼は落着いて答へた。

ナナは毛皮外套にくるまつて登場を待ちながら、立つて紳士達と話してゐた。ミラファ伯爵は、舞臺を見ようと思つて脇道具の間を登つて行つたが、場内監督の身振りを見て、靜かに歩かねばならないことに氣づいた。天井からは靜かな熱い空氣が下りて來た。燈火でくつきり照らし出された舞臺脇には、二三の者がひそ／＼話をして、暫らくすると爪先でそつと歩いてどこかへ隠れてしまつた。照明係が一人、自分の持場である錯綜した瓦斯管の栓の集まつた位置につき、消防係が一人支柱に凭れて、舞臺を見ようと頸を長くしてゐた。高い所には、幕係が椅子にかけて、芝居には無關心に、諦めたやうな顔付で、綱具の操作の合圖の電鈴だけを待つてゐた。その息苦しい空氣の中に、そつ

と歩く足音や囁きを越えて、舞臺から聞えて來る俳優の微かな聲は、妙にその空々しさで人を驚かせた。そして更に遠く、管絃樂の入り亂れた音の向うに呼吸をつく場内のざわめきが、時々叫喚や哄笑や喝采を揚げて、それがまるで大きな溜息のやうに聞えて來た。たとへ静まり返つてゐる時でも、わざ／＼見なくても大入りの群衆が感ぜられた。「何處か開いてゐるらしいわ。」と突然ナナが毛皮の襟を掻き合せて言つた。「見ておいで、バリヨ。きつと誰か窓を開けたんだよ……ほんとに寒くてやりきれないわー」

バリヨは自分ですつかり閉めて來たと言つた。どこか硝子が壊れてゐるのだらう。俳優達はいつも風が吹き込むので不平を洩らしてゐた。瓦斯の重苦しい熱さの中へ、冷たい風が流れ込んで、全くフォンタンの言ふやうに『肺炎の巢』であつた。「お前さんは鹹首になつた方がいゝよ。」とナナが機嫌を損ねて言つた。「しつ！」とボルドナアヴが囁いた。舞臺ではローズがその二重奏の一聯を素敵にうまく歌つたので、喝采の聲が管絃樂をも消してゐた。ナナは話を止め眞顔になつた。こちらではミラファ伯爵が、背景の間を進み過ぎたので、バリヨは見物席から見ると言つて引き留めた。伯爵は背景を裏から斜めに眺めた。書齋の裏面に

は、それを丈夫にするために古いボスターを厚く貼つてあつた。そしてそこから銀鑲に穿れたエトナの洞窟と、その奥にヴェルカンの鍛冶場が少し見えてゐた。三角燭臺が下ろされて、刷毛で塗上げた銀坑を照らしつけてゐた。青と赤の硝子を装置した支柱が、交互に籠の焰の色を調節してゐた。舞臺の中程には瓦斯管が並んで、床から黒い岩の列をくつきり照らし出してゐた。そして緩やかな傾斜になつた通路は、祭禮の夜、草の間に置いた燈火のやうな光の點々とある中であつて、そこにはジュノンを演ずるドルアル夫人が、眠さうに、眩ゆさうにして屈んで登場を待つてゐた。

その時、あたりがちよつと騒がしくなつた。クラリスの身の上話を聞いてゐたシモンヌが、「あら！ トリコンだわー」と叫んだ。

それは、髪を英吉利巻きにして、公證人を訪ねる伯爵夫人のやうな身ごなしのトリコンであつた。彼女は、ナナを見つけると、その方へ眞直ぐに進んで行つた。

「いゝえ、今はだめよ。」とナナが、手短かに言葉を交はしてから答へた。トリコンは不機嫌な顔をした。ブリュリエールが通り掛りに握手をした。小さな二人の補役女優が、心をわく／＼させながら彼女を眺めてゐた。彼女はちよつと躊躇つたやう



に見えたが、合圖をしてシモンヌを呼び寄せた。そして手短かに言葉を変はした。

「いゝわ、三十分してからよ。」と遂にシモンヌが答へた。シモンヌが樂屋へ歸ると、ブロン夫人がまた手紙を持って来て一通を彼女に渡した。ポルドナアヴは怒つて、低い聲でブロンに、トリコンを黙つて通した事を責めた。こんな女を！ 今晚のやうな時に通すなんて！ 殿下が居られるので、彼は腹を立てゝゐた。三十年もこの劇場で暮らしてゐるブロン夫人は、鋭い聲で言ひ返してゐた。彼女の知つたことだらうか？ トリコンはこゝの女達残らずと取引をしてゐるのだつた。ポルドナアヴだつて一言の小言も言はずに何度も顔を合せてゐたではないか。一方トリコンは、ポルドナアヴが手荒い言葉を吐き出してゐるのに知らぬ顔をして、一目で男を見抜く婦人らしくまぢ／＼と殿下を眺めてゐた。微笑がその黄色い顔を明るくした。それから彼女は、控へ目にしてゐる女達の間を靜かに歩いて出て行つた。そして、

「よくつて？ 早くよ。」とシモンヌを顧みて言つた。シモンヌはひどく厭さうに見えた。手紙はその晩逢ふ筈になつてゐた青年から来たのであつた。彼女は、「懐しきわが君よ、少々差支へ有之候まゝ、今宵はお目も相叶はず候。」と走り書きした紙切れをブロン夫人に渡した。しかし

花束が床に落ちて、圓くなつて寝てゐる黒猫の傍に萎んでゐた。仔猫は紳士達の足の間を、氣狂ひのやうに駆け廻つたり、追つ駆け合つたりしてゐた。ふと、クラリスはラ・フアロアズを追ひ出したと思つた。この鈍間は猫が嫌ひだつた。ます／＼馬鹿げてゐる。彼は親猫に觸れまいとして兩腕を窄めてゐた。

「とつ捉まるぜ、用心おしよ！」と手の甲で唇を拭きながら登つて来た道化役のアリュトンが言つた。それでクラリスはラ・フアロアズを追ひ出さうとする考を捨て、ブロン夫人が手紙をシモンヌの青年に渡すのを見届けた。青年はそれを玄關の瓦斯燈の下へ持つて出て讀んだ。「懐しきわが君よ、差支へ有之候まゝ、今宵はお目も相叶はず候。」そして、その文句にはもう慣れてゐたらしく、彼は落着き拂つて出て行つた。この男は少くとも身の振方だけは知つてゐた！ そして、ブロン夫人のあの暑くていつも黒臭のする硝子張りの大きなランプに照らされて、藥の抜けた椅子にいつまでも坐り込んでゐる他の連中のやうなことはしなかつた。こんな場所が、どうして人々を惹きつけるのだらう！ クラリスはすつかり厭な氣持になつて歸つて来た。舞臺裏を通つて、素早く樂屋の梯子を三階まで昇つて、シモンヌに返事を傳へた。

舞臺裏では、殿下が他の人達から離れてナナと話してゐ

彼女は、この青年がそれでもまだ待つてゐるやうに思へて不安になつた。もし三幕目に出るのでなかつたなら、すぐにも歸つてしまひたいと思つた。それで彼女は、見て来てくれとクラリスに頼んだ。クラリスは三幕目の終りにだけ登場することになつてゐた。彼女は、シモンヌが彼女等の共同の樂屋へちよつと駈け上つて行くのと行き違ひに、階段を下りて行つた。

階下のブロン夫人の酒場には、アリュトンの役を與へられた補役俳優が、燃え立つやうな緋の寛やかな衣裳を着けて、一人で飲んでゐた。階段の下その審が、コップから零れる酒でいつも濡れてゐるのを見ても、ブロンははじめ／＼うまく行つてゐるのに相違なかつた。クラリスははじめ／＼した階段に觸れないやうにイリイの衣裳を積み上げた。そして、彼女は注意深く立ち止つて、階段の端からたゞ頸だけを延ばして部屋を覗きこみ、様子を窺つた。まだ鈍間のラ・フアロアズが、燵と卓子の間の、前と同じ椅子にゐるではないか！ 彼はシモンヌの前では出て行くふりをして、直ぐ歸つて来たのであつた。この部屋には例によつて、絶えず手袋をはめて身なりを整へた柔順な辛抱強い紳士が満ちてゐた。彼等は待ちながらお互に眞面目な顔で睨み合つてゐた。卓子の上には汚れた皿だけが残つてゐた。ブロン夫人は花束を残らず運んでしまつた。たゞ一つだけ薔薇の

た。彼はナナにくつついて、眼を細くして絶えずやさしく眺めてゐた。ナナはその方は見えないで、微笑みながら點頭いて、承知したといふ身振りをした。その時ミラファ伯爵は、突然、全身の力で押し出されたやうに、滑車や太鼓の操作を説明してゐるポルドナアヴを置き去りにして、二人の會話を妨げる爲めに近づいて行つた。ナナは眼を上げて、殿下に微笑みかけたと同じやうに彼にも微笑みかけた。そして彼女は絶えず臺詞が自分までまはつて来るのを待ち構へて耳を澄ましてゐた。

「三幕目が一番短かさうだね。」と伯爵に妨げられた殿下が言つた。彼女は答へなかつた。舞臺へ出なければならぬので、突然顔の様子を變へた。ぱつと肩を揺つて外套を滑らせる。後に立つてゐたジュール夫人が両手にそれを受け取つた。そして裸體になつて、両手を頭に上げて髪を撫で、から、舞臺に出て行つた。

「レッ！ レッ！」とポルドナアヴが言つた。伯爵と殿下は吃驚してしまつた。觀客の遠いざわめきと深い溜息が、異常な靜かさの中に聞えて来た。毎晩このやうな同じ効果が、裸體の女神ヴェニスの登場する毎に現はれるのであつた。その時ミラファは、それを見ようとして節孔に眼を當てた。眩しいばかりのフライトの半圓のあち



らには、まるで茶褐色の煙が満ちたやうに場内が暗く見えて、そこに並んでゐる朦朧とした青い顔の列を背景として、ナナが眞白に大きく、天井に近い張出席まで届いてくつきりと浮き出てゐた。後からは、その張り切つた腰や、開いた胸が見えた。それと同時に後見の老人の顔が、彼女の足許の床に、まるで首を切られて其處へ置かれたものゝやうに、貧しさうな、また正直さうな表情を現してゐた。彼女が登場の數句を歌ふと、咽喉のあたりから浪打つ曲線が全身を滑り下りて、床に引いた衣裳の端にまで流れていつた。喝采の嵐の中で最後の一節を歌ひ終つて、彼女はお辭儀をした。背中を屈めると軽い衣裳が翻つて、髪が腰に觸れた。そしてそのやうに豊かな腰を屈めて、ナナが彼の覗いてゐる孔の方へ後退りして来るのを見て、ミリアは眞着な顔をして身を起した。今度は視野が忽ち變つて、最早、舞臺装置の裏面や、出鱈目に貼りつけられた色とりどりの古いポスターしか見えなかつた。通路の瓦斯管の匍つてゐるところには、全オリンブの人々が、居睡りをしてゐる。ドルアル夫人の周りに集つてゐた。彼等は幕の終るのを待つてゐたのだ。ポストとフォンタンは床に坐つて膝の上に頸を載せてゐた。プリュリエールは伸びをしたり、欠伸をしたりしながら登場を待つてゐた。みんな元氣なく眼を赤くして、早く歸つて寝たさうにしてゐた。

その時、舞臺の右側へ廻ることをポルドナアヴに禁じられて、左側をうろついてゐたフォシュリイが、誰か相手が欲しいので、伯爵に樂屋を御案内いたしませうかと言つた。艶めかしい感情が次第に募つてきて、意志をも失くしてゐたミリアは、あたりを見まはしてシュアール侯爵がゐないのを確かめると、記者の後に従つて行くことにした。そして彼はナナの歌の聞えて来る舞臺裏を離れると、ほつとすると同時に何か不安になつて來た。フォシュリイは、直ぐ先に立つて階段を登り初めた。二階も三階も風除け戸で閉ざされてゐた。この階段は、よくミリア伯爵が慈善救濟會の會員として行く先で見受ける、怪しげな家の階段と同じもので、たゞ黄の一角に塗りつぶしてあるばかりで何の飾りもなく、破損だらけで、昇降の度に踏まれるところはもう磨り減つてゐるし、鐵の欄干は手擦れで光つてゐた。どの踊り場にも、床から直ぐ近いところに四角な窓があつて、それが空氣抜きになつてゐた。壁に依り込んだランプには瓦斯の焰が燃えて、この惨めな有様をばつきり照らしつけてゐた。その放射する熱が立ち上つて、狭い螺旋階段の裏に籠つてゐた。伯爵は階段の下へ來た時から、光線とざわめきの波の中で、また頸筋の上に激しい女の香りが樂屋から下りて來るのを感じた。そして今は階段を一步々上る毎に、白粉の

香りや、化粧水の鋭い酸っぱい匂ひが益々彼を上氣させ、放心させてしまふのであつた。二階では二つの廊下が奥の方へ續いてゐて、そこで急に曲つてゐた。部屋の扉は、怪しげな設備のホテルのやうに、黄色に塗られて、太い白字の番號がついてゐた。床は、家が古いために歪んで、箆め板が幾枚か持ち上つて、こぼこになつてゐた。伯爵は大急ぎで、半ば開いた扉口にちらつと眼をやつた。それは場末で見かけるやうな鬻師の店で、二脚の椅子と、一面の鏡と、櫛の垢で黒くなつた抽斗つきの仕事臺が備へてあつて、非常に見苦しい部屋であつた。肩から湯氣を立て、汗みづくの男がそこで着物を着換へてゐた。すると、その隣と同じやうな部屋では、縮らせた髪が濡れて伸びてしまつた湯上りらしい女が、外出しようとして手袋をはめてゐた。フォシュリイが呼んだので伯爵は三階へ昇つていつた。その時右の方の廊下から、「あら、大變！」と叫ぶ鋭い聲が聞えて來た。身なりの汚ない無邪氣な少女のマチルドが、洗面器を毀したので、汚れた石鹼水が踊り場のところまで流れて來た。或る部屋では急いで扉を閉めた。コルセットのまゝの二人の婦人が、それを跳び越えて過ぎていつた。肌着の端を口にくはへた一人の婦人が、見えたかと思ふと直ぐ走つて消えて行つた。笑聲が聞えたり争ふ聲が聞えたりして、それから小唄を歌ひ初めたかと思ふと、それもはたと止んで

しまつた。廊下に沿つて、あちこちの隙間から裸體の一部分や、白い皮膚や、透き通る織物の端などが見えた。非常に快活な二人の若い女が目配せをし合つてゐた。そのうち一人はまだ全くあどけない子供で、着物の裾を膝の上までかゝけて、ズボンを縫つてゐた。すると衣裳方の女が、二人の通り掛るのを見、その場を繕つて軽くカーテンを引いた。どこでも今、芝居がすんだ後の紅や白粉をすつかり洗ひ落すのと、そしてその後で街へ出るための化粧をするのとで、粉白粉の霧のやうな中で皆が大急ぎだつた。扉の明け閉て毎に、激しい女の香りが二倍にもなつて匂つて來た。四階まで來るとミリアはすつかり頭がぼんやりしてしまつた。そこには、補役女優達が二十人も一緒に詰め込まれた樂屋があつた。まるで場末の共同宿泊所のやうな部屋で、石鹼やラゾアノ香水の匂が亂雑に置いてあつた。また通り過ぎるとき、彼は或る閉ざされた扉の中で亂暴に顔を洗ふ洗面器の水音を聞いた。最後に五階まで辿りつくと、彼は好奇心に驅られて、丁度開いたまゝになつてゐた覗き孔から中を見た。部屋には人影がなく、瓦斯の焰の下にはただ一つ忘れられた屎塚だけが、散らかつたスカートの床に引摺つてゐる間に見えた。この部屋の有様が彼の明かに覺えてゐる最後の光景であつた。この五階でたうとう彼は呼吸が苦しくなつた。あらゆる香りや焰が彼を打ちのめして



しまつたのだ。黄色な天井は焦げてゐるやうに見え、燈火は茶褐色を帯びた霧の中で燃えてゐた。彼は鐵の欄干につかまつた。と、それが何か生物のやうな冷たさに感じられた。彼は眼を閉じた。今まで知らずにゐた、ちよつと見ただけでも顔を赧めてゐた女といふものゝ秘密を、残らず彼は吸収した。

「さあいらつしやい。」と少し前から見えなくなつてゐたフオシュリイが呼んだ。「あちらでは皆があなたを待つてゐるんです。」

クラリスとシモンヌの樂屋は廊下のずつと奥の、屋根裏にある粗末な細長い部屋であつた。木口が露はに見え、壁には龜裂が走つてゐた。日光は兩側の家と家との深い間から入つて來るのであつた。しかし今は夜で、瓦斯の光が、緑の格子の上に薔薇の花を描き出した一帖七スウ位の壁紙を貼つた部屋を照らしてゐた。並べて置いてある二枚の板が、それ／＼化粧臺になつてゐた。その板は蠟引した布で覆はれてゐるが、それも水の零れた爲めに黒く汚れてしまつてゐた。化粧臺の下には、あちらこちらに窪んだ鉢力の水差しや、汚水一杯入つてゐるバケツや、粗末な黄色い陶器の水甕などが並んでゐた。勸工場のやうに、汚なく使ひ古された様々な品物が、曲りくねつて、たとへば疵のついた洗面器や、齒の折れた角の櫛などが、何の分け隔て

もなくいつも大急ぎで一緒に顔を洗つたり衣裳を脱いだりするこの二人の周圍に、亂雑に散らかつてゐた。彼女等はこゝでたゞ時間を過せばいいので、その汚なさなどは最早氣にならないのであつた。

「早くいらつしやい、クラリスが手を延してあなたを待つてゐるんですよ。」とフオシュリイが、女のところで男達が互に示し合ふあの狎れ／＼しさをもつて呼びかけた。

ミラファはたうとう樂屋に入つて來たが、その時化粧臺の間の椅子にかけてゐるシヤール侯爵を見て、吃驚してしまつた。侯爵は先刻からそこに引つ込んでゐたのであつた。バケツの底から漏れた水で白い水溜りが出來てゐるので、彼は足を開いてゐた。まるで浴室のやうに息苦しい中で、人々はみな快活になつて、こんな場所に氣樂さうにしてゐた。この不潔な部屋は、女が平氣で現はしてゐる淫らさを、却つて自然なゆとりのあるものに見せるのであつた。

「あのお爺さんと一緒に行くの？」と、シモンヌがクラリスの耳の側で訊いた。

「厭なこつたわ！」とクラリスは高い聲で答へた。

シモンヌを助けて外套を着せてゐた、大へん醜いが人なつっこい若い女は、身を燃つて笑つた。三人は體を突き合はせながら何か囁いて、益々はしやいでゐた。

「さあクラリスさん、あの方に接吻して上げなさい。お金

を持つてゐるんですよ。」と、フオシュリイが繰り返して言つた。

そして伯爵の方を振り返つて、「御覽の通り綺麗でせう、あなたを接吻したいんですよ。」

しかしクラリスは男達には飽き／＼してゐた。そして亂暴な言葉で、ブロンのところまで待つてゐる野暮な男どものことを話した。が、うっかりしてゐると、彼女の最後の登場に遅れさうなので、また急いで下りて行かなければならなかつた。けれども、フオシュリイが扉口を塞ぐので、彼女はミラファの頬髻に二度接吻して、

「だけど、これはあなたにしてあげるのぢやないのよ！ フオシュリイさんが邪魔するからなの！」と言つた。

そして彼女は出て行つてしまつた。伯爵は當惑したやうに眞の前に立つてゐた。上氣して顔が眞赤になつた。壁紙や鏡の贅澤なナナの樂屋では、この二人の女が投げやりに散らかしてゐる屋根裏部屋の見苦しい惨めな有様から受けるやうな鋭い刺戟は經驗しなかつた。その時侯爵はシモンヌの傍に寄つて何か言つてゐたが、彼女が頭を振つて斷るので、急いで彼女の後ろに從いて出て行つてしまつた。フオシュリイも笑ひながら二人に續いて部屋を出ていつた。すると伯爵は、洗面器を洗つてゐる衣裳方とたつた二人にな

つてしまつたのに氣づいて、今度は彼もそこを出て階段を下りて行つた。足がよろめいた。また彼が通りかゝると、下着だけの女が起ち上つて、急いで扉を閉めてゐた。しかしこんなだらしない女達の間を通つて行きながら、四階を通じて彼がはつきりと見たのはたつた一匹の猫だけであつた。大きな褐色の猫が、麝香の香りの漲つた蒸し熱い階段を登つて來ながら、背中を欄干の支柱に擦りつけて、びんと尾を立てゝゐた。

「さうよー」と、腹れた女の聲が聞えた。「どうせ今晚は、みんな呼ばれるだらうと思つてゐたわ！……招待なんかして、ほんとに煩さい人達ね！」

そのとき、芝居が終つて幕が下りたところだつた。人々が階段を駆け登つた。大急ぎで早く着物を着換へて街へ出ようとして、その騒ぎが階段に満ちてゐた。ミラファは最後の段を下り切つたとき、廊下をゆつくり歩いてゐるナナと殿下とを見た。ナナは立ち止つて笑ひながら低い聲で言つた。

「宜しうございますわ、今すぐね。」

それから殿下はボルドナアヴの待つてゐる舞臺の方へ歸つていつた。ミラファはナナと二人きりになると、激しい情慾に驅り立てられて、思ひ切つて後からナナに走り寄つた。彼女が樂屋に入らうとした時に、彼はその頸筋——肩



の間の縮れた短い金髪の上——にはげしく接吻した。それは丁度、五階で受けた接吻をそこへ返したやうであつた。ナナは驚いてすぐに手を上げて遮つたが、伯爵だと知ると、笑ひながら、

「まあ！ 吃驚いたしましたわ。」とたゞそれだけ言つた。

心では嬉しかつたのだが、その接吻を受けて當惑したやうに微笑む彼女の顔は、愛情に輝いてゐながらも慎ましく恥かしさうだつた。だが、彼女は、その夜もその翌日もどうすることも出来なかつた。待たなければならぬのだ。もし彼女にどうかすることが出来たとしても、それは男に自分を慕ふ心を募らせるだけのことであつたらう。やがて彼女は口を開いた。

「私、田舎にも家を持つてゐますの……さう、あなたが時々いらつしやるあのオルレアンの近くに、別荘を買ひましたの。あなたがいらつしやることは、子供のジョルジュ・エーゴンから聞きました。ジョルジュを御存じでせう？ あちらへ遊びにいらして下さいましわ。」

臆病者の癖に、今のやうな粗暴な行ひをしたことを、伯爵は我ながら恥かしく恐ろしく思つてゐた。そして彼女に丁寧な會釋をして、招待をうけることを約束した。それから夢の中を歩くやうにして、去つた。彼はまた殿下と一緒に於て樂屋の前を通つてゐると、

サタンの叫ぶのが聞えた。

「いやな爺ね！ かまはないでおくれよ！」

それは心變はりしてサタンを追ひかけ初めたシニール侯爵であつた。サタンの方では、そんな社交界の人は心から嫌つてゐた。ナナが彼女をボルドナアヴにうまく紹介した後のことであつた。しかしサタンは、馬鹿なことを言つてはならないと思つて、堅く口を噤んでゐたのですつかり疲れてしまつた。そして彼女は、こんなに零落れ、ば零落れるほど、嘗て惚れ合つてほんの一週間一緒に居たつて、殿下られたことのあるもと菓子屋だつた情夫の、今はブリュトンの役をしてゐる補役俳優と、舞臺裏でもう一度會ひたいと思つた。それで彼女は待つてゐたが、侯爵がまるでこゝの女優をでも相手にするやうに言ひ寄るので、腹を立て、たうとう威丈高になつてかう言つた。

「見て、御覽よ、今に私の亭主が来るんだから！」

その時俳優達が外套にくるまつて、疲れた顔をして一人一人歸つて行つた。下端の女優達や男俳優が一團となつて、曲りくねつた狭い階段を下りて來た。顔料を洗ひ落した醜い蒼ざめた横顔を見せ、擦り切れた帽子を被つたり、古い肩掛を羽織つたりして、暗い中を通つて行つた。舞臺では支柱も三角燭臺も燈火を消されて、殿下はボルドナアヴから劇場にあつた面白い珍らしい話を聞いてゐた。彼はナナ

の出て來るのを待つてゐたのである。ナナが現はれた時に、暗くなつた舞臺には、消防係が巡視を終つてその提灯が動いてゐるばかりであつた。ボルドナアヴは殿下がバノラマ街へ廻らなくても済むやうに、ブロン部の屋から劇場の裏口に通ずる通路を開かせた。すると女達が、道に待ち受けてゐる男達から逃れられるのを喜んで、先を争つてそこを通つて行つた。彼女等は押し合つたり腕を突き合せたり、後ろを振り返つたりなどしてやつと外に出て息をついた。彼女等が好きな男と一緒に並樹街でも歩いてゐる頃に、フオンタンとポストとブリュリエールが、眞剣な顔を、てワリエテ座の廊下を駆けまはつて女を捜してゐる男を冷かしながら、悠々と歸つて行つた。クラリスは、殊に意地が悪かつた。彼女は、ラ・フロアアズが歸つたとは信じてゐなかつた。果してブロン夫人の椅子に頭張つてゐる紳士達に交つて、彼もまだそこに待つてゐたのだつた。誰も彼も眼を光らせて待つてゐるところを、彼女は澄ましこんで、友達の蔭になつて通り越してしまつた。紳士達はそんな長い間待つてゐたのに、女達が狭い階段にスカートを纏らせながらどやどやと一時に降りて來たのに驚いて、誰が誰だか少しも分らないで、みんながそんな風にして歸つて行つてしまふのを見て、落膽して眼をばちくりさせてゐた。一ヶ所だけ腹の黒い仔猫等は、皆、矢伸をして足を伸ばしてゐる親猫の

腹に集つて、蟻引布の上で眠つてゐた。褐色の毛をした大きな雄猫は、尾を延ばして卓子の一方の端に坐つて、黄色い眼で、女達が逃げて行くのを眺めてゐた。

「殿下、どうかこゝをお通り下さいませやうに。」と道を示しながら階段の下でボルドナアヴが言つた。

補役女優が二三人まだそこを通つてゐた。殿下はナナの後から従つて行つた。ミリアアと侯爵とが、更にその後を續いた。それは長い管のやうな、劇場とその隣の家屋との間の、一種の狭い路次で、硝子を張つた天窗が幾つか開いてゐる、廂に覆はれてゐた。壁には濕氣が滲んでゐた。まるで地下を歩いてゐるやうに、足音が鋪道の上に反響した。そこにはまた、門番が仕上げの鉤をかける仕事臺や、夕方客の整理をするために木戸口に立てる木柵が積み重ねてあつて、物置小屋のやうに一杯ごた／＼としてゐた。水道のあるところでは、栓が締め切つてないために鋪石が水に浸されてゐたので、ナナは着物の裾を濡み上げなければならなかつた。一同は裏口で挨拶を交はして別れた。ボルドナアヴは一人になると、馬鹿にし切つたやうな態度で兩肩をすぼめて、殿下に對する彼の考へを口にした。

「兎に角、少し鈍間さ。」彼はその上の説明はしないで、ロイズ・ミニオンが、自分の家で夫と仲直りをさせようとして連れて行くフォシユリイに向つて言つた。



ミッファは舗道の上で一人になった。殿下は、彼の馬車に静かにナナを乗せてゐた。侯爵は何か漠然とした慰みの希望を感じて、唆のかされるやうに、サタンとその情夫である補役俳優との跡を喜んでつけて行つた。ミッファは、頭が熱いので、歩いて歸らうと思つた。彼の心ではもう戦が止んでゐた。波のやうな新しい生活力が、彼の思想と四十年の信仰とを溺らせてしまつた。並樹街を通つてゐる間にも、夜更けに通る馬車の響きがナナの名を言つてゐるやうに思はれた。瓦斯燈の光は、彼の眼前にナナの柔らかな腕や、白い露はな肩を踊らせた。そして自分がナナの虜になつてしまつたのを感じた。彼女を一時間、たゞ一晚、もし所有することが出来るなら、彼は一切を否定し、何もかも賣り飛ばしてしまふだらう。それは、遂に眼醒めた彼の青春であり、加特力信者の冷たさと成熟した男の威厳の中に、突然燃え上つた青春であつた。

六

ユーゴン夫人が息子のジュールと二人きりで暮らしてゐたフォンデットへ、一週間ばかり招待されて、ミッファ伯爵が妻と娘を連れて到着したのは、昨日の夜であつた。その家は十七世紀の末に建てられたもので、大きな正方形の敷地の中央に、飾り氣もなくぼつんと立つてゐた。だが庭

には立派な木蔭があつて、あちらこちらの水盤には泉から湧く水が流れてゐた。それはオルレアンから巴里に通ずる街道に沿つてゐて、まるで緑の波か、木立のやうに、耕地が無限に續いたこの地方の風景の單調さを破つてゐた。

十一時に、二つ目の鐘が鳴つて一同が朝飯に集つた時、ユーゴン夫人は母親らしく優しい微笑を浮べて、サビイヌの兩頬に二度も大きな接吻をして言つた。

「ね、田舎では、いつもこんなにする習慣なんですよ……、まあこの家へ来ていたゞけて、私は二十年も若返つたやうな氣がしますよ……昨夜はあの昔のまゝの部屋で、よくお寝みになれましたか？」

それからその答へは待たないで、今度はエステルの方に向いて、

「あなたもよく眠りましたか？……さあ接吻して頂戴。」

そこは廣い食堂で、窓はみな庭に向つてゐた。人々は大きな食卓のたゞ一隅にかたまつて、出来るだけ親しく傍へ寄り合つてゐた。サビイヌは眼を覺ましたときから非常に快活になつて、嘗つてフォンデットで過した幾月かの、長い間散歩をしたことや、夏の或る夕暮に水の中へ落ちたことや、また衣裳戸棚の中から『騎士物語』を發見したことや、葡萄の枝の燃えてゐる燧爐の前でそれを讀み耽つたことや、さうした若い頃の記憶を思ひ出さずにゐられなかつ

た。サビイヌを幾月も見なかつたジュールは、顔の様子が少し變つてゐるのを見て可笑しく思つた。またひよる長いエステルは、それとは反對に、一層顔色が悪くなつて、素氣なく黙つてゐた。

一同が半熟の卵とカツレツの非常に簡単な朝食を攝つてゐる時に、ユーゴン夫人は主婦として、こゝの牛肉屋は皆商賈を廢めてしまつたので、今では何もかもオルレアンから取り寄せてゐるのだが、何時も註文通りに届けてくれないのだとこぼしてゐた。また、食べ物がつづいても、それはこんな季節が過ぎてから來たあなた方の罪だとも言つた。「ほんとに仕様がないわ。」とユーゴン夫人が言つた。「六月からお待ちしてゐて、もう九月の半ばですものね……だから御覽なさい、もう美しくないでせう。」

彼女は體を動かして、黄葉し初めた芝生の木立を示した。空は曇つて、憂鬱な静けさと平和の中に、青い霧が遠くに立ち罩めてゐた。

「まだお客様が見えますのよ。」と彼女は續けた。「もつと賑やかになりますわ……。ジュールがお招きしたフォシュリイさんとダグネさんのお二人ですの、あなた方も御存じでせう？……それから、五年も前から約束してあるブンドゥルさんも。あの方も今年も多分思ひ切つておいでになるでせう。」

「まあ、いゝこと」とサビイヌが笑ひながら言つた。「ブンドゥルさんさへいらして下さればね！でもあの方は大變忙がしいさうですから。」

「フキリップさんは？」とミッファが訊いた。

「フキリップは休暇を願つてゐますのよ。」と、老夫人が答へた。「でも、あれが歸つて参ります頃には、あなた方もフォンデットにはゐらつしやらないでせう。」

珈琲が出て、話題は巴里に移つた。シュタイネルの名も出た。それを聞くとユーゴン夫人は軽い叫びをあげた。

「では、シュタイネルさんといふのは、」と彼女が言つた。「何時かあなたのお宅でお目にかゝつた、あの肥つた銀行家のことでは？……厭な人ですわね！あの人はこゝから一里ばかり離れたギミエールの傍のラ・シウの後ろの方に、

或る女優のために屋敷を買つたさうぢやありませんか！近所の者が皆腹を立てゝゐますわ……。そんなこと御存じでせうにね？」

「いゝえ、少しも知りません。」とミッファが答へた。「へえ！シュタイネルがこの附近で土地を買つたのですか！」

ジュールは母がこの問題に觸れるのを聞いて、珈琲茶碗の上に顔を伏せてゐたが、ミッファの答に驚いて、顔を上げて伯爵を眺めた。何故こんなに眞面目な顔をして嘘をつくのだらう？伯爵の方でも、この青年の舉動に注意して、



怪訝な視線を投げてゐた。ユーゴン夫人は續けて詳しい話をした。その土地はミニョットと云ふ所で、橋を渡らうと思へばラ・シュウからギムニールまで、道程にして二料たつぶりも廻らなければならぬし、さうでなければ、足を濡らして水禽の眞似でもしなければならぬといふことだつた。

「その女優の名は何と申しますの？」と、サビイヌが訊いた。

「ええと！先刻聞きましたかね。」と老夫人が呟いた。「ジョルジュや、お前は今朝、園丁が話してゐたときに私の傍にゐたでせう……」

ジョルジュは思ひ出さうと努めるやうな様子をした。ミニョットは指の間で小さな匙を廻しながら、答へを待つてゐた。その時サビイヌが夫に向つて言つた。

「シュタイネルさんなら、あのゾリエテ座の歌ひ手のナナぢやなくつて？」

「さうく、ナナですわ。厭なことですわね！」とユーゴン夫人が不機嫌に叫んだ。「そして、ミニョットへもうすぐ来るのですよ。私はね、何も彼も園丁から聞いたのですが……ね、ジョルジュや、あの園丁が今晚来るのだと言つてゐたね。」

伯爵は驚いて軽く身を顛はせた。しかしジョルジュは活潑

に答へた。

「いゝえ！お母さん、園丁は何も知らないで、喋つてゐるんですよ……つい先刻はまた取者が違つたことを言つてゐましたよ。明後日まではミニョットへ誰も来ないんですつて。」

彼は自分の言葉が伯爵に及ぼす効果を、横眼で窺ひながら、努めて自然な風を装つてゐた。伯爵は安心したやうにまた匙を廻した。サビイヌはぼんやりと庭の遠い木蔭に眼をやつて、突然心に浮んだ祕密な物思ひに耽つてゐるらしく、顔には微笑の影を浮べ、もう會話には注意してゐないやうであつた。エステルは人々がナナのことを話してゐるのを聞きながら、その處女らしい白い顔を動かさうともせず、ちつとしてゐた。

「けれどもね！」とユーゴン夫人はしばらく黙つてゐた後に、また平常の人のいゝ様子に歸つて呟いた。「私が腹を立てたのは間違つてゐましたわ。誰だつて皆生きて行かなければなりませんからね……たゞその方と道で出會つても、私達はお辭儀をしないまでのことすわね。」

そして食事をすまずと、彼女はまたサビイヌに、今年になつてからこんなに長く待たせたことの不平を言つた。併しサビイヌは自分の言ひ譯をして、その遅れた罪を夫に被せた。トランクの鍵もかけ、出發するやうにしてゐた前夜

になつて、二度も緊急な用事のために、伯爵がそれを取消したのだつた。そしてやつと、この旅行がお流れになりさうな頃になつて、突然出發して來たのだつた。すると老夫人は、ジョルジュも同じやうに、二度も歸つて來ると知らしめて置いて姿を見せなかつたが、突然一昨晩、もう歸つて來ないだらうと思つてゐた頃に、ひよつくり歸つて來たのだと言つた。一同は庭へ下りてゐた。女達の左右に別れて、それを聞いてゐた二人の男(ジュッファと)は、肩を疊やかした。「でもね、」と、ユーゴン夫人が、息子の金髪に接吻しながら言つた。「とにかくこの子は親切に、私と一緒に田舎の家で暮さうとして歸つて來たのです……この子は私のことを忘れないでゐてくれるんですよ！」

午後ユーゴン夫人には心配なことが起つた。ジョルジュは食卓を離れると直ぐに、頭が重いと言ひ出したが、それが少しづつひどい偏頭痛になつたのだつた。四時頃になると、彼は二階へ行つて寝たいと言つた。かういふ時にはそれが唯一の治療法で、明日までぐつすり眠れば、すつかり癒るでせうと言つた。母は彼を連れて行つて、自分の手で寢臺へ横にしてやつた。しかし彼女がその部屋を出ると、彼は飛び起きて、鏡を下してしまつた。誰か入つて來ると煩さいから、室に閉ぢ籠るのだといふ事に假託けた。そして、お休みなさい！お母さん、ではまた明日！と優しい聲で

ナ ナ

言つてから、ぐつすり寢込んでしまふと約束した。だが彼は横にならなかつた。明るい顔をし、眼を生き／＼と輝かしながら、音をさせないやうに服を着換へて、椅子にちつと腰掛けて時間の來るのを待つてゐた。夕飯の鐘が鳴ると、彼は、客間の方へ歩いて行くミニョット伯爵の様子を窺つてゐた。それから十分たつて、もう誰にも見つからないことが確實になると、襪に握まつて、素早く窓から脱け出した。二階の彼の部屋は丁度この家の裏側になつてゐた。彼は草叢の上に飛び下りて、庭を脱け出ると、一散に畑を駈けて、ラ・シュウの方角へ、腹の空いたまゝ胸をときめかせながら走りつゝけた。夜になつて、細かな雨が降り初めた。

それは正しくナナがミニョットへ到着した夜であつた。五月にシュタイネルがこの別荘を彼女に買つてやつてから、ナナは幾度も泣き出したほどこゝへ來たがつてゐた。しかしその度にボルドナアヴが、博覽會の開會中はたとへ一晩でも、代役にやらせる譯には行かないと言つて、一日の休暇も與へてくれないので、たうとう九月まで延ばした。八月の末にボルドナアヴが、十月にして呉れと言つたのを、彼女は腹を立て、九月の十五日には必ずミニョットへ行くと言ひ放つたのだつた。そしてボルドナアヴに當てつけるやうに、彼のゐる前澤山の人をミニョットへ招待して見せた。また或る日の午後、彼女が巧みに斥けてゐたミニョット



伯爵が、彼女の家で身を頼はせながら、自分の望みを表明けた時、彼女はそれを聴き入れはしたが、でもミニョットで、と言つて、彼にも十五日にといふ約束をしたのだつた。九月の十二日になると、彼女はゾエと二人きりでどうしてもすぐに出かけたくてたまらなくなつた。それにポルドナアヴが手を廻して、何とか彼女を引き留める方法を作り出すかも知れない。だから、醫者の診斷書を送りつけて置いて、彼を出し抜いてやるのは愉快だつた。そして、ミニョットへ眞先に行つて、誰にも知られずにそこで二日ばかり暮さうと思ひつくと、直ぐゾエをせき立て、荷物を作らせ、その背中を押すやうにして馬車に乗つたのだつた。馬車に乗ると急に優しい心になつて、ゾエを接吻して、許してお呉れなどと言つた。そして、停車場の食堂へ来てから、やつとシタイネルにも手紙で知らして置かうと思ひついた。もし私の元氣な顔が見たかつたなら、どうか明後日まで来るのを見合せてくれるやうにと、書いた。それから直ぐまた別に、二通目の手紙を書いて、伯母にルキを連れて早く来てくれと頼んだ。それは子供の健康にどんなに嬉しいことだらう！ また木の下で一緒に遊ぶのは、どんなに嬉しいことだらう！ 巴里からオルレアンまでの汽車の中で、俄かに目覺めて來た母性愛のうちに、花と鳥の間に我が子を交へながら彼女は眼を潤ませて、たゞそんなことばかり言

つてゐた。ミニョットはオルレアンから三里以上も離れてゐた。ナナは車を備ふのに一時間もかゝつた。その車は古い大きな無蓋の四輪馬車で、金具の音をたてながらゆつくりと進んだ。彼女は直ぐその小柄な無口の年取つた馭者を捉まへて、質問攻めにして弱らせた。幾度もミニョットの前を通つたところがあるとか、ではこの丘の後ろかとか、きつと樹木が茂つてゐるでせうとか、そして、その家は遠くから見えるかとか。その小柄な老人は吐くやうな聲で答へた。馬車の中では、ナナがたまらなくなつて踊つてゐた。ゾエは、そんなに急いで巴里を出たのが氣に入らなくて、苦い顔をして堅くなつてゐた。突然馬が立ち止つた。ナナは着いたのかと思つて、厩口から顔を出して、

「着いたの？」と訊いた。

馭者は答へる代りに馬に鞭をくれた。やつこのことで丘を上つた。ナナはうつとりとなつて、大きな雲が重なつた灰色の空の下、廣い平野を眺めてゐた。

「あら！ 見て御覽、ゾエ、草があるわ、これは麥だらうか？……まあ！ なんて美しいんだらう！」

「奥様が田舎の方でないといふことが直ぐに分りますわ。」

ゾエは、つんとした様子でたうとう口を利いた。「私なんか、田舎のことは知り過ぎてゐる位ですわ。私の奉公してゐ

た齒醫者さんは、ブウジヅールに家がありましたから……それにしても、今晚は寒うございますわ。この邊は濕ますのね。」

馬車は木の下を過ぎた。ナナは仔犬のやうに木の葉の匂ひを嗅いで見た。道が曲ると、突然、彼女は木立の間に建物の一角を認めた。きつとあれだらうと思つて、また馭者に話しかけた。馭者は例によつて首を振つて、いゝえと答へた。そして今度は丘の下り坂にさしかゝると、彼は鞭で指さして、

「それ、あそこです。」とだけ呟いた。彼女は立ち上つて、厩口から全身を乗り出して、

「どこなの？ どこなの？」と叫んだ。彼女は顔を蒼くして、何も眼に入らなかつた。

たうとうその塀の一端が見えた。すると、小さな聲で叫びながら、飛び上つて、感激を押し切れない有様であつた。

「ゾエや、見えたわ、見えたわ！……そちら側から見て御覽……おゝ！ 屋根には煉瓦の露臺があつてよ。あそこに見えるのが温室だわ！ 廣いわね……まあ嬉しいわ！ 見て御覽、ゾエや、見て御覽！」

馬車は鐵柵の前に止つた。潜り門が開いて、背の高い瘦せた園丁が、帽子を手にして現はれた。ナナは勿體ぶつて見せようと思つた。といふのは、馭者が唇を噛みしめてゐ

たが、内心では笑つてゐるやうに見えたからだ。彼女は園丁の——これはまた非常にお喋りであつたが——言葉を開きながら、駈け出したのを抑へてゐた。園丁は、奥様のお手紙がやつと今朝届きましたので、どうか整理の行届いてゐないのはお許し下さるやうに言つた。彼女は努めて抑へてゐたが、足は地に落着かないで、ゾエが従いて行かないほど早く歩いた。小徑の外れで彼女はちよつと立ち止つて、屐敷を見渡した。それは伊太利式の大きな家で、傍には、金持の英國人がナポリに二年ばかり滞在して歸つてから建てさせてすぐにまた厭いてしまつた、別棟の小さな建物がついてゐた。

「御案内いたしませう。」と園丁が言つた。併し彼女は、自分で歩いて見るから、又その方がいゝのだから、好きなやうにさせておくれと言つて、先に立つてずん／＼入つて行つた。そして帽子も脱がずに部屋から部屋を歩き廻り、廊下の端から端までその聲を響かせてゾエを呼び立てた。その呼び聲と笑ひ聲で、幾月も前から空いてゐたこのひつそりした家を満たした。先づ支關だが、これは少し濕つてゐたが、まさかそこで寝るのでもないし、どうでもよいことだつた。客間は、窓が芝生に向つてゐて、全く素敵だつた。たゞ赤い家具だけが、ひどくけば／＼しかつた。それは彼女が變へるだらう。食堂に至つては、ま



あ、何といふ美しい食堂だらう！ もしも巴里でこんなに  
 廣い食堂があつたら、どんなに立派な結婚披露の式が催さ  
 れることだらう！ 彼女は二階へ上つてから、臺所を見落し  
 て来たのを思ひ出して、聲を立てながら下りて来た。ゾエ  
 は流しもとの綺麗なのや、羊を丸焼に出来る程の大きな籠  
 に眼を圓くした。再びナナは二階へ上つて行つて、自分の  
 部屋を見るともううつとりしてしまつた。その部屋の壁  
 は、オルレアンの或る織物商の手で、ルキ十六世式の淡紅  
 色の麻布を覆つてあつた。あゝ！ こゝなら、どんなに氣持  
 よく眠れることだらう！ ほんとに氣持のいい巢だつた！  
 その他に四つ五つの客間もあつて、それからトランクを入  
 れるのに非常に便利な大きな屋根裏部屋もあつた。ゾエは  
 ナナの後から遅れ勝ちに従つて来て、顔を曇めながら、冷  
 たい眼付で部屋から部屋と見廻つた。そしてナナが、屋根  
 裏部屋の急な梯子を上つて行くのを見た。もう澤山だ！  
 落ちて足を折りたくはないから、と彼女は考へてみた。と、  
 遠くから、煙突の中を通つて来たやうに、また呼び聲が聞  
 えて来た。

「ゾエヤー！ ズエヤー！ どこにゐるの？ 上つておいでよ！  
 ……ねえ、上つて来ないの…。まるで夢のやうだわ！」  
 ズエは眩きながら上つて来た。見ると、ナナは屋根の上  
 で、煉瓦の手摺に凭れかゝつて、遠くへ擴がつてゐる谷間

の景色を眺めてゐた。地平線は果しもなかつた。それを灰  
 色の霧が立て罩めてゐた。早い風が驟雨を吹き立て、来た。  
 ナナは帽子を奪はれないやうに、両手で持たなければなら  
 なかつた。スカートは、旗のやうな音を立て、翻つてゐた。  
 「まあ！ たまりませんわ！」とゾエはすぐに顔を引つ込  
 めて言つた。「吹き飛ばされますよ、奥様…。なんて厭なお  
 天氣でせう！」  
 ナナはそれには耳も藉さないで、前屈みになつて、眼の  
 下の屋敷を眺めてゐた。塀に圍まれた敷地は六七千坪もあ  
 つた。菜園が眼につくと、彼女はぢつとしてゐられなくな  
 つて、大急ぎで階段の途中でゾエを押しやりながら吃つて  
 言つた。  
 「キャベツが一杯生えてゐるのよ！…まあ！ こんなに  
 大きいキャベツなのよ！…それからサラダと酸模と玉葱  
 と、まだ何でもあるわ！ 早くお歩きよ。」  
 雨は益々強くなつた。彼女は白い絹の蝙蝠傘を開いて、  
 小徑を駆け出した。  
 「邪を引きますよ、奥様！」とゾエは叫んで、玄關の雨  
 除け廂の下にぢつと立つてゐた。  
 しかしナナは見たくならなかつた。そして色々なもの  
 を見つける毎に、感嘆の叫びを上げた。  
 「ゾエヤ、蕨草があつてよ！ 来てごらん！…おゝ！

朝鮮蕨もあるわ！ これは可笑しいわね。もう花が咲いて  
 しまつたのかしら？…あら！ これは一體何なの？ 私  
 には分らないわ…。来てごらんよ、ゾエ。お前だつたら  
 きつと分るわ。」

ゾエはぢつとしてゐた。奥様はきつと氣でも狂つたのだ  
 らう。もう雨は盆を覆へすやうな豪雨になつて、白い絹の小  
 さな蝙蝠傘は、濡れて黒くなつ。それは十分ナナを覆へ  
 ないで、スカートから雨滴が落ちた。彼女はそれにも辟易  
 しなかつた。その驟雨の中で菜園や果樹園を見て廻つた。  
 どの木の下にも立ち止り、どの野菜の畝にも屈んで覗きこ  
 んだ。それから一つの穴を見つけて、そこに走り寄り、そ  
 の下に何があるのかと思つて蓋を取り除けて見た。そして  
 大きな南瓜に感心して見とれてしまつた。彼女の希望は、  
 かうしてすべての小徑を見廻つて、彼女が昔、巴里の舗道  
 の上に、労働者の穿くやうな古靴を曳きすつてゐた頃夢み  
 てゐた通りに、あらゆるものに親しく觸れてみたかつたの  
 である。雨は益々激しくなつたが、それにも怯まなかつた。  
 たゞ日の暮れて行くのが悲しかつた。もうはつきりと見え  
 なかつたので、彼女は指で觸れてみて、それが何であるか  
 を知らうとした。と突然、黄昏の中に、蕨のあることが分  
 つた。すると彼女の童心が叫びを上げた。  
 「蕨だわ！ 蕨だわ！ さうだ、それに違ひないわ！…」

ゾエヤ、皿を持つておいで！ 蕨を摘みにおいで。  
 彼女は泥濘の中に躊躇まり、傘を投げ出して、雨に打た  
 れるまゝになつてゐた。そして両手を濡らして、葉の間か  
 ら蕨を摘み取つた。が、ゾエは皿を持つて来なかつた。立  
 ち上つた時に、ナナはぞつとした。何か、影がやつて来る  
 のが見えるやうだつた。  
 「誰かゐるわ！」と彼女は叫んだ。  
 そして魂消げて、彼女は小徑の上に立ち竦んでしまつた。  
 それは一人の男だつた。彼女の知つてゐる男だつた。  
 「あらまあ！ 坊やぢやないの！…一體どうしたと言ふ  
 の？」  
 「やあ！」とジョルジュが答へた。「やつて来たんですよ。」  
 彼女は吃驚してしまつた。  
 「園丁に聞いたの、私が来るつて？…まあ！ この赤ち  
 やん！ ぶぶ濡れになつてさ！」  
 「後で言ひますよ。途中で雨に會つたんです。けれども、  
 ギュミエールまで引返す氣にはなれないので、ラ・シュウを  
 突き切つて歩いてゐるうちに、とんでもない水溜りに落ち  
 込んだんですよ。」  
 するとナナは蕨のことは忘れてしまつて、身を顛はせな  
 がら氣の毒に思つた。まあ可哀さうに、坊やは水溜りへ落  
 ち込んだりして！ 彼女はジョルジュを家の方に伴つて行き



ながら、すぐ火を焚かせよう、と言った。  
 「あのね、」と彼は、ナナを木蔭に立ち止らせて、囁いた。  
 「僕は隠れてゐたの。呼ばれもしないのに入つて行つたら、  
 また、巴里の時のやうに叱られるかと思つて、怖かつたか  
 ら。」

彼女は、それには答へないで笑ひ出して、彼の額に接吻  
 した。今日まで彼女は彼を子供扱ひにして、その言葉を眞  
 面目にとらなかつた。彼をたゞの子供のやうにからかつて、  
 楽しんでゐたのだつた。それにしても、彼を落ちつかせて  
 やらなければならぬ。兎に角、部屋に火を焚かなければ  
 ならない。それがいゝだらう、と思つた。ゾエは、どんな  
 意外な出會ひにも慣れてゐたから、ジョルジュを見ても少し  
 も驚かなかつた。しかし園丁は、薪を運んで来て、この滴  
 の垂れてゐる男を見て驚いてしまつて、確かに自分ほどの  
 扉口も閉めて置いたのに、こんな男がどうして入つて来た  
 のかと思つた。園丁にはもう用事がなかつたので、直ぐ追  
 ひ歸された。ランプが一つ部屋を照らしてゐた。燧燻の火  
 は大きな焰を上げてゐた。

「乾きつこないわ、風邪を引いてしまふわね。」とナナは  
 ジョルジュが慄へてゐるのを見て言つた。  
 しかし男のズボンにはなかつた！ 彼女は、園丁を呼ぼう  
 かと思つたが、ふとしたことを考へつた。化粧室でトラ

ソクを開けてゐたゾエが、ナナの着換へのために、寝衣や  
 スカートの化粧着を持つて入つて来た。  
 「あゝ、それでいゝわ！」とナナが叫んだ。「坊や、ね、そ  
 れをみんな着てしまひなさい。どう？ 私のが厭ぢやない  
 でせう……そして着物が乾いたら、またそれを着て、お母  
 さんに叱られないやうに急いでお歸りなさい……。早くな  
 さいよ。私も、化粧室へ行つて着換へて来るからね。」

それから十分ほど経つて、彼女は部屋着に着換へて歸つ  
 て来て、嬉しうにジョルジュの両手をとつた。  
 「まあ！ なんて可愛い女の子でせう！」  
 ジョルジュはたゞ、いゝ加減に寝衣に手を通して、刺繍の  
 あるズボンを穿いて、その上から、レース飾りのついたリ  
 ソネル襪ひの、長い化粧着を着てゐた。彼がそんな着物を  
 着て、その若々しい両腕を露はにし、まだ濡れてゐる金  
 髪を頸まで垂らしてゐるところは、まるで娘のやうだつ  
 た。

「私と同じくらゐに瘦せてゐるわね！」とナナは彼の胸を  
 抱いて言つた。「ゾエや、どんなによく似合つてゐるか来て  
 見て御覽……。どうでせう！ よく體に合つてるわね。胸  
 着だけは大き過ぎるけれど……。この可哀さうな坊やの胸  
 は、私のよりも小さいわ。」  
 「あゝ、さうです。僕は胸が少し狭いのです。」とジョルジュ

が笑ひながら言つた。

三人とも陽氣な氣持になつた。ナナは自分で化粧着の鈕  
 を上から下までかけてやつて、きちんとさせた。それから  
 スカートの後を軽く敲いて膨らませたりなどして、まるで  
 彼を人形のやうに扱つた。そして、着具合はいゝか、寒く  
 はないか、など訊いてゐた。えゝ、大變いゝ、とジョル  
 ジュが答へた。女の寝衣ほど暖かいものはないので、出来る  
 ことなら何時も着てゐたいと彼は思つた。布地の肌觸りが  
 いゝので、彼は嬉しうに體を動かしながら、ゆつたりし  
 た着物の良い匂ひを嗅いでゐた。そこにはナナの温かな生  
 命が、まだ少し残つてゐるやうに思はれた。

一方ゾエは、彼の濡れた着物を持つて、籠の火の前で出  
 来るだけ早く乾かすやうに、裏所へ下りて行つた。ジョル  
 ジュは脇掛椅子に身を投げて、やつと白狀をすることが出  
 來た。

「ねえ、あなたはもう今晚は何も食べないんですか？……  
 僕は、腹が減つて死にさうなんです。夕飯を食つてゐない  
 んですよ。」

ナナは腹を立てた。この馬鹿な男は、お母さんの家を脱  
 け出して、腹を空かせて水溜りの中へ落つこちに来たのだ  
 らうか！ だが彼女もひどく空腹だつた。何か食べなければ  
 ならなかつたのだ！ が、手に入るもので辛抱しよう。そ

こで燧燻の前へ滑らして来た圓卓子の上に、可笑しな夕飯

の準備をし初めた。ゾエは園丁のところへ駈けつけた。園  
 丁はキャベツのスープなら作れた。が、もしこゝへ来るまで  
 に、オルレアンで夕飯をしなかつたら、それを手紙に認め  
 て、何か準備をするやうに言つてくれよばよかつたのに、と  
 思つた。幸ひに、箸には色々なものが貯蔵してあつた。そこ  
 でヘットを使つてキャベツのスープを作ることが出来た。そ  
 れから、ナナは袋の中を掻き廻して、こんな場合にもと思  
 つて入れて置いた鳥の肝臓の小さなパテとか、ボンボン  
 の袋だとか、蜜柑だとかを取り出した。二人は友達のやう  
 にして、少しも極りの悪い思ひをせず、二十年も食はずに  
 ゐたやうな勢ひで、餓鬼のやうに貪り食つた。ナナはジョル  
 ジュを「女友達」と呼んだ。その方がずつと親しくて、また  
 優しく思はれた。食後、二人はゾエを煩はすまいと思つて、  
 代る／＼同じ匙を使つて、衣裳棚の上にあつた果實砂糖煮  
 の壺を空にした。

「あゝ！ 私、十年もこんなに美味しい夕飯は、食べたこ  
 とがないわ。」とナナは圓卓子を押しやりながら言つた。

しかし、もう時間が遅かつたので、彼に悪い結果が起る  
 のを心配して、彼女は早く歸らせたいと思つてゐた。彼は、  
 まだ時間があると繰り返して言つた。その上、着物はなか  
 なか乾かなかつた。ゾエは、まだもう一時間もかゝると言



つた。そして彼女は、旅行の疲労で立つたまゝ眠るので、下へ降りて寝させることにした。静かな家の中に、二人だけになつてしまった。

それは非常に氣持のいい夜だつた。暖爐の火は燠になつて、青みがゝつた広い部屋の中は少し暑苦しかった。ゾエは降りる前に寢床をとつて行つた。ナナは暑くてならないので、暫らく窓を開けようとして立つて行つた。そして軽い叫びを上げた。

「まあーなんて美しいんでせう！……ちよつと見て御覽なさい。」

ジョルジュは俯へ来た。そして、窓の手擦が彼には低過ぎるかのやうに、ナナの體に纏つて、その肩に頭を凭せかけた。天候はすっかり變つてゐた。空は澄み渡つて、圓い月が野面に一帶の金色を布き流してゐた。それは嚴かな静寂さであつた。谷間が廣々と涯しもない平野に向つて擴がつてゐた。平野は月光で靜かな湖水のやうに見え、あちらこちらに樹木の影が小さな島を作つてゐた。ナナは再び幼い頃に歸るやうな氣がして、うつとりしてゐた。もう懐ひ出すことも出来ない昔の頃に、きつとこんな夜を空想してゐたやうに思へてならなかつた。汽車を降りてから彼女の眼に觸れたものすべてが、こんなに廣い野原も、強い香りを放つ草も、この家も、野菜も、皆が彼女の心を奪つて、

まるで巴里を離れたのが、二十年も前のことのやうに思へてならなかつた。彼女の昨日の生活は、遠いところのものになつてしまつた。彼女は今まで知らなかつたものを體驗した。その時、ジョルジュが頸筋へそつと甘えて接吻したので、彼女の心は一層うつとりしてしまつた。そして躊躇ひ勝ちに、愛情に疲れた子供に對するやうにジョルジュを片手で押しやつて、早く歸らなければならぬと繰り返した。ジョルジュはそれに逆らひはなかつた。彼は直ぐにも歸らうとしてゐた。

その時、鳥が啼いて、その後はまた静寂に歸つた。それは窓の下の、藪の中に来てゐた駒鳥だつた。

「あゝ。」とジョルジュは囁いた。「ランプの光が恐いのかも知れないから、僕が消して來ませう。」

そして又歸つて來て、ナナの體に手を置いて言ひ加へた。

「また直ぐ慰ませうね。」

駒鳥の啼くのを聴きながら、少年が彼女に擦り寄つてゐる時に、ナナはふと思ひ出した。さうだ、すつかりこの通りの有様を見たことがあるのは、あれは小説の中だつた。その頃彼女は、このやうな月と、駒鳥の歌と、愛に満ちた一人の青年とのことばかりを考へてゐた。あゝ！涙の出るほど、それが優しく嬉しく思はれた！しかし彼女は、眞面目に生活するために生れて來たのだ。そこで、大膽に

言ひ寄るジョルジュを押し退けた。

「いゝえ、そんなに言はないで頂戴、いゝえ、いけません……。あんたのやうな年で、そんな事はいけません……。ね、ねえ、私はあんたのお母様になつて上げませう。」

純潔な心が彼女に歸つて來た。彼女は顔を眞赤にしてゐた。しかしそれは誰にも見えなかつた。部屋は二人の後に、暗い闇に閉されてゐた。ひつそりとした野邊からは何の物音も起らず、何物も動かなかつた。嘗つて、彼女はこんなに恥かしいと思つたことはなかつた。當惑して、これではならないと思ひかへしながらも、彼女は少しづつ力が抜けて行くのを感じた。女の寢衣や化粧着を着たジョルジュの姿は、またしても彼女を笑はせた。彼女に付き纏つてゐるのは、女友達のやうに思はれた。

「いゝえー いけません、いけません。」と彼女は最後の努力をした後に、口籠るやうに言つた。

だが彼女は、この美しい夜を前にして、この少年の腕の中に、處女のやうに抱かれた。屋敷は眠つてゐた。

翌日フォンデットの家で、朝食の鐘で人々が集つて來た時、食堂の卓子は大き過ぎはしなかつた。第一の馬車はフォッシュイとダグネと一緒に來てゐたし、二人に續いて、その次の列車を降りたワンドゥル伯爵が到着したからだつた。一同の後から、眼を曇らせたジョルジュが、少し

蒼い顔をして食堂へ入つて來た。そして、もうすぐすつかり良くなりさうだが、しかしまだ時々發作的にひどく頭痛がすると答へた。ユーゴン夫人は、心配さうに微笑を浮べて彼の眼を覗き込みながら、今朝はまだよく櫛の入れられてゐないその髪の毛を掻き上げてやつた。するとジョルジュは、その愛撫に當惑したやうに退いて行つた。食卓に就くと、彼女は機嫌よくワンドゥルに話しかけて、私は五年間も待つてゐましたわ、など冗談を言つた。

「やつとお見えになりましたのね……一體今まで、何をしておらつしやいましたの？」

ワンドゥルはその冗談に調子を合せて、昨夜、俱樂部で途方もなく金を捲きあげられた話をした。そして彼は、田舎で餘生を送らうと思つてやつて來たのだと言つた。

「えゝ、ほんとですよ、この邊でどうか金持の家付娘を見つけて下さいませんか……。この邊はいゝ女のみなさうなところですね。」

ユーゴン夫人は同じやうに、ダグネとフォッシュイに、息子の招待を受け入れて來てくれたことを感謝してゐた。と、その時、彼女は三番目の馬車で、シユアール侯爵が入つて來るのを見て驚き喜んだ。

「まあ！これは、」と彼女は叫んだ。「今日はまるで何かの會のやうぢやありませんか？ ちやんと話し合せて



お置きになつたのでせう……如何です？　こんなにして一緒に顔をお合せになるなんて、ずるぶん久し振りですわね……あゝ！　もう私には何も不足はありません。」

また一人分の食器が運ばれた。フォシユリイはサビイヌ夫人の傍に坐つてゐた。ミロメニール街のあの嚴めしい客間の中で、あんなに打ち萎れて見えた彼女が、こゝでは生き／＼として快活に見えるので、彼は驚いた。反對に、エステルエステルの左にゐたダグネは、この無口な背の高い娘の傍に坐つてゐるのが、どうやら少し煙たいらしく、その尖つた兩腕は殊に氣に入らないやうだつた。ミッファとシユアーは、そつと視線を交はした。ワンドゥッセルは、近いうちに結婚するので、と冗談を言つてゐた。

「御婦人のことなら、」到頭ユイゴン夫人が言つた。「あなた方も御存じの方が、この近くにゐらつしやいますのよ。」そしてナナの名を言つた。ワンドゥッセルはこの上もなく驚いたやうな風をした。

「何ですつて！　ナナの家がこゝから近いんですつて！」フォシユリイとダグネも同じやうに叫びを上げた。シユアー侯爵は、何のことだか分らない様子で、鳥の胸肉を食べてゐた。男達は一人も笑はうともしなかつた。

「そしてね、」と老夫人が言葉をつゞけた。「その方も、私が言つてゐたやうに昨夜ミニョットに着いたさうですよ。」

今朝園丁から聞いて見ましたの。」

すると男達は、あり／＼と驚きの様子を現はさないでゐられなかつた。皆顔を上げて、何だつて！　ナナが着いたつて！　明日でなければ来ない筈だが、こちらの方が先に來てゐる積りだつたのに！　と思つた。たゞジョルジュ一人が、睫毛を伏せて、疲れたやうにコップを眺めてゐた。朝食の初めから、彼はぼんやりと眼を見開き、薄笑ひをしながら、居眠つてゐるやうだつた。

「まだ頭痛がするの？」と母親は彼から眼も放さずに訊いた。

彼は驚いて顔を赤くしながら、もう直ぐにすつかり良くなるだらうと答へた。そして踊り過ぎた娘のやうに、うつとりしてはゐるがまだ何處か飽き足らぬやうな顔をしてゐた。

「頸筋をどうかしたの？」とユイゴン夫人が驚いて訊いた。「赤くなつてゐるよ。」

彼は周章で口籠つた。何だか氣がつかなかつた、襟には何にもついてゐやしない。そして肌着の襟を立てた。

「えゝ！　蟲が刺したんですよ。」

シユアー侯爵はその小さな赤い斑點を、ちらつと横から眺めた。ミッファもジョルジュの顔を眺めた。皆、食事を終る頃に、遠足の計畫が出来上つた。フォシユリイはサビイ

又夫人の聲を聞いて、次第に心を動かされてゐた。彼が夫人に果物の皿を渡すとき、二人の手が觸れ合つた。彼女がちよつとその黒い眼で彼を見つめたので、彼はまた何時かの夜、酒に酔つた友人から聞いた打明け話を、ふと思ひ出した。彼女はもうこの前見たときと同じ彼女ではなかつた。彼女の心の中が更にはつきりと外に現はれてゐた。彼女の肩を柔らかに包んでゐる鼠色の薄絹の着物は、或る投げやりな氣持を、その洗練された神祕的な高雅さの中に見せてゐた。

皆が食卓を離れた後に、ダグネとフォシユリイが残つて、エステルエステルの事を、『男の兩腕に抱かれる美事な筈』など、容赦なく悪口を言つてゐた。しかしダグネは、記者が持參金は四十萬法だと言ふのを聞いて、眞顔になつた。

「だが母親の方は？」とフォシユリイが訊いた。「ねえ！　素敵だらう！」

「おゝ！　それは素敵さ！　だがとても駄目だよ、君！　「なあに！　分るものか……當つて見なけりや。」

まだひどく降つてゐて、この日は外へ出られなかつた。ジョルジュは急いで姿を消して、部屋に入つて、しつかり錠を下してしまつた。男達は皆、こゝへ落ち合つた理由を知つてはゐるが、お互に辯解がましいことを言ふのは避けてゐた。賭博ですつかりひどい目に逢つたワンドゥッセルは、ほ

んとに田舎で暮さうと考へてゐた。そして好きな女の傍にでもゐれば、少しは退屈退屈になるだらうと考へてゐた。

フォシユリイは、その頃ひどく忙しかつた。ローズに貰つた暇を利用してやつて來たのだが、もし田舎がお互の氣持を寛げてよもくれるなら、次の記事を種にしてもう一度ナナの心にとり入ることも出来るだらうと考へてゐた。シユタイネルのこと以來彼女を怨んでゐたダグネは、機會が許せばもう一度彼女と仲直りして、うまい汁を吸つてやらうと思つてゐた。シユアー侯爵は、靜かに時機を見計らつてゐた。そしてまだ紅もすつかり洗ひ落さずにこの土地へ來てゐるヴェニスヴェニスの後を従つて來た紳士達の中でも、ミッファが一番熱烈で、また一番激しく惱んでゐた。新しい情慾と恐怖と怒りの刺戟が、前後も分らなくなつた彼の心の中で、互に戰つてゐた。彼はナナが待つて居れと言つた形式的な約束を、その通りに信じてゐた。それに、何故また二日も早く出發したのだらう？　彼はその夜、夕食が濟んだらミニョットへ赴かうと決心した。

夜になつて伯爵が庭を出て行くと、その後からジョルジュもまた脱け出して行つた。彼は、伯爵がギュミエールの街道を歩いて行くの見届けて、ラ・シユウを突き切つてナナの家へ飛び込んだ。息を切らし、腹を立て、眼には涙を一杯ためてゐた。あゝ！　伯爵はあなたに會ひに來たのだ、と



彼はすつかり見抜いて言った。ナナは驚いて、この嫉妬の有様を眼の前に見ると、どんな事情かといふことを了解して、すつかり心を動かされてしまった。そして彼を兩腕に抱いて、力の限り慰めた。いゝえ、あなたは思ひ違ひをしてゐる、私は誰も待つてゐるのではない、と言つた。何でもないことにこんなに腹を立てるなんて、この子は何といふ赤ちやんなだらう！ 彼女は、ルキゼの首にかけて、も、ジョルジュ一人しか愛さないことを誓つた。そして彼に接吻して、その涙を拭つてやつた。

「何事につけても、私がどんなにあんたのためを思つてゐるか、それもすぐに分るでせうよ。」と彼女は、彼が少し落着いたのを見て言つた。「シュタイネルが、もう来て二階にゐるのよ……。ね、あの人を追ひ出せないことは、あんたも知つてゐるでせう。」

「それや分つてゐます。僕は何もそんなことを言つてゐるのぢやありません。」

「ぢやいゝわ……私は病氣だと言つて、あの人を奥の部屋に入れてゐるの。今荷物を解いてゐるわ……。さあ、誰も見てゐるものはないから、早く二階へ上つて、私の部屋へ隠れて、待つて、頂戴。」

ジョルジュは彼女の頸へ飛びついた。では彼女の言つたことはほんとで、多少は自分を愛してゐてくれるのだ！ そ

して昨日と同じやうに出来るだらう。二人はまたランプを消して、暗い部屋で、夜の明けまで話し合はう。と、その時電鈴が鳴つたので、彼は素早く其處を去つた。二階へ上つて、部屋に入ると、音を立てないやうに直ぐ靴を脱いだ。そして、カーテンの後ろに隠れ、床の上に坐つておとなしく待つてゐた。

ナナはミコフア伯爵を迎へたが、何か気がさして、まだそれはくしてゐた。彼女は伯爵に約束したのだし、伯爵を眞面目な男だと考へてゐるので、自分の言葉を守りたいと思つた。だがそれにしても、ほんとに誰が昨夜のやうなことが起らうと想像しただらう？ あの旅行と云ひ、彼女の知らなかつたこの家と云ひ、つぶぬれになつてやつて来たジョルジュと云ひ……しかもそれが皆こんなに楽しく思はれる以上、これを續けて行くのはどんなに嬉しいことだらう！ だが、伯爵に對しては、氣の毒なことに違ひない！ 彼女は三月も前から身持の正しい女のやうに振舞つて、伯爵を焦らせ、その情熱を一層燃え立たせてゐたのだつた。それなら彼はもつと待つてゐるが、いゝ。そしてそれが氣に入らないのなら、餘所へ行つてしまふが、いゝ。彼女はジョルジュを欺く位なら、いつそ何もかも失つてしまふ方がいゝと思つた。

伯爵は、近所の田舎の人が訪問に來たやうに、眞面目臭

つて坐つてゐた。両手だけが顫へてゐた。童貞を保つてゐた彼の熱情的な性質の中には、ナナの巧みな策略に刺戟された情慾が、時と共に次第にはげしく荒れ狂つてゐた。テュイルリイ宮殿の廣間を闊歩した侍従の、この堂々たる伯爵も、夜になると枕を噛み、怒りに燃え、何時も同じ情慾の影像を心に描いて、果ては涙に咽んでゐたのであつた。だが今度こそは、すつかり決定をつけようと決心してゐた。夕暮の森とした街道を歩きながら、彼は様々な野蠻なことを空想した。そして、最初の言葉を交はすや否や、彼はナナの兩手をとらうとした。

「いゝえ、いゝえ、いけませんわ。」彼女はただそれだけ、腹も立てずに笑ひながら言つた。

彼は齒を噛みしめて、また彼女を捉へた。そして彼女が身を蕩擻くと、彼は思慮もなくなつて無頼に、私は寢に來たのだと告げた。彼女は絶えず微笑みながら、當惑したやうに、彼の兩手を握つた。しかし柔らかく拒絶するために、押れくしい言葉を使つた。

「ね、どうか静かにして下さいまし……ほんとに、どうにもならないんですもの……シュタイネルが二階に來てゐるんですから。」

しかし彼は氣狂ひのやうだつた。彼女は男がこんな有様になるのをまだ見た事がなかつた。彼女は怖ろしくなり、

彼の口を抑へて大聲を立てさせまいとした。そして小聲で、どうか聲を立てないで放してくれやうにと願つた。そのとき、シュタイネルが下りて來た。たうとうこんな有様になつてしまつたのだ！ シュタイネルは入つて來た時、ナナが腋掛椅子に靜かに深く腰掛けて、かう言つてゐるのを聞いた。

「私ね、田舎が非常に好きですの……」

彼女は言葉を切つて振り返つた。

「あなた、ミコフア伯爵よ。燈火が見えたので、私達が來たのを喜んで、この邊を散歩のお序でにちよつとお寄り下さつたのよ。」

二人は握手をした。ミコフアは顔を曇らせて暫らく黙つてゐた。シュタイネルは不機嫌らしく見えた。巴里の話が出た。シュタイネルの仕事はうまく行かなくて、取引所の方もまづかつた。十五分ばかり経つてから、ミコフアは暇を告げた。ナナが送つて來たので、明日の夜どこかで會ひたいと言つたが、それも聴かれなかつた。シュタイネルは間もなく二階へ上つて、女なんて怪しからん奴だとか何とか呟きながら眠りに就いた。かうして、やつと二人の年寄りの始末がついた！ ジョルジュに會へるやうになつて、ナナが行つて見ると、彼はカーテンの後に、相變らずおとなしくして待つてゐた。部屋はもう暗くなつてゐた。ジョルジュ



は彼女を自分の傍の床へ坐らせた。そして二人は一緒に轉がつて遊んでゐたが、その素足が家具にぶつかると、接吻しながら笑を噛み殺した。ミユッファ伯爵は遠くのギュミエール街道を、帽子を手にして、その熱した頭を夜の静かな爽かな空氣に浸しながら、ゆるやかに歩いて歸つて行つた。

それから、来る日も来る日も生活は楽しかつた。ナナはジョルジュの腕に抱かれて、十五歳の頃の自分を再び見出した。この少年の愛撫をうけて、大人の不快さに慣れてゐた彼女の心の奥に、再び戀の花が開いたのであつた。彼女は、すぐに顔を赤くした。ちよつとした感動にも身を顫はせた。急に笑ひたくなつたり、また泣きたくなつたりした。驚き易い少女らしさのすべてが、彼女に歸つて來たのだ。情慾の影がさすのを、彼女は絶えず恥かしいと思つてゐた。今までそんなことを彼女は経験したこともなかつた。田舎は優しく彼女の心を潤はした。子供の頃、彼女は永い間、一頭の牝羊と小さな牧場で一緒に暮さうと願つてゐた。それは或る日、棒杭に繋がれて砲臺の斜面に鳴いてゐる一頭の牝羊を見かけたからである。今、残らず彼女のものであるこの屋敷やこの土地が、溢れるばかりの感動をもつて、彼女の胸を膨らませた。彼女の望みは、何もかも十分に満たされてゐたのだ。彼女は再び小娘らしい澄刺とした感覺をと

り返してゐた。夕暮には、一日を戶外で暮してうつとりとなり、木の葉の香りに酔ひながら、またカーテンの後に隠れてゐる坊やに會ひに二階に上つて來るのであつた。それはまるで、女學校の寄宿生が休暇中にくつそり人の眼を避けて、微かな音にも驚き、両親に知れはしまいかと怖れながら、結婚することになつてゐる從兄と最初の過ちを犯して、心嬉しいときめきや、身も溶けてしまひさうな恐怖を味つてゐる、そんな戀のやうにも思はれた。

その頃ナナは、感傷的な娘のやうに氣紛れになつてゐた。幾時間も月を眺めてゐることがあつた。或る夜は、家中が寢鎮まつてから、ジョルジュと一緒に庭へ下りたいと言つた。二人は木の下を、互に腰を抱き合ひながら散歩して、露に濡れてゐる草の中に寢轉んだ。また或る夜は、部屋の中で暫く黙つてゐたかと思ふと、ジョルジュの頸に抱きついて、歎息きながら、死ぬのが怖ろしいと繰り返した。また低い聲で、花と鳥に満たされたルラ夫人の戀物語を幾度も話して聞かせて、果ては涙に暮れながら話をやめ、心を籠めてジョルジュを抱き締めて、變らぬ愛の誓ひを求めた。そして二人が友達に歸つて煙草を吹かしながら、砲臺の縁に腰を下ろして素足の踵を木に打ち當てゑる時には、彼女自身でもよく知つてゐるやうに、ほんとに思慮のない馬鹿であつた。しかしナナの心を覆へしてしまつたのはルキゼの到着だ

つた。彼女の發作的な母性愛は、並はづれてまるで氣狂ひのやうに激しかつた。若い王子のやうな服裝をさせた子供を、日向に伴れだして、絶えず手足を動かすのを眺めてゐたり、彼女も一緒になつて草の上を轉がつたりした。そして彼女は、すつかり田舎が氣に入つたルラ夫人が横になつてすぐに駢をかいてゐるその隣まで、自分の傍にジョルジュを寝させようと思つた。ルキゼはルラとは反對に、ジョルジュに少しも迷惑をかけなかつた。ナナは子供が二人あるのだと言つて、彼等にその同じ氣紛れな愛情を傾けた。夜中に彼女は、何度もしジョルジュの傍を離れて、ルキゼがうまく呼吸をしてゐるかどうか見に行つた。そして歸つて來てまた引き續いてジョルジュを、母親らしい愛撫で可愛がつた。彼女が母親のやうに振舞へば、ジョルジュの方では、うまく彼女の腕の間に小さくなつて、喜んで添乳をされる子供のやうに揺ぶられてゐた。眞面目になつて、もう何時までも田舎を去るまい、とジョルジュに話しかけたほど、かうした生活は楽しく愉快なものであつた。皆を巴里へ歸らせて、誰からも離れて、彼と彼女と子供の三人で暮らしたいと、夜が明けまるで敷限りもない計畫を話し合ひ、野原で花を摘んだので疲れてぐつすり寢込んでゐるルラ夫人の高い駢も耳に入らなかつた。

かうした楽しい生活が一週間ばかりも續いた。ミユッファ

伯爵は毎日夕方に訪ねて來て、顔を膨らませ、手をはてらせて歸つて行くのだつた。或る夕方、彼は家へさへも入れて貰へなかつた。シュタイネルは巴里へ發たなければならなかつたが、ナナは病氣だと言つた。ナナは日毎にジョルジュを偽りたくない氣持が増して行つた。こんなに無邪氣な、彼女を信じ切つてゐる少年をどうして欺されよう！ 彼を欺したりしたら、彼女は女のうちの最も下等なものになるだらう、そんなことは厭だつた。この有様を見てゐるゾエは、口には出さなかつたが輕蔑し、奥様は馬鹿になつてしまつたのだらうと考へてゐた。

六日目に突然、この牧歌のやうな戀愛の中へ、大勢の訪問客が入つて來た。ナナは、多分來ないだらうと信じて、大勢の人を招いたのだつた。だから或る日の午後、ミニョットの門の前に、乗客を満載した乗合自動車に着いたのを見て、驚いて當惑してしまつた。

「來ましたよ！」とミニヨンが叫んで、眞先に車を下り、アンリイとシャルルの二人の子供を連れ出した。

その後からラボルデットが現はれた。そして引き続き下りて來る婦人達に手を借してやつた。それはリュシイ・スツワアル、カロリイヌ・エッケ、タタン・ネネ、マリイ・ブロンなどであつた。ナナはほつとして、もうそれでおしまひだと思つてゐると、ラファロアズが踏板から飛び下りて、



その兩腕を頼はせながら、ガガと娘のアメリイが下りるのを助けてやった。皆で十一人だった。それだけを落着かせるのは大仕事だった。ミニョットには、お客用の部屋が五つあつて、その一つはもうルラ夫人とルキゼが占めてゐた。そこで、一番大きな部屋はガガとラ・ファロアズに當て、アメリイは隣の化粧室で、十字寢臺に寝ることにした。ミニョットと二人の子供は三番目の部屋にして、ラポルデットを四番目の部屋に入れた。残つた一つの部屋を寢室にして、リュシイとカロリイヌとタタンとマリアの寢臺を並べた。シュタイネルは客間の長椅子の上に寝ることにした。一時間ほどして、すつかり割當が済むと、最初は腹を立てゝゐたナナが、すつかり機嫌を直して、女主人の役をした。女達はミニョットを賞め、この立派な屋敷に驚いてゐた。彼女等は巴里の空気をそつくり運んで来た。そして皆がてんでに笑つたり、大聲を上げたり、肩を敲いたりしながら先週中の出来事を話した。では、あのポルドナマツは、私がここへ逃げて来たのを何とか言つてゐまして？ いゝえ、何も心配するほどのことはなくつてよ。お上の手を借りてゝも伴れて歸るなど、最初は怒つてゐましたけれど、その晩から代役を使ひましたの。そしてあのヴィオレヌが代役を承つて、例の「プロンド・ヴェニヌ」で素敵にうまくやつてゐますわ。この消息を聞いて、ナナは眞面目になつた。

まだ四時になつたばかりだった。皆が揃つて散歩することになつた。「私が馬鈴薯をとりに行かうとしてゐると、丁度そこへあなた達が着いたんだわ。」とナナが言つた。そこで、一同は着物を着換へないで馬鈴薯をとりに行くことにした。園丁と二人の傭人がもう屋敷の奥にある畑へ行つてゐた。女達は跪づいて、指環をはめた手で土を掻き廻しながら、大きな馬鈴薯を見つけると叫び聲を立てた。そんなことがそれほどまでに愉快だつた。タタン・ネネは得意だつた。彼女は若い頃にこのやうな経験があつたので、皆を馬鹿扱ひにして、一生懸命になつて教へてやつた。男達はそんなに興がなかつた。ミニョットは眞面目な態度で、この田舎にゐる間を利用して、子供達に教育をしようと考えた。彼はバルマンチエ(十八世紀末にルキ十六世の援助を得て佛蘭西に馬鈴薯を普及せしめた人物)の話をして聞かせた。

「あゝ！ みんな明後日お發ちになるんだから、ほんとにつまらないわ。」とナナが言つた。「でも仕方がないから、何か面白いことを考へませうよ。」

そこで一同は、明日の日曜日に、こゝから七軒ばかり離れたシャモンにある古い修道院の跡を訪ねることにした。朝食を済ませた頃に、五臺の馬車がオルレアンから迎へて来て、夕方の七時頃にまたそれでミニョットへ歸つて、夕食を攝るやうにすれば、非常に愉快だらうと言ふのであつた。その夕暮、何時ものやうに、ミラファ伯爵は丘を上つて来て、門にある雷鈴を押した。しかし、煌々と輝いてゐる窓や大きな笑聲が彼を驚かした。ミニョットの聲を聞きつけると、事情が分つたので、この新しい邪魔者にすつかり腹を立て、この次に手荒なことをしようと思つて歸つて行つた。ジュールジュは、自分が合氣を持つてゐる小さな門から壁に沿つて静かにナナの部屋へ忍び込んだ。しかし彼は夜中過ぎまで待たなければならなかつた。彼女は酔つ拂つて、平生よりは一層母親らしい氣持になつて入つて来た。彼女は酒を飲むと、一層愛情が深くなり、人懐っこくなるのであつた。彼女はジュールジュをシャモンの修道院へ一緒に連れて行きたいと言つたが、彼は人に見られるのを恐れて行かないと言ひ張つた。もし誰かに、彼女と一緒に馬車に乗つてゐるのを見られたら、きつとひどい噂を立てら

れるだらうと言つた。しかし彼女が涙を流し、男のために身を投げ出した女の、はげしい投げやりな氣持にさへなつて訴へたので、彼はそれを慰めて、兎に角仲間に加はることを約束した。「ぢや、あなたは私を愛してゐてくれるのね。」と彼女は口籠つた。「さあもつと私を、心から愛してゐる、と言つて頂戴……言つてくれないの？ ね、もし私が死んだら、あなたはほんとに泣いてくれるかしら？」

ナナが来たので、フォンデットのユーゴン夫人の家が掻き亂された。毎朝食の時に、善良なユーゴン夫人は、彼女らしくもないことだが、ナナのことに就いて園丁から聞いた言葉を繰り返した。そして、世間の最も眞面目な人々に付き纏つて、彼等を惱ませる賣笑婦であると言ふのだつた。もと／＼極めて氣持の大きい彼女が、この頃は何かしら或る漠然とした不幸の豫感に怯えて、夜になると、見世物小屋から逃げ出した獸が近所へ現はれたかのやうに、怖れるのだつた。

そして彼女は招待した人々が、皆ミニョットの附近を散歩するのを非難して、口論を惹き起すやうなこともあつた。ブンドゥルが街道を、髪を亂した女と笑ひながら歩いてゐたのを見かけた者があつた。しかしブンドゥルは辯解して、ナナではないと誓つた。事實それは、三人目の王子をどん



なにして追ひ出したかといふことを一緒に歩きながら彼に話して聞かせたリユシイだったのだ。シユアール侯爵も毎日出歩いた。そして何時でも、それが醫者の命令だからと言つてゐた。ユーゴン夫人は、ダグネとフォシュリイに對しては厭な顔をした。殊にダグネはフオンデットを離れなかつた。ナナと仲直りすることはもう思ひ切つたが、エステルに對して敬意に満ちた愛情を示した。フォシュリイも同じく、ミユファ家の婦人達に對して慇懃にしてゐた。フォシュリイは一度小徑で、ミニヨンが兩腕に花を持って、息子植物の話聞かせてゐるのに行き會つた。二人は握手をして、ローズの消息を話し合つた。ローズは達者だつた。二人ともその朝彼女から、どうかいゝ空氣の中で、氣持よくお遊びなさいといふ手紙を受取つてゐた。ユーゴン夫人は、人々の中で、たゞミユファ伯爵とジョルジュだけを別に考へてゐた。伯爵はオルレアンに重大な用事があると言つてゐたので、賣笑婦のところへ通ふやうな暇はなかつた。ジョルジュはと言へば、可哀さうにこの子供は、夜になるとひどく偏頭痛がして、それで晝間は餘儀なく眠つてゐたので、彼女はそれを心配してゐた。

また一方フォシュリイは、サビイヌ夫人に對して平凡な騎士の役目を勤めてゐた。夫人は午後になると何時も外へ出かけた。彼女が庭の隅へ行けば必ずフォシュリイが、椅子を

運んだり蝙蝠傘をもつて行つたりしてゐた。その上彼は、下つ端の新聞記者らしい野卑な機智をもつて彼女を楽しませてゐた。田舎に来てゐるせゐもあつて、彼はすぐ夫人と親しい友達になつてしまつた。新しい青春に眼覺めた彼女は、この青年のがさつな嘲罵が、まさか彼女を捲き添へにするやうなことも出来まいと信じて、直ぐ彼の友達になつてしまつたのだつた。そして時々、繁みの蔭などで二人きりになると、互に探るやうな眼を見交はしたり、笑つてゐる途中でふと眞顔になつて、お互に心の中まで知り合つてゐるやうに黒い眼で睨み合つたりなどした。

金曜日の朝食には、また新しい食器を運ばなければならなかつた。テオフィール・ダグネが来たのだつた。ユーゴン夫人は、去年の冬ミユファの家で彼を招待したのを思ひ出した。ダグネは背中を圓くして、皆が彼に示してゐた畏敬を氣づいてゐるやうな風もせずに、とるにも足らない男のやうに、人の好ささうな態度を裝つてゐた。やつと人々の注意から忘れられるやうになると、彼は食後の小さな砂糖菓子を囁りながら、苺をエステルに渡してゐるダグネの様子を眺めてゐた。彼はまた、フォシュリイが何かの話でサビイヌを非常に喜ばせてゐるのを聞いてゐた。人々が彼の顔を眺めると、彼は靜かに笑つて見せた。食事が済むと彼はミユファ伯爵の腕をとつて、庭へ一緒に行つた。伯

爵の母が亡くなつてから、彼が伯爵に對して非常な權力を持つてゐることは誰も皆知つてゐた。この古い辯護士の手でなされてゐる伯爵家の管理に就いては、不思議な噂も擴まつてゐた。彼が来たのを厭がつてゐるフォシュリイは、ジョルジュとダグネに彼の財産の出所を説明してやつた。それは昔、彼がゼジュイト教會に頼まれて、大きな訴訟事件に携はつたから出来たのだつた。フォシュリイの言葉に従へば、このお人好しに見える、脂ぎつた優しい顔付の怖ろしい男は、今では、司祭達の陰謀にいつも首を突つこんでゐるのであつた。それを聞いてゐた二人の青年は、この老人の様子が馬鹿に見えるので冗談を言ひ初めた。この得體の知れないダグネが、司祭達のために文書を作成する大立物であるなど、言ふことは、二人に滑稽な空想のやうに思はれた。しかし、先刻と同じやうに、好人物のダグネに手をとられたミユファ伯爵が、まるで泣いたやうに眼を赤くし、非常に青い顔をして現はれたときには、彼等も黙つてしまつた。

「きつと地獄の話でもしてゐたのさ。」と冷やかしか好きなフォシュリイが囁いた。それを聞いてサビイヌ夫人が靜かに振り返つたので、二人の視線が會つた。二人はちつと眼を見合つて、先づ危険を冒す前に、お互に注意深く相手の心を讀まうとした。

何時もの通り食事が済むと、一同は花壇の端の方にあつて野原を見晴らす事の出来る露臺に出た。日曜日の午後は非常に氣持がよかつた。十時頃には雨になるかと思はれたが、空は晴れないまゝに乳色の霞に溶け、日光を内に罩めて金粉をまぶしたやうであつた。するとユーゴン夫人はその露臺の小さな出口から下りて、ギュミエールからラ・シュウまで散歩をしないかと言ひ出した。彼女は歩くのが好きで、六十歳にしては足も非常に早かつた。誰も皆それに賛成し、馬車の必要はないと言つた。かうして人々は、少しづつ組をなして、小川に渡した木の橋の袂まで来た。フォシュリイとダグネは、サビイヌ親子と共に先になつて歩いてゐた。ミユファ伯爵とシユアール侯爵はそれに續いて、ユーゴン夫人と一緒に歩いてゐた。ワンドゥルは眞面目臭つた退屈さうな顔をして、煙草を吹かせながら、一番後から街道を歩いて行つた。ダグネは歩を早めたり緩めたりして、一つの組から他の組へ、誰の話も聞き洩らすまいとするやうに、笑ひながら移り歩いてゐた。

「まあ、可哀さうに、ジョルジュはオルレアンへ行つたりして！」と、ユーゴン夫人は繰り返した。「あの年取つたタダエルニエ先生はもう往診はなさらないので、頭痛を診て貰ひに参りましたのですわ……さう、あなた方はまだお寢みになつてゐらつしやいましたわね。あの子は七時前に發ち



ましたから。それで、一緒にこゝへも来られませんでしたわ。」

そして彼女は言葉を切つてかう言つた。「あらー どうしてあの方達は橋の上に止つてゐるのでせう？」

女達とダグネとフォシユリイは、躊躇ふやうに橋の袂に立ち止つてゐた。何か障物があるらしく、心配してゐるやうであつた。けれども、道は自由に通れるのだつた。

「さあ、参りませう！」とミッファ伯爵が叫んだ。彼等は動かさなかつた。向うからやつて来るものを眺めてゐるのだが、他の者にはまだ見えなかつた。白楊の密生した道が、そこで急に曲つてゐたからである。しかしざわめきが大きくなつて来て、車輪の音が笑聲や鞭の音に交つて聞えて来た。そして突然、五臺の馬車が續いて現はれた。

どの車も車輪が折れんばかりに人々を満載して、爽かな、青や薔薇の明るい色の衣裳が、音を立てゝはためいてゐた。「一體何でせう？」とユーゴン夫人が驚いて言つた。

間もなく彼女はそれが何だかを感じ、推察して、このやうに街道を蹂躪する者に對して立腹した。「おゝー あの女ですわ！」と彼女は呟いた。「立ち止らないで、さあ、行きませう。そんなにしてゐないで……」

しかしもう進めなかつた。ナナとその一行をシャモンの

古跡に乘せて行く五臺の馬車は、小さな木の橋にさしかつた。フォシユリイとダグネとサビイヌ親子は、道を避け、ユーゴン夫人やその他の人も立ち止つて、道傍に並ばなければならなかつた。それは見事な分列式だつた。車の中には笑聲が止んで、珍らしさうに皆顔を覗かせた。沈黙の中に、馬の調子正しい蹄の音が聞えて、互にじろく／＼と顔を眺め合つた。最初の車にはマリア・ブロンとタタン・ネネが、スカートと車輪の上まで擴がらせ、公爵夫人のやうに反り返つて、徒歩の立派な婦人に輕蔑したやうな視線を投げてゐた。次の車にはガガが一人で椅子を占領して、その傍に坐つたラ・ファアロアズは、不安さうな顔をしてゐた。それに續いてラポルデットとカロリヌ・エツケの車と、リュシイ・スツワアルとミニヨンと彼の子供を乗せた車が過ぎた。最後には、無蓋四輪馬車にシュタイネルとナナとが一緒に乗つて、ナナは彼女の前の補助椅子に、その膝をナナの膝の間に入れてゐる哀れな可愛い坊や(ジュル)を坐らせて走り過ぎた。

「あの、最後の馬車のがさうでせう？」と靜かにサビイヌは、ナナを少しも知らない風を装つてフォシユリイに訊ねた。サビイヌが一步退かなければ、無蓋四輪馬車の車輪はもう少しで彼女に觸れるところだつた。サビイヌとナナは深い視線を交はした。それは決定的な、一瞬間に相手をはつきりと完全に評價しようとする視線であつた。男達は落

着き拂つてゐた。フォシユリイとダグネはびく／＼して、誰の顔も見分けられなかつた。シュアール侯爵は心配さうに、女達にからかはれるのを恐れながら、折り取つた草の莖を指頭に弄んでゐた。ワンドゥザルは一人で少し離れたところゐて、眼配せでリュシイに會釋をすると、彼女も通り過ぎながらそれに微笑み返した。

「用心しなさい！」とミッファ伯爵の後ろに立つてゐたダノオが騒いだ。

伯爵は周章で、彼の前を駈け去るナナの幻影を追つて見つめてゐた。伯爵夫人は靜かに振り返つて彼を眺めた。すると彼は眼を地に落して、まるで彼の肉と心を奪ひ去つて行く、馬車の音から逃れようとでもするやうだつた。彼はもう少しで苦惱の叫びを上げるところであつた。が、ナナのスカートの間に隠れてゐたジュルジュを見て、すべてを了解した。あんな子供に、あんな子供に、ナナが彼を見かへたかと思ふと、打ち碎かれるやうな氣持がした。シュタイネルは彼とは對等だつたが、しかしあんな子供が！

ユーゴン夫人は、最初はジュルジュが目につかなかつた。が、橋を渡る時に、もしナナの膝がうまく支へなかつたなら、彼は川の中に抛り出されるところだつた。彼は吃驚して、麻のやうに顔を白くし、堅くなつてしまつた。そして誰も眼に入らなかつた。恐らく彼は誰の眼にも觸れなかつ

たであらう。

「まあ！ まあ！」と突然ユーゴン夫人が言つた。「あの女と一緒にゐたのはジュルジュですわ！」

馬車は、互に見知つてゐて、しかも互に會釋も交はさない人々の、不愉快な空氣の中を過ぎて行つた。この微妙な瞬間の遭遇は、かうして永遠に忘れ難いものとなつたやうであつた。そして今や車は一層快活に、黄金の波打つ野の中へ、大氣を攪き亂しながら女達を運んで行つた。着物の裾は潑刺と蹴へり、笑聲や冗談が再び初まり、道の傍らに立ち止つて腹を立てゝゐるらしい身分の卑しからぬ人々の方を幾度も顧みた。ナナが振り返つたときには、躊躇つてゐた散歩者達は、やがて橋を渡らずに、もと来た方へ引き返すのが見えた。ユーゴン夫人は、ミッファ伯爵の腕に寄り掛つて口を嚙み、誰も彼女を慰めることが出来ないほど、悲しみに沈んでゐた。

「ね、あなたは」と、ナナが、隣の車から身を乗り出してゐたリュシイに呼びかけた。「あなたはフォシユリイが眼について？ きつと何か黒企みをしてゐるのよ！ 私がとつちめてやるわ……。そしてあのダグネも、私があんなに可愛がつてやつたのに！ 挨拶一つしやしない……。ほんとに、私に對して失禮ぢやなくつて？」

そして彼女は、あの紳士達の態度は立派だつたと言つた



シュタイネルに、恐ろしい權幕で喰つてかゝつた。それでは私達には、帽子を脱いで貰ふだけの値打もないのでせうか？ 見ず知らずの卑しい男でも、私達を侮辱してもいゝのでせうか？ え、え、あなたには立派な方ですわ。もう澤山よ。でも男達は、何時も女に對しては敬意を拂はねばなりませんわ。と彼女が言つた。

「あの背の高い女は誰なの？」と、リュシイが車輪の音の中で力一杯に叫んだ。

「ミリア伯爵夫人だよ。」とシュタイネルが答へた。

「あらさう！ さうだらうと思つてゐたわ。」とナナが言つた。「でもね！ あなた、あの伯爵夫人はまやかしのものだわ。立派な方ぢやなくつてよ……。いゝえ、いゝえ、きつと立派な方ぢやなくつてよ……。さうよ、私だつて眼が利くわ。まるで私が作つたやうに、あの奥様のことなら、何でもちやんと分るわ……。あの蛇のやうなフォシュリイと決して一緒に寝ないつて、あなたには賭をする勇氣があつて……。私は寝ると言つて置くわ！ 女同志なら、そんなことはすぐ分るのよ。」

シュタイネルは肩を響やかした。昨夜から彼の不機嫌は益々ひどくなつてゐた。彼は、明日の朝必ず巴里へ歸れといふ手紙を受け取つてゐた。それに、わざ／＼田舎まで来て、客間の長椅子の上へ眠るなんてことは、どう考へて見

ても面白くなかつた。

「お、この可哀さうな坊や！」とナナは、堅くなつたまままで溜息をついてゐるジョルジュの蒼い顔を見ると、直ぐに優しい氣持になつて言つた。

「どう、お母さんに見つからなかつたと思ふ？」とやがてジョルジュが呟いた。

「さうね、きつと見つかつたと思ふわ。お母さんの聲が聞えてゐたもの……私が悪かつたわね。あなたが来たがらなのを、無理に連れて來たりして……。ねえ、坊や、私がお母さんに手紙を書いてはいけないこと？ 優しいさうなお母さんだわ。だから私、あなたに一度も會つたことはなかつたんだが、今日初めてシュタイネルさんが連れて來たんだと書いてあげるわ。」

「いゝえ、いけない、手紙なんか書かないで下さい。」ジョルジュは非常に心配さうにして言つた。「自分で何とかうまく取り繕つて置きますよ……でも、叱られるやうなら、もう家へ歸らないで置かう。」

そして彼は、夕方に家へ歸つて言ふ嘘を一心に考へてゐた。五臺の馬車は、美しい樹木に縁どられた平野の中の果しもない一直線の路上を進んでゐた。燦銀のやうな風が野原に溢れてゐた。女達は馭者の後で面白さうに笑ひながら、車から車へとつきりなしに話を交してゐた。時々その内

の一人は遠くまで見渡さうとして、馬車が揺れて腰掛の上に倒れるまで、隣に居る者の肩に捉まつて立つてゐた。カ

ロリイヌ・エッケは、ラポルドットと大問題を論じ合つてゐた。二人とも、ナナが三月經たないうちに、あの別荘を手離すだらうと言ふことでは意見が一致した。そしてカロリイヌはラポルドットに、さうなつたら内緒でうまく立ち廻つて、安く買ひ取つてくれと頼んだ。彼等の前の車では、はげしい愛に燃えてゐるラ・ファロアズが、ガガの厚ぼつたい頸筋までは届かないので、脊骨のあたりに張りつめてゐる着物の上から接吻してゐた。補助椅子の上に堅くなつて腰掛けてゐたアメリイは、母が接吻されてゐるのを見て苛々して、手を振りながら二人にどうかやめてくれと言つた。また他の車では、ミニヨンがリュシイを驚かせようと思つて、子供達にラ・フォンテーヌの寓話詩を話してみろと言つてゐた。アンリイの方は殊に上手で、やり直してもせず一息に言つてしまつた。先頭の車ではマリア・ブロン

が、タタン・ネネの馬鹿を欺すのに疲れて、もう退屈し切つてゐた。彼女はネネに、巴里の製酪工場では、膠とサフランで卵を造るのだなどいふ話をしてゐた。が、兎に角道はあまり遠すぎた、どこまで行つても行き着くといふことがないのだらうか？ この質問は車から車へ傳はつて、ナナのところまで來た。ナナは馭者に訊ねて、立ち上つて

叫んだ。

「もう十五分ほどですよ……樹の間から、もう教會が見えてゐるでせう……」

そしてまた言葉をついで、

「あのシャモンの館の女主人は、ナボレオン時代の老婦人ださうですよ……。お、司教館の召使から聞いて來たジョゼフが、非常な道樂者だと私に言つてゐましたわ。またとないやうな道樂者だつたさうです。それが今では司祭様なんですつて。」

「何と言ふ名？」とリュシイが訊いた。

「ダンゲラル夫人。」

「イルマ・ダンゲラルですよ。私知つてますわ！」とガガが叫んだ。

元氣のいゝ馬の歩みに運ばれて行く馬車は、周圍に女達の感嘆の叫び聲を振り撒いて行つた。人々はガガを見ようとして頸を延ばした。マリア・ブロンとタタン・ネネは、腰掛の上に跪き、疊んだ幌の中に手をやつて、後向きになつてゐた。そして人々は心では感嘆してゐるのだが、意地の悪い言葉も交へて、四方から質問を浴せかけた。ガガがその女を知つてゐるといふことは、女達の心にガガの遠い過去に對して尊敬させた。

「あのね、私の若い頃、」とガガが言つた。「兎も角、あの



人が通つてゐるのを見た覚えがあるわ。家にゐるときはとも仕様のない女だつたさうよ、でも馬車に乗つてゐるところなど、なかく粹なものだつたわ！ 驚くやうな話や、汚ない話や、物凄いや、胸前を持つてゐることも聞いたの……だから館を持つてゐると聞いても、私は驚かないわ。あの入なら、あなた方から男を奪る位のこととは何でもないわ……まあ、あのイルマ・ダングラルはまだ生きてゐるなんて、ねえ！でも、もうきつと九十歳位にはなるでせう。」

突然、女達は皆眞面目になつた。九十歳！ リュシイの言ふ通りに、この中の一人だつてそんな年まで生き残るものはないだらうと思はれた。皆ひどく弱々しげな體のものばかりだつた。するとナナが、そんなに老練するまで生きてゐたくないわ、つまらないもの、と言つた。もう目的地近くまで来てゐた。會話の間に、馬を勵ます馭者の鞭の音が聞えた。しかしその音の中でリュシイは話を變へて、ナナに明日皆と一緒に歸ることを奨めてゐた。博覽會は終らうとしてゐるし、女達は巴里へ歸らなければならなかつた。彼女等の希望などには頼着せずに、季節が移らうとしてゐるからだつた。しかしナナは聴き入れなかつた。彼女は巴里を嫌つてゐて、そんなに早く巴里の土を踏みたいと思はなかつた。

「さうでせう？ ね、もつとこちらにゐませうね。」と彼女

は、シニタイネルのことなんか氣にもかけずに、ジョルジュの膝を挟んで言つた。

馬車が突然止つた。驚いて、一同は丘の麓の静かな場所に下りた。馭者の一人が彼女等に、鞭の先で、樹木の間に隠れたシャモンシャモンの古い修道院の跡を、教へなければならなかつた。その光景は全く意外なものだつた。木苺に覆はれたあちらこちらの廢墟の跡や、半分ばかり崩れた塔などは、女達にはつまらないものと思はれた。實際それはわざ／＼二里の道をやつて來るほどでもないものだつた。すると馭者は彼女等に、修道院の傍から庭の續いてゐる館を教へ、塀に沿つて小徑を通つて行くやうにと言つた。そして、皆が見物してゐる間に、馬車は村の廣場へ行つて、一同の歸るのを待ち受けることにした。散歩するには非常に氣持のいいところだと聞いて、一同はその言葉に従つた。

「おやまあ！ イルマはいゝ家に住んでゐること！」と言つて、ガガは庭園の端の道に面した鐵柵の前に立ち止つた。

一同は黙つて、鐵柵の中に見える幽邃な木立を眺めてゐた。それから小徑を辿つて、庭園の塀に沿つて進んで行きながら、高い枝が厚い緑の穹窿になつて覆ひかゝつてゐる樹立を見上げて感心した。三分ばかり進むと、また新らしい鐵柵の前に出た。そこからは廣い芝生が見渡され、百年以上もたつた二本の柳がその上にくつきりと影を落してゐる

た。そこからなほ三分も進むと、また鐵柵があつて、彼等の前には暗い廊下のやうな廣い道が續いてゐて、その出口の方は、星のやうにはつきりと日の光が見えてゐた。最初は見とれて黙つてゐた彼女も、少しづつ感嘆の言葉を洩らし初めた。羨ましいので少しは黒口も言つたが、やがてすつかり見とれてしまつた。イルマは何といふ偉い女だらう！ 女の肩身も廣くなる譯だ！ 樹木はずつと續き、到るところの塀は蔦が覆つてゐて、その上に離れ／＼に屋根が見えた。山樺毛山樺毛や白楊白楊の深い茂みに續いてポプラの並樹があつた。どこまでも果しがないのだらうか？ 女達は、道が曲る毎に何時も影深い繁みの外何も見えないのに倦きて、早く建物を見たいと思つた。彼女等は兩手で鐵柵を握つてそれに顔を押し當てた。この廣大な敷地の中の、まだ見えない館を想像しながら、彼女等は畏敬の念に打たれてしまつた。静かな路の曲り角に來る毎に、同じ鼠色の石の路がまた長く續いてゐた。先きへ行き着くことに絶望して、引き返さうと言ひ出す者もあつた。しかし、この散歩で疲れ、ば疲れるほど、益々彼女等の心は敬虔になり、一步は一步より、なほこの静かな幽玄な偉大な場所に打たれるのだつた。

「まあつまらないわ、ほんとに！」口の裡で「カロリヌ、エツケが言つた。」

ナナは肩を聳やかして、その言葉を打ち消した。彼女は少し前から黙つて、ちよつと蒼ざめた顔に眞面目な表情を浮べてゐた。突然、最後の角を曲つて村の廣場に出ると、塀が途絶えて中庭の奥に館が現はれた。その玄關の石階の廣くて高いことや、正面に見える澤山の窓や、縁を石で飾つた煉瓦造りの三つの突出部などに感心して、一同は立ち止つてしまつた。アンリイ四世が住んでゐたこの歴史的な館には、ゼノア製の天鵝絨を張つた大きな寢臺のある部屋もまだ残つてゐた。ナナは息をつまらせて、子供のやうにほつと消息をついた。

「まあ！」と彼女は自分に言つて聞かせるかのやうに、極めて低い聲で呟いた。

一同もすつかり感心してしまつた。突然ガガは、あの教會の前に立つてゐるのはイルマに違ひないと言つた。年はとつても、まだその快活な様子が残つてゐたし、どんな服装はしてゐても、昔に變らぬ眼をしてゐたので、ガガにはよく分つた。彼女は祈禱を済まして出て來たところで、暫らく車寄の下に佇んでゐた。非常にあつさりした實やかな朽葉色の絹の着物を着て、まるで革命の災禍を逃れて來た老侯爵夫人といった風の、犯し難い顔をしてゐた。右手に握つてゐる大きな祈禱書が日に輝いてゐた。そしてゆつくり庭を通つて行く彼女の後から、十五歩ばかり離れて制服



を着た侍僕が従つて行つた。シャモンの人々は皆教會から出て来て、恭しく彼女に敬禮した。一人の老人は彼女の手

に接吻した。一人の婦人はその前に跪つかうとした。それは老齡の、名譽ある偉い女王そのまゝの姿であつた。彼女は石階を登つて行つて、姿を隠してしまつた。

「秩序のある生活をすればこんな身分になるのだ、ミニョンはさも感心したやうに言つて、二人の子供を顧みて教訓を與へた。

すると皆がてんで、喋り出した。ラポルデットはイルマを非常に憤し深い人だと言つた。マリア・ブロンが卑猥なことを言ふと、リュシイは怒つて、老人を尊敬なさいと窘めた。結局、あのやうな女は見ることがないといふ意見に一致した。そして再び馬車に乗つた。シャモンからミニョットまでの間、ナナはちつと黙つてゐた。彼女は二度ばかり館の方を振り返つた。車輪の音に心を揺られて、彼女はもう傍にゐるシュタイネルも前にゐるジョルジュも忘れてゐた。

黄昏の中に幻影が浮んで、その中には、あの老齡の名譽ある偉い女王のやうな威嚴を作つて、絶えずイルマが歩いてゐた。

夜になつて、ジョルジュは食事を攝りにフォンデットへ歸つた。次第に氣持が變つて来て、今までと様子の違つて来たナナは、お母さんに許しを乞ふやうに言ひ聞かせて、彼を

送り歸した。私は急に家庭といふものを尊敬しなければならぬと思ふやうになつた、と彼女は眞面目に言つた。そして、今晚はもうこゝへ泊りに來ないことを彼に誓はせもした。彼女は疲れてゐた、そして彼はたゞ、彼女の言葉に従ひさへすれば、それで子としての義務が果せるのであつた。ナナの教へを聞いてがっかりしたジョルジュは、びくびくしながら頭を下げて母の前に現はれた。幸ひに、軍隊でも非常に元氣な兄のフキリッが歸つてゐたので、彼の涙を漉へた眼で彼を眺めたゞけだつた。それと察してゐたフキリッは、もしかしたその女の所へ出かけるやうだつたら、耳を引張つて連れて歸ると言つて嚇かした。ジョルジュはほつとして、すぐまた明日の二時頃脱け出して、ナナとこれから逢ふ約束をしようと私に考へてゐた。

フォンデットでは、皆が氣まつい思ひをして夕食を攝つた。ゾンドゥルはもう歸ると言ひ出した。彼は、十年來何の興味もなしに眺めて來たリュシイを、巴里へ連れて歸るのが面白く思はれた。シュアール侯爵は屈み込んで食事をしながら、ガガの娘のことを考へ、昔彼女を膝の上で遊ばせたことを思ひ出してゐた。子供達が何と大きくなつたことだらう！ あんなに小さかつたのが、今ではずるぶる大きくなつてゐた。ミラファ伯爵は殊に顔を赤くして、考へ

深さうに黙つてゐた。彼はジョルジュをちつと睨んでゐた。そして食卓を離れると、少し熱があると言つて二階へ歸つて行つた。その後をヴノオが急いで従つて行つた。二階へ上つた伯爵は、枕に顔を埋め、息を切らして、神經的に歎息してゐた。ヴノオは優しい聲で、私の兄弟よと呼びかけて、神の憐憫を乞ふやうに奨めたが、彼は聴き入れなかつた。彼は苦しさに嗚咽してゐた。それから突然、寢床から跳ね起きて口籠りながら言つた。

「行かう……。私はもうこんなにしてゐられない……」

「宜しい、私も一緒に行きませう。」と老人が言つた。二人は外に出た。それから小徑の闇の中に、二つの影が消えて行つた。今では、夕方になるとサビイヌ夫人とフォンシュリイは、お茶を出す時に必ずダグネにエステルの手傳ひをさせてゐた。道へ出ると伯爵は、非常に早足で歩いた。ヴノオは、それに従つて行くために走らなければならなかつた。そして息を切らしながら、肉の誘惑に就いて種々の教訓を垂れることを止めなかつたが、それも無駄であつた。伯爵は黙つて、闇の中を進んで行つた。ミニョットの前に着くと、彼はたゞかう言つた。

「もう我慢がならない……。どうか歸つてくれ給へ。」

「あゝ、神よ、御心のまゝになし給へ。」と、ヴノオは驕いた。「神は勝利を確かめるためにはあらゆる道をとる給ふ。

そしてあなたの罪も、神の武器の一つに過ぎないでせう。」ミニョットでは食事の時に口論が持ち上つた。ポルドナアヴからナナに宛てた手紙には、彼女を馬鹿にしたやうに精々御静養なさいと書いて、ヴィオレエヌが毎晩二度も、觀客の再演の聲で呼び出されてゐると書いてあつた。ミニョンがまた明日皆と一緒に歸らうと急ぎ立てると、彼女は立腹して、世話にならなくても歸るときには歸ります、と言ひ放つた。そして、食卓に就いてもつんと澄まし込んでしまつた。ルラ夫人が何か卑猥な言葉を言ふと、あゝ、私は、伯母一人にさへもそんな穢ららしいことを眼の前で言はせないやうにする力もないのだ、と言つた。さうかと思ふと、また急におとなしくなつて、優しく一同を見渡し、ルキゼに對する宗教教育のことや、自分自身の身持をよくすることなどを考へてゐた。皆が笑ふほど、彼女は眞面目なことを言つて、さも思ひ餘つた人のやうに首をか上げた。秩序だけが幸福に導くのだ、自分は貧乏して死にたくない、とも言つた。女達は呆氣に取られて噤き合つた。何といふナナの變りやうであらう！ 全く思ひがけないことだつた。しかしナナは、ちつと坐つたまゝ、空想に耽つて、どこを見てもないその眼は、非常に富んで、尊敬されてゐる自分の幻影を追つてゐた。

人々が二階へ寢に歸ると、ミラファが現はれた。庭で彼



を見つけたのは、ラポルデットだつた。彼は何も彼も呑み込んで、伯爵の手をとり、シュタイネルを避けながら、暗い廊下をナナの部屋まで連れて行つた。ラポルデットはかういふ仕事にかけては、少しも抜け目がなくて巧みだつた。まるで他人の幸福を作つてやることに情熱を感じてゐるやうだつた。ミッファが自分を怒つてゐるので、厭な氣持にはなつたが、ナナは少しも驚かなかつた。人生は眞面目に考へなければならぬ、戀するなどいふことは、馬鹿げたことで、結局何にもなりはしない、と彼女は考へてゐた。それから彼女は、ジョルジュの年の若さのことをよく考へて見た。ほんとに彼女は間違つたことをしてゐたのだ。あゝ！今度こそは心を入れ變へよう。さう思つて彼女は年をとつた男を捉まへた。

「ゾエヤ、」と彼女は、田舎を去るので喜んでゐる女中に言つた。「明日の朝起きたら、すぐに荷物を作つておくれ、もう巴里へ歸るのだから。」  
そして彼女はミッファと一緒に寝た。何の喜びもなく。

七

それから三ヶ月後の十二月の或る夕暮、ミッファ伯爵はパノラマ街を歩いてゐた。非常に暖かい夕暮で、驟雨が来た後なので、路上には群衆の波が満ちてゐた。それは、全

くひどい雑沓で、兩側の店の間を押し合つて、進まうとしても骨が折れて抄らなかつた。白く反射して光つてゐる硝子窓の中には、白い圓筒や、赤い提灯や、透明な青硝子や、瓦斯の列や、陳列品や、風に燃えてゐる大きな扇子形の焰などから、明るい光が煌々と流れてゐた。寶石商には金が、菓子屋には硝子の器が、婦人用装身具店には明るい色の絹が、磨きあげられた陳列棚の硝子の中に、強い反射鏡の光を受けて色とりとりに並べられてゐた。また亂暴なペンキ塗りの看板の中には、眞赤な大きい手袋が、遠くの方から見ると、黄色の袖を着けて手頸まで血に染つた手のやうに見えてゐた。

ミッファ伯爵は、ゆつくりと並樹街まで歩いて來た。彼は道路をちらと見渡したが、また小刻みに歩きながら、軒を並べた店先に沿つて戻つて來た。濕氣を含んだ生温かい空氣が、狭い路に明るい霧を漂はしてゐた。舗道は傘の滴で濡れ、人聲は少しも聞えないで、足音ばかりが續いてゐた。踵を返す度毎に彼と擦れ違ふ散歩者達は、口を噤んで、瓦斯の光に蒼ざめた顔をしてゐる彼を訝しげに眺めた。それで伯爵は、人々の好奇心から逃れるために、文房具店の前に立ち止つて、文鎮や、風景や花を描いてゐる硝子球を上げ／＼と見てゐた。  
だが、彼は何も見てゐなかつた。ナナの事ばかり考へて

ゐたのである。何故彼女は自分をまた欺いたのだらう？  
彼女は今朝、ルキゼが病氣でその看病の爲めに今夜は伯爵の家に泊らなければならぬから、來てくれるかと彼に手紙で言つて寄越した。しかし彼はそれを疑つて、彼女の家へ行つて見ると、門番の女が、今奥様は劇場へいらつしやいましたと教へてくれた。それは彼を驚かせた。彼女は今度の芝居では、何も役を引き受けてゐなかつたのだから。何故またこんな嘘を言つたのだらう？ 今晚ブリエテ座で何をしようと言ふのだらう？  
通りかゝつた人に押されて、伯爵は、ふら／＼と文鎮の前から歩き出して、玩具屋の陳列窓の前に來て、ぼんやりした様子で、どの隅にも同じ青い燕のマークのついてゐる手帳や葉巻入が並んでゐるのを眺めてゐた。確かにナナは裏切つたのだ。田舎から歸つた當座は、顔の周りや頬髯を親猫のやうに優しく接吻して彼を夢中にさせ、私はあなたを愛してゐる、こんなに愛してゐる人はあなた一人よりない、などと誓つた位だつた。彼は最早フオンデットの母の手許に留められてゐるジョルジュを少しも恐れなかつた。後は肥つちよのシュタイネルだが、彼はあの男の位置を奪つたと信じて、それに就いては別に何も言はうとはしなかつた。そして最近シュタイネルが非常な財政困難に陥つて、取引所からは告訴されさうになり、たゞ一縷の望みは、ランドの

製鹽事業の株主から、今一度資金を搾り取らうと努力するだけであることを知つてゐた。彼がナナの家でシュタイネルと出會つた日に、ナナはしんみりとした調子で、あんなに自分のために金を費つてくれた人を、今更犬のやうに追ひ出したくはないと言つて聞かせた。その後三ヶ月以來、伯爵は彼女を所有したい一念の他に、どんな幸福をも考へることの出来ないほど激しい情慾の世界に生活してゐるのであつた。子供が食べ物のことばかり考へてゐるやうに、中年を過ぎてから起つた性の眼覚めは、彼の心に一杯になつて、見榮や嫉妬を起す餘地はなかつた。たゞ一つ彼の心を打つ確かな氣持は、ナナが薄情になり、もう髯にも接吻しなくなつたといふことである。女を知らない彼は、それを不安に思つて、何が彼女の氣に入らないのだらうかと考へてみた。しかし彼は、彼女の望むことなら何でも満足させて來てやつたと信じてゐた。そして彼はまた今朝の手紙のことを考へた。たゞ劇場でその夜を過したいといふだけのために、どうしてあんなに複雑な嘘を書いて寄越したのか。再び群衆に押されたので、彼は道路を横切り、或る料理店の入口で、窓の中に陳列してある毛を捲つた雲雀や一尾の大きな鮭に眼をとめて、深く考へこんでしまつた。  
やがて、眼前の光景から我に返つたやうに、體を屈め、眼を擧げて見ると、もう九時に近かつた。



ナナは直ぐに出て来るだらう。彼は真相を確かめようと思つた。そしてまた歩きながら、劇場の出口で彼女に逢つて、それからよくこの場所へ来た過ぎ去つた夜の事を思ひ出した。どの店も皆彼は知つてゐた。瓦斯の臭ひの交つた空氣の中に、露西亞革の強烈な臭ひや、チョコレート商の地下室から出るワニラの香ひや、香料店の開け放された扉口から流れて来る麝香の薫を、再び感じたのであつた。で、彼はこの上、静かに見覚えのあるやうに彼を眺めてゐる勘定場の婦人達の蒼白い顔の前に立ち止つてゐることは出来なかつた。彼は暫らくの間、軒を並べた商店の上に入り交つた看板の間の小さな圓窓の列を、初めて見るかのやうに眺めてゐた。それから再び並樹街まで行つて、そこに暫らく立ち止つた。雨はもう細かい霧のやうになつて降つてゐるだけで、その滴が両手を冷たく濡らして、彼の氣持を落着かせた。その時彼は、この秋以來病苦に悩んでゐる友人のシュセル夫人の、マアコン附近にある別荘に見舞に行つた妻のことを考へた。馬車が路面の泥濘の中を走つてゐた。こんな厭な天氣には田舎は我慢出来ないに相違ない。しかし突然不安に襲はれて、通りの熱鬧の中を大股に、散歩者に揉まれながら彼は歩いて行つた。がその時、もしナナが自分のことを感づいたら、モンマルトルへ行くかも知れないと思つた。

そこで伯爵は、劇場の出口で待ち受けることにした。だが彼は、人眼を恐れて、街路の外れで待つのを好まなかつた。それはグリエテ通りとサン・マルク通りの角の、怪しげな場所、客のない靴屋や、古道具屋などの暗い店が並んでゐた。燻つて眠たげな新聞閱覽室では、圓笠をつけた燈火が、緑色の光をぼんやりと漂はしてゐた。俳優用の入口には、酔つ拂つた道具方を見すばらしい服装をした補役女優が出入してゐる他には、身なりを整へた辛抱強い紳士達が見受けられるだけだつた。劇場の前には、汚れた笠の中の瓦斯燈がたゞ一つ入口を照らしてゐた。ミラファは、一寸プロン夫人に訊ねてみようかとも考へたが、それではナナが先手を打つて並樹街へ逃げ出して行きはすまいかといふことも恐れた。彼はまた歩き初めた。そして、今までに二度ばかりも経験したことだが、自分の家が門を閉ぢて彼を締め出してしまはうとも、彼女を待つてゐようと決心した。一人で歸つて眠らうと考へるのは、胸を締めつけられるやうに苦しかつた。髪を亂した女や、汚れた麻服の男が出て来て、彼の顔をじろく眺める度に、彼は閱覽室の前に行つて立ち止つた。そこからは、窓硝子に貼つてある二枚の掲示の間から、何時も小さな頑固さうな老人がたゞ一人で、大きな卓子に倚つて、緑の燈火に染められて、緑の両手に握つた緑の新聞を讀んでゐる變化のない情景が見えた。しかし十

時五六分前から、きちんとして手袋をはめた立派な背の高い金髪紳士が彼と同じ劇場の前を歩いてゐた。そして二人は歩頭をかへす毎に、互に嘲るやうな横目で睨み合つた。伯爵は大きな硝子で羽目飾りのしてある二つの通りの角まで来て、嚴かな顔をし整つた身なりをした自分の姿がそこに映つてゐるのを見ると、恐怖の交つた恥かしさを感じた。十時が鳴つた。ミラファは突然、ナナがまだ樂屋にゐるかどうかを自分で確かめるのが一番容易なことだと氣づいた。彼は石段を三つ上つて、黄色く塗つた小さな玄關を通り、それから鏝だけしかかかてない戸口を通つて中庭に忍び込んだ。丁度その時、中庭は井戸の底のやうに狭くて濡れてゐて、悪臭を放つ便所や、水汲場や、炊事場の籠や、門番が集めた積込みなどが、暗い水蒸氣の中に隠れてゐた。そして向ひ合つて立つた二つの壁は、窓が穿たれてゐるのではつと明るくなつてゐた。階下には小道具部屋や消防夫詰所があり、左手は經營者の事務所になつてゐて、右手と階上は俳優達の樂屋であつた。それらは壁に沿つて、闇に向つて開いた籠の口のやうであつた。伯爵はすぐに、二階の明るく點つてゐる硝子窓を見て、ほつと安心して嬉しくなつた。眼を上げて泥濘の中に立つたまま、この變な臭ひのする巴里の一番古い建物の中で、彼は我を忘れてゐた。壊れた樋から大きな雨滴が落ちてゐた。ブロン夫人の窓か

ら洩れて来る瓦斯の光が、苔の蒸した鋪石の一角や、流しもとの水で浸蝕された壁の裾や、古いバケツや割れた鉢などの積み重ねてあるその邊の不潔な隅を黄色く照らしてゐて、鍋の中には小さな桃葉衛矛が緑色になつてゐた。窓の留金の軋る音がしたので、伯爵は逃げ出した。きつとナナがそのうちに下りて来るだらう。彼は閱覽室の前に廻つた。終夜燈の點つた眠り込んだやうな影の中に、例の小さな老人が、衰へた横顔を新聞に近よせて少しも動かないでゐた。それから彼はなほ歩きつづけた。今度は彼はつと遠くまで散歩した。廣い通りを横切り、グリエテ座の前をずつと進んで、人影のない、冷たい陰氣な影の中に浸つてゐるフェイドウ通りまで来た。そして彼は後戻りして、劇場の前を通り、サン・マルク通りの角を曲つて、モンマルトルの通りまで出て見たが、その或る食料品店で砂糖を挽いてゐる機械を一寸面白く思つた。しかしまた今度も、ナナが彼の眼を脱けて逃げはしないかと思ふと、その心配が彼からすべての見榮を失はせてしまつた。彼は金髪紳士と共に劇場の前に立ち止つた。二人は互に謙遜な懐しさの籠つた視線を交はしたが、心の中ではもしや戀仇パイプを啣へて、どや／＼と出て来て突き當つたが、二人ともそれを不愉快とは思はなかつた。するとまた闇の上に、



汚れた着物を着、髪を亂した三人の背の高い女が現はれて、林檎を噛つてはその芯を吐き出した。二人は顔を伏せて、彼女達の圖々しい視線と露骨な言葉の下に、泥をはね掛けられるやうな思ひをしながら我慢してゐた。やがてその蓮葉な女達は、お互に押し合ひながら彼等にぶつかつて来て面白がつてゐた。

丁度その時ナナが玄關の石段を下りて来た。彼女はミナフアを見ると、さつと顔色を變へた。

「まあ！ あなたですの。」と彼女は口籠つた。

ふざけてゐた補役女優達は、彼女を見ると吃驚して、悪いところを奥様に見つかつた女中のやうに堅くなり、眞面目な顔をして一列になつて立ち竦んでしまつた。金髪の背の高い紳士は、それを見ると同時に、悲しさうにその場を立ち去つた。

「さあ！ 腕を借して頂戴。」黙つてゐられなくなつてナナがまた言葉を掛けた。

二人は静かに歩き初めた。伯爵は質問を準備して来たのだが、何を言つていゝのか分らなかつた。彼女の方は早口に事情を述べた。八時までは伯爵の家にゐたのだつたが、ルキゼの経過が非常にいゝのを見て、一寸劇場に寄らうと考へたのだつた。

「何か大切な用事でもあつたのかい？」と彼が訊いた。

「え、新しい脚本のことで、皆が私の意見を持つてゐたの。」と彼女は少し躊躇つた後に答へた。

彼は彼女が嘘を言つてゐるのを知つてゐた。しかし、強く彼の腕と組んでゐる温かい彼女の腕の感覚が、彼から氣力を失くしてしまつた。彼はもうあんなに長く女を待つてゐた間の怒りも怨みも持つてゐなかつた。彼の考へてゐる唯一つのことは、今腕を組んでゐる彼女と離れたくないことであつた。彼は翌日になれば彼女が樂屋で何をして来たか知らうと努めるであらう。ナナは絶えずおど／＼し、心の中で、しつかり心を落着けようとしてゐる様子が、眼に見えるほどだつた。彼女はドリエテ通りの角を曲ると、扇子商の陳列棚の前に立ち止つて、

「あら！ 美しいわね、この羽根のついた眞珠飾りの扇子は。」と囁いた。

そして何氣ない調子で、

「あなたは、家まで送つて下さるの？」と訊いた。

「勿論、」と彼は驚いて答へた。「ルキゼが好くなつたんだからね。」

彼女は先刻の話を後悔した。またルキゼの病氣が悪くなつたかも知れないから、バテイニヨルへ行きたいと言つた。しかし彼も一緒に行くと言ひ出したので、その話はやめてしまつた。そしてふと彼女は、女といふものは束縛されな

がらしとやかに振舞はなければならぬのを感じて、ひどく當り散らしたが、終ひに彼女は、それも諦めてしまつた。そして時間を潰さうと決心した。十二時頃に伯爵に別れば、何も彼もうまく行くのだつた。

「あなたは今晚はお獨りね、ほんとに。」と彼女が呟いた。

「奥さんは明日の朝でなければ歸らないのでせう。ね？」

「さう。」と伯爵は、妻のことを親しさうに話されるので少し當惑して答へた。

しかし彼女は聲に力を入れて、汽車の時間を聞いたり、停車場へ彼が出迎へに行くかどうかと訊ねたりなどした。彼女は一層歩度を緩めて、すつかり店頭に氣を奪られてゐるやうであつた。

「あれを御覽なさいな！ なんて可笑しな胸輪でせう！」

彼女はまた寶石商の前に立ち止つて言つた。彼女はパノラマ街が好きだつた。横溝寶石や、鍍金した亜鉛や、ボール紙で作つた革などいふ巴里の安びか物に對する子供の頃の情熱が彼女にまだ残つてゐた。そこを通る時には、昔惡戯盛りの頃古靴を曳きすつて、隣の店でオルガンが鳴つてゐるのを聞きながら、チョコレート屋の砂糖菓子の上に立つて見とれたり、殊に値段の安い、桃胡の殻に入つた化粧道具や負ひ籠形の小楊枝立てや、寒暖計の臺になつたゾンドオムの圓柱やオベリスクなどの、つまらな

い裝飾品を夢中になつて熱愛した頃と同じやうに、彼女は陳列棚の前に立ち止らないではゐられなかつた。しかしその晩彼女は非常にそは／＼してゐた。眺めるものが眼に入つてゐないやうであつた。何といつても、自由を束縛されてゐるので、彼女は厭な氣持だつた。そしてむづ痒いやうな反抗心から、何か取り返しがかないやうな事がして見たくてならなかつた。男達を持つてゐても何の足しにもならなかつた！ 彼女は殿下とシュタイネルから子供のやうな氣紛れで金を搾り取つたのだが、その金もどこへ消えて行つたのか分らなかつた。オースマン街の彼女の住居は、まだ完全に家具が揃つてゐなかつた。たゞ客間だけが、赤い繻子ですつかり壁覆ひをされて、調子外れに所狭いまで飾り立てられてゐた。しかしこの頃は少しも金がなくて、彼女は債權者に前よりも一層苦しめられてゐた。それは自分を模範的な儉約家のやうに考へてゐる彼女にとつて、絶えず不審の種であつた。この一月の間に、シュタイネルはやつと千法の金を、それを持つて來なければ玄關拂ひにするよと彼女が言つた日に、持つて來ただけだつた。ミナフアに至つては全く世間知らずで、男達は女に何を興へるべきかも知らなかつた。だから彼女も、彼の吝嗇をもう咎める氣にはなれなかつた。あゝ！ もし彼女が一日に何度も何度も教訓を繰返してみて、行ひを慎しむとしてゐるのでな



かつたら、それらの人々とも直ぐに別れてしまつたことだらう！ 分別を持たなければなりません、とゾエは毎朝言ふし、彼女自身も、絶えず思ひ出されて次第に大きくなつて行くあのシャモンの嚴かな幻影を、その宗教的な記憶を、いつも眼前に浮べてゐた。今もそんな譯で、内心は怒りに顫へてゐながらも、しとやかに伯爵と腕を組んで、一つの店から他の店へと次第に少くなる人通りの中を歩いてゐるのであつた。戸外では舗道が乾いてしまつて、通りを吹いて来た冷たい風が、硝子窓の下の熱い空気を吹き拂つて、色様々な燈火や、瓦斯燈の列や、花火のやうに燃えてゐる大きな扇子形の焰をはためかせた。料理店の扉口では一人のボーイが圓い瓦斯燈を消してゐるし、煌々と輝いてはゐるが客のゐない店々では、どこでも、勘定臺にゐる婦人がぢつとして、まるで眼を開いたまゝ眠つてゐるやうであつた。

「まあ！ 可愛いこと！」と言つたナナは、最後の店の前で二三歩後戻りをして、陶器のルヴレット犬が、薔薇の間に隠れた鳥の巢の前で、片足を擧げてゐるのに見とれてゐた。二人は遂にパノラマ街を出てしまつたが、ナナは馬車に乗りながらなかつた。氣持のいゝ夜ですのね、この上別に急ぐこともないのだから、歩いてゐる方がよささうだわ、と彼女が言つた。そして或る英國風のカフェの前に来ると、

彼女は、ルキゼの病氣のために朝から食事をしてゐないので、空腹を覚えて牡蠣が食べたいと言ひ出した。ミッファは反對しなかつた。彼は彼女と一緒に居る處を、まだ誰にも見せたことはなかつたので、この時も急いで廊下を通つて、小さな別室を求めた。彼女は勝手を知つた様子で後から従つて来て、二人はボーイが扉を開けてゐる別室に入らうとした。と、丁度その時、今まで笑ひ聲や叫び聲が嵐のやうに起つてゐた隣室から、突然一人の男が出て来た。それはダグネだつた。

「おや！ ナナ！」と彼は叫んだ。伯爵は素早く別室に身を隠したが、まだその扉は少し開いたまゝになつてゐた。そして彼の圓い背中が見えなくなると、ダグネは隣室をしながら大袈裟な調子で附け加へた。「これは、これは！ うまくやつてゐますね。今度は河岸を變へて、テニールイ宮殿の方ですね！」

ナナはにつこりして、指を一本唇にあて、どうか黙つてゐてくれと頼んだ。彼が非常に流行の身なりをしてゐるのを見て、彼女はこゝで出會つたのを嬉しく思つた。彼は立派な婦人達と一緒にゐた時に、彼女を見知らないやうに振舞つたほど卑怯だつたが、彼女の方では彼に對して心の隅に優しい氣持を持つてゐた。「どうしてゐるの？」と彼女は親しげに問ひかけた。

「眞面目になつたんです。ほんとに、結婚しようかと思つてゐるんですよ。」

彼女は蔑むやうに兩肩を聳やかした。しかし彼は冗談に紛らして、たゞ呑な男だと思はれたくないばかりに、取引所でやつと女達に贈る花束代だけを稼いでゐるやうなのは、それは生活ではない、と言つた。嘗て彼は三十萬法の金が一年半しか續かないやうな生活をしたが、今は世の中もよく分つて、多額の持參金つきの娘と結婚して、やがて父のやうに知事になつて世を終りたいと思つてゐた。ナナは絶えず微笑を浮べて容易に信じなかつた。彼女は顔を動かして隣室を示しながら、

「どんな連中なの？」と訊いた。

「なあに！ 例の連中ですよ。」と彼は一杯機嫌でもう先刻の計畫も忘れて言つた。「レアが埃及の旅行談をやつてゐるんです。素敵に面白い！ 浴場の話なんですがね……」

そして彼はその話を聞かせた。ナナは機嫌よく何時までも聞いてゐた。二人は廊下で、向ひ合つて壁に凭れこんでしまつた。瓦斯燈が低い天井に照つてゐた。壁覆ひの襜の間に、微かな料理の匂ひが残つてゐた。時々隣室の騒ぎが大きくなると、二人はお互の言葉を聞きとるために、體を近寄せなければならなかつた。殆んど二十秒ごとに、皿を運ぶボーイが、廊下を塞いでゐる二人を妨げた。しかし二

人は壁に凭れて、お客の騒々しい聲とボーイ達に妨げられながら、休まずに靜かに話合つてゐた。

「御覽なさい！」とダグネはミッファの入つた別室の扉を眼で示して囁いた。

二人はそれを見た。扉は風が動かしてゐるやうに小さく顫へてゐた。そして、少しも音を立てないで、非常に靜かに閉された。二人は黙つたまゝ互に顔を見合せて笑つた。伯爵は一人ぼつちで、その中で頭を働かせてゐるに違ひない。

「ね、ちよいと。フォッシュイが私のことを書いた記事を読んで？」と彼女は訊いた。

「讀みました。あの『金の蠅』でせう。」とダグネは答へた。「厭な思ひをさせたくないから、今まで黙つてゐたんです。」

「厭な思ひですつて、どうして？ あの記事はずるぶん長かつたわね。」

彼女はフィガロ紙に自分のことが出たのを喜んでゐた。床屋のフランススが新聞を持つて来て、何とか言つてくれなければ、彼女は自分の事などは知らないでゐたのだ。ダグネは冷笑を浮べて、彼女を流眇で見た。結局彼女が満足してゐる位だから、他の者が不平を言ふべきことではなかつた。

「御免下さい！」とボーイが兩手でピラミッド形のアイス



クリームを持つて、二人の間を通つた。

ナナはミッファが待つてゐる別室の方へと歩み寄つた。

「では、さよなら。あなたのコキユ(妻を他の男に奪さ)の傍へ歸つてお上げなさい。」とダグネが言つた。

彼女はまた立ち止つた。

「どうしてあの人をコキユなんて言ふの？」

「だつてコキユだからコキユと言ふんです！」

彼女はまた壁に凭れて、彼の言葉をちつと聞き入つた。

「まあ！」彼女はたゞそれだけ言つた。

「おや、おや、あなたはそれを知らないんですか！ 伯爵夫人はフオシュリイと一緒に寝てるんです……どうやら田舎で出来たらしいんです……今先刻、私はこゝへ来る時フオシュリイと別れたんだが、今晚はどうも先生の家で御面會らしいと睨んでるんです。旅行と云ふ體裁でね。」

ナナは胸を打たれて、黙つて聞いてゐた。

「やつぱりさうだつたのかしら！」たうとう彼女は腿を敲きながら言つた。「何時かたゞ一度道で出會つただけでも、さうだらうと察してゐたわ……それが本當なら、上流の奥様でも矢張り夫を欺すんだわね。それにしても、相手があるんならフオシュリイのやうなやくざ者だとはね！ あの男なら、定めし奥さんを立派に仕込むでせうよ。」

「ふん！」とダグネは意地悪く呟いた。「ところで、伯爵夫人は、それが初めてではないんです。どちらが仕込むか、分つたもんぢやありませんよ。」

すると彼女は眉を顰めて叫んだ。

「全くね！……なんて立派な人達だらう！ あんまり穢きたなすぎるわね！」

「御免下さい！」と言つて、壘うしろを提げたボーイが二人の間を通つた。

ダグネは彼女を引寄せて一寸その手を握つた。彼はハーマニカのやうな調子の、水晶のやうな聲を出した。何時もこの聲で女達に對して成功するのだつた。

「さやうなら。ね、……私は何時でもあなたを愛してゐるんです。」

彼女は身を引いて笑つた。ダグネの言葉は、扉が顫へるほどの雷のやうな隣室の叫び聲や喝采の聲で消されてしまつた。

「いけないわ、もう済んだことぢやないの。……でも、いいわ。近いうちに、いらつしやいね。話したいことがあるわ。」

それからまた非常に眞面目になつて、物堅い主婦が怒つたときのやうな調子で言つた。

「まあ！ あの人をコキユなんですつて……厭いやになるわね、私、どう考へたつて厭いやだわ、コキユなんて。」

人は、それが初めてではないんです。どちらが仕込むか、分つたもんぢやありませんよ。」

すると彼女は眉を顰めて叫んだ。

「全くね！……なんて立派な人達だらう！ あんまり穢きたなすぎるわね！」

「御免下さい！」と言つて、壘うしろを提げたボーイが二人の間を通つた。

ダグネは彼女を引寄せて一寸その手を握つた。彼はハーマニカのやうな調子の、水晶のやうな聲を出した。何時もこの聲で女達に對して成功するのだつた。

「さやうなら。ね、……私は何時でもあなたを愛してゐるんです。」

彼女は身を引いて笑つた。ダグネの言葉は、扉が顫へるほどの雷のやうな隣室の叫び聲や喝采の聲で消されてしまつた。

「いけないわ、もう済んだことぢやないの。……でも、いいわ。近いうちに、いらつしやいね。話したいことがあるわ。」

それからまた非常に眞面目になつて、物堅い主婦が怒つたときのやうな調子で言つた。

「まあ！ あの人をコキユなんですつて……厭いやになるわね、私、どう考へたつて厭いやだわ、コキユなんて。」

彼女がやつと別室に入つて行つたとき、ミッファは諦めたやうに狭い長椅子に腰掛けて、顔を着くし、手を懐はせてゐた。彼は一言も不平を言はなかつた。彼女はすつかり感動して、心には憐憫と輕蔑を感じてゐた。この人はよくない夫人に憐れに欺された憐れな男だ！ 彼女は彼の頸に抱きついて、切つてやりたいと思つた。しかしそれにしても、この男は、女にかけては馬鹿に等しかつたのだ。こんなこともよい見せしめになるだらう。だが、何といつても可哀さうな男だつた。牡蠣を食べてしまつてからも、彼女は最初に考へてゐたやうに、彼と別れようとはしなかつた。二人は十五分ばかりそのカフェにゐたが、そこを出て、一緒にオースマン街に歸つた。もう十一時になつてゐた。そして十二時までは、何とかしてうまく彼を歸す方法を、彼女は見つけるであらう。

「来たらね、音を立てないやうに言つておくれよ。いかな。まだあの人があるかも知れないから。」

「どの部屋へ御案内しませう、奥様？」

「臺所へね。あすこなら安心だわ。」

ミッファは部屋で、もうフロックコートを脱いでゐた。煙爐の火は盛んに燃えてゐた。それは例の紫香木の家具と、

灰色地に大きな青い花模様のある刺繡をした緞子の椅子や壁覆ひのある部屋であつた。二度ばかりナナはその部屋を作り變へようかと考へた。一度はすつかり黒の天鵝絨ひやうごにしようと思ひ、二度目は白の緞子しよんにして、肝腎な所だけ薔薇色にしようと考へた。シュタイネルが同意したので、直ぐそれに要る金を強請つて手に入れたが、何か他の事に使つてしまつた。そしてたゞ氣紛れに、煙爐の前の虎の毛皮と、天井から下つてゐる硝子の終夜燈しよやとうだけを買つたのであつた。

「私、睡ねむくないの。まだ寝ないわ。」と部屋の中に二人きりになると彼女が言つた。

伯爵はもう人眼を憚おそることも要らないので、どこまでも彼女の言葉に従つた。彼の唯一の考へは、彼女を怒らせないことであつた。

「好きなやうにしなさい。」と彼は呟いた。

しかし彼は、煙爐の前に腰掛けるよりも先に、編上靴あみあがりを脱いだ。ナナの一つの喜びは、衣裳籠筒の姿見に向つて、全身を映しながら着物を脱ぐことだつた。彼女は肌着までも脱ぎ捨て、すつかり裸體になつて、長い間我を忘れて自分の姿に見とれてゐた。彼女の肉體のもつ情熱と、その縞子のやうな皮膚や、柔らかい胴の線の醸かほす恍惚さが、彼女の心を引き立て、潑刺とさせ、自分自身を見とれるやうな事をさせるのであつた。床屋のフランシスもよくそんな



ところを見かけたが、彼女は振り向きもしなかつた。この時ミコフアが不機嫌になつたので、彼女は吃驚してしまつた。どうしたと言ふのだらう？ これは他人のためにしてゐることではなくて、たゞ自分だけの好みでしてゐることなのに。

その晩彼女は、自分の姿が一層はつきり見えるやうに、壁の枝形燭臺に六本の蠟燭を點した。そして彼女は、肌着を肩から落したとき、ふとさつきから氣に懸つてゐたやうに、もの問ひたげな唇をして立ち止つた。

「まだファイガロの記事をお讀みにならない？……新聞はその卓子の上にあつてよ。」

ダグネがあんなに笑つたのを思ひ出すと、それが彼女の氣になつた。もしフォジュリイが眩しでもしたのなら、彼女は復讐するだらう。

「それは私のことだつて皆が言つてゐるわ……え？ どうお考へになつて？」と何氣ない風を裝つて彼女は言つた。

そして肌着を脱いでしまつて、ミコフアが讀み終るのを待ちながら、裸體で立つてゐた。ミコフアはゆつくりと讀んだ。「金の蠅」と題されたフォジュリイの記事は、大酒飲みの四五代續いた家に生れた女の、貧困と酒癖の長い遺傳で害なはれた血液が、女性によくある神経病的な異狀を呈してゐることを書いたものであつた。その女は、巴里の郊

外で淫賣婦として生長し、十分な堆肥で育つた植物のやうに、立派な肉體を美しく發育させたのである。彼女は、彼女を生んだ放浪者や廢人の復讐をするであらう。民衆の間に、醜態するがまゝに顧みられずにあつた腐敗物は、彼女によつて再び散り擴がつて、貴族階級を腐敗させるであらう。彼女は雪のやうに白い腿の間で、巴里を腐敗させ、秩序を亂し、恰も女達が毎月牛乳を腐らせるやうに、無意識のうちに、巴里を衰滅へと導くところの腐敗の酵母となり、自然の力となつてゐる。そしてその一文の結末には、彼女を、金色に輝く一匹の蠅が腐敗物から飛び出して行くのに比較してあつた。その蠅は道傍に棄てられた腐肉から、死を携へて来て、唸つたり踊つたりしながら、寶石のやうに輝いて、窓から宮殿の中へ舞ひ込んで、たゞ一寸その上にとまるだけで、人々を毒するといふのだつた。

ミコフアは顔を上げて、ちつと燧爐の火を見つめてゐた。「どう？」とナナは訊ねた。

しかし彼は答へなかつた。彼はもう一度その記事を読み返したいと思つてゐるらしかつた。頭から肩へぞつと惡寒が流れた。その記事はしきりに措辭を轉倒させ、唐突な言葉や、奇異な對照を大袈裟に列べたて、書きなぐつたものであつた。しかしそれを讀むと、二三月前から觸れることを恐れてゐたすべてのものが、彼の心に突然自覺めて

來るのを感じて、すつかり途方に暮れてしまつた。

その時彼が眼を上げて見ると、ナナは一心に自分の姿に見とれてゐた。彼女は頸を曲げて、右の腰の上にある小さな褐色の黒子を鏡の中に注意深く眺めてゐた。そして一層體を反らせて、指先でそれを摘んで持ち上げた。そんなところに黒子のあるのが、可笑しくて、一寸好いものだと思つてゐるのに違ひなかつた。それから彼女は、子供らしい悪い好奇心から、體の色々な部分を面白かつて調べてゐた。自分の體を見る事は、彼女にとつて何時も驚異であつた。彼女は自分の青春を初めて發見した小娘のやうに、物珍らしさうな、うつとりとした様子をしてゐた。それから静かに兩腕を開いて、あのヴェニヌスに扮したときのやうにむつちりと肥つた胸を擴げた。そして身を撚らせて前や後から自分の體を調べて、横向きになつて立ち止つたり、駈け出しさうな足の姿勢をとつたりなどした。果ては、體を左右に揺ぶり、兩膝を廣く踏み開いて、腹踊りを踊る埃及の舞妓のやうに絶えず體を慄はせながら、腰を中心にして上體をまはした。

ミコフアは、つくづく眺めてゐたが、彼女が少し怖ろしくなつた。新聞が手から滑り落ちた。彼は、幻影をつきとめた瞬間に、自らを輕蔑した。實際フォジュリイの言ふ通りだつた。三ヶ月の間に彼女に自分の生命を腐蝕され、想像

もしなかつた汚物によつて既に骨の髓まで害なはれたのを感じた。今や彼の生命全體が崩れようとしてゐた。ふと彼は不幸な災ひを感じた。この酵母によつて醸された腐敗を見た。彼自身は毒され、彼の家庭は破壊されて、社會の一隅が音を立て、崩れ落ちるのを見た。そして彼はもう眼を反らすことも出来なくなつて、彼女を見つめてゐた。彼はどうかしてこの裸體に對して嫌惡の情を持たうと努力した。

ナナはもう動かなかつた。片腕を頸筋の後に廻して手と手を握り合し、腕を張つて頭を反らした。彼は口を開き、微笑を湛へ、半ば閉ぢた眼を更に細くして惚れくくと見てゐた。彼女の解けた金髪が、牝獅子の毛のやうに背中を覆つてゐた。彼女は體を曲げ、脇腹を張り、繻子のやうな細かい肌理の肉付の逞ましいしつかりした腰や、戰士のやうに丈夫な胸を見せた。微妙な線が僅かに肩と腰のあたりで波うつて、腕から足許まで流れてゐた。ミコフアは、その艶めかしい横から見た體、蠟燭の焰の絹のやうな反射を受けてゐる圓みのある肉體、黄色い光に覆はれて金色に輝く裸體を眺めてゐた。淫蕩な野獸の匂ひのする聖書の中の惡魔に對するやうに、昔は婦人に對して恐怖を持つてゐたことを、彼は思ひ出してゐた。ナナは非常に毛深い質で、體は茶色の生毛で天鵝絨のやうであつた。牝馬のやうな腰や腿、惱ましい陰影をその「性」に與へてゐる深くくびれた肉の



隆起は、まるで獸のやうであつた。それは、力そのもの、やうに無意識的な、匂ひだけで世を毒するやうな黄金の野獸であつた。ミッファは、どうすることも出来ずに見つめてゐたが、もう見まいとして遂に臉を閉ぢた。するとまたそれが闇の中に、大きな恐ろしく誇張された姿になつて現はれた。今やその獸は彼の眼の前に、彼の肉の中に、永久に住まうとしてゐるのだつた。

ナナは躊躇つてしまつた。艶めかしい戰慄が、彼女の手足を過ぎたやうであつた。眼を潤ませて、もつとはつきりと我が身を感じたいかのやうに、小さくなつてゐた。そして両手をふりほどいて、それを體に沿つて滑らせ、激しく力を籠めて喰ひ入るほど腰を締めた。それから身を反らせて、溺れるやうに我と我が身を愛撫しながら、兩頬を代る左右の肩に優しく擦りつけた。飽くことを知らぬ口が體に觸れて、彼女の欲情を唆かした。彼女は唇を歪めて、腋の下の近くを長い間接吻しながら、鏡の中でも自分の體に接吻してゐるもう一人の女に微笑みかけた。

その時ミッファは、ほつと長い溜息をついた。彼女のこの一人だけで味つてゐる快樂が、彼の心を振り立てたのである。突然嵐に襲はれたやうに、彼は前後も分らなくなつてしまつた。彼はナナの腕を捉へて、手荒く引き寄せ、絨毯の上に打ち倒した。

「放つて置いて下さいよ。」と彼女は叫んだ。「ひどいことをなさるわね！」  
彼はしまつたと思つた。彼女が愚かで、卑猥で、嘔吐きであるとは彼も知つてゐたが、その上に彼女が毒を持つてゐることさへも望ましいと思つた。

「まあ！ ひどい人ね！」と彼が抱き起したときに、彼女は怒つて言つた。  
しかし彼女は平靜に歸つた。彼は今に歸るだらう。レース飾りのついた寢衣に手を通してから、彼女は燐燐の前の床に坐つた。そこは彼女の好きな場所であつた。彼女がまたフォシュリイの記事に就いて訊ねた時に、ミッファは喧嘩になるのを避けたので、たゞ漠然と答へただけだつた。彼女はフォシュリイが少し癪に觸つてゐるのだと言つた。そして長い間ちつと黙つて、伯爵を歸らせる方法を考へてゐた。彼女は優しい氣質なので、何とか氣持を悪くさせないやうな方法で歸らせたくつたのだ。男達を苦しめることは嫌つてゐた。まして伯爵はコキユだからと考へると、氣が折れてしまふのだつた。

「では明日の朝のね、奥様のお歸りは？」と遂に彼女が言つた。

ミッファは、肘掛椅子に疲れた手足を延ばして、うとうとしてゐた。彼は點頭いて、さうだと答へた。ナナは本氣

になつて、氣を揉みながら彼を眺めてゐた。彼女は軽く皺になつたレースの上に胡坐を組んで、片足を両手で握つて、それを機械的に折つたり曲げたりしてゐた。

「結婚してから随分になるの？」と彼女は訊いた。  
「十九年。」と伯爵が答へた。

「まあ！……奥様は御親切？ あなたの家はうまく行つてゐるの？」  
彼は黙つてゐた。それから當惑した様子で言つた。

「そんなことは決して言つてくれるなど、あれほど頼んで置いたぢやないか。」  
「あら！ どうして？」と彼女は焦れつたさうに叫んだ。

「奥様のことを話したつて、まさかとつて食べようとは言やしないわ……だつて、女なんて、どんな女でもみんな同じやうなものよ……」

しかし彼女は喋り過ぎてはならないと思つて、そこで言葉を切つた。彼女は自分を非常に親切だと信じて、優越者のやうな態度をとつた。この憐れな男には、智慧を借してやらなければならぬ。すると愉快な考へが浮んだので、彼を眺めながら、微笑んで言葉をつづけた。

「ねえ、フォシュリイがあなたの悪い噂を擴めてゐることを、まだ言はなかつたわね……ほんとに悪い奴よ！ だけど私は、あの記事には本當の事もあるし、怨んでなんかは

みないわ。でも、ほんとに悪い奴だわ。」

そして一層聲高く笑ひながら、足を手から離し、にぢり寄つて来て、伯爵の膝にその胸を凭せかけた。

「まあね、こんなに言つてゐるのよ。あなたは奥様と結婚してからも、女を知らずにゐらつしやるんですつてね……さうなの？ 知らずにゐたの？……どう？ ほんと？」

彼女は彼を見つめて、両手をその肩のところまで滑らせて行き、強く揺ぶつたので、たうとう彼もかう打ち明けてしまつた。

「その通りだ。」彼はやつと重々しい聲で答へた。

すると彼女はまた彼の足に飛びついて、氣狂ひのやうに笑ひながら、彼をやさしく手で敲き、疊みかけて言つた。

「どうしたつて、それはお金でなんか買へないわ、ほんとにあなただけよ。あなたは珍らしい方だわ……。でも可哀さうな方ね、馬鹿らしいぢやないの！ 男でゐて、それを知らないなんて、どう考へたつてをかしいぢやないの！ ほんとに私、あなたのやうな人を知らないわ！……まあ、女を知らずに來たの？ 一寸言つて頂戴。ねえ！ お願ひだから、言つて頂戴よ。」

彼女はすべての事を根柢り葉掘りして、彼を質問攻めにした。そして時々、急に高い聲で腹を抱へて笑つた。そのために寢衣が滑り落ちるのを掻き上げるとき、燐燐の盛んな



焔で皮膚が金色に染められた。遂に伯爵は少しづつ、結婚の夜の話を話して聞かせた。彼はもう窮屈を感じなかつた。そしてたうとう自分でも楽しみながら、餘り露骨でない言葉で、『どんなにしてその夜を過ごした』かを、説明した。彼はまだ羞恥心を持つてゐたので、言葉だけは選んだ。ナナは乗り氣になつて夫人のことを訊ねた。彼の言葉に従へば、夫人には申分なかつたが、非常に冷やかだつた。

「いや！ お前が嫉妬するやうな心配だけはないよ。」と彼はおづ／＼と囁いた。

ナナは笑ふのをやめて、またもとの場所に歸つた。煖爐を後ろにし、両手で足を抱へて、膝の上に頸を載せた。そして眞面目になつて言つた。

「あなたのやうに、結婚の晩、奥様に氣のきかない眞似をするのはいけないと思ふわ。」

「どうして？」と伯爵は驚いて訊いた。

「だつて。」と彼女は静かに、物識り顔をして答へた。

彼女は頸をかしげて説明を初めたが、しかし、どうしても明らさまに言つてしまふことは出来なかつた。

「でもね、私にはそれがどうしてだかよく分つてゐるわ……あのね、女と云ふものは間の抜けた男が嫌ひなのよ。そして何時も黙つてはゐるけれど、それは恥かしいからなんだわ、お分りになる？……しかしほんとは、何時までもその

ことばかり考へてゐるのよ。そして男が知つてくれなければ、遅かれ早かれ、結局、他の男のところへ行くことになるんだわ……ね、そんなものよ。」

彼には分らないやうだつた。それで彼女は更に詳しく言つた。彼女は母親らしい氣持になつて、親切な心から、友達にやうに様々なことを教へた。彼がコキユであると知つてからは、その祕密が氣になつてならなかつた。彼女はそのことに就いて、彼とよく話し合ひたいと熱望してゐた。

「ほんとにね！ 私に關係したことはないんだけど……こんなことを言ふのは、皆が仕合せでありたいからよ……何も彼も話してしまひませう。ね？ さあ、あなたも、隠さずに答へて頂戴。」

そして彼女は熱くなつたので、話を切つて、體の向きを變へた。

「どう？ 熱いわね。背中が焼けるやうよ……今度は、すこしお腹を焼くわ……かうするのが僕麻質斯にいゝんですつて！」

そして彼女は位置を變へて、煖爐に向つて蹲踞んだ。

「もう奥様と一緒に寝ないの、どう？」

「さう、ほんとに寝ないんだ。」とミッファは、ナナを怒らせまいと心配しながら答へた。

「では奥様を、ほんとに木片だとも思つてゐらつしやる

の？」

彼は點頭いてそれを肯定した。

「だから私を可愛かつて下さるの？……言つて頂戴よ！ 怒りやしないわ。」

彼はまた點頭いた。

「まあ嬉しい！」と、彼女は言つた。「私、さうとは知らなかつたの。お、氣の毒な方ね！……私の伯母のあのルラを御存じ？ 今度來たら、あの人の家の向ひの青物屋の話を聞いて御覽なさい……。その青物屋と云ふのがね……あつ！ 熱い。向きを變へなくちや。今度は左の腹を焼いてみよう。」そして焔の方に腰を向けながら、まるで美味しい鳥のやうに、煖爐の反射で肥つた體が、薔薇色になつてゐるのが可笑しいと言つてふざけ散らした。

「どう？ 鶯鳥のやうでせう……ほんとにさうよ、串に刺された鶯鳥よ……かうしてくる／＼廻れば、脂を出して焼けるわ。」

彼女はまた大きな聲で笑つた。とその時、人聲と扉を閉める音が聞えた。ミッファは驚いて、怪訝な眼付をした。彼女は眞顔になつて、不安さうな様子しながら、屹度ゾエの猫で、あれはなんでもお構ひなしに壊すので困つてゐる、と言つた。もう十二時半だつた。しかし、コキユの幸福のために盡さうとしてゐた考へは何處へ行つたのだらう

か？ もう他の男が部屋の外に來てゐる。この男は早く送り出さなければならぬ。

「その青物屋がどうしたの？」と伯爵は、こんな親切な彼女を見るのが嬉しくて、楽しさうに訊ねた。

けれども彼女は氣が變つて、彼を送り出したいと思つてゐるので、無遠慮にもう言葉を選ばなかつた。

「あ、さう、その青物屋とお上さんがね……さうよ、一度も一緒に寝ないんですつて！……でも、お上さんは随分それを我慢したのよ。ところが御亭主は頓馬で、何時までも氣がつかかなかつたの……そしてお上さんを木片のやうに思ひこんで、わざ／＼餘所へ出掛けて行つて、淫賣なんかと思ひ切つた悪ふざけをしてゐると、お上さんの方でもね、頓馬な御亭主よりは少々人の悪い連中と、ちゃんとそれ相當なことをして差引きしたといふわけなの……。お互に何も知らないでゐると、そんな風になるのは極り切つたことですよ。ほんとに！」

ミッファは終ひにその寓意を了解したので、頷を著し、彼女を黙らせようとした。しかし、彼女はもう後へは引かなかつた。

「いゝえ、まあ聞いてゐらつしやい！……もしあなたが馬鹿でないなら、奥様にも私にすると同じやうに親切になさればいゝぢやないの。そして、もしあなたの奥様が七面鳥



のやうな馬鹿でないなら、あなたを奪られまいとして、私  
があなたを奪らうとする位のもの、それ位もの苦勞はなさる  
筈だわ。さうよ、まあさうしたもので……ね、今言つたこ  
とを、手帳にでも書いて覚えておらうしやい。」

「純潔な婦人に對しては、そんな口を利かない方がいよ。  
お前には分らないんだから。」と彼は氣むづかしげな口調で  
言つた。

突然、ナナは膝をついて立ち上つた。

「私には分らないのですつて……ところが生憎、あなた  
の奥様にしても純潔なことはいないですよ。いゝえ、ち  
つとも純潔ではないんです。私のやうに、あなたに向つ  
てこんなにも何も彼もあけすけに言つてしまふ女もないでせ  
うけれどね……純潔な婦人だなんて、ほんとに、笑はせる  
のはおよしなさいよ！ どうぞ、言つてから後悔するやう  
なことを、私に言はせないやうにして頂戴、私の癪に障ら  
ないやうにして頂戴よ。」

伯爵はその答へに、聞きとれない聲で罵るやうなことを  
言つた。今度はナナが顔の色を變へた。そして黙つて暫ら  
く彼を見つめてゐたが、きつぱりと言ひ切つた。

「もしあなたの奥様が、あなたを裏切つてゐたらどうする  
氣なの？」

彼は凄まじい權幕を示した。

「ではね、私が、もしも私があなたを裏切つたら？」

「おゝ！ お前が？」と彼は肩を聳やかして呟いた。

確かにナナには、悪意があつたのではなかつた。話の最  
初から、彼女は絶えず、彼が欺されてゐることを比喩で悟  
らせようと努めてゐた。彼がそれとなく氣づいて後悔する  
のを望んでゐたのだ。しかし結局、彼が彼女を怒らせてし  
まつた。それでもう最後だつた。

「でもね、」と彼女は言つた。「こゝへ何をしにいらした  
のか知らないけれど……二時間も前から私はうんざりして  
ゐるのよ……さあ早く歸つて、奥様とフォッシュリイが仲よ  
くしてゐるところを見ておらうしやい。さうよ、間違ひは  
ないの、テッポウ街とプロバンス通りの角よ……。ちゃん  
と家を教へて上げるわ。行つて御覽なさい。」

そして彼女は、ミラファが撲殺される牛のやうに顫へな  
がら立ち上るのを、勝ち誇つた風に眺めてゐた。

「さうよ、純潔な婦人達だつて出掛けて行つて、私達の戀  
人を奪つて行くんですわ……ほんとにお達者だわ、その  
純潔な婦人といふ人達はね！」

しかし彼女はそれ以上續けることが出来なかつた。彼は  
恐ろしい勢ひで彼女を床へ投げ倒した。彼は足を擧げて、  
その頭を踏み潰したいと思つた位だつた。一瞬間、彼女  
は激しい恐怖を感じた。彼は前後を忘れて、氣狂ひのやう

に床を踏み鳴らしてゐた。すると彼の守つてゐる息苦しい  
沈黙と彼の惱んでゐる苦惱とが、深く彼女の心に觸れて、  
彼女は泣き出しさうになつた。彼女は死にたくなるほど後  
悔した。そして燠爐の前に躊躇んで、右腹を温めながら、  
また彼を慰めようとした。

「ほんとね、あなたがきつと知つてると思つてゐたの。  
でなかつたら、こんなことを言ひ出すんぢやなかつたわ、  
ほんとに……それに、多分嘘だらうと思ふわ。私ね、何も  
ほんとにしてゐる譯ぢやないのよ。そんな風に世間で噂し  
てゐるけれど、それだつて何も當てになるもんですか？……  
……あゝ、どうぞ、あなたも氣を悪くしたりなんかしないで  
下さいな。もし私が男だつたら、矢張り女のことなんか氣  
にかけないわ！ 女といふものは、ほんとに、身分の高い  
人も低い人も、同じやうなものよ。みんなだらしがなくて、  
似たり寄つたりなものよ。」

彼女は、彼に與へた打撃を少しでも軽くしようと思つて、  
自分のことも忘れてしまひ、女を非難するのであつた。し  
かし彼はもうそれに耳を借さうとはしなかつた。手荒く音  
を立てながら編上靴を穿いてフロックコートを着た。そし  
てもう一度床板を踏み鳴らして、やつと扉口を見出したや  
うに、さつと身を躍らして部屋を出て行つた。ナナはすつ  
かり腹を立てゝしまつた。

「ぢや、さやうなら！」と彼女は一人になつてからも高い中  
聲で續けて言つた。「禮儀のある方ね、人が話をしてゐる最  
に行つて了ふなんて……私も要らぬ骨折りをしたも  
よ！ 私の方が先に悪かつたと思つて、あんなに詫まつてゐ  
るのに、こんなにして、癪に障らないではゐられないわ！」  
彼女は兩腕で足を抱へ、不愉快さうにしてゐたが、やが  
てはつきり腹を決めた。

「えゝゝ まゝよ！ 私の知つたことか、コキユであらう  
となからうと。」

そして體中を鶏料理のやうに熱くして、寢床の中に潜り  
こむと、電鈴を押してゾエを呼び、臺所に待たせて置いた  
もう一人の男を呼び入れた。

ミラファは、戸外を恐ろしい權幕で歩いてゐた。また驟  
雨が來た。彼は濡れた鋪道を滑るが如く歩を進めてゐた。  
そして機械的に空を見上げると、灰色の千切れ雲が月を掠  
めて飛んでゐた。もうその時刻には、オースマン街も人通  
りが稀になつてゐた。彼はオペラ座の工事に沿つて、暗  
いところを選つて進みながら、途切れ／＼に何か呟いてゐ  
た。ナナは嘘を言つたのだらう。あんな出鱈目をならべ立て  
て自分を苦しめるのだらう。あの時足で踏みつけて、ほん  
とに頭を潰してやればよかつたのに。それにしても、結局、  
これはあまりに恥かしいことだ。もう會ふまい、もう彼女



の傍へは近づくまい。でなければ、自分が非常に卑しいものとならなければならぬのだ。そして彼は、解放されたやうに、深く息をついた。あゝ！あの裸の、馬鹿げた、鷲鳥のやうに丸焼になつた女め、四十年來私が尊敬してゐたものを残らず唾液で汚した悪魔め！雲が切れて月が現はれた。人通りの絶えた通りがばつと白く照らされた。彼は恐ろしくなつた。咽び泣きし初めた。突然、絶望に捉はれ、果てしもない空虚の奈落に陥ちたやうに、前後も忘れた。「あゝ！」と彼は呟いた。「もう終りだ。何もかも失つてしまつた。」

並樹街を、夜更しをした人々が、歩を早めて過ぎて行つた。彼は落着かうと努めた。ナナの言つたことが、上氣した頭に、またしても思ひ出されるので、彼は自分で事實を確かめたくなつた。サビイヌがシュゼル夫人の別荘から歸つて来るのは朝になる筈だつた。しかし、考へて見れば、その前日の夕暮に巴里へ歸つて来て、あの男の家で夜を過すのだと考へられないこともなかつた。今になつて見れば、あのフオンデットに逗留してゐた頃に、色々思ひ當る細かな節もあつた。或る夕暮、彼が行つて見ると、樹の下にゐるサビイヌは、返辭も出来ないほど驚いたこともあつた。あゝのときも男が一緒にゐたのだ。その男の家へ、今も行つてゐないかどうか考へられよう？ そんなことを考へれば

考へるほど、ナナの話は本當のこのやうに思はれて来た。そして終ひにはその話が自然な、當然なことだと考へるやうになつた。彼が淫賣婦の家で肌着の袖で鬪弄されてゐるのに、彼の妻は好きな男の部屋で着物を脱ぐ——これほどよく分つた當然なことではない。さう考へて、彼は冷静にならうと努力した。併しそれは、自分の周囲から世界を擯んで奪ひ去る狂ほしい肉慾の中へ墮ちて行くやうな感じだつた。熱に冒されたやうな幻影が彼につき纏つた。裸體のナナが、突然裸體のサビイヌになつて現はれた。この幻影は彼女等二人の共通な不貞によつて、同じ情慾の息吹のもとに結ばれたのである。一臺の貸馬車が彼を轆きさうになつた。カフェから出て来た女達は、笑ひながら彼を眩で突いた。すると、人々の前では泣くまいと思つて堪へてゐるにも拘らず、涙がこみ上げて来た。彼は人通りの絶えた暗い道へ入つた。静かな家の並んだロシニ街で、彼は子供のやうに泣いた。

「もう終りだ。何もかも失つた。失つてしまつたのだ。」と彼は低い聲で呟いた。

彼は、或る家の扉口に凭れて、濡れた両手の中で激しく泣いてゐた。足音が彼を追ひ立てた。彼は恥かしさと怖ろしさで一杯になりながら、人々の前を、夜の浮浪者のやうな不確かな歩みで逃げるやうに通越した。歩道の上で通行

人と行き違ふ時には、人々が自分の肩の端まで何も彼も讀み取りさうに思へて、努めてさあらぬ態を装つた。彼はグラソング・パトリエール街を通つて、フオポール・モンマルトル街まで進んで行つた。が、そこがばつと明るいのに驚いて、また今来た道に戻つて来た。一時間近くも、彼はそんなにして、暗い場所を選つてその附近をうろついてゐた。彼には全く一つの目當があつたので、その方角へ足は自づと向つてゐた。そして、辛抱強く、曲り角の多い入りこんだ路を進み續けてゐた。遂に彼は或る街角で眼を上げた。たうとう来てしまつてゐた。それはティッボウ街とプロバンス街の街角であつた。彼は頭が憤怒にこんがらかつてゐて、五分間ばかりで行けるところを、そこまで一時間もかゝつてゐた。先月のことだが、ティールイ宮殿にあつた舞踏會をフオシリイが批評した中に、彼の名を擧げてゐたので、彼は或る朝その禮を述べに記者の家へ行つたことがあつた。その部屋は、小さな四角い窓のある中二階になつてゐて、或る商店の大きな看板の蔭に半ば隠れてゐた。一番左の端にあたる窓が、半ば開かれたカーテンの間を洩れるランプの光で、縦にばつと明るく照らされてゐた。彼は一心に、何事かを期待しながら、その明るく照らされた場所を見つめてゐた。月は、墨を流したやうな空に消えて、冷たい雨がばら／＼と降つて来た。ラ・トリニテ教會では時計が二時を打つた。

プロバンス街とティッボウ街の二つの道が、遠くの方では黄色い霧の中に消えてゐる瓦斯燈を、煌々と輝かせて、霧の中に續いてゐた。ミラファは動かなかつた。それは寢室で、赤い安木綿の壁覆ひをして、その奥にルキ十三世式の寢臺があつたのを思ひ出した。ランプは右の方の、燧爐の上にある筈だ。少しも影が映らないのだから、疑ひもなく二人は寢てゐるのに違ひない。窓の明りはまるで終夜燈のやうに、ぢつと輝いてゐた。彼は、相變らず眼を見あげたまゝ計畫してゐた。電鈴を押して戸を開けさせ、門番が呼び止めるのもかまはずに二階へ駆け上り、體をぶつけて扉を壊し、寢床の中の二人の上へ、抱き合つた腕を振りほどく餘も與へずに襲ひかゝつてやらう。が、その瞬間、武器を持つてゐないと云ふ考へが、彼を押し止めた。それで、二人を絞め殺してやらう、と思つた。そして絶えず、何か確實な兆候が現はれるのを期待しながら、彼は計畫を十分に吟味した。もしその時女の影が現はれたら、彼は電鈴を押したであらう。しかし、勘違ひをしてゐるかも知れないと考へると、彼は慄然とした。一體これは何としたことだらう？ 彼はまた疑はしい氣持になつて、妻がこんな男の家に来てゐる筈がない、それは荒唐無稽な、不可能な事だと思ふやうにもなつた。だが、彼はまだ立ちつくしてゐた。ぢつと見つめてゐるその目の先が、ちら／＼するほど長い



間立ち盡してゐたので、だん／＼頭がぼんやりして来て、自覺のない世界へ滑つてゆくやうに思はれた。驟雨が沛然として来た。巡查が二人近づいて来たので、彼は雨を避けてゐた軒下を、立ち去らなければならなかつた。そして巡查がプロバンス街に姿を消してしまふと、彼は慄へながら、ぶぶ濡れになつて歸つて来た。明るい光が、前と變らず窓に輝いてゐた。だが今度は、彼が去らうとすると、何かの影が過ぎて行つた。それは彼が、自分の眼を疑つたほど早かつた。しかも續けざまに他の影が、代る／＼映つた。部屋で何事も起つてゐるのに違ひなかつた。彼はまた歩道に釘づけにされて、今度はそれを了解しようとするやうに努めながら、胃袋が煮えくり返るやうに感じた。手や足の影が走り過ぎた。するとまた水鏡を持つた大きな片手が映つた。彼には、はつきりとは分らなかつた。併し、女の髪だけは見覚えがあるやうに思はれた。それがサビイヌの髪だと言へるにしても、頸筋があまりに太すぎる、とも考へた。もう彼には何も分らなくなつてしまつた。彼はどうすることも出来なかつた。終ひに彼は氣を鎮めるために、乞食のやうに慄へながら、或る扉口に縋りついてしまつたほど、恐ろしい不安の苦痛で、胃袋が痛んでならなかつた。だがそれでも、彼はどうしても窓から眼を離さなかつた。すると彼の怒りが道徳家らしい空想の中に溶けてい

つた。彼は代議士になつて、議會の演壇に身を起して風紀の紊亂に就いて獅子吼し、時代の危機を警告してゐた。またどこかの舞臺に立つて、フオシュリイのあの毒を撒く蠅の記事をそのまゝ繰り返し、かゝるビザンチン帝國の如き風習を以てしては、社會の前途はまことに累卵の危きにある、と辯じ立てゝゐた。すると氣持が少し楽になつた。窓には影が消えた。きつと二人はまた寝たのだらう。彼は見上げたまゝ、立ち續けてゐた。

三時が鳴り、そして四時が打つた。彼はその場を去ることが出来なかつた。驟雨が来ると、彼は軒下に身を避けた。足が泥まみれになつてゐた。もう誰も通らなかつた。時々明るい窓の光に疲れて眼を閉ぢたが、直ぐにまた、愚かしくも執拗に、もとの凝視に歸るのであつた。その後二度ばかり、大きな水鏡を持つた同じ影が、同じ仕事を繰り返して窓に映つた。そして、二度とも沈黙に歸つた。ランプは終夜燈のやうに、愼ましい光を投げてゐた。その影は、彼の疑惑を増した。けれども突然或る考へが浮んで、決斷を延ばさせ、彼を慰めた。彼は妻が出て来るのを待つてさへ居ればいゝと思つた。さうすれば彼はサビイヌの姿を見届けるだらう。それ以上に簡単な、安心な、確實なことはない。そこに待つてゐるだけでいゝのだ。彼を惱ませたあらゆる感情の中で、彼は今、たゞ知りたいといふ微かな欲

求の外に何も感じなかつた。すると、軒端に立つてゐる彼は、退屈を感じて眠たくなつた。彼は氣を紛らすために、まだ幾時間待たなければならぬかを、しきりに考へて見た。サビイヌは九時には停車場に着いてゐなければならぬ筈だ。それにはまだ四時間半ばかりあつた。彼は辛抱する決心をし、もう動かうともしなかつた。かうして夜の中に待つてゐることが、永遠に續くかのやうに想像して、或る魅力をさへ感じながら。

と、突然窓の明りが消えた。この簡単なことが彼には全く思ひがけない椿事だつた。不愉快な、惱ましい出来事だつた。確かに二人がランプを消したのだ。二人は寝るのだらう。丁度時間も時間だし、それは何も不思議な事ではなかつた。併しそのために彼は苛立たしい氣持になつた。この暗い窓は、最早彼を牽きつけるものを持つてゐなかつたから。彼はなほ十五分間ばかり見つけてゐたが、やがてそれも疲れてしまつて、軒を出て歩道を歩き初めた。五時頃まで、行きつ戻りつして、軒を見上げながら散歩してゐた。窓には少しの變化もなかつた。時々彼は、窓硝子の上にあんなに影が踊つてゐたのは、それは夢ではなかつたかと思ひ返して見た。限りない疲労に壓し潰され、鋪石に躓つきながら、彼は、路傍でこんなにして待つてゐるのは何の爲めか、もう頭がぼんやりして分らなかつた。そして

時々驚いたやうに寒さに慄へ上つて、自分のゐる場所も忘れてゐたやうな氣持から、我に歸るのだつた。何もこんな心配や苦勞をするほどのこともないのであるまいか。二人はもう眠つてゐるのだから、そのまゝ眠らせて置けばいいではないか。そんな二人のことに頭を使つてみて何になるのだらう？ 夜は眞暗で、この場の有様を知つてゐる者は誰もゐないだらう。かう考へると、今までのすべての氣持が、好奇心まで消えてしまつて、もうこんなことは止めてどこか休息の場所を探したいと一圖に考へるやうになつた。寒さは益々厳しく、路上にゐることは耐へられなくなつた。二度ばかり彼はその場を立ち去つて、また足を曳きずりながら戻つて来たが、三度目は更に一層遠く離れて行つた。あれでお終ひで、もう何事も起らなかつた。彼は並樹街まで行つて、歸つて来なかつた。

街を通つて行くのは陰鬱な氣持だつた。彼は何時も同じ歩調で、家々の扉に沿つてゆつくりと歩いた。靴の踵が鳴つてゐた。瓦斯燈のあるところへ来る毎に、自分の影が小さくなつたり大きくなつたりして、廻轉するより他に何も見えなかつた。彼はそれに心を慰められて、たゞ機械的にそれを見つめて歩いた。後になつても、彼はどこを通つて来たのか少しも分らなかつた。まるで幾時間も、大きな輪のまはりをぐる／＼廻つてゐたやうに思はれた。たゞ一つ



の記憶が、彼の頭にはつきり残されてゐた。前後のことは少しも分らないのだが、彼はパノラマ街の鐵柵に顔を押しつけて、両手にそれを握つてゐたのだつた。それを揺ぶるでもなく、たゞ一心に、或る感動を心に充たして通りを眺めてゐた。彼には何も見分けがつかかなかつた。人影のない路上には、遠く、闇が浪のやうに流れてゐた。サン・マルク街を吹き過ぎて来る風は、彼の顔へ害のやうな濕氣を運んで来た。彼は何時までもさうしてゐた。そして、ふと夢から醒めたやうに驚いて、こんな時刻にこんな熱心に、鐵柵の跡が顔に残るほど寄り掛つて、何を求めてゐたのかと考へて見た。彼はまた歩き初めた。絶望して、心はこの上もない大きな悲哀に満たされて、恰も永遠にこの影の中にたゞ一人、裏切られて取り残されるのかと思はれた。

たうとう夜明けが来た。巴里の泥まみれの舗道の上に、冬の物悲しい汚れた薄明が、さし初めた。ミラファは、新しいオペラ座の工事に沿つた普請中の廣い道路を歸つて来た。粘土質の地面が、驟雨に打たれ、荷車に控ね返されて、全く泥沼に變つてゐた。彼は足許に氣をつけようとせず、滑つては何かに捉まりながら、どこまでも歩き続けてゐた。巴里の覺醒——掃除人夫の群や、早出の職工の列が、日の昇るにつれて、また彼を當惑させた。人々は皆、帽子をぶぶ濡れにし、泥まみれの不安さうな様子の彼

を、眺めるのだつた。永い間彼は、鐵柵の中の、工事の足場の間に隠れてゐた。心はずつかり空虚になつてゐたが、たゞ一つ、自分を非常に悲惨だと思ふ氣持だけが残つてゐた。

その時彼は神に就いて考へた。この突然な神の救ひといふ考へが、この超人間的な慰藉が、不思議な思ひ設けなかつたことのやうに彼を驚かせた。そして彼に、ゾノオの姿を思ひ出させた。彼はその齒並の悪い、肥つた顔が見えるやうに思つた。幾月も前から避けてゐるので、心配してゐるに違ひないゾノオは、もしも彼が扉を敲いて、その兩腕の間へ涙を流して行つたなら、喜んでくれるに相違なかつた。嘗つて神は、彼のためにあらゆる憐憫を垂れ給うた。どんな小さな悲しみにも、人生の邪魔をするどんな僅かな障りにも、彼は直ちに教會に行つて、主の御心の前に跪つき、謙遜な心になり、祈りによつて強められ、地上の幸福を放棄する決心を堅め、只管その禮拜の永遠性のみを願つてそこから出て来るのであつた。併し今日、地獄の恐怖が彼を捉へてゐるこの時に、彼は發作的にしか神を祈ることが出来なかつた。あらゆる種類の欲情が彼を蹂躪し、ナナが彼の祈禱を攪き亂した。それなのに神を思ひ浮べたことが、我ながら不思議だつた。どうしてまた、彼の弱い人間性ががら／＼と崩れ落ちる時に、その恐怖すべき危機に當

つて、直ちに神のことをば思はなかつたのであらうか？

そして彼は、重い足を運んで、教會堂を探したのであつた。最早彼の意識は朦朧としてゐた。朝の時間は、道の様子を變へてゐた。そして、ショーセ・ダンタン街の或る街角を曲ると、遠くの方にトリニテ教會の尖塔が、霞の中に霞んで見えた。落葉した庭を見下ろしてゐる白い立像は、よく公園の黄色い落葉の上に見かける、寒さうなヴェニスの像のやうであつた。幅の廣い石段を上り、疲れた彼は支關に立ち止つて、ちよつと息をついた。それから中へ入つた。教會の中は、暖房装置が前夜から消えてゐて、高い天井の下には、繪窓を通つて来た光が湯氣のやうに微かに立ち上り、非常に寒かつた。左右の脇堂は暗い影の中に隠れて、人氣がなかつた。この明けきらぬ薄闇の中に、小使が、眼をめたばかりの懶い様子で曳きすつてゐる古靴の音だけが聞えてゐた。彼は、亂雑に置かれた椅子の列に突き當りながら、氣も遠くなり、心は涙で一杯にして、小さな祭壇の前の聖水盤の傍にある格子にばつたり跪ついた。彼は手を合せ、祈りの言葉を求めた。身も心も捧げて、激しい信仰に委ねたいと願つた。併したゞ彼の唇が僅かに何か呟くだけで、心は常に逃げ出して脇道へ外れ、止みがたい必要に迫られてゐるかのやうに、休みもせずに再び路上を彷徨うて行くのであつた。彼は繰り返した。「おゝ、主よ、來りて救ひを

垂れ給へ！ おゝ、主よ、御身の創り給ひし者、御身の義しきに從ひまつらんとする者を憐れ給へ！ おゝ、我が主よ、御身をあげめまつる者をして、願はくば、御身の敵の手に委ねて摧かしむること勿れ！」何も答へはなかつた。影と寒氣が彼の兩肩に降り注いだ。古靴の音は遠くに續いて彼の祈りを妨げた。その苛立たしい音の他に、人影のない教會は森として何も聞えなかつた。朝の掃除もまだ済んでゐなかつたし、最初の彌撒の煙もまだ上つてゐなかつた。その時彼は椅子に捉つて、膝の音をさせながら起ち上つた。神はまだ降臨し給はないのであつた。況して、ゾノオの腕の間で、どうして泣くことが出来たであらうか？ この男にはもう何も出来ないのだ。

そして彼は機械的にナナの家へ歸つて行つた。戸外に出ると、涙が眼に浮ぶのを感じた。それは運命に對する怒りではなく、たゞ自分の魂の弱さと不健康であるからに他ならなかつた。つまり彼は、あまり疲労し、あまり雨に打たれ、あまり寒氣に苦しめられたのであつた。そしてミロメニール街の暗い屋敷に歸らうと考へると、その身が凍るやうに感じられた。ナナの家では、まだ戸が閉つてゐた。彼は門番が出て来るまで待たなければならなかつた。しかし石段を上りながら、彼はもうこの家の柔らかな温味を感じて微笑んだ。そこで彼は手足を伸ばして、眠ることが出来るで



あらう。  
 ゴエが出て来て扉を開けた。そして彼女は呆氣にとられ  
 たやうな、また心配さうな顔をした。奥様はひどく頭が痛  
 んで、昨夜は一睡もなさいませんでしたの。兎に角、まだ  
 眠つてゐらつしやるかどうか見て参りませう、と彼女は言  
 つた。彼女が部屋に入つて行くと、彼は客間の脇掛椅子に  
 ぐつたり身を投げ出した。すると、殆んど直ぐにナナが現  
 はれた。恐らく寢床から跳ね起きて、やつとスカートを穿  
 いて來たらしく、素足のまゝで、髪を亂し、肌着は皺にな  
 つて所々破れ、一夜の戀の戯れをした後の取り亂した姿で  
 あつた。

「まあ！ また來たの！」と彼女は赤い顔をして叫んだ。  
 彼女は矢も楯もたまらないほど腹が立つて、彼を追ひ出  
 さうと思つて出て來たのだつた。しかしそんなに見窄らし  
 い彼の姿を見ると、憐憫を感じずにはゐられなかつた。  
 「まあ！ ひどく汚れてゐるぢやありませんか、あなた！」  
 と彼女は優しく言葉をかけた。「何をしたのですか？ ……え  
 え？ 待ち伏せをして、自棄を起したのですか？」  
 彼は答へなかつた。彼は今にも斃れさうな獸のやうだつ  
 た。そして彼女は、彼がまだ確かな證據を握つてゐない、  
 といふことが分つた。彼女は、彼を落着かせやうと思つて  
 言葉をついだ。

「いゝえ、私が間違つてゐたのですわ。あなたの奥様はき  
 つと純潔です…さあ、あなたは家へ歸つて、お寝みな  
 さい。さうしなければいけませんわ。」  
 彼は動かなくなつた。

「さあ、お歸りなさい。こゝにゐらしてはいけません…  
 …。乾度あなたよつて、こんな時間にこゝにゐやうなんて  
 お積りはないでせう？」

「いゝや、一緒に寢させておくれ。」と彼は口籠つた。  
 彼女は怒つたやうな身振りを見せまいとして抑へてゐた  
 が、もう我慢が出来なかつた。この男は馬鹿になつたのだ  
 らうか？

「さあ、お歸りなさい。」と彼女は繰り返した。

「いゝや歸らない。」  
 そこで、彼女は癪に觸つて、捨鉢になつて聲を高くした。  
 「ほんとに厭になつてしまふわね！ ……お聞きなさいよ、  
 私は全くあなたが嫌ひなんです。あなたをコキユにした奥  
 様の傍へお歸りなさい…。さうよ、奥様よ、あなたをコ  
 キユにしたのは。私が教へて上げるわ…。さあ〜！  
 お忘れ物はありませんか？ 歸つてくれるでせうね？」  
 ミラファの眼は涙で一杯になつた。彼は手を合せた。  
 「一緒に寢させておくれ。」  
 突然、ナナは何が何やら譯が分らなくなり、發作的な獻

歎に咽喉をつまらせた。どうしてかう自分は窘められるの  
 だらう！ どうしてそんな他人のことにまで煩はされるの  
 だらう？ 彼女は親切に、出來るだけの力を盡して、あんな  
 なに彼に力を添へてやつたではないか。それなのに、まだ  
 その上、壞れた壺の代價を、彼女に支拂はせようとするの  
 か！ 斷じてそんなことを忍ぶ譯には行かない！ 彼女は  
 親切な心を持つてゐた。けれども、これはあまりにひどか  
 つた。

「ふざけてゐるわね！ もう澤山！」と彼女は拳で家具を打  
 ちながら言ひ切つた。「私はね、出來ない我慢までして、親  
 切にしてあげてゐるんですよ…だけども、明日にでも、  
 ちよつと口を利きさへすればお金持にはなれるんですよ。」  
 彼は驚いて顔を上げた。彼はまだ一度も金のことは考へ  
 たことがなかつた。もし彼女が欲しいと言ふのなら、今直  
 ぐにでもやるだらう。彼の財産は残らず彼女のものだ。

「いゝえ、もう遅いわ。」と彼女は腹を立て、言つた。「く  
 れと言はないうちにくれる男が好きなの…いゝえ、あな  
 たからは一度に百萬法を揃へて下すつたつて、お斷りする  
 わ。もうこれでお終ひにしませう。私は他に用事があるん  
 です…お歸りなさい。でなければ、私はもう何も答へま  
 せん。どんな恐ろしいことをするか分りませんからね。」  
 彼女は脅かすやうに彼の前に歩み寄つた。そして、この

氣質の優しい女が切迫つまつて、自分を惱ませる紳士達へ  
 の優越感と自分の正しさを確信して、激怒してゐるとこ  
 ろへ、突然扉口が開いて、シュタイネルが現はれた。何も彼  
 も鉢合せになつたのだ。彼女は怖ろしい聲をあげた。  
 「あら！ また一人來たわ！」

シュタイネルは、その聲に驚いて立ち止つた。思ひがけな  
 くミラファに顔を合せたので、苦しい思ひをした。彼は、  
 辯解しなければならぬことがあるので、三ヶ月ばかり前  
 から出會はないやうに努めてゐたのだつた。彼は當惑した  
 やうに瞬きをし、體を曲げて、伯爵から眼を外させた。彼  
 は、吉報を携へて巴里の町を駈けつけて來たので顔を眞赤  
 にして、しかも自分が今或る破綻に陥つてゐるのを悟つて  
 ゐるので、元氣も失せて喘いでゐた。

「何か御用？」と彼女は素氣なく伯爵を尻眼にかけながら  
 親しげに口を利いた。  
 「私は…私はね…。」と彼は口籠つた。「私は、例のも  
 のを渡しに來たんだ。」

「何を？」  
 彼は躊躇つた。彼女は一昨夜、借金を拂ふために千法を  
 彼が作つて來なければ、もう家へ入れないと言つたのだつ  
 た。彼は二日の間あちらこちら走りまはつて、やつと今朝、  
 その金額を調達したのだつた。